

千葉東南部ニュータウン21

－千葉市有吉遺跡（第4次）・高沢古墳群－

平成11年3月

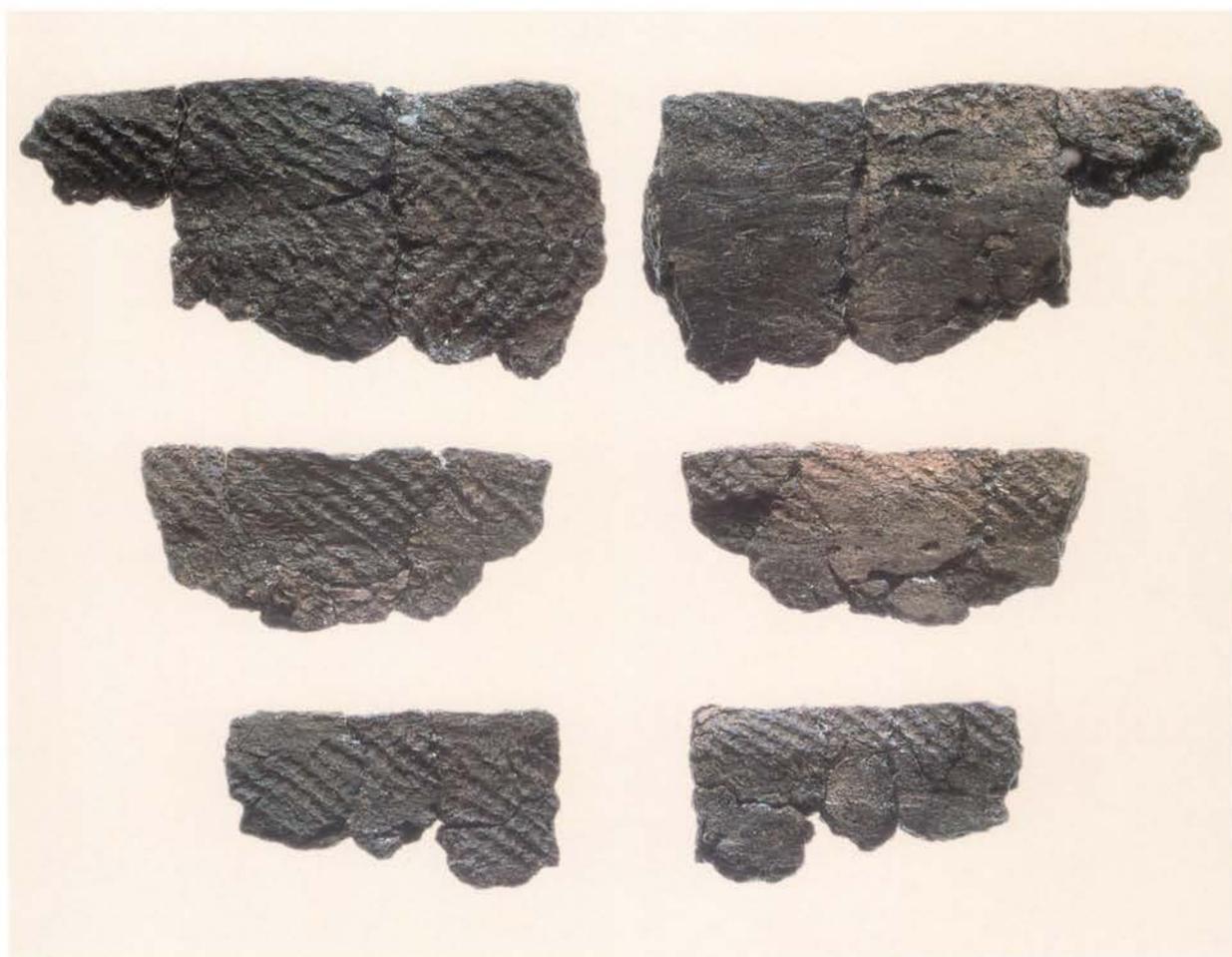
住宅・都市整備公団

財団法人 千葉県文化財センター

千葉東南部ニュータウン21

—^{ちば}千葉市^{ありよし}有吉遺跡（第4次）・^{たかざわこふんぐん}高沢古墳群—





縄文時代草創期の遺構と出土土器—有吉遺跡（第4次）028号跡—

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第351集として、住宅・都市整備公団千葉地域支社（旧首都圏都市開発本部）の千葉東南部土地区画整理事業に伴って実施した千葉市有吉遺跡（第4次）及び高沢古墳群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器や縄文時代草創期の土器を初め、古墳時代から平安時代の集落及び古墳群の一部が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年3月31日

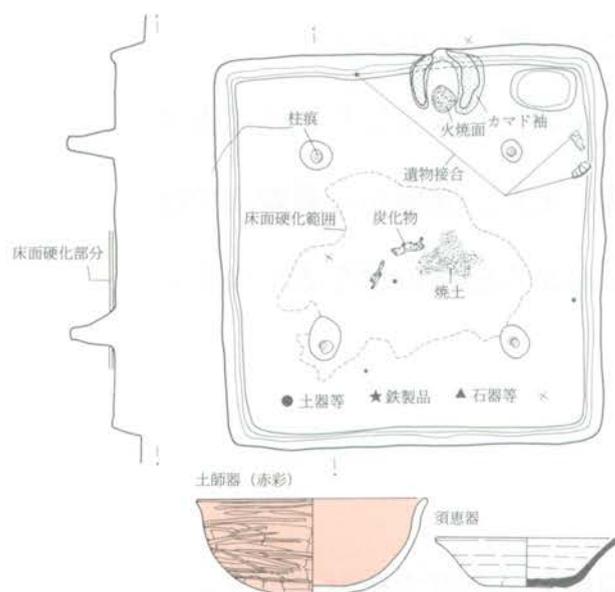
財団法人千葉県文化財センター
理事長 中 村 好 成

凡 例

- 1 本書は、住宅・都市整備公団千葉地域支社（旧首都圏都市開発本部）による千葉東南部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
有吉遺跡 千葉県千葉市緑区南生実町1,569-1ほか（第4次調査、201-081）
高沢古墳群 千葉県千葉市緑区生実町2,703-1ほか（201-084）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、住宅・都市整備公団千葉地域支社の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、主任技師山田貴久が第2章及び第4章第1節、技師小笠原永隆が第3章及び第4章第2節を担当し、それ以外の部分については山田と小笠原が共同で行った。
- 7 発掘調査から報告書作成に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、住宅・都市整備公団、千葉市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「千葉」（N1-54-19-15）
第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図「蘇我」（N1-54-19-15-2）
- 9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和47年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 11 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、以下のとおりである。

(竪穴住居跡等における記号)

(旧石器出土状況図における記号)



器 種	
★ ナイフ形石器 (Kn)	□ 加工痕のある剥片 (Rf)
● 尖頭器 (Po)	○ 使用痕のある剥片 (Uf)
● 楔形石器 (Pi)	○ 石核 (残核含) (D)
● 掻器 (Es)	● 剥片 (B) 碎片 (C)
☆ 彫刻刀形石器 (Bu)	▲ 礫・礫片
石 材	
○ メノウ (Ag)	● 黒曜石 (Ob)
■ 安山岩 (An)	● 流紋岩 (Rh)
● 安山岩 (トトロ石) (An(t))	▲ 珪質頁岩 (S-Sh)
▲ チャート (Ch)	□ 凝灰岩 (Tu)
○ ホルンフェルス (Ho)	

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
第2節	遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2章	有吉遺跡（第4次）	8
第1節	調査の概要	8
第2節	旧石器時代	8
第3節	縄文時代の遺構と遺物	36
第4節	弥生時代の遺構と遺物	49
第5節	古墳時代の遺構と遺物	51
第6節	平安時代以降の遺構と遺物	62
第3章	高沢古墳群	77
第1節	概要	77
第2節	遺構と遺物	77
第4章	まとめ	115
第1節	有吉遺跡（第4次）	115
第2節	高沢古墳群	122

挿図目次

第1図	遺跡周辺の地形	4	第10図	第1ブロックレベル別出土点数	14
第2図	遺跡位置と周辺の遺跡 （有吉遺跡 第4次）	6	第11図	第1ブロック出土遺物（1）	16
第3図	第4次調査区位置	8	第12図	第1ブロック出土遺物（2）	17
第4図	グリッド配置	8	第13図	第1ブロック出土遺物（3）	18
第5図	遺構分布	9	第14図	第1ブロック出土遺物（4）	19
第6図	旧石器時代遺物分布及び グリッド配置	10	第15図	第1ブロック出土遺物（5）	20
第7図	基本層序	11	第16図	第2ブロックレベル別出土点数	23
第8図	第1ブロック遺物出土状況（器種別）	12	第17図	第2ブロック遺物出土状況（器種別）	24
第9図	第1ブロック遺物出土状況（石材別）	13	第18図	第2ブロック遺物出土状況（石材別）	25
			第19図	第2ブロック出土遺物（1）	26
			第20図	第2ブロック出土遺物（2）	27

第21図	第3ブロック遺物出土状況	29	第53図	014号住居跡と出土遺物	68
第22図	第3ブロック出土遺物	30	第54図	015号住居跡と出土遺物	69
第23図	第4ブロック遺物出土状況及び 出土遺物	32	第55図	021号土坑と出土遺物・ 020号方形周溝状遺構	70
第24図	第5ブロック遺物出土状況及び 出土遺物	33	第56図	018号溝状遺構・022号溝状遺構 (高沢古墳群)	72
第25図	第6ブロック遺物出土状況及び 出土遺物	34	第57図	高沢古墳群周辺地形及び遺構配置	78
第26図	表採石器	35	第58図	1号墳実測図及び出土遺物	79
第27図	017号跡と出土遺物	37	第59図	1号墳墳丘断面図	80
第28図	025号跡出土礫重量別点数	38	第60図	2号墳実測図	82
第29図	025号跡と出土遺物	39	第61図	2号墳墳丘断面図及び周溝断面図	83
第30図	026号跡・027号跡・028号跡及び 出土遺物	41	第62図	2号墳主体部及び出土遺物	84
第31図	グリッド出土の縄文土器時期別点数	42	第63図	2号墳出土遺物	85
第32図	グリッド出土の縄文土器(1)	43	第64図	3号墳実測図	87
第33図	グリッド出土の縄文土器(2)・ 土製品	45	第65図	3号墳墳丘断面図及び 主体部遺物出土状況	88
第34図	グリッド出土の石器	46	第66図	3号墳出土遺物(1)	89
第35図	縄文時代前期土器及び礫出土分布	47	第67図	3号墳出土遺物(2)	91
第36図	グリッド出土礫重量別点数	49	第68図	3号墳出土遺物(3)	92
第37図	010号住居跡と出土遺物	50	第69図	3号墳出土遺物(4)	94
第38図	001号住居跡と出土遺物	51	第70図	3号墳出土遺物(5)	95
第39図	002号住居跡と出土遺物	53	第71図	3号墳出土遺物(6)	96
第40図	004号住居跡と出土遺物	54	第72図	3号墳出土遺物(7)	97
第41図	007号住居跡と出土遺物(1)	56	第73図	4号墳実測図	98
第42図	007号住居跡出土遺物(2)	58	第74図	4号墳墳丘断面図・主体部実測図 及び出土遺物	99
第43図	008号住居跡と出土遺物	58	第75図	4号墳出土遺物	100
第44図	009号住居跡と出土遺物	59	第76図	1号塚実測図及び出土遺物	101
第45図	011号住居跡と出土遺物	60	第77図	2号塚実測図	102
第46図	016号住居跡と出土遺物	61	第78図	1号周溝状遺構	103
第47図	グリッド出土の勾玉	61	第79図	1号土坑・1号竪穴状遺構	105
第48図	003号住居跡と出土遺物	63	第80図	1号溝状遺構	106
第49図	005号住居跡と出土遺物	64	第81図	2号溝状遺構及び出土遺物	107
第50図	006号住居跡と出土遺物	65	第82図	グリッド出土の遺物 (有吉遺跡 第4次・高沢古墳群)	109
第51図	012号住居跡と出土遺物	66	第83図	008号住居跡出土のガラス質発泡物 サンプル採取位置	119
第52図	013号住居跡と出土遺物	67			

第84図 有吉遺跡時代別竪穴住居跡分布図（1）	121	第86図 有吉遺跡時代別竪穴住居跡分布図（3）	124
第85図 有吉遺跡時代別竪穴住居跡分布図（2）	123	第87図 高沢古墳群及び周辺の古墳	126

表目次

第1表 高沢古墳群新旧遺構番号対照表	3	第16表 古墳時代の遺構	51
第2表 旧石器時代ブロック	11	第17表 平安時代以降の遺構	62
第3表 第1ブロック北東側石器集中地点	21	第18表 竪穴住居跡構造	73
第4表 第1ブロック南西側石器集中地点	22	第19表 玉類	73
第5表 第2ブロックIII層石器集中地点	28	第20表 鉄製品	73
第6表 第2ブロックVII層石器集中地点	28	第21表 遺構出土土器	74・75・76
第7表 第3ブロック	31	第22表 古墳出土土器	110
第8表 第4ブロック	32	第23表 鉄製品①（鉄鏃）	110・111・112・113
第9表 第5ブロック	33	第24表 鉄製品②（直刀・刀子等）	114
第10表 第6ブロック	34	第25表 銭貨	114
第11表 単独出土・表採・グリッド	35	第26表 石製品・銅製品・土製品・石器	114
第12表 縄文時代の遺構	36	第27表 遺構別土器出土量	114
第13表 土製品	44	第28表 ガラス質発泡物計測値	119
第14表 縄文時代石器	48	第29表 遺構の種類と時期別総数	120
第15表 弥生時代の遺構	49		

図版目次

巻頭図版 縄文時代草創期の遺構と出土土器－有吉遺跡（第4次）028号跡－

図版1 遺跡周辺の空中写真 （有吉遺跡 第4次）	図版9 003号住居跡・005号住居跡
図版2 調査区遠景・調査区全景・層序	図版10 006号住居跡・012号住居跡
図版3 旧石器時代の調査状況	図版11 013号住居跡・014号住居跡
図版4 縄文時代・弥生時代の遺構	図版12 015号住居跡・020号方形周溝状遺構 ・021号土坑
図版5 001号住居跡・002号住居跡	図版13 018号溝状遺構・022号溝状遺構
図版6 004号住居跡・007号住居跡	図版14 旧石器時代出土遺物（1）
図版7 008号住居跡・009号住居跡	図版15 旧石器時代出土遺物（2）
図版8 011号住居跡・016号住居跡	図版16 旧石器時代出土遺物（3）

- 図版17 旧石器時代出土遺物（4）
- 図版18 遺構出土の縄文土器・弥生土器
- 図版19 遺構・グリッド出土の縄文時代石器
- 図版20 グリッド出土の縄文土器（1）
- 図版21 グリッド出土の縄文土器（2）・土製品
- 図版22 古墳時代の土器
- 図版23 古墳時代・平安時代の土器・支脚
- 図版24 古墳時代・平安時代の土器・玉類・鉄製品
（高沢古墳群）
- 図版25 調査前風景・1号墳
- 図版26 1号墳・2号墳
- 図版27 2号墳・2号墳第1主体部
- 図版28 2号墳第1主体部・2号墳第2主体部
- 図版29 3号墳
- 図版30 3号墳（主体部付近遺物出土状況）
- 図版31 4号墳
- 図版32 4号墳主体部・1号塚
- 図版33 2号塚・1号方形周溝状遺構・1号土坑
- 図版34 1号竪穴状遺構・1号溝状遺構・2号溝状遺構
- 図版35 土器（1号墳・2号墳・2号溝状遺構）
- 図版36 土器（3号墳・4号墳）
- 図版37 鉄製品（2号墳・3号墳（1）・4号墳）
- 図版38 銅製品（3号墳）・鉄製品（3号墳（2））
- 図版39 鉄製品（3号墳（3））
- 図版40 鉄製品（3号墳（4））
- 図版41 鉄製品（3号墳（5））
- 図版42 鉄製品（3号墳（6））
- 図版43 鉄製品（3号墳（7））・銭貨
- 図版44 縄文土器・土製品、ガラス質発泡物（有吉遺跡（第4次）008号住居跡）

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

住宅・都市整備公団（当時の日本住宅公団）は、都心部の人口増加に対処するため、千葉東南部地区土地区画整理事業と呼称される大規模な住宅用地の造成を計画した。昭和46年に実施された事業地区内の遺跡分布調査に基づいて、埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果、可能な限り公園及び緑地として保存し、やむを得ない部分については記録保存の措置を講ずることとなり、昭和49年4月から同地区内の埋蔵文化財の発掘調査が開始され、現在に至るまで数多くの調査が行われている。

有吉遺跡（第4次）及び高沢古墳群もそうした遺跡の一つとして、記録保存の措置を講ずることとなり、下記のとおり発掘調査及び整理作業が行われた。

有吉遺跡（第4次）

（発掘調査）

昭和63年度（昭和63年5月25日～11月10日）

調査面積：調査対象面積 9,000m²

確認調査 上層 —— m² 下層 360m²

本調査 上層 9,000m² 下層 800m²

組織：調査部長 堀部 昭夫、部長補佐 岡川 宏道、班長 佐久間豊

担当職員：調査研究員 島立 桂・出口雅人

（整理作業）

平成3年度

組織：調査部長 天野 努、調査部長補佐 佐久間豊、班長 三浦和信

内容：水洗・注記

平成6年度

組織：調査研究部長 高木博彦、調査課長 西山太郎、千葉調査事務所長 田坂 浩

担当職員：主任技師 西野雅人

内容：記録整理、分類、復元の一部

平成9年度

組織：調査部長 西山太郎、調査課長 古内 茂、中央調査事務所長 藤崎芳樹

担当職員：主任技師 山田貴久

内容：復元の一部から原稿執筆まで

ただし、遺物の実測及びトレースについては資料部整理課で実施

平成10年度

組織：調査部長 沼澤 豊、調査課長 上野純司、中央調査事務所長 石田広美

内容：報告書刊行

高沢古墳群

(発掘調査)

昭和57年度(昭和57年4月1日～昭和58年3月31日)

調査対象：古墳8基

組織：調査部長 白石竹雄、部長補佐 根本 弘、班長 古内 茂

担当職員：調査研究員 柳 晃、渡辺修一

(整理作業)

昭和58年度～平成元年度

組織：調査部長 白石竹雄、鈴木道之助、堀部昭夫

部長補佐 根本 弘、岡川宏道、古内 茂、阪田正一

班長 古内 茂、清藤一順、阪田正一、佐久間豊、大原正義

担当職員：調査研究員 関口達彦、倉内郁子

内容：水洗・注記から実測まで(高沢遺跡の整理作業に含めて行う)

平成9年度

組織：調査部長 西山太郎、調査課長 古内 茂、中央調査事務所長 藤崎芳樹

担当職員：技師 小笠原永隆

内容：トレースから原稿執筆まで

平成10年度

組織：調査部長 沼澤 豊、調査課長 上野純司、中央調査事務所長 石田広美

内容：報告書刊行

2 調査の方法

(1) 有吉遺跡(第4次)

発掘区の設定は国土地理院国家座標を基準とし、40m×40m方眼の大グリッドを設定した。西から東に向かってZ・A・B……、北から南に向かって0・1・2……とし、1A区・6G区といった大グリッドを設定した。さらに、大グリッドを4m×4m方眼の小グリッドに100分割し、西から東へ00～09、北から南に向かって00～90とし、各小グリッドをB0-85、E2-40のように呼称することにした。

調査に際しては、上層については第1次調査～第3次調査の結果をもとに、調査対象範囲をすべて本調査範囲とした。上層本調査では表土を重機により除去し、ジョレンによる遺構確認後、精査を行った。

下層については上層本調査終了後、2m×2mの確認トレンチを調査対象範囲面積の4%の割合で設定し、その遺物検出状況をもとにして、遺物集中地点7か所、合計800㎡の本調査範囲を決定した。本調査では原則としてジョレンで掘り下げ、遺物検出を行った。

(2) 高沢古墳群

グリッド設定については上記の有吉遺跡(第4次)と同様の方法で行った。ただし、現地調査では任意の杭名を用いたため、整理作業においては、隣接し、同時並行で調査を行った高沢遺跡のグリッド名称にあわせた杭名を使用した。

調査に際しては、事前の現地踏査で確認された墳丘8基部分を対象とした。周辺部分については必要に応じて拡張し、遺構の有無を確認後、拡張を行い遺構の検出に努めた。なお、調査に際しては、表土部分

から全て人力で行った。

なお、本報告書作成に当たり、発掘調査時に付した遺構番号は第1表のように変更してあるが、図面、写真等の記録類及び注記番号は調査時のままである。

第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置 (第1図)

有吉遺跡は、千葉市緑区南生実町1,569-1ほかに、高沢古墳群は同生実町2,703-1ほかにそれぞれ所在する。緑区は千葉市の東南部に位置し、南側は市原市と接している。

本遺跡の所在する千葉東南部地区は、JR外房線鎌取駅南側に展開し、現在は「おゆみ野」と呼称され、約606haにわたる新しい街作りが進行中である。

千葉東南部地区は、市原市を流れ千葉市で東京湾に注ぎ込む村田川の下流域右岸に位置する。付近は村田川に注ぎ込むいくつもの支谷によって、樹枝状の谷に複雑に開析されている。有吉遺跡・高沢古墳群は、こうした支谷の一つである通称赤塚支谷(二ノ沢)に面する南向きの台地上に立地する。赤塚支谷は、谷口から北東に入り込む全長約1kmの狭長な支谷である。遺跡はこの赤塚支谷の谷口から約0.9kmと谷奥の位置にある。遺跡付近の標高は35mであり、谷部との比高は約17mを測る。

2 周辺の遺跡 (第2図)

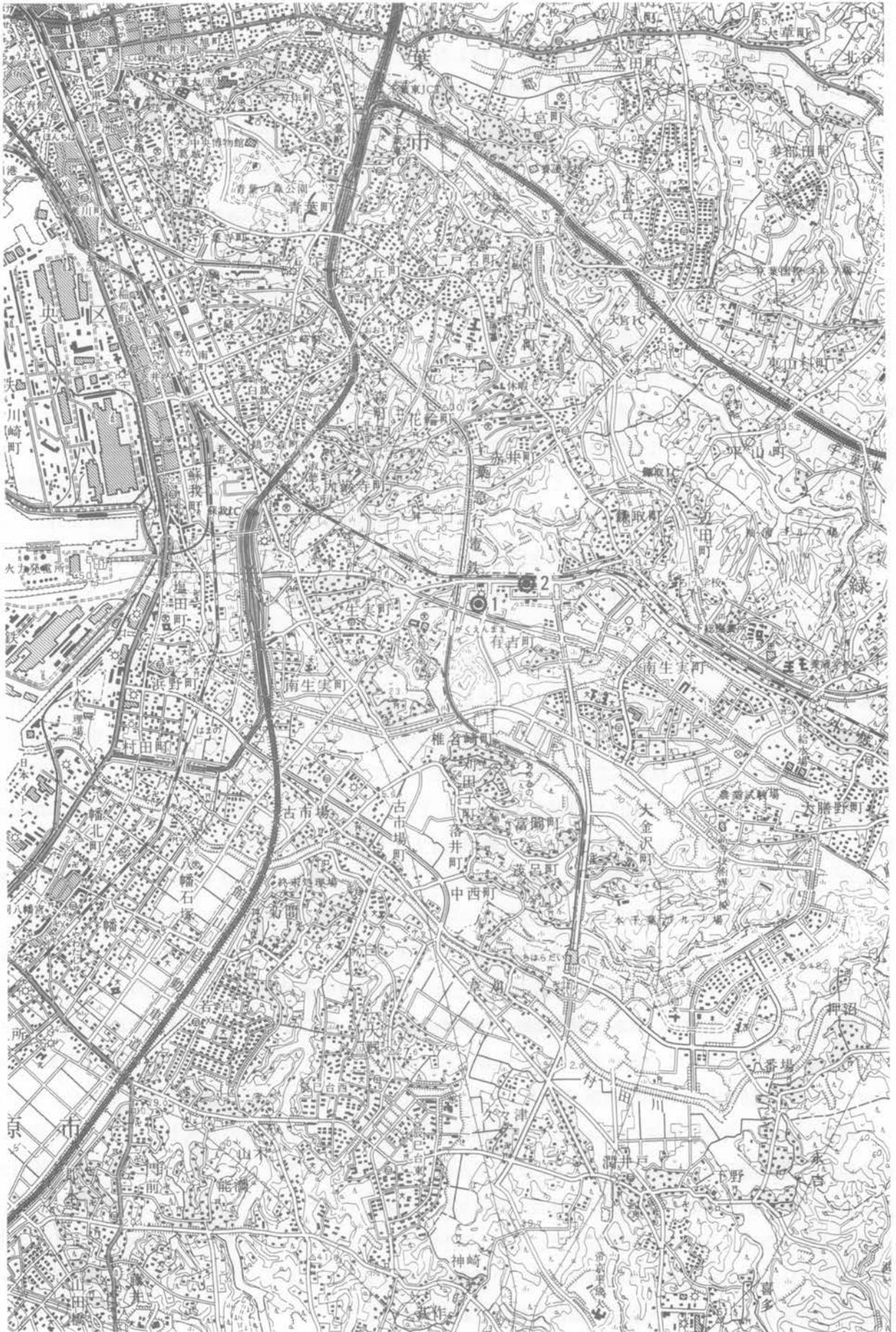
旧石器時代の遺跡は、千葉東南部地区では大規模なものは発見されていない。馬ノ口遺跡⁽¹⁾及びバクチ穴遺跡⁽²⁾においてVI層及びVII層中の良好なブロックが出土したほかは、散発的な出土である。しかし、六通神社南遺跡からは旧石器時代最終末から縄文時代草創期の尖頭器が発見されている⁽³⁾。また、千原台地区内の遺跡を見ると押沼遺跡群、草刈六之台遺跡、草刈遺跡において各時期の良好な石器群が出土している⁽⁴⁾。

縄文時代では、千葉東南部地区に貝塚をはじめとして多くの遺跡の所在が確認されている。南二重堀遺跡⁽⁵⁾、高沢遺跡⁽⁶⁾ではまとまった量の燃糸文土器が出土している。早期後半では、小金沢古墳群⁽⁷⁾、バクチ穴遺跡、鎌取遺跡⁽⁸⁾、大膳野北遺跡⁽⁹⁾、小金沢貝塚⁽¹⁰⁾などで、炉穴を伴い多量の土器が出土している。前期は有吉北貝塚⁽¹¹⁾、太田法師遺跡⁽¹²⁾、有吉遺跡⁽¹³⁾、バクチ穴遺跡、高沢遺跡などから浮島式・諸磯式期の土器が多く出土しているが、住居跡などの遺構はほとんど検出されていない。中期では、有吉北貝塚及び有吉南貝塚⁽¹⁴⁾において大規模な貝塚の形成が始まるとともに、多量の遺構を伴うことが判明している。しかし、集落はこれらに集中し、ほかには鎌取遺跡、鎌取場台遺跡⁽¹⁵⁾、南二重堀遺跡、大膳野南貝塚⁽¹⁶⁾などから小規模な集落が検出されているにすぎない。後期では、小金沢貝塚、木戸作貝塚⁽¹⁷⁾、大膳野南貝塚、六通貝塚⁽¹⁸⁾、上赤塚貝塚⁽¹⁹⁾において貝塚が形成される。しかし、集落規模は中期に比して小さくなるようである。晩期に入ると遺跡は極端に減少する。前半期には六通貝塚において貝塚の形成も続くが、後半期では鎌取遺跡、高沢遺跡及び有吉北貝塚などにおいてわずかに土器片が採集されているのみである。千原台地区では草刈遺跡から中期の大規模な貝塚及び集落が検出されている⁽²⁰⁾。

弥生時代になると千葉東南部地区では、遺構も遺物もほとんど検出されていない。本報告書中の有吉遺跡(第4次)須和田式期竪穴住居跡は、唯一の遺構検出例である。しかし、千原台地区では草刈遺跡から弥生時代後期を中心とする大規模な集落が検出されている⁽²¹⁾。

第1表 高沢古墳群新旧遺構番号対照表

新	旧
1号墳	3号墳
2号墳	5号墳
3号墳	8号墳
4号墳	7号墳
1号塚	2号塚
2号塚	4号塚
1号方形周溝状遺構	001号跡
1号土坑	002号跡
1号竪穴状遺構	004号跡
1号溝状遺構	003号跡
2号溝状遺構	005号跡

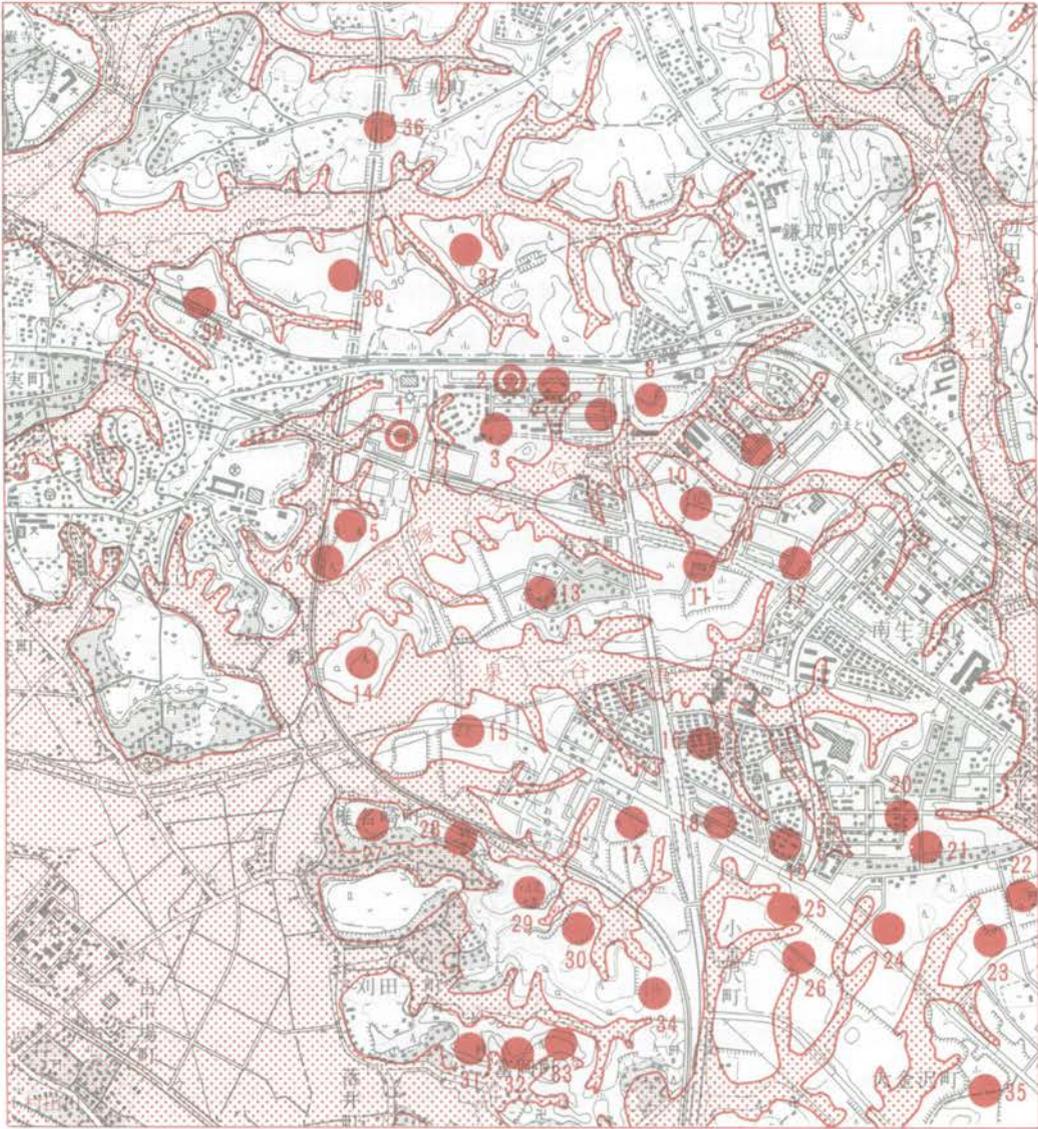


第1図 遺跡周辺の地形 (1. 有吉遺跡、2. 高沢古墳群)

古墳時代に入ると遺跡は徐々に拡大する様相がうかがえる。前期～中期にかけての遺跡は、南二重堀遺跡、鎌取遺跡、馬ノ口遺跡、城ノ台遺跡⁽²²⁾があり、集落が検出されている。上赤塚1号墳⁽²³⁾も該期の円墳である。後期では遺跡数及び集落規模ともに大幅に拡大する。椎名崎遺跡⁽²⁴⁾、ムコアラク遺跡⁽²⁵⁾、有吉遺跡、有吉北貝塚⁽²⁶⁾、高沢遺跡、城ノ台遺跡などから比較的大規模な集落が検出されている。同時に椎名崎古墳群⁽²⁷⁾、生浜古墳群⁽²⁸⁾、高沢古墳群、南二重堀遺跡、ムコアラク古墳群⁽²⁹⁾、小金沢古墳群、神明社裏遺跡⁽³⁰⁾などで多くの古墳が確認されている。北側に隣接する榎作遺跡⁽³¹⁾、種ヶ谷津遺跡⁽³²⁾、笹目沢遺跡⁽³³⁾からも部分的な調査ではあるが、後期を中心とする大規模集落の存在が予想される。千原台地区では、前期から集落及び古墳が大規模に展開し、その傾向は後期に入っても同様である。

奈良・平安時代では、古墳時代後期の遺跡に連続して集落が営まれる傾向がうかがえる。特に高沢遺跡では260軒にもものぼる竪穴住居跡が検出され、最も大規模な遺跡と位置付けることができる。ほかには有吉城跡、有吉遺跡、城ノ台遺跡、椎名崎遺跡、伯父名台遺跡⁽³⁴⁾、今台遺跡⁽³⁵⁾、神明社裏遺跡、ムコアラク遺跡、太田法師遺跡⁽³⁶⁾などからまとまった集落が検出されている。さらに隣接する千原台地区の諸遺跡のほか、榎作遺跡、種ヶ谷津遺跡、大道遺跡⁽³⁷⁾などからも該期の遺構がまとめて検出されている。

- 注1 古内 茂・大野康男 1984「馬ノ口遺跡」『千葉東南部ニュータウン15』 (財)千葉県文化財センター
- 2 大野康男ほか 1983「バクチ穴遺跡」『千葉東南部ニュータウン14』 (財)千葉県文化財センター
(財)千葉県文化財センター 1994『年報No.19—平成5年度—』
(財)千葉県文化財センター 1995『年報No.20—平成6年度—』
- 3 (財)千葉県文化財センター 1983『年報No.9 (昭和58年度)』
- 4 白井久美子・島立 桂ほか 1995『千原台ニュータウンIV—草刈六之台遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
- 5 古内 茂ほか 1983『千葉東南部ニュータウン12—南二重堀遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
- 6 佐久間豊・関口達彦 1990『千葉東南部ニュータウン17—高沢遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
- 7 白井久美子 1979「小金沢古墳群」『千葉東南部ニュータウン8』 (財)千葉県文化財センター
(財)千葉県文化財センター 1993『年報No.18—平成4年度—』
- 8 上守秀一・出口雅人 1993『千葉東南部ニュータウン18—鎌取遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
- 9 大野康男 1985『千葉東南部ニュータウン16—大膳野北遺跡—』 (財)千葉県文化財センター
- 10 郷田良一・小宮 孟 1982『千葉東南部ニュータウン10—小金沢貝塚—』 (財)千葉県文化財センター
- 11 山田貴久ほか 1998『千葉東南部ニュータウン19—有吉北貝塚1—』 (財)千葉県文化財センター
- 12 (財)千葉県文化財センター 1989『年報No.14—昭和63年度—』
- 13 種田斉吾・阪田正一 1975『千葉東南部ニュータウン3—有吉遺跡(第1次)—』 (財)千葉県文化財センター
種田斉吾 1978『千葉東南部ニュータウン5—有吉遺跡(第2次)—』 (財)千葉県文化財センター
栗田則久ほか 1983「有吉遺跡(第3次)」『千葉東南部ニュータウン14』 (財)千葉県文化財センター
- 14 (財)千葉県文化財センター 1997『年報No.22—平成8年度—』
- 15 (財)千葉県文化財センター 1991『年報No.16—平成2年度—』
- 16 (財)千葉県文化財センター 1994『年報No.19—平成5年度—』
- 17 郷田良一・小宮 孟 1979『千葉東南部ニュータウン7—木戸作貝塚—』 (財)千葉県文化財センター
- 18 (財)千葉県文化財センター 1992『年報No.17—平成3年度—』



1. 有吉遺跡 2. 高沢古墳群 3. 高沢遺跡 4. 生浜古墳群 5. 上赤塚貝塚
6. 上赤塚古墳群 7. 南二重堀遺跡 8. 鎌取場台遺跡 9. 鎌取遺跡 10. 有吉北貝塚 11. 有吉南貝塚
12. 馬ノ口遺跡 13. 有吉城跡 14. 城ノ台遺跡 15. 椎名崎遺跡 16. 木戸作貝塚
17. 椎名崎古墳群B支群 18. 椎名崎古墳群A支群 19. 小金沢貝塚 20. 六通遺跡 21. 六通貝塚
22. 六通神社南遺跡 23. 六通金山遺跡 24. ムコアラク遺跡 25. 小金沢古墳群 26. 御塚台遺跡
27. 伯父名台遺跡 28. 椎名神社遺跡 29. 今台遺跡 30. 春日作遺跡 31. 富岡古墳群A支群
32. 椎名崎古墳群C支群 33. 富岡古墳群B支群 34. 神明社裏遺跡 35. 太田法師遺跡
36. 榎作遺跡 37. 笹目沢遺跡 38. 種ヶ谷津遺跡 39. 大道遺跡

第2図 遺跡位置と周辺の遺跡

- 勸千葉県文化財センター 1996 『年報No21-平成7年度-』
 勸千葉県文化財センター 1997 『年報No22-平成8年度-』
 19 勸千葉県文化財センター 1994 『年報No19-平成5年度-』
 勸千葉県文化財センター 1996 『年報No21-平成7年度-』
 20 高田 博ほか 1986 『千原台ニュータウンIII-草刈B区-』 (勸千葉県文化財センター
 小林清隆 1990 『市原市草刈貝塚』 (勸千葉県文化財センター
 21 勸千葉県文化財センター 1990 『年報No15-平成元年度-』

- (財)千葉県文化財センター 1991 『年報No.16－平成2年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1992 『年報No.17－平成3年度－』
 22 (財)千葉県文化財センター 1989 『年報No.13 (昭和62年度)』
 (財)千葉県文化財センター 1989 『年報No.14－昭和63年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1991 『年報No.16－平成2年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1992 『年報No.17－平成3年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1993 『年報No.18－平成4年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1995 『年報No.20－平成6年度－』
 23 栗田則久 1982 「上赤塚1号墳」『千葉東南部ニュータウン13』 (財)千葉県文化財センター
 24 上村淳一 1979 『千葉東南部ニュータウン6－椎名崎遺跡－』 (財)千葉県文化財センター
 25 田坂 浩 1979 「ムコアラク遺跡」『千葉東南部ニュータウン8』 (財)千葉県文化財センター
 (財)千葉県文化財センター 1991 『年報No.16－平成2年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1992 『年報No.17－平成3年度－』
 26 岸本雅人 1998 『千葉東南部ニュータウン20－有吉北貝塚2－』 (財)千葉県文化財センター
 27 (財)千葉県文化財センター 1989 『年報No.14－昭和63年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1990 『年報No.15－平成元年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1991 『年報No.16－平成2年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1992 『年報No.17－平成3年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1993 『年報No.18－平成4年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1994 『年報No.19－平成5年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1996 『年報No.21－平成7年度－』
 28 種田斉吾・谷 旬 1977 『千葉東南部ニュータウン4－生浜古墳群－』 (財)千葉県文化財センター
 29 (財)千葉県文化財センター 1992 『年報No.17－平成3年度－』
 30 (財)千葉県文化財センター 1985 『年報No.9 (昭和58年度)』
 (財)千葉県文化財センター 1986 『年報No.10 (昭和59年度)』
 (財)千葉県文化財センター 1987 『年報No.11 (昭和60年度)』
 31 小林清隆 1992 『千葉市榎作遺跡』 (財)千葉県文化財センター
 32 立和名明美 1998 「種ヶ谷津遺跡」『生実・本納線埋蔵文化財調査報告書2』 (財)千葉県文化財センター
 33 立和名明美 1998 「笹目沢遺跡」『生実・本納線埋蔵文化財調査報告書2』 (財)千葉県文化財センター
 34 (財)千葉県文化財センター 1994 『年報No.19－平成5年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1995 『年報No.20－平成6年度－』
 35 (財)千葉県文化財センター 1992 『年報No.17－平成3年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1996 『年報No.21－平成7年度－』
 36 (財)千葉県文化財センター 1989 『年報No.14－昭和63年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1990 『年報No.15－平成元年度－』
 (財)千葉県文化財センター 1991 『年報No.16－平成2年度－』
 37 立和名明美 1998 「大道遺跡」『生実・本納線埋蔵文化財調査報告書2』 (財)千葉県文化財センター

第2章 有吉遺跡（第4次）

第1節 調査の概要（第3～7図）

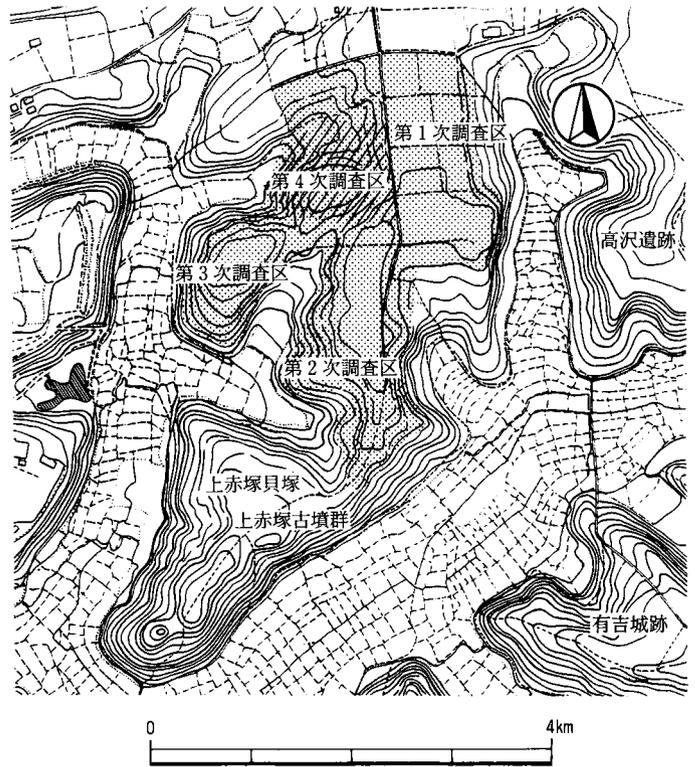
有吉遺跡に関しては、これまで3回にわたる調査が行われ、既に調査報告がなされている。今回報告する第4次調査部分は、遺跡の北西部分にあり（第3図）、その調査結果の概要は以下のとおりである（第4図～第7図）。

旧石器時代に関しては、8か所の遺物集中地点及び単独出土資料、表採資料を合わせて計222点の遺物を検出した。遺物の出土層準及び垂直分布から、III層からIX層に至るまで4枚の文化層を確認した。縄文時代に関しては、炉跡3基（草創期、前期、中期）、土坑1基（前期）、集石遺構1基（前期）を検出した。また、調査区全体から土器片及び礫を検出した。中でも草創期の炉跡は、いわゆる多縄文土器群の資料を伴い、注目されるものである。弥生時代に関しては、竪穴住居跡1軒（中期）を検出した。須和田式期のもので、千葉東南部地区では初の検出例である。古墳時代に関しては、竪穴住居跡8軒（後期）、平安時代以降に関しては、竪穴住居跡7軒、土坑1基、溝状遺構2条を検出し、それぞれ第1次～第3次調査の成果とあわせ、遺跡全体の様相を明らかにすることができた。

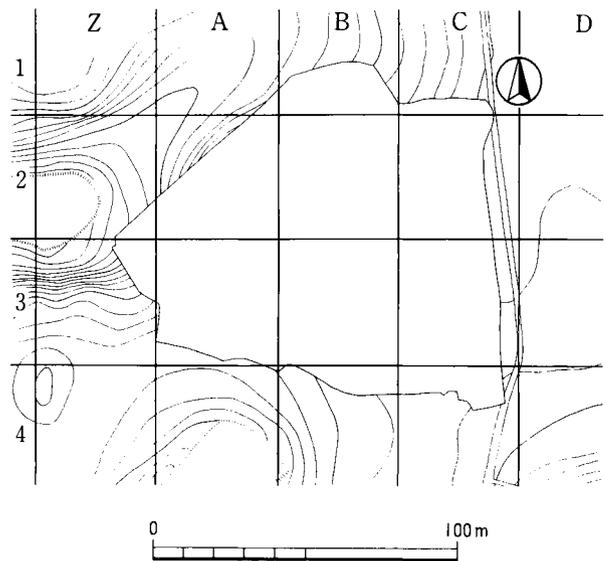
第2節 旧石器時代

1 概要（第6・7図）

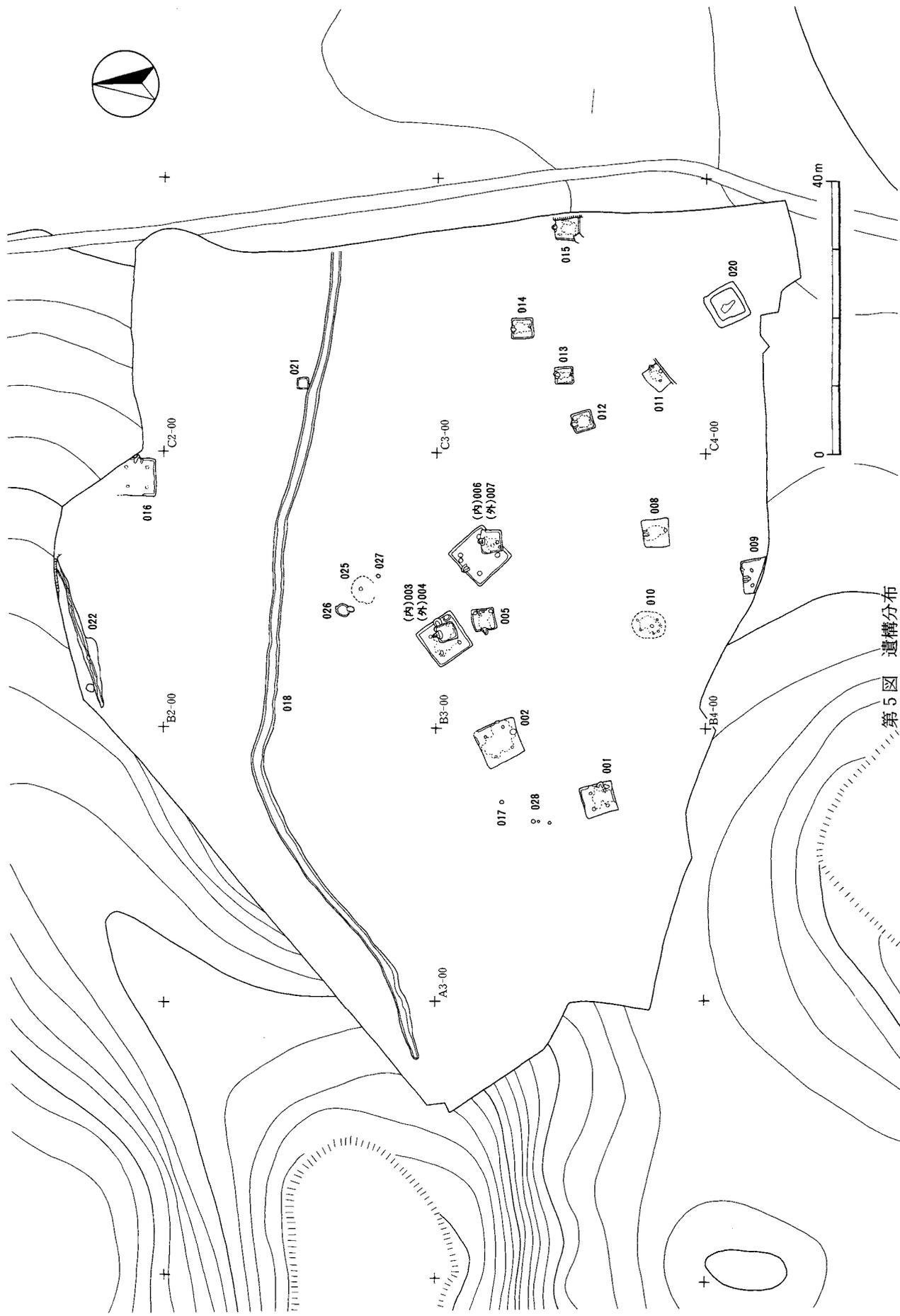
第1次～第4次にわたる有吉遺跡の調査において、第4次調査の今回、初めて旧石器時代の本調査が行われた。その結果、立川ロームの第2黒色帯下部に当たるIX層か



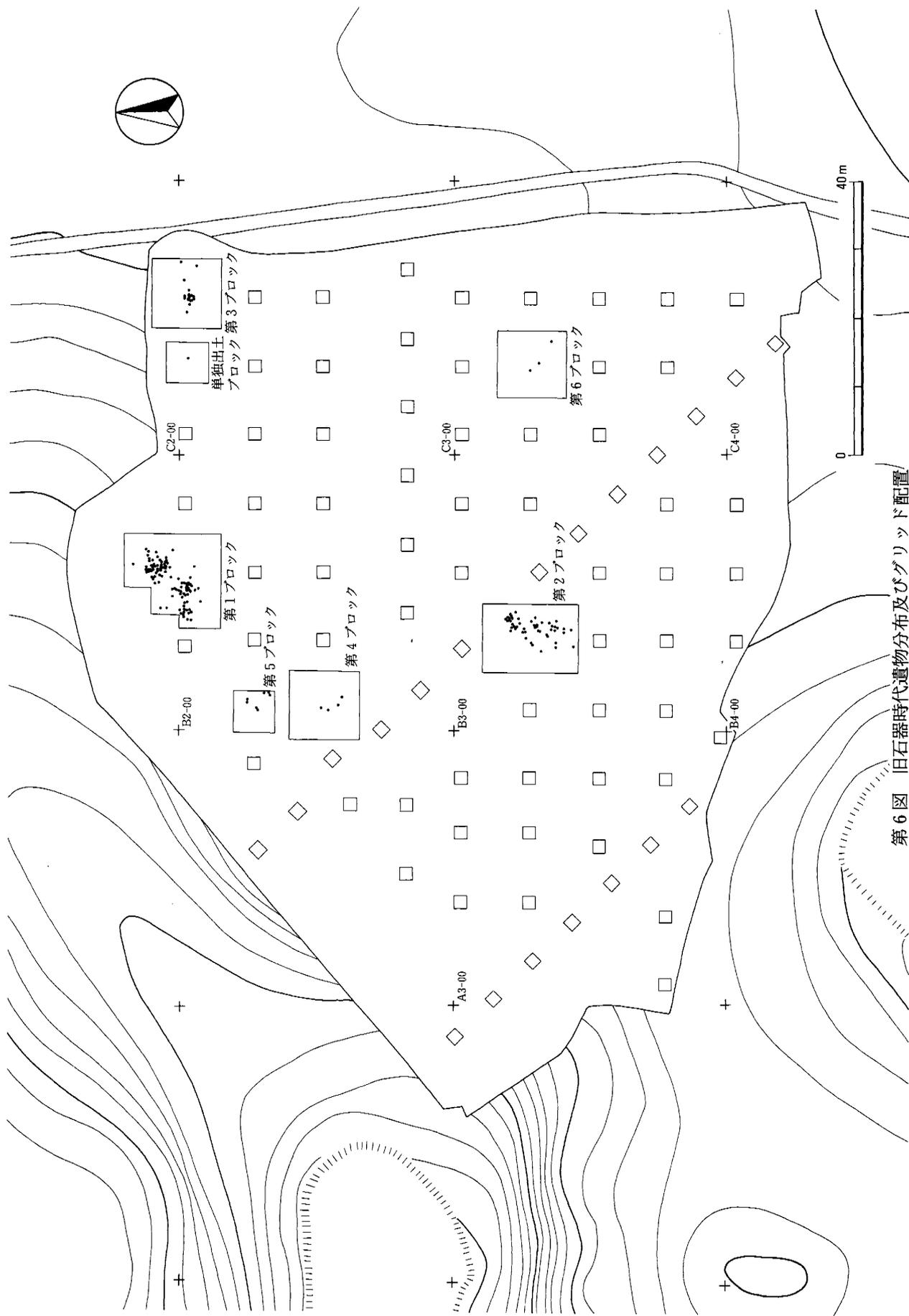
第3図 第4次調査区位置



第4図 グリッド配置



第5図 遺構分布



第6図 旧石器時代遺物分布及びグリッド配置

らⅢ層までの間に4枚の文化層を確認し、単独出土ブロックを含めて7ブロックを検出した(第6図)。第1・第2ブロックに関しては、各ブロック内の遺物の出土範囲に複数箇所のまとまりが見られるため、石器集中地点という用語をそれぞれ並記して用いた。各ブロック及び石器集中地点の中心となるグリッドの位置及び文化層の関係は第2表のとおりである。ただし、単独出土ブロックについては、層位不明のため文化層中への位置付けは行っていない。

第2表 旧石器時代ブロック

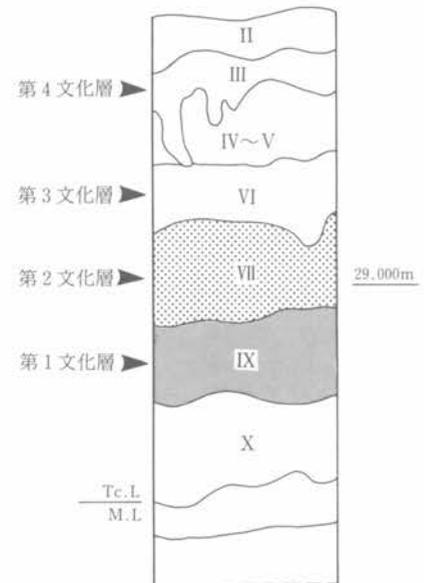
ブロック名称	位置	出土層位	出土点数	文化層	挿図番号	図版番号
第1ブロック北東側石器集中地点	B1-95・96	Ⅲ層	57	第4文化層	第8～15図	3・14・15・16
第1ブロック南西側石器集中地点	B2-04・05	Ⅲ層	48	第4文化層	第8～15図	3・14・15
第2ブロックⅦ層石器集中地点	B3-23・24	Ⅶ層	42	第2文化層	第16～20図	3・17
第2ブロックⅢ層石器集中地点	B3-33・43	Ⅲ層	28	第4文化層	第16～20図	3・16
第3ブロック	C2-05・06	Ⅸ層	17	第1文化層	第21・22図	3・17
第4ブロック	B2-50	Ⅵ層	4	第3文化層	第23図	3・16
第5ブロック	B2-20・31	Ⅶ層	9	第2文化層	第24図	3・17
第6ブロック	C3-33・34	Ⅶ層	3	第2文化層	第25図	17
単独出土ブロック	C2-03	(不明)	1			3
表採			13		第26図	17

調査区の基本層序は以下に記すとおりである⁽¹⁾(第7図)。

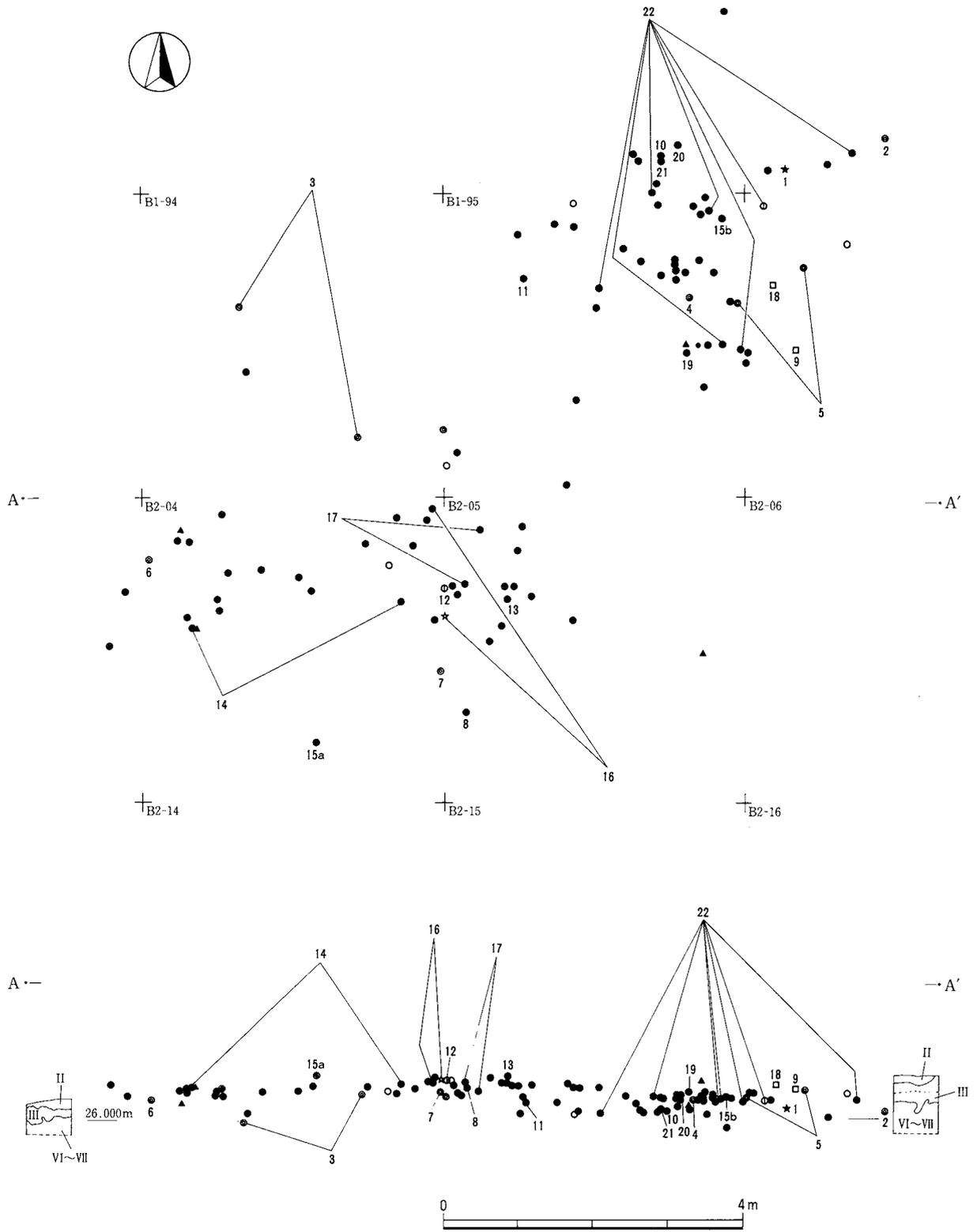
- II 黒褐色土層。縄文時代以降の文化層に相当する。
- III ソフトローム層。地点により上下に分層できる。
- IV～V ハードローム層から第1黒色帯にかけての層。
- VI 明黄褐色土層。始良丹沢火山灰(AT)を含む層。
上下にやや幅をもたせた分層をした。
- VII 褐色土層。第2黒色帯上部に相当する。
- IX 暗褐色土層。第2黒色帯下部に相当する。
- X 明褐色土層。立川ローム最下層に相当する。

2 第1ブロック(第8～15図、第3・4表、図版3・14～16)
(1) 出土状況(第8～10図)

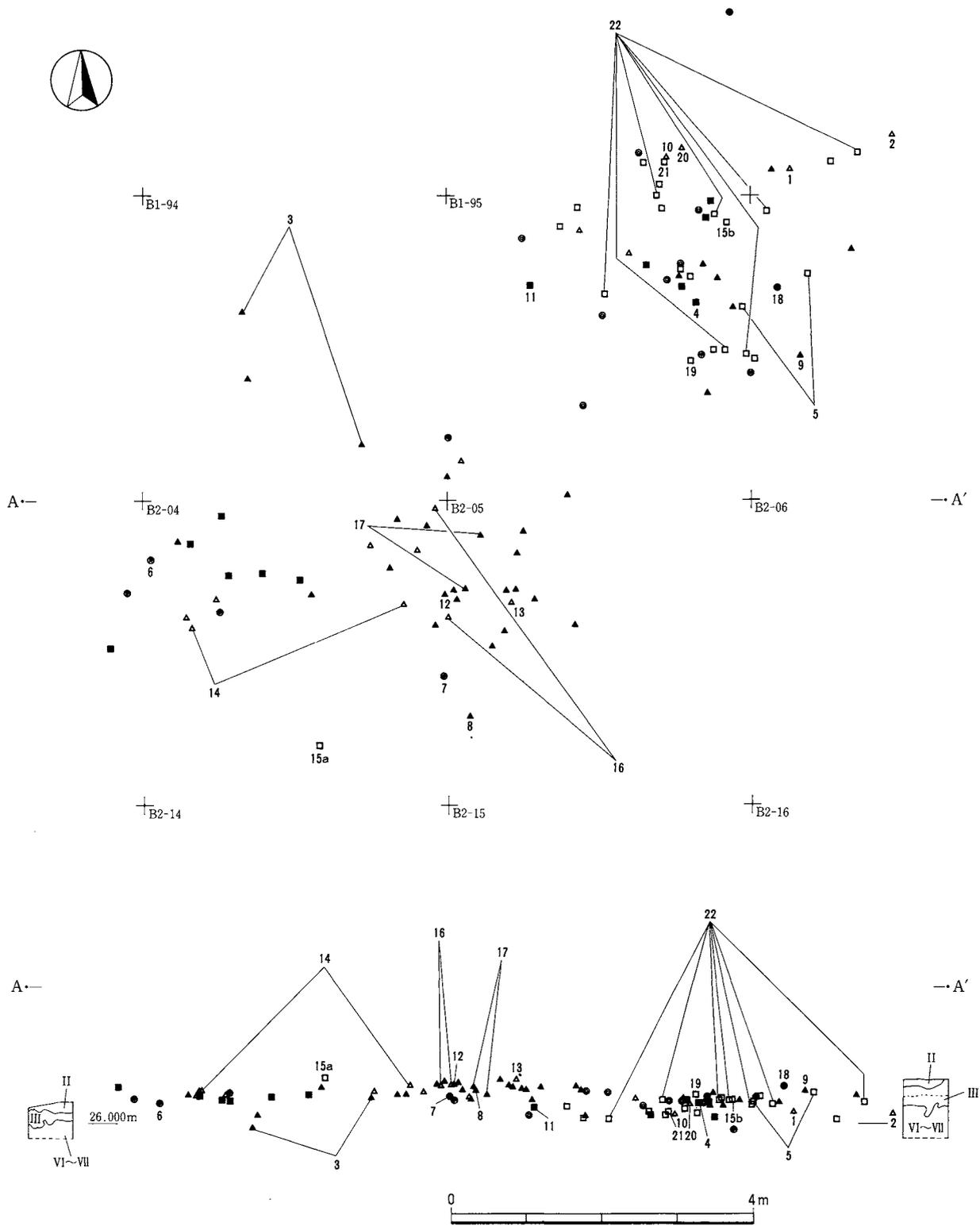
台地上の平坦面から北西方向に緩やかに傾斜する台地肩部、調査区の北端B1-95・96ブロック～B2-04・05ブロック付近に位置する。出土面はⅢ層中にあり、本調査が行われた中で遺物が最も多く出土したブロックである。遺物の平面分布から、第1ブロックとして拡張した範囲に北東側と南西側の2か所の石器集中地点があるように見える。また垂直分布から、北西方向へ傾斜する地形に対して、西側に分布域のある南西側石器集中地点のレベルの方が北東側石器集中地点よりも幾分高いように見える。集中地点を構成する石器石材においても、北東側と南西側の石器集中地点では差異が認められる。北東側では緑色凝灰岩、黒曜石、珪質頁岩3、チャート3、南西側では珪質頁岩1・2、チャート1・2から主に構成されており、母岩別に見ても、両集中地点の間に相関性はほとんど認められない。以上のことから、第1ブロックでは2枚の文化層が存在する可能性も考えられるが、レベル別出土点数のヒストグラム(第10図)を見る限り、2枚の文化層に分かれるとは明言しがたい。石材組成や石材の使用法がやや異なり、



第7図 基本層序



第8図 第1ブロック遺物出土状況（器種別）



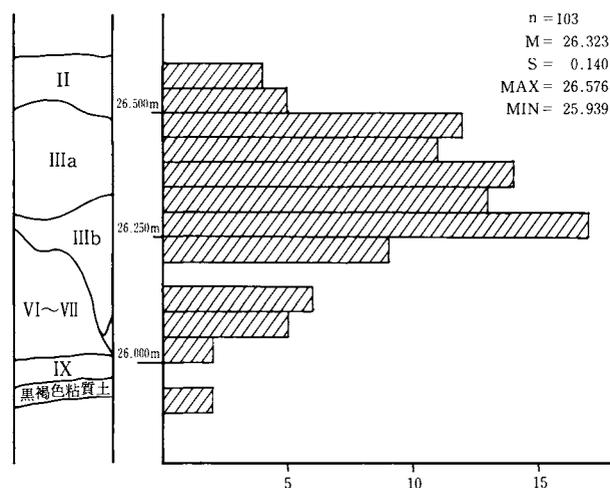
第9図 第1ブロック遺物出土状況 (石材別)

相互の接合関係もほとんどない2か所の石器集中地点が、同一文化層としてIII層内に存在したととらえ、北東側・南西側両石器集中地点を第4文化層に位置付けた。

ブロック構成を見ると、出土総点数105点のうち、北東側石器集中地点ではナイフ形石器1点、尖頭器6点(うち2点は同一個体で接合した)、使用痕のある剥片(以下「Uf」という)1点、加工痕のある剥片(以下「Rf」という)2点、石核1点、剥片45点、碎片1点の計57点、南西側石器集中地点では、尖頭器3点、彫刻刀形石器1点、Uf1点、Rf1点、石核1点、剥片37点、礫及び礫片4点の計48点を数える。

(2) 石器組成 (第11～15図)

1はチャート製のナイフ形石器である。基部側に残る自然面を打面として剥片剥離を行った縦長剥片を素材としている。背面左側縁部全体と右側縁部の器体中央付近にまで及ぶブランディングが施されている。背面左側縁部のブランディングは、右側縁部のものに比べ角度がやや浅い。先端部の欠損は、当時の使用による可能性がある。2～7は尖頭器である。2は節理が少なく、良質なチャートを素材にしている。背面側に一部自然面が残り、腹面側には一部主要剥離面が残っている。バルブは除去されている。ほかに同一母岩と思われる剥片がないことから、搬入品と考えられる。3は珪質頁岩製で、片面調整の尖頭器である。整形及び調整は背面側に集中しており、周辺調整は丁寧に行われている。腹面側は右側縁部に調整痕があり、バルブも残っている。4は安山岩製である。左下半部を欠損により失っているが、形態的には3と類似していた可能性が高い。調整法では、2・3とは異なり、両面調整が行われている。実測図背面側の調整は、腹面側に比べてやや粗さが目立つ。5は凝灰岩製と報告したが、頁岩製の可能性もある。木葉形を呈し、多少厚みがあるが、器体が長く細身である。両面に調整が入っており、尖頭部の調整は入念に行われている。6・7は安山岩(トロトロ石)製で、直線的に細くなる基部をもつ形態のよく似たものである。6は両面調整で、基部は欠損している。7は厚みがあり、全体的に細身である。8・9は珪質頁岩製の剥片である。8は節理の目立つ厚手の剥片であり、背面左側縁部にノッチが認められる。9は縦長剥片で、背面左側縁部に使用痕と思われる複数の剥離が観察できる。基部側に欠損が認められる。10は1のナイフ形石器と同一母岩と思われるチャート製の薄手の幅広剥片である。背面側に数回剥片剥離を行った痕跡がある。打面の一部に自然面が残る。11は安山岩製の縦長剥片である。自然面が大きく残っている。12は珪質頁岩製の石核である。半割された礫の分割面を打面とし、剥片剥離作業が行われている。13はチャート製の厚手の剥片である。背面左側縁部を中心に剥離が行われている。上・下両方向からの剥離が認められることから、石核調整剥片か打面再生剥片とも考えられる。主要剥離面は節理面である。もともとは両設打面をもつ石核であったと思われる。14はチャート製の接合資料である。14aは14bから直接剥離されたものではなく、14bから剥離された縦長剥片を素材としたものである。15は拳大よりも一回り小さい礫を用いている。一面に自然面が残っており、搬入された石材がこの地で剥片剥離作業が行われたことを示



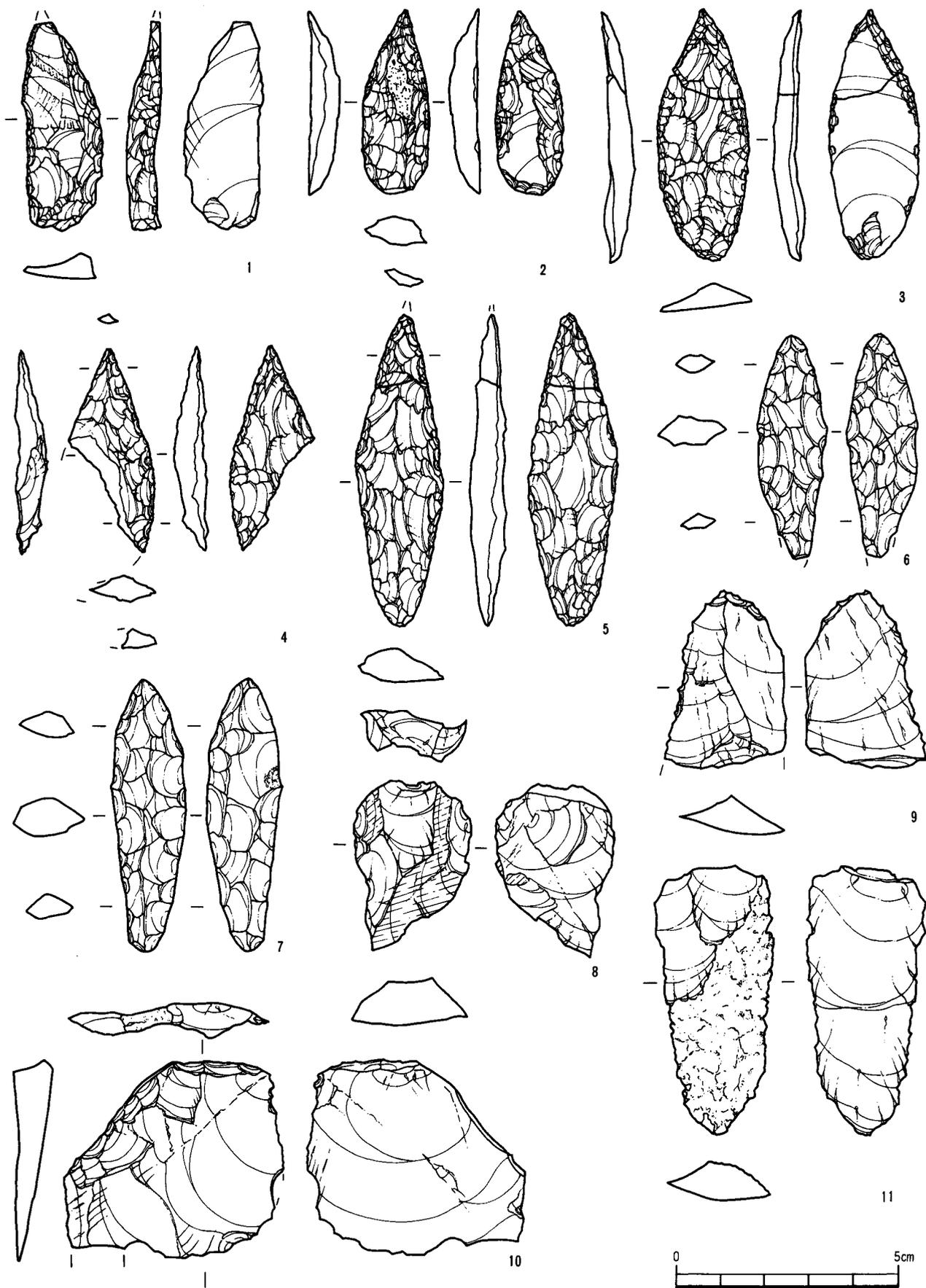
第10図 第1ブロックレベル別出土点数

している。15a・15bの主要剥離面が直行していることから、打点を移動しながら自然面を除去する作業をしていたと考えられる。凝灰岩製である。16は両設打面をもつ石核から剥離された剥片で、チャート製である。16aが剥離された後、16bが剥離されている。16aは背面右側縁部に彫刻刀面を作り出したと思われるフルーティングが一条あることから、彫刻刀形石器と判断した。17は珪質頁岩製である。17bの剥離後、17aが剥離されている。17bの背面左側縁部にはリタッチが施されている。17aは厚手で寸詰まりの剥片で、17bと同様に背面右側縁部にリタッチが施され、ノッチも認められる。接合状況から主要剥離面が直行しており、石核の調整剥片であったと考えられる。18は自然面が大きく残された厚手の大形剥片で、粗割り段階の剥片である。背面右側縁部にリタッチが連続で入っており、刃部の形成とも考えられるが、ここではRfと判断した。今回出土した中では唯一の流紋岩製で、原石自体もかなりの大きさがあったと思われる。19・21・22は緑色凝灰岩製で、風化が進んでおり、白っぽく変色している。直接接合はしないものの、同一母岩と思われる。19は自然面が残っており、粗割り段階の剥片である。21は背面全体に自然面の残る横長剥片である。22は7点の剥片が接合した例である。接合により、全体の約50パーセントが明らかにされており、拳大より一回り大きな礫が搬入され、使用されたことがわかる。剥離順序は22fの剥離が最初に行われる。次に、打点を移し、大きな一枚剥離の行われた面を打面として22eが剥離されている。その後、22(a+b)+22cが剥離されるが、その際に22cは節理と力の分散により22(a+b)から別々に剥がれたものと考えられる。その次に22(a+b)が折断され、最後に22dが22g(石核)から剥離されている。打点が頻繁に動いており、不定形な剥片を剥離したものと考えられる。22gの石核は、かなり大きい状態で廃棄されている。石核及び剥片を見ても、ヒンジフラクチャーやステップフラクチャーがところどころで起きており、薄く、定形的な剥片は得られていないものと思われる。20はチャート製の縦長剥片である。一部に自然面が残っている。背面側の剥離状況は左・右両方向から行われており、自然面を落とす段階の剥離と考えられる。腹面左側縁部には、一部発掘時の欠失部があるものの、使用痕と考えられる微細剥離が観察でき、右側縁部には浅いノッチが形成されている。

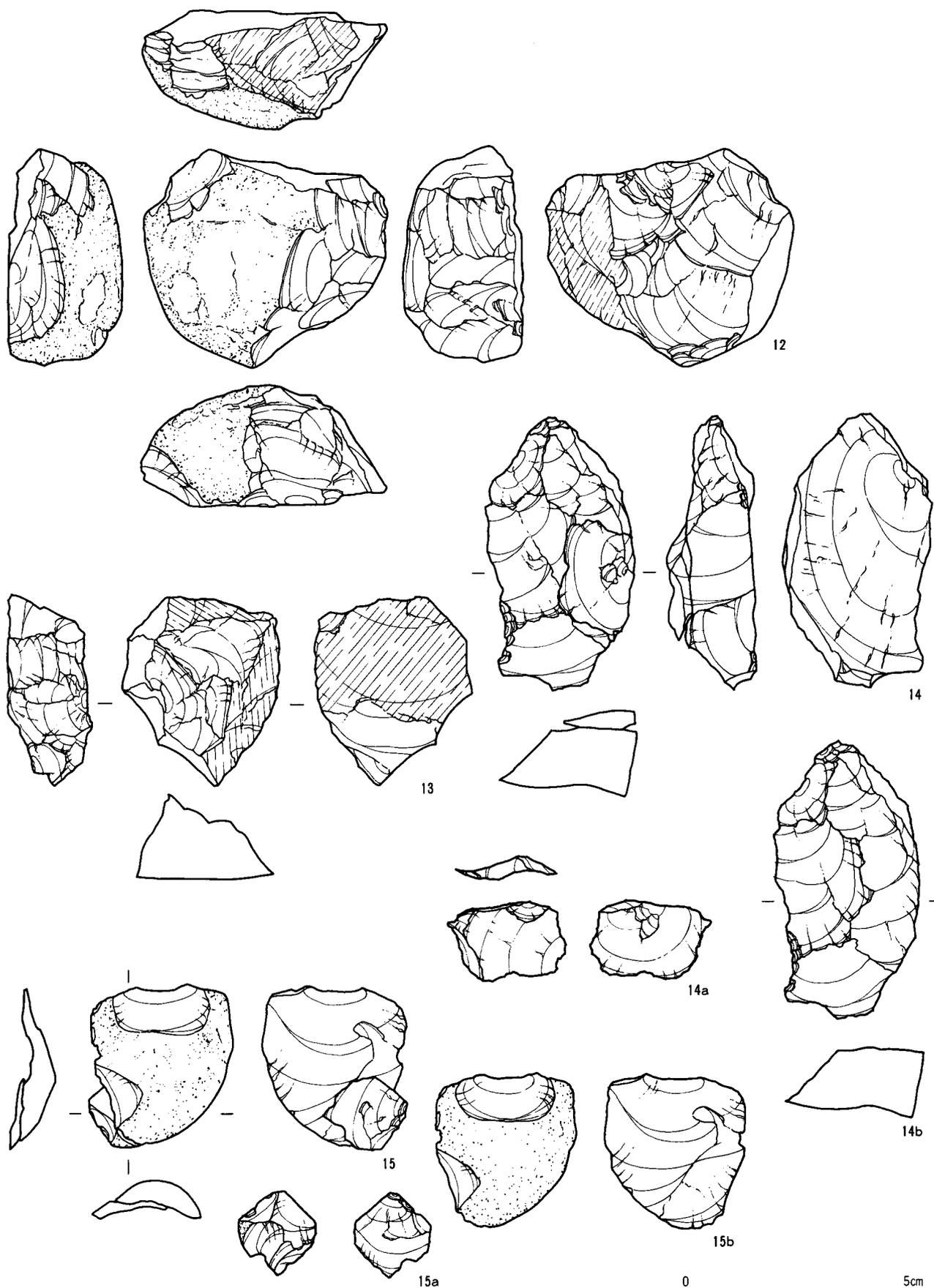
(3) 石材組成

北東側石器集中地点では、1のナイフ形石器及び10・20の剥片は、同一母岩から作られた、あるいは剥離されたものと考えられる。また、同一母岩に属する剥片が1点(第3表、0061)検出されている。石材自体、良質なチャートであり、石核は他の地点に搬出された可能性が高い。ただし、ナイフ形石器のものに限らず、整形・調整剥片(チップ類)が出土していないため、製品あるいは剥片の状態で搬入された可能性も否定できない。5の凝灰岩製の尖頭器は、15の接合資料と同一母岩と思われる。また、同一母岩に属する剥片が7点(第3表、0090・0093~0095・0097~0099)検出されている。石材の凝灰岩は、風化の度合いが少なく、堅くしまった材質である。出土している剥片類は、尖頭器の調整・整形剥片とは考えにくいいため、製品と石核が搬入されたと考えられる。今回の出土資料中、最も接合関係の捉えられた緑色凝灰岩に関しては、ほぼ原石の状態か、少々自然面を落とした状態で搬入されたと考えられる。大きめの剥片が得られており、石核整形とも思えるが、最終的に石核は廃棄され、石核から得られた剥片が搬出されたものと思われる。

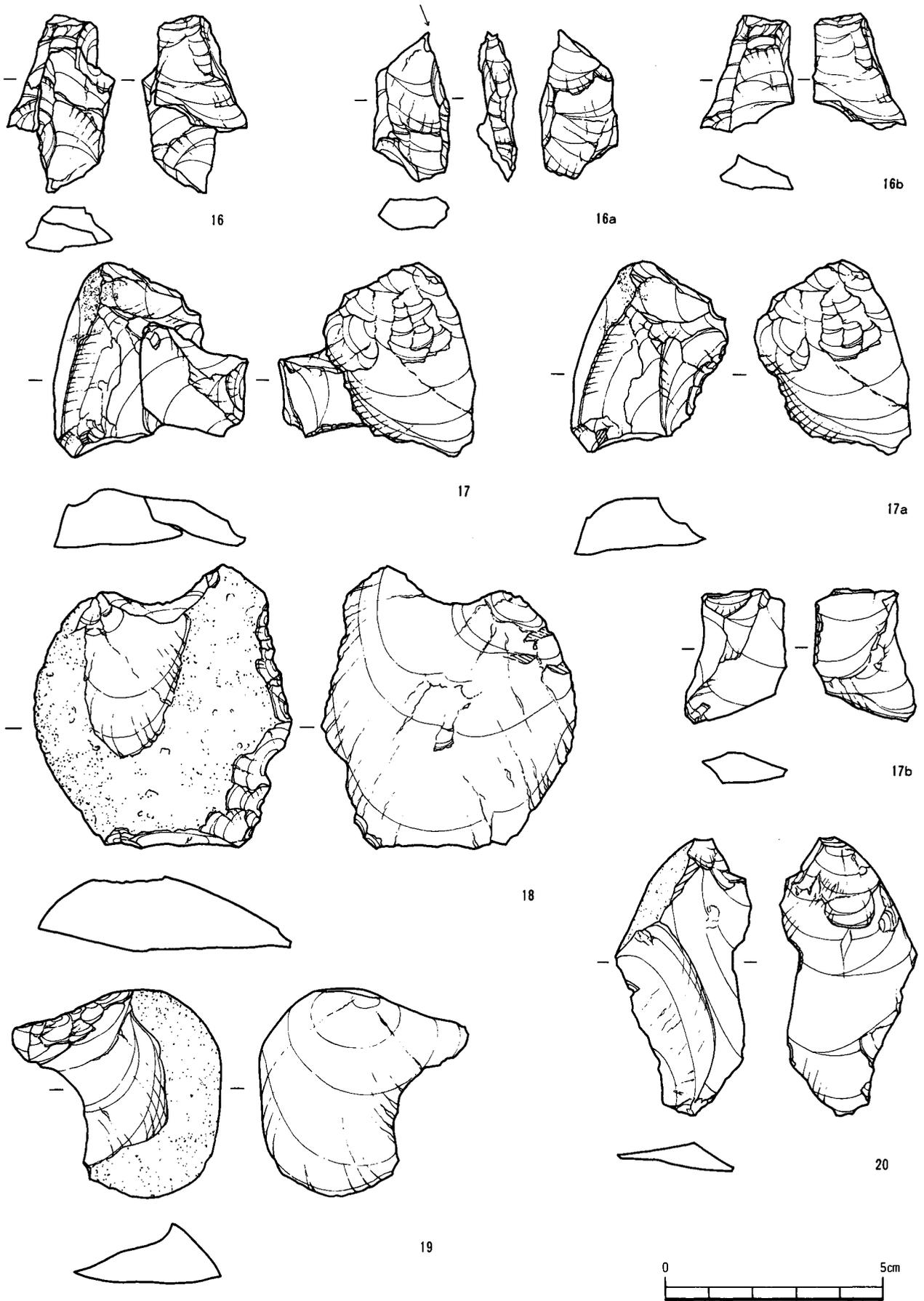
南西側石器集中地点は既述のとおり、珪質頁岩、チャート、安山岩といった一般的な石材で構成されている。特徴的なものに、第11図6・7のような安山岩(トロトロ石)製の尖頭器がある。安山岩は第6図11のように自然面のある剥片が多く、珪質頁岩には自然面のある剥片はあまり多くない。このことから、



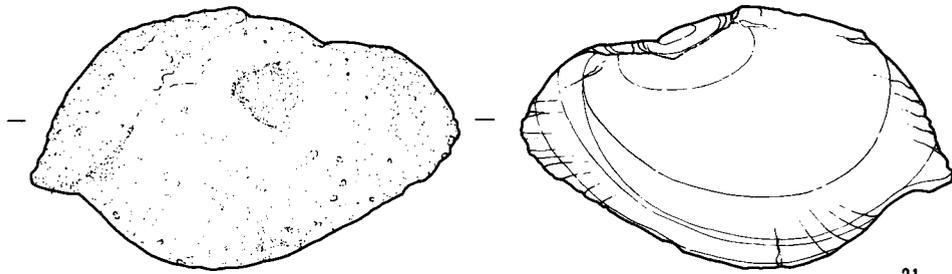
第11図 第1ブロック出土遺物(1)



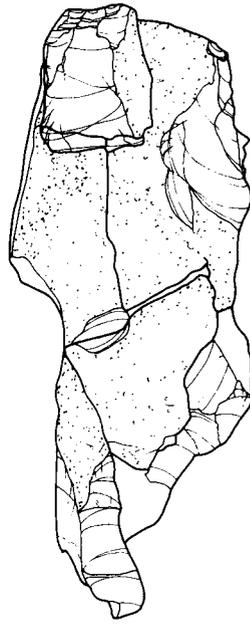
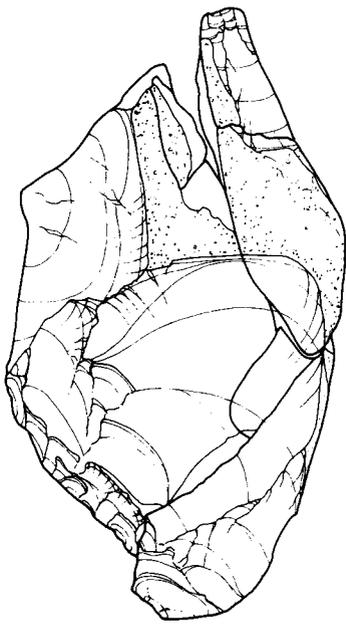
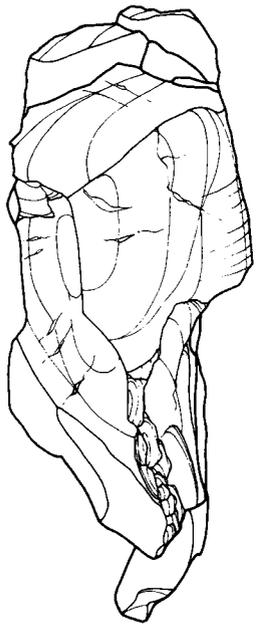
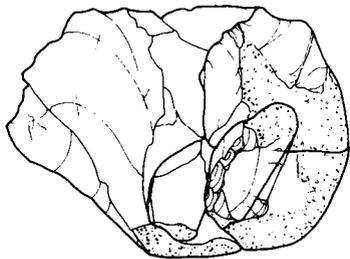
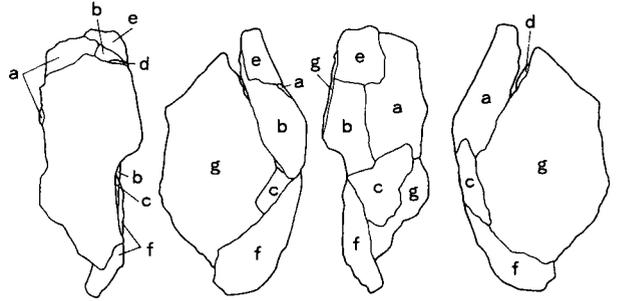
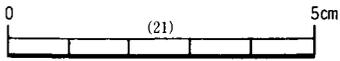
第12図 第1ブロック出土遺物(2)



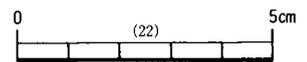
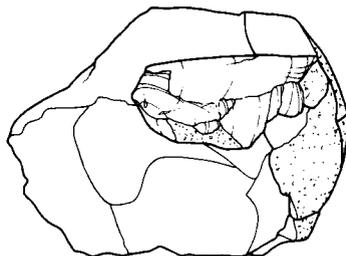
第13図 第1ブロック出土遺物（3）



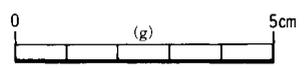
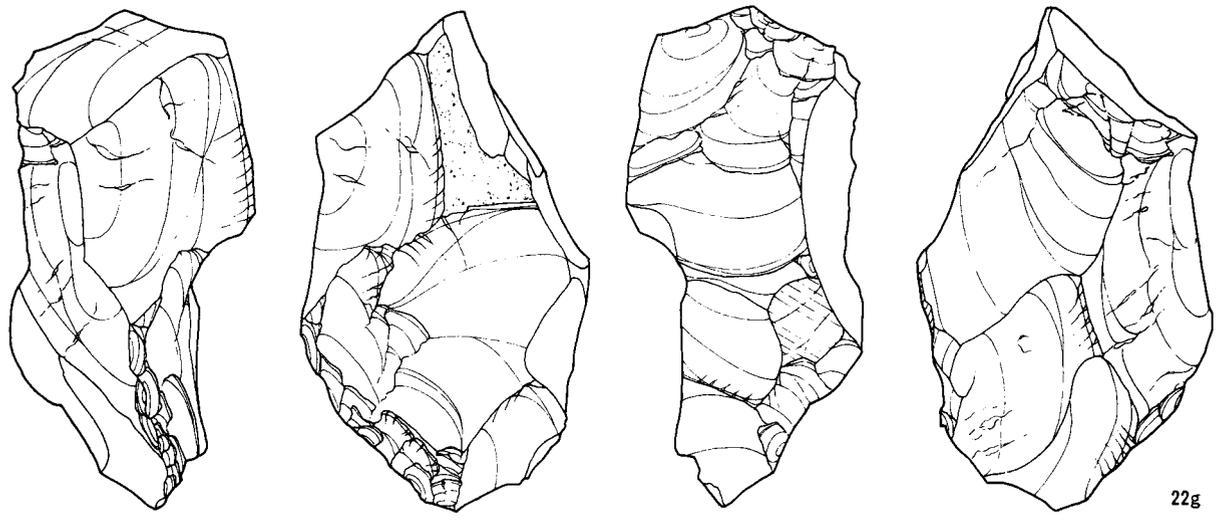
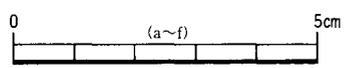
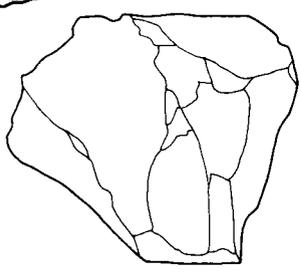
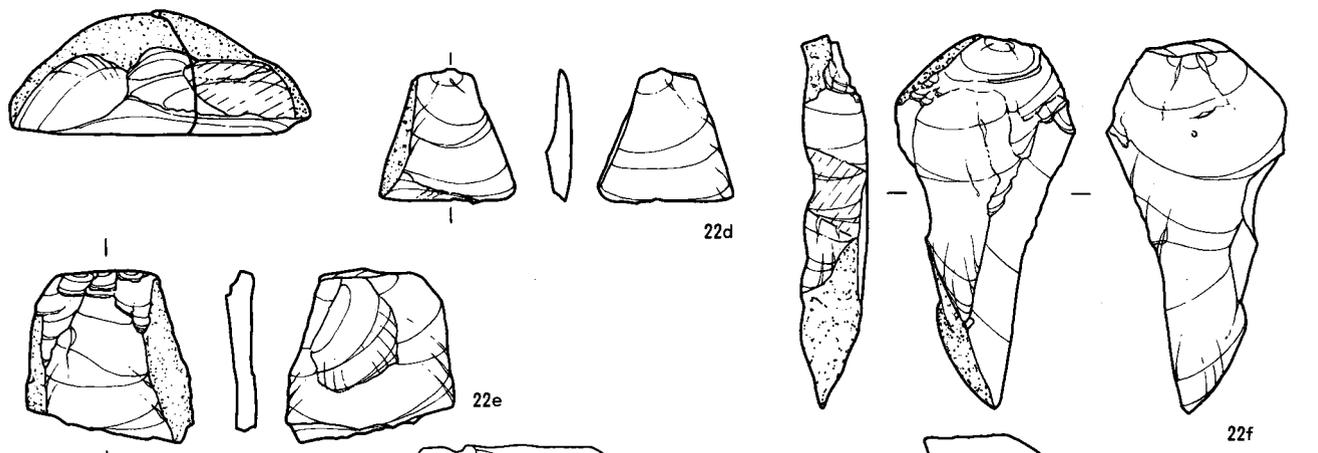
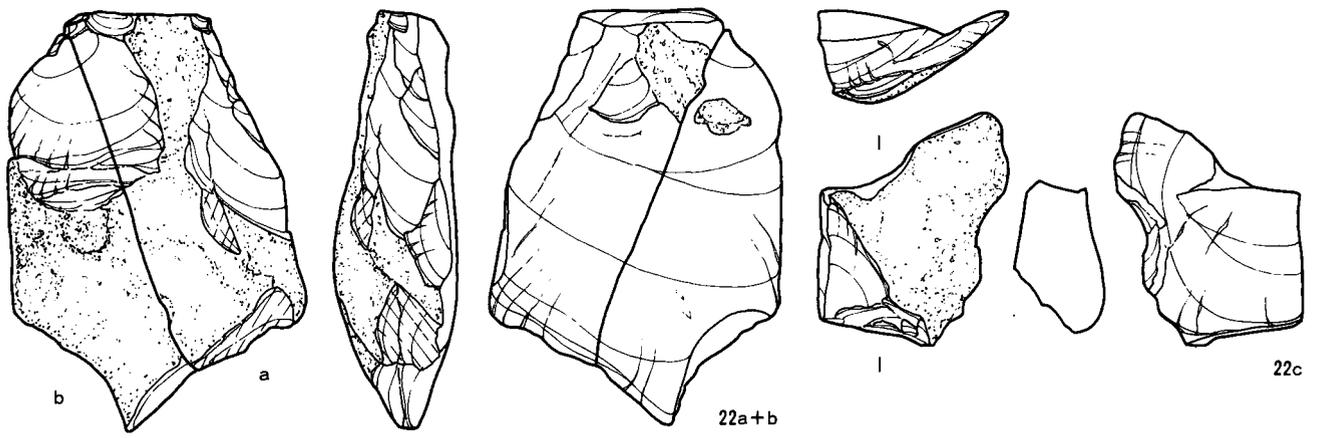
21



22



第14図 第1ブロック出土遺物(4)



第15図 第1ブロック出土遺物(5)

第3表 第1ブロック北東側石器集中地点

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	レベル (m)	層位	備考
2	B2-3 0038	Po	Ch	4.1	1.5	0.7	3.9	26.108	攪乱	
22a	B2-3 0039	B	Tu1	6.2	2.6	2.0	36.9	26.255	Ⅲ a	接合22
	B2-3 0040	Uf	S-Sh3	(2.6)	(2.6)	0.6	(2.5)	26.329	Ⅲ a	
1	B2-3 0041	Kn	Ch3	(4.7)	1.8	0.8	(5.8)	26.150	Ⅲ	
	B2-3 0042	B	S-Sh3	(2.5)	1.8	0.3	(1.5)	26.242	Ⅱ	
22g	B2-3 0043	D	Tu1	9.4	5.6	5.3	232.4	26.253	Ⅲ a	接合22
15b	B2-3 0044	B	Tu2	(3.6)	3.2	1.0	(8.9)	26.302	Ⅱ	接合15
22c	B2-3 0045	B	Tu1	(3.8)	(3.1)	1.6	(13.6)	26.272	Ⅱ	接合22
	B2-3 0046	B	An1	(1.1)	1.4	0.2	(0.3)	26.281	Ⅱ	
	B2-3 0047	B	Ob1	1.8	1.2	0.2	0.2	26.251	Ⅲ a	
10	B2-3 0048	B	Ch3	(4.4)	(4.9)	0.9	(13.8)	26.234	Ⅱ～Ⅲ a	
21	B2-3 0049	B	Tu1	4.3	7.1	1.4	35.6	26.249	Ⅱ～Ⅲ a	
	B2-3 0050	B	Ob1	2.6	1.4	0.3	0.5	26.218	Ⅲ	
22b	B2-3 0051	B	Tu1	6.6	2.6	2.0	30.1	26.306	Ⅲ a	接合22
	B2-3 0052	B	S-Sh3	(1.3)	2.0	0.3	(0.5)	26.288	Ⅱ	
5	B2-3 0053	Po	Tu2	(1.7)	(1.2)	0.5	(0.8)	26.287	Ⅲ	接合5
	B2-3 0054	B	S-Sh3	(2.0)	2.1	0.4	(1.3)	26.237	Ⅲ	
4	B2-3 0055	Po	An	(4.5)	(1.9)	0.8	(3.4)	26.254	攪乱	
	B2-3 0056	B	S-Sh3	(2.6)	1.4	0.3	(0.8)	26.239	Ⅲ	
	B2-3 0057	B	An1	(3.4)	2.8	0.7	(5.7)	26.295	Ⅲ	
	B2-3 0058	B	S-Sh3	(1.2)	2.5	0.4	(0.7)	26.295	Ⅲ	
	B2-3 0059	B	Ob1	(2.3)	(1.3)	0.4	(0.7)	26.300	Ⅲ	
	B2-3 0060	B	Ob1	2.0	1.3	0.4	0.4	26.259	Ⅲ	
	B2-3 0061	B	Ch3	2.6	2.3	0.6	1.5	26.297	Ⅲ	
19	B2-3 0062	B	Tu1	4.6	4.6	1.5	19.6	26.380	Ⅲ	
	B2-3 0063	C	An(t)	0.9	0.6	0.2	0.1	26.342	Ⅲ	
	B2-3 0064	B	Tu1	(1.5)	1.0	0.3	(0.4)	26.301	Ⅲ	
22f	B2-3 0065	B	Tu1	6.0	2.9	1.1	14.3	26.308	Ⅲ	接合22
22e	B2-3 0066	B	Tu1	2.9	2.7	0.5	4.6	26.278	Ⅲ	接合22
	B2-3 0067	B	Tu1	1.4	(1.6)	0.2	(0.3)	26.346	Ⅲ a	
	B2-3 0068	B	An(t)	2.5	3.4	0.8	5.2	26.332	Ⅲ a	
9	B2-3 0069	Rf	S-Sh3	(4.0)	(2.7)	0.9	(7.2)	26.407	Ⅲ	
	B2-3 0070	B	S-Sh3	(2.2)	3.3	0.7	(4.0)	26.387	Ⅲ a	
	B2-3 0072	B	Ob1	(0.9)	(1.4)	2.0	(0.1)	26.405	Ⅲ a	
	B2-3 0073	B	Ch1	1.4	1.4	0.5	0.6	26.359	Ⅲ	
11	B2-3 0074	B	An2	6.0	2.6	1.1	12.2	26.238	Ⅲ	
	B2-3 0075	B	Ob	(1.2)	(3.0)	1.3	(2.4)	26.408	攪乱	
	B2-3 0076	B	Tu1	0.9	1.3	0.1	0.1	26.239	攪乱	
3	B2-3 0077	Po	S-Sh4	(2.0)	(1.6)	(0.3)	(0.9)	26.330	攪乱	接合 3
22d	B2-3 0088	B	Tu1	2.1	2.2	0.5	2.5	26.067	Ⅲ	接合22
	B2-3 0089	B	Ob1	1.1	1.0	0.2	0.1	26.085	Ⅲ	
	B2-3 0090	B	Tu2	3.1	2.3	0.7	2.2	26.046	Ⅲ	
	B2-3 0091	B	Ch2	3.0	1.8	0.7	3.3	26.086	Ⅲ	
	B2-3 0092	B	An1	(1.4)	1.2	0.5	(0.7)	26.108	Ⅲ	
	B2-3 0093	B	Tu2	1.3	1.6	0.2	0.4	26.133	Ⅲ	
	B2-3 0094	B	Tu2	(2.9)	1.9	1.0	(3.2)	26.165	Ⅲ	
	B2-3 0095	B	Tu2	1.6	1.6	0.2	0.5	26.138	Ⅲ	
	B2-3 0096	B	An	1.1	1.3	0.5	0.7	26.072	Ⅲ	
	B2-3 0097	B	Tu2	(2.0)	1.3	0.4	(0.6)	26.084	Ⅲ	
	B2-3 0098	B	Tu2	(1.0)	1.5	0.4	(0.3)	26.173	Ⅱ	
	B2-3 0099	B	Tu2	(0.8)	1.3	0.2	(0.2)	26.038	Ⅲ	
	B2-3 0100	B	An(t)	(1.0)	2.2	0.6	(0.7)	25.939	攪乱	
15a	B2-3 0101	B	Tu2	(1.8)	1.7	0.4	(0.7)	25.705		接合15・表採
3	B2-3 0102	Po	S-Sh4	(4.2)	2.1	0.7	(5.7)	25.974		接合3
5	B1 0030	Po	Tu	(5.5)	2.1	0.9	(10.7)	26.400		接合5
20	B1 0031	B	Ch3	(6.2)	3.0	1.1	(11.2)	26.288		
18	B1 0041	Rf	Rh	(6.3)	5.8	1.5	(59.8)	26.465		

第4表 第1ブロック南西側石器集中地点

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	レベル (m)	層位	備考
6	B2-3 0001	B	An1	4.1	3.1	0.9	11.4	26.475	II	
	B2-3 0002	B	An(t)1	(4.0)	4.5	0.7	(10.9)	26.334	III	
	B2-3 0003	Po	An(t)	5.0	1.6	0.6	4.4	26.257	III	
	B2-3 0004	B	S-Sh1	4.7	3.4	1.0	8.4	26.391	III a	
	B2-3 0005	B	An1	5.3	3.5	1.1	10.3	26.426	II	
	B2-3 0006	B	An1	1.0	(1.3)	0.3	(0.2)	26.329	III a	
	B2-3 0007	B	An1	4.7	3.8	1.5	24.8	26.326	III	
14b	B2-3 0008	B	Ch2	3.8	4.0	0.7	9.6	26.386	II	接合14
	B2-3 0009A	B	Ch2	(6.2)	3.2	1.7	(32.5)	26.436	II a	
	B2-3 0009B	礫片	Sa	-	-	-	(81.7)	26.436	II a	
	B2-3 0010	B	An(t)1	5.7	3.4	1.0	11.7	26.412	III a	
	B2-3 0011	B	Ch2	(2.3)	(2.5)	0.9	(3.8)	26.400	III a	
	B2-3 0012	B	An1	(1.7)	2.3	0.7	(1.4)	26.381	III a	
	B2-3 0013	B	An1	4.0	3.4	1.5	13.5	26.391	III a	
	B2-3 0014	B	S-Sh2	6.2	(3.0)	1.8	(27.1)	26.464	II~III a	
	B2-3 0015	B	Ho	(5.1)	(2.0)	1.3	(12.3)	26.611	II	
	B2-3 0016	B	Ch1	(1.1)	1.9	0.3	(0.5)	26.426	III a	
16b	B2-3 0017	Rf	S-Sh2	3.0	2.4	0.8	4.7	26.374	III	接合16
	B2-3 0018	B	S-Sh1	3.0	1.9	1.0	5.2	26.386	III	
	B2-3 0019	B	Ch1	(2.7)	2.0	0.9	(3.4)	26.498	II	
	B2-3 0020	B	S-Sh	0.7	2.2	0.4	0.6	26.514	III a	
17b	B2-3 0021	B	S-Sh2	(3.2)	2.2	0.8	(4.0)	26.379	III	接合17
17a	B2-3 0022	B	S-Sh2	(4.5)	3.2	1.9	(20.5)	26.470	III	接合17
12	B2-3 0023	B	S-Sh1	(5.1)	(3.1)	1.7	(18.4)	26.455	III	
	B2-3 0024	D	S-Sh1	5.0	5.5	2.6	76.7	26.559	III a	
14a	B2-3 0025	B	Ch2	1.7	2.7	0.6	1.7	26.468	III	接合14
16a	B2-3 0026	B	S-Sh	3.2	3.4	1.0	6.5	26.557	III	接合16
B2-3 0027	Bu	Ch1	3.4	1.8	0.9	4.6	26.522	III・攪乱		
7	B2-3 0028	B	S-Sh1	2.2	1.4	0.6	1.0	26.357	III	
	B2-3 0029	Po	An(t)	6.1	1.6	0.9	7.0	26.356	III a	
13	B2-3 0030	B	S-Sh1	(2.2)	3.0	0.9	(4.6)	26.507	III	
	B2-3 0031	B	Ch1	(4.3)	(3.7)	2.0	(25.3)	26.572	II	
	B2-3 0032	B	S-Sh1	(1.7)	1.3	0.5	(0.7)	26.484	III	
	B2-3 0033	B	S-Sh1	3.1	(1.4)	0.8	(2.1)	26.451	III	
	B2-3 0034	B	S-Sh1	1.2	1.4	0.7	0.7	26.471	III	
	B2-3 0035	B	S-Sh1	1.9	1.1	0.4	0.5	26.442	III	
	B2-3 0036	B	S-Sh1	2.3	2.0	0.6	1.7	26.434	III	
8	B2-3 0037	礫	Sa	-	-	-	(1.0)	26.544	III	風化が進んでいる
	B2-3 0078	B	S-Sh2	3.5	(3.2)	(1.3)	(11.3)	26.118	攪乱	
	B2-3 0079	B	S-Sh1	(2.7)	3.1	1.2	(8.1)	26.576	III a	
	B2-3 0080	Po	An(t)	(5.1)	3.0	1.4	(20.0)	26.295	III a	
	B2-3 0081	B	Ch1	3.0	4.0	0.6	3.9	26.457	III	
	B2-3 0082	Uf	S-Sh1	3.7	2.7	1.2	0.7	26.449	III	
	B2-3 0083	礫片	Sa	-	-	-	(3.6)	26.237	III	
	B2-3 0084	B	S-Sh	(3.3)	2.4	0.6	(3.2)	26.537	II	
	B2-3 0085	B	S-Sh1	2.8	2.3	0.8	4.8	26.319	III	
	B2-3 0086	B	S-Sh1	(2.0)	(2.3)	0.6	(1.8)	26.484	II	
B2-3 0087	礫片	Sa	-	-	-	(0.4)	26.173	攪乱		

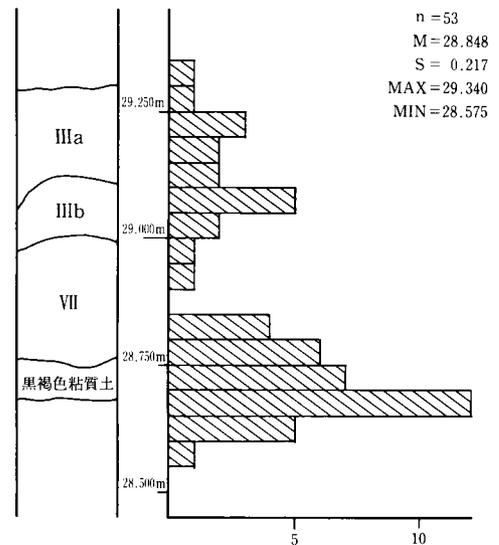
安山岩は拳大ほどの原石が搬入され、粗割りが行われていたということに対して、珪質頁岩は別の地点で加工されたものが搬入され、剥片剥離が行われた後に搬出されたと考えられよう。また、チャートに関しては、第12図14の接合資料と同一母岩と考えられる剥片2点（第3表0091、第4表0008）が検出されている。北東側石器集中地点に分布する良質なチャートと比べると、質に差異が見られ、下総台地でよく使用されている節理の多い石材である。剥片数も多くなく、数度の剥離を終えた後に搬出されたと思われる。

第1ブロックの両石器集中地点を全体的に見ると、北東側石器集中地点のみに黒曜石の剥片が出土している。石材的には、透明感のあるものと漆黒のもの2種類が確認されている。また、南西側石器集中地点で見られる剥片が、北東側石器集中地点のものに比べてやや大きい傾向がある。

3 第2ブロック（第16～20図、第5・6表、図版3・17）

（1）出土状況（第16～18図）

南西及び西から延びる小谷津の両谷頭部に挟まれた台地上、調査区の中央部B3-23・24～B3-33・43グリッド付近に位置する。遺物の出土量では、第1ブロックに次ぐ量が検出されている。遺物の出土状況は、南北10mの範囲にわたり散漫に出土しており、北側にやや集中する部分がある。平面分布では、第1ブロックのように明らかに2つに分かれてはいないが、垂直分布を見てみると、レベル差のある2つの石器集中地点を確認することができる。また、レベル別出土点数のヒストグラム（第16図）を見ると、大きく2つのピークがあり、分布域が分かれる。石材及び石器組成では、下位のVII層を中心に分布している石器群は、メノウ、安山岩が中心であり、下総台地のIX層～VII層で一般的に見られる様相を呈している。



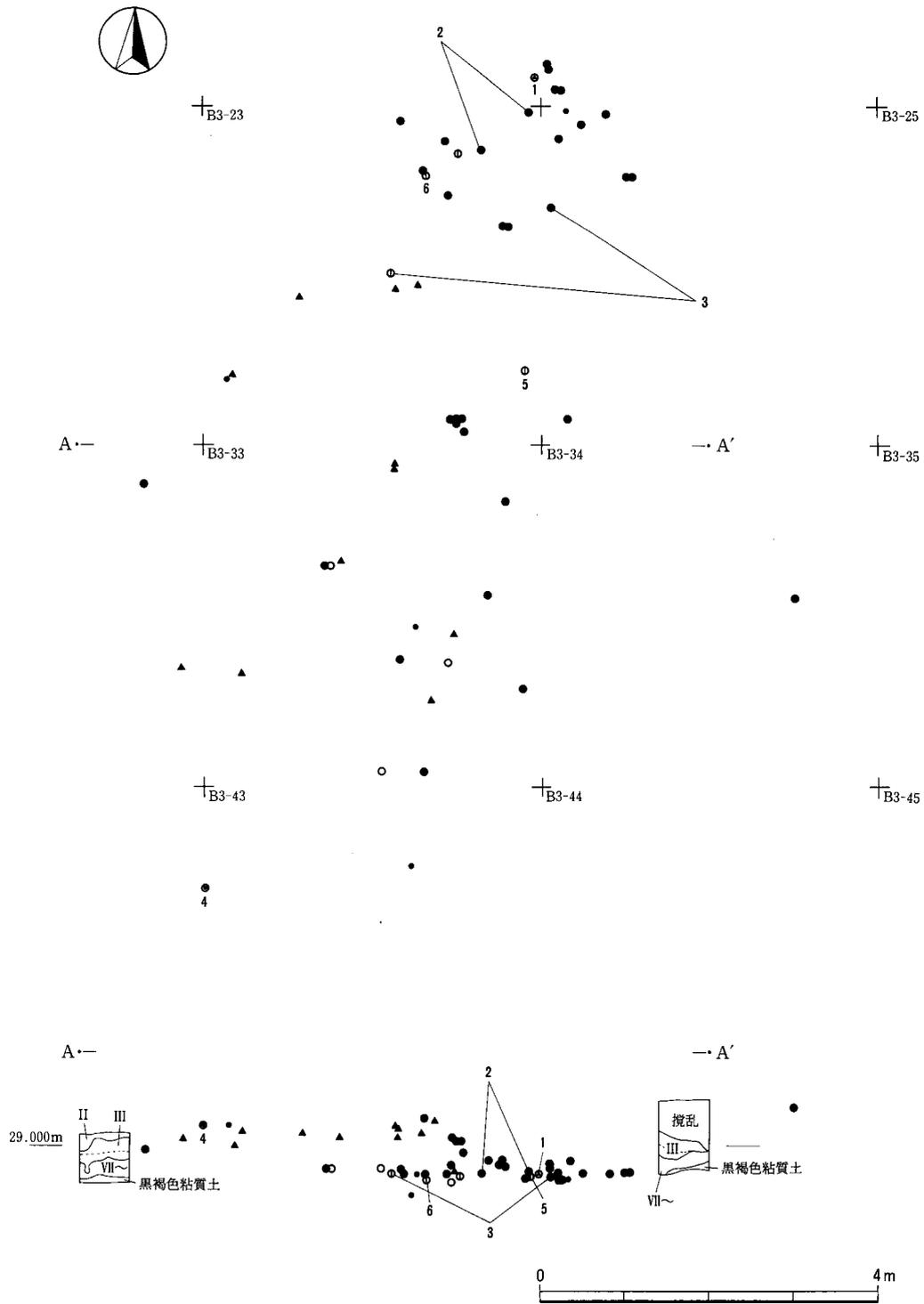
第16図 第2ブロックレベル別出土点数

それに対し、上位のIII層を中心に分布する石器群は礫がほとんどである。そうしたことから、第2ブロックではVII層段階とIII層段階の2枚の文化層があることがわかる。

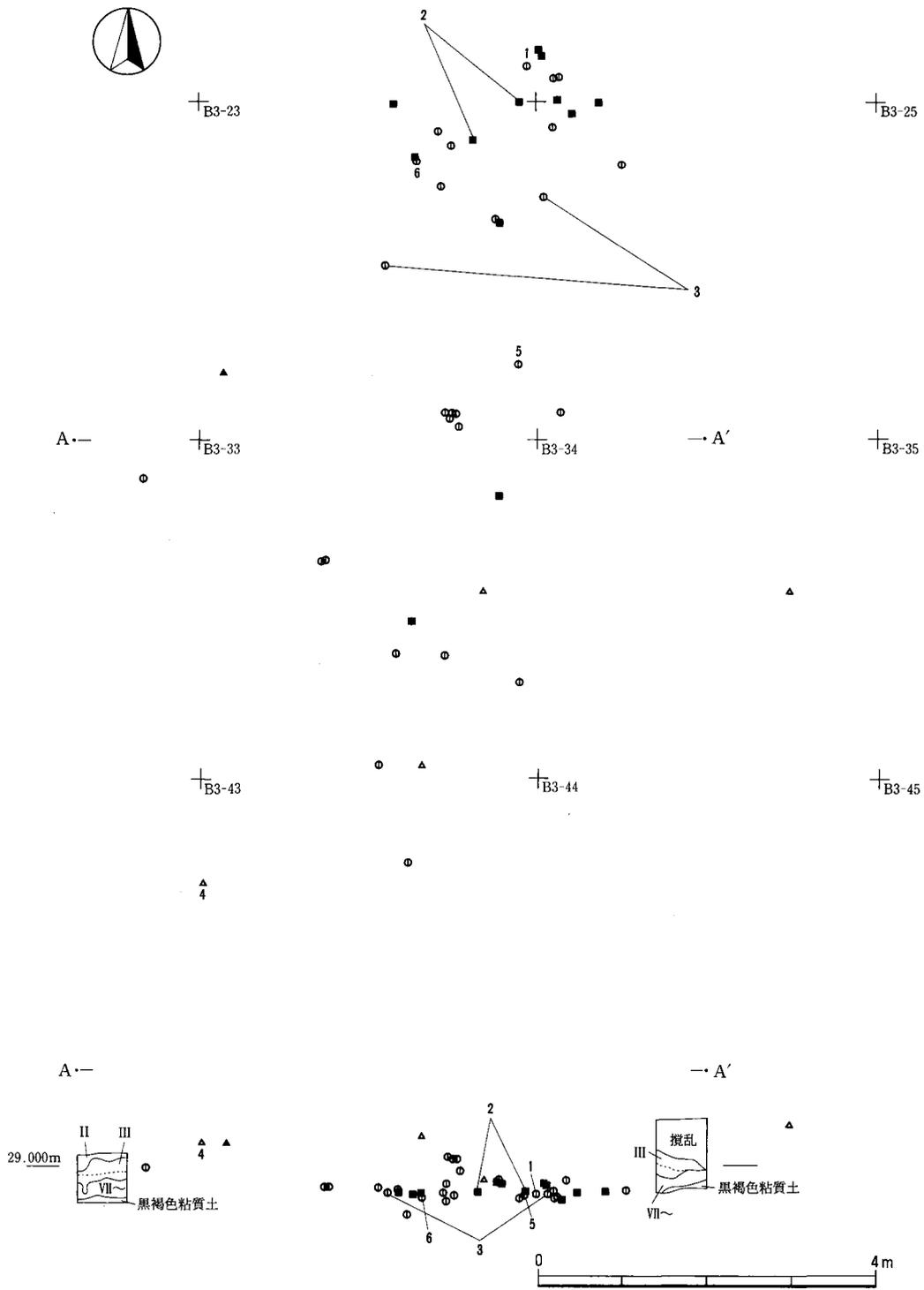
ブロック構成を見ると、全70点のうち、VII層石器集中地点では、搔器1点、Uf 3点、石核4点、剥片30点、碎片3点、礫片1点の計42点、III層石器集中地点では、剥片4点、碎片1点、礫及び礫片23点の計28点が出土している。なお、一括で取り上げられた礫（片）が13点あるが、礫（片）の分布がIII層石器集中地点に大きく偏っていることから、III層石器集中地点に帰属する可能性を示唆する。

（2）石器組成（第19・20図）

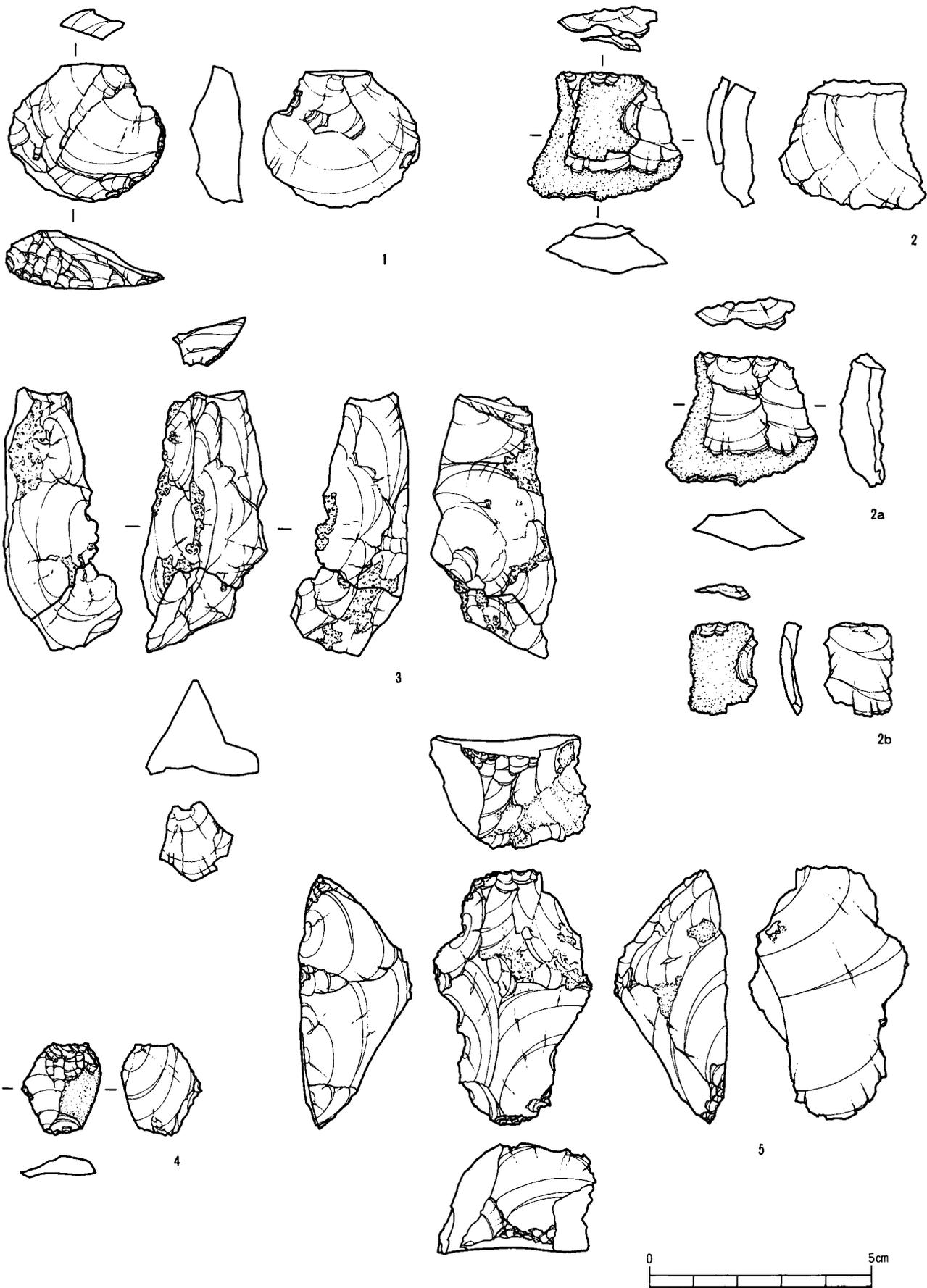
1は幅広の横長剥片を用いたメノウ製のエンドスクレイパーである。腹面側から丁寧に刃部を作り出しており、腹面右側縁部には背面側からの二次加工が行われている。石材の良質な部分を用いている。2は剥片の接合資料で、安山岩製である。拳大より一回り小さい礫を用いたと考えられ、石核調整よりも粗割り段階での剥片である。打面に当たるフラット面が接合しても平坦なため、半截された礫から剥離されたものと思われる。3・5はメノウ製の石核で、石材中に異物の混入が認められる。3は2点の接合資料で、剥離作業面と打面を入れ替えて、剥離が行われている。5は半截した石材の主要剥離面を打面として、打点を変えながら剥片剥離が行われている。3・5とも横長剥片を取ることが特徴である。なお、5は実測図上下両端に刃部を作出しており、剥片剥離後、エンドスクレイパーとして転用されている。4は剥片で



第17図 第2ブロック遺物出土状況（器種別）

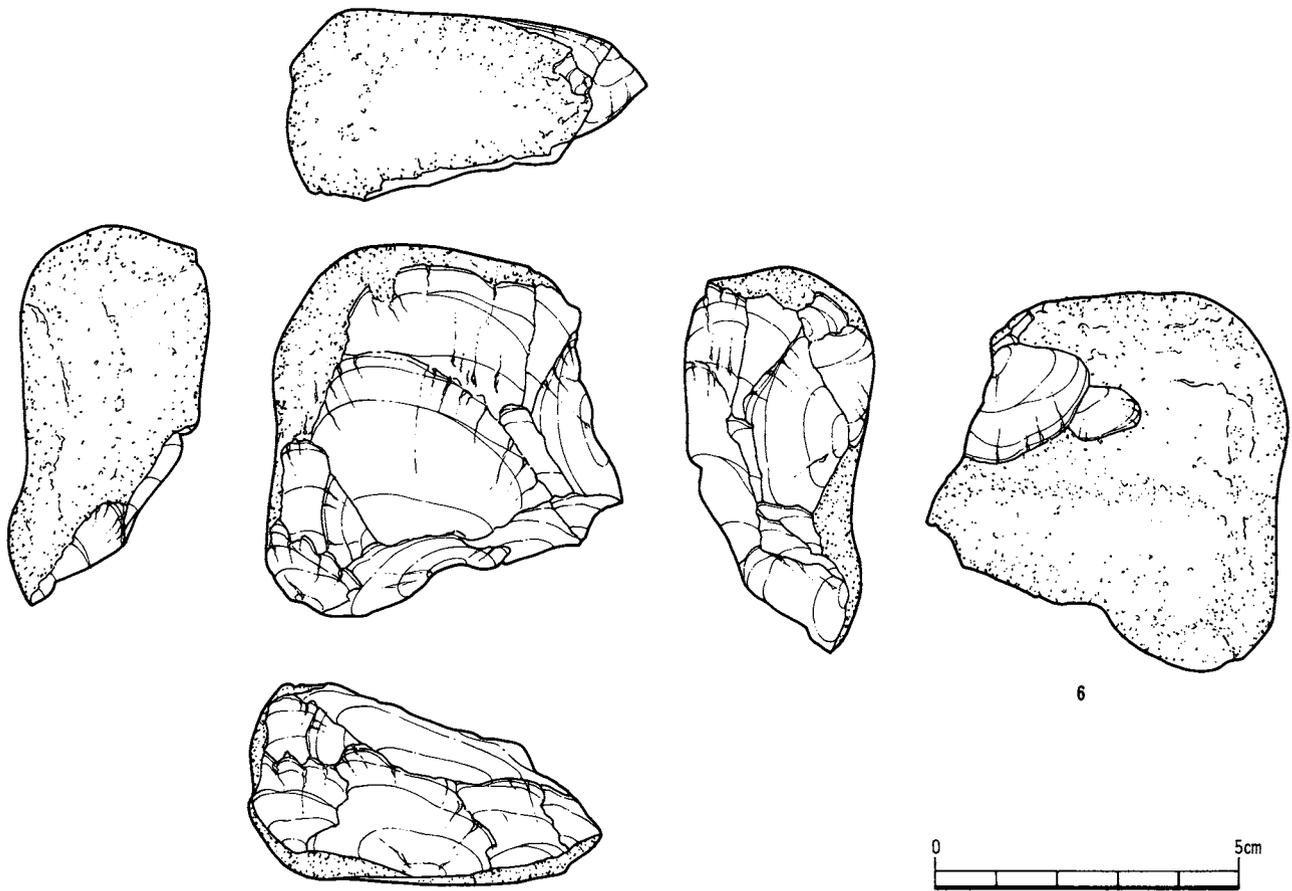


第18図 第2ブロック遺物出土状況 (石材別)



第19図 第2ブロック出土遺物(1)

ある。比較的小さな礫を素材として、打面調整も行われている。6は安山岩製の石核である。拳大より一回り小さい扁平な礫を用いている。石材中に異物の混入が多いため、ステップフラクチャーが起きている。



第20図 第2ブロック出土遺物(2)

(3) 石材組成

Ⅲ層の文化層では礫及び礫片が主体を占めている(第5表)。礫のあり方は2とおりある。一方は第2ブロック全体に散漫に広がっている小さめの礫及び礫片で、B3-6-0001~0003・0006~0008・0010~0013がこれに該当する。もう一方は、B3-6-0035A~Nである13個の礫及び礫片である。後者は出土地点が集中しており、いずれも大きめの礫で構成されていることから、礫利用の状況を端的に示していると思われる。

Ⅶ層の文化層で特徴的なことは、分布する石器群の石材が安山岩とメノウにほぼ限られることである。安山岩は、第19図2のように自然面を剝離している状況のものと、第20図6のように原石を加工しただけで、そのまま廃棄したものの2つのパターンがある。メノウはいずれも乳白色を呈し、自然面に近いところは透明化していない部分と透明な部分が互層を成しているが、中心部はかなり良質な石材となるようである。

第5表 第2ブロックIII層石器集中地点

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	レベル (m)	層位	備考
	B3-6 0001	礫片	Tu	—	—	—	13.1	29.086	III	
	B3-6 0002	礫片	Sa	—	—	—	2.2	29.180	攪乱	被熱
	B3-6 0003	礫片	Tu	—	—	—	6.3	29.280	III	
	B3-6 0006	礫片	Rh	—	—	—	6.7	29.115	攪乱	被熱
	B3-6 0007	礫片	Sa	—	—	—	3.9	29.226	III	被熱
	B3-6 0008	礫片	Sa	—	—	—	5.5	29.220	III	
	B3-6 0009	C	S-Sh	0.8	0.7	0.1	0.1	29.025	III	
	B3-6 0010	礫片	Sa	—	—	—	3.8	29.017	攪乱	
	B3-6 0011	礫片	Sa	—	—	—	143.0	29.185	III	被熱
	B3-6 0012	礫片	Ch	—	—	—	28.0	29.094	III	
	B3-6 0013	礫片	Sa	—	—	—	12.6	29.143	III	被熱
	B3-6 0035A	礫片	Sa	—	—	—	(44.5)	—		
	B3-6 0035B	礫片	Ch	—	—	—	(32.1)	—		
	B3-6 0035C	礫片	Tu	—	—	—	(55.3)	—		
	B3-6 0035D	礫片	Tu	—	—	—	(71.7)	—		
	B3-6 0035E	礫片	Gl	—	—	—	(82.0)	—		被熱
	B3-6 0035F	礫片	Ch	5.1	(3.6)	2.4	(61.7)	—		
	B3-6 0035G	礫片	Sa	—	—	—	(17.8)	—		被熱
	B3-6 0035H	礫片	Ch	—	—	—	(9.4)	—		
	B3-6 0035I	礫片	Rh	—	—	—	(54.8)	—		被熱
	B3-6 0035K	礫片	Tu	—	—	—	(66.9)	—		被熱
	B3-6 0035L	礫片	Tu	8.0	(6.4)	3.7	(233.9)	—		
	B3-6 0035M	礫片	Sa	—	—	—	(22.4)	—		
	B3-6 0035N	礫片	Tu	—	—	—	(8.2)	—		被熱
	B3-6 0035P	B	Ch	(1.8)	1.3	0.8	(2.8)	—		
	B3 0022	B	Ch	(1.3)	1.0	0.4	(0.5)	29.478		
	B3 0034・K	B	Ch	0.7	2.3	0.4	0.7	29.340		
4	B3 0035・F	B	Ch	2.0	1.8	0.4	1.8	29.233		

第6表 第2ブロックVII層石器集中地点

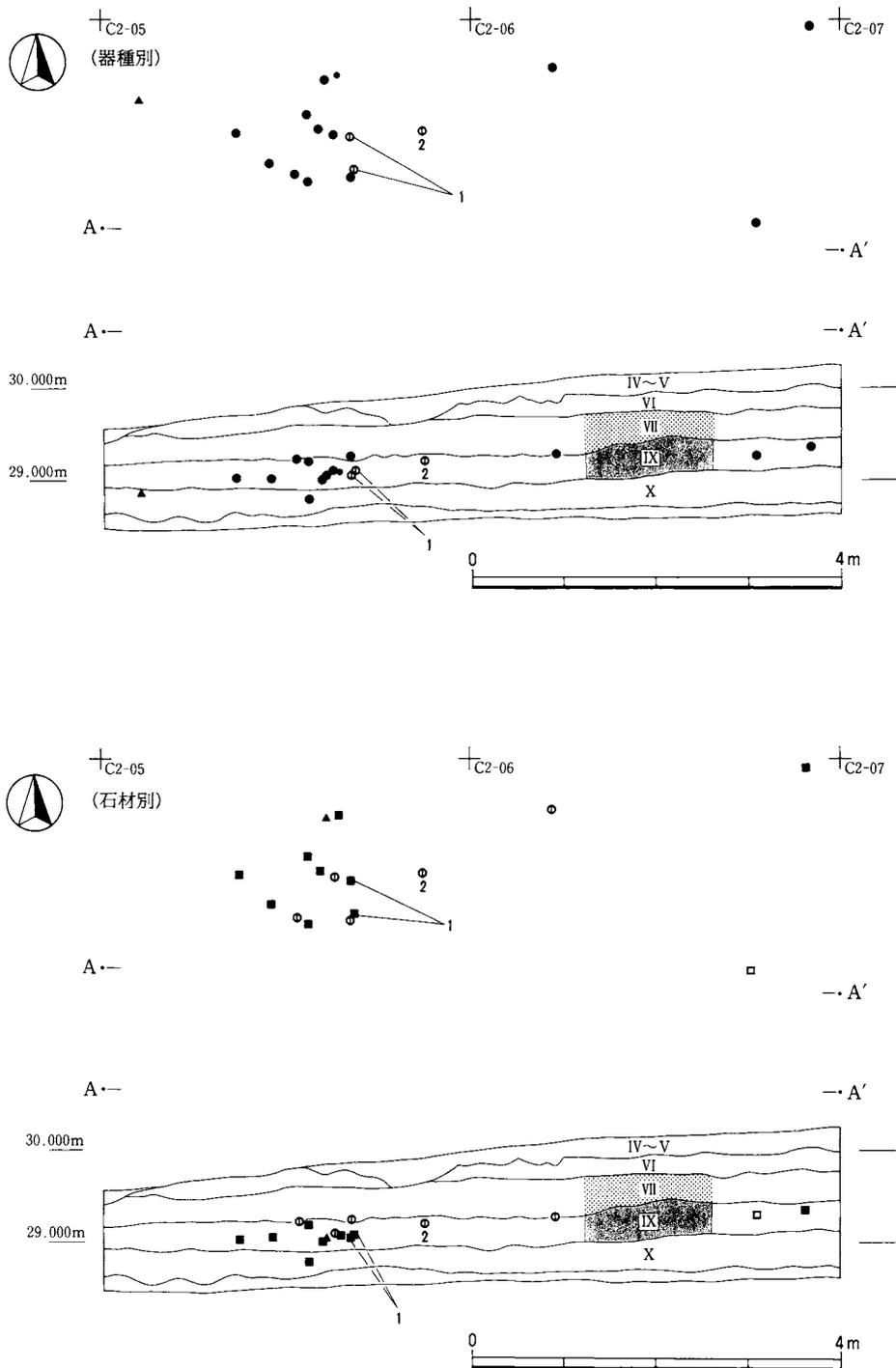
挿図番号	遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	レベル (m)	層位	備考
	B3-6 0004	B	Ag	(1.2)	(1.8)	0.5	(0.6)	28.980	III	
	B3-6 0005A	Uf	Ag	(2.0)	1.2	0.3	(0.7)	28.759	攪乱	
	B3-6 0005B	B	Ag2	(2.7)	1.6	0.7	(2.1)	28.759	攪乱	
	B3-6 0014	Uf	Ag	(3.1)	3.2	1.1	(9.6)	28.725	VII	
	B3-6 0015	B	Ag	(1.9)	2.2	0.6	(3.2)	28.690	攪乱	
	B3-6 0016	C	An3	1.4	0.8	0.5	0.4	28.680	VII	
	B3-6 0017	B	An3	3.5	2.5	0.6	4.7	28.765	攪乱	
	B3-6 0018	B	Ch	(1.5)	1.8	0.6	(1.6)	28.835	攪乱	
	B3-6 0019	礫片	Ch	—	—	—	(10.5)	28.717	攪乱	
	B3-6 0020	Uf	Ag	(2.2)	1.2	0.7	(1.7)	28.575	攪乱	
	B3-6 0021	B	Ag2	(2.5)	1.6	1.0	(2.9)	28.608	VII~IX	
3	B3-6 0022	D	Ag1	(4.9)	2.5	2.4	(22.5)	28.680	攪乱	接合3
	B3-6 0023	B	An2	3.3	2.4	1.2	9.0	28.685	攪乱	
	B3-6 0024	B	An2	1.1	2.4	0.4	1.0	28.785	攪乱	接合7・未図化
2b	B3-6 0025	B	An2	2.0	1.6	0.4	1.1	28.718	攪乱	接合2
2a	B3-6 0026	B	An2	2.9	3.4	0.9	8.8	28.700	攪乱	接合2
	B3-6 0027	D	Ag1	4.3	3.4	2.4	31.2	28.670	攪乱	
	B3-6 0028	B	Ag2	1.5	1.9	0.7	1.1	28.680	攪乱	
	B3-6 0029	B	Ag	3.2	2.4	0.8	3.6	28.667	攪乱	
6	B3-6 0030	D	An3	6.2	6.0	2.8	114.6	28.667	攪乱	
	B3-6 0031	B	An2	1.9	4.0	2.2	13.0	28.810	攪乱	
	B3-6 0032	B	Ag1	3.1	2.4	1.5	9.6	28.810	攪乱	
	B3-6 0033	B	Ag	1.9	1.5	0.6	1.2	28.760	攪乱	
	B3-6 0034	B	An2	—	—	—	—	28.770	攪乱	接合7・未図化
	B3-6 0036	B	Ag	(2.4)	(1.5)	0.8	(2.1)	—	III	
	B3-6 0037	B	Ag	(2.5)	1.1	0.3	(0.5)	29.088	III	
	B3-6 0038A	B	Ag2	(2.2)	2.5	(0.8)	(4.2)	29.068	III	
	B3-6 0038B	B	Ag2	1.0	1.5	0.5	0.5	29.068	III	
	B3-6 0039	B	Ag	1.9	2.4	0.7	2.1	28.936	VII	
5	B3-6 0040	D	Ag1	5.7	3.6	2.5	38.9	28.663	攪乱	
	B3-6 0041	B	Ag1	2.2	1.8	0.7	2.0	28.816	VII	
3	B3-6 0042	B	Ag1	(2.3)	2.3	1.5	(6.4)	28.642	攪乱	接合3
	B3-6 0043A	B	Ag1	(5.2)	(3.6)	1.5	(25.7)	28.711	攪乱	
	B3-6 0043B	B	Ag	0.7	1.1	0.5	0.4	28.711	攪乱	
	B3-6 0044	B	An2	4.8	4.0	1.3	22.7	28.708	攪乱	
	B3-6 0045	B	An2	3.7	1.9	0.7	2.7	28.692	攪乱	
	B3-6 0046	B	Ag2	(6.3)	(3.8)	2.2	(41.7)	28.703	攪乱	
	B3-6 0047	C	An	0.6	1.1	0.2	0.1	28.619	攪乱	
	B3-6 0048A	B	Ag1	2.1	2.1	0.7	1.6	28.620	攪乱	
	B3-6 0048B	B	Ag1	(1.6)	0.9	0.4	(0.6)	28.620	攪乱	
1	B3-6 0049	Es	Ag	3.2	3.5	1.4	12.4	28.656	攪乱	
	B3-6 0050	C	Ag2	—	—	—	2.3	28.438	攪乱	

4 第3ブロック (第21・22図、第7表、図版3・17)

(1) 出土状況 (第21図)

西側から延びる小谷津の谷頭部に面する斜面肩部、調査区の北東端C2-05・06グリッドに位置する。出土面はIX層中にあり、本遺跡における最下層の文化層に該当する。遺物は東西8m×南北4mの範囲から出土しており、第1・第2ブロックに比べると、分布域は狭く、出土石器数も少ない。

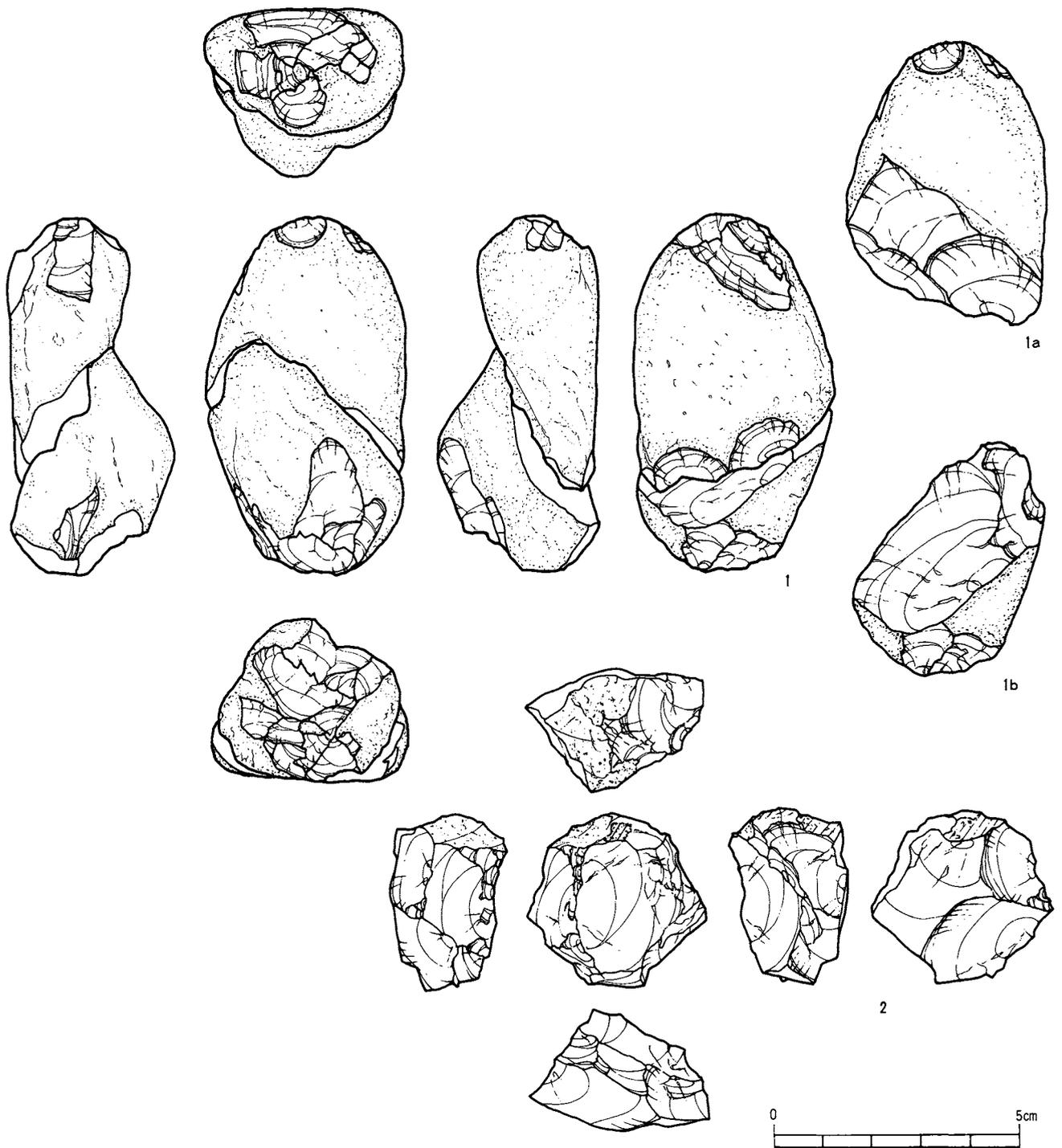
ブロック構成は、石核3点、剥片12点、碎片1点、礫1点の計17点である。メノウ、安山岩が主要石材であるが、珩質頁岩、凝灰岩の剥片及び砂岩製の礫片が1点ずつ出土している。



第21図 第3ブロック遺物出土状況

(2) 石器組成 (第22図)

1は拳大ほどの礫を用いた石核で、安山岩製である。2個体に分割される前に、敲石として使われていたもので、両端の剝離痕が放射状に展開しており、敲石として両端とも機能していたことがわかる。石核に転用したといっても、2枚～3枚の剝片が剝離されただけで、すぐに廃棄されたものと思われる。2はメノウ製の石核である。剝離作業面と打点を入れ替えながら剝片剝離を行っているため、サイコロ状になっている。IX層では多く見られる典型的な石核形態といってよいであろう。



第22図 第3ブロック出土遺物

第7表 第3ブロック

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	レベル (m)	層位	備考
1a 2 1b	C2-3 0001	礫片	Sa	—	—	—	1.4	28.845	IX	接合 1
	C2-3 0002	B	An	1.6	0.9	0.4	0.4	29.035	IX	
	C2-3 0003	B	An	(0.8)	(1.3)	0.3	(0.3)	29.045	IX	
	C2-3 0004	B	Ag3	2.0	(2.2)	1.9	(2.3)	29.240	IX	
	C2-3 0005	B	An1	(1.5)	(0.9)	0.3	(0.5)	29.002	IX	
	C2-3 0006	B	An1	3.2	2.1	0.8	3.0	28.800	IX	
	C2-3 0007	B	S-Sh1	1.3	1.6	0.6	1.0	29.070	IX	
	C2-3 0008	C	An	1.3	0.6	0.2	0.1	29.087	IX	
	C2-3 0009	B	Ag3	4.0	3.6	1.9	23.3	29.120	IX	
	C2-3 0010	D	An4	5.6	4.2	2.5	63.6	29.075	IX	
	C2-3 0011	B	Ag3	2.5	3.7	1.6	11.6	29.275	VII~IX	
	C2-3 0012	D	Ag3	3.4	3.6	2.2	24.5	29.222	IX	
	C2-3 0013	B	Ag3	(2.6)	(1.4)	0.8	(2.0)	29.290	IX	
	C2-3 0014	B	An1	1.6	1.7	0.7	1.6	29.372	IX	
	C2-3 0016	B	An1	(1.7)	(1.4)	0.5	(1.1)	29.205	IX	
	C2-3 0017	D	An4	(4.8)	(3.3)	(2.5)	(44.2)	29.110	IX	
	C2-3 0018	B	Tu	2.1	3.4	0.9	3.7	29.264	IX	

5 第4ブロック (第23図、第8表、図版3)

(1) 出土状況

西から延びる小谷津の谷頭部に当たる斜面肩部、調査区の北寄りB2-50グリッドに位置する。出土面はVI層中にあり、最高位と最低位の石器のレベル差は約50cmほどあるが、出土しているチャート製のスクレイパーから判断すると、ほぼ同時期のものと判断してよいであろう。層序は比較的安定している。

ブロック構成は、搔器2点、剥片2点の計4点と少ない。

(2) 石器組成

1・2は、やや厚めの横長剥片を素材としたスクレイパーである。1・2ともチャート製である。1は打面側に一部自然面が残っており、粗割り段階の剥片を用いて製作したとみられる。末端部と右側縁部は剥離状況がやや粗いようである。2は1に比べて刃部が丁寧に作り出されている。両石器とも比較的小型で、サム・スクレイパーと思われる。剥片剥離作業は当該地で行われた様子がなく、剥片2点をあわせた4点とも搬入されたものと考えられる。

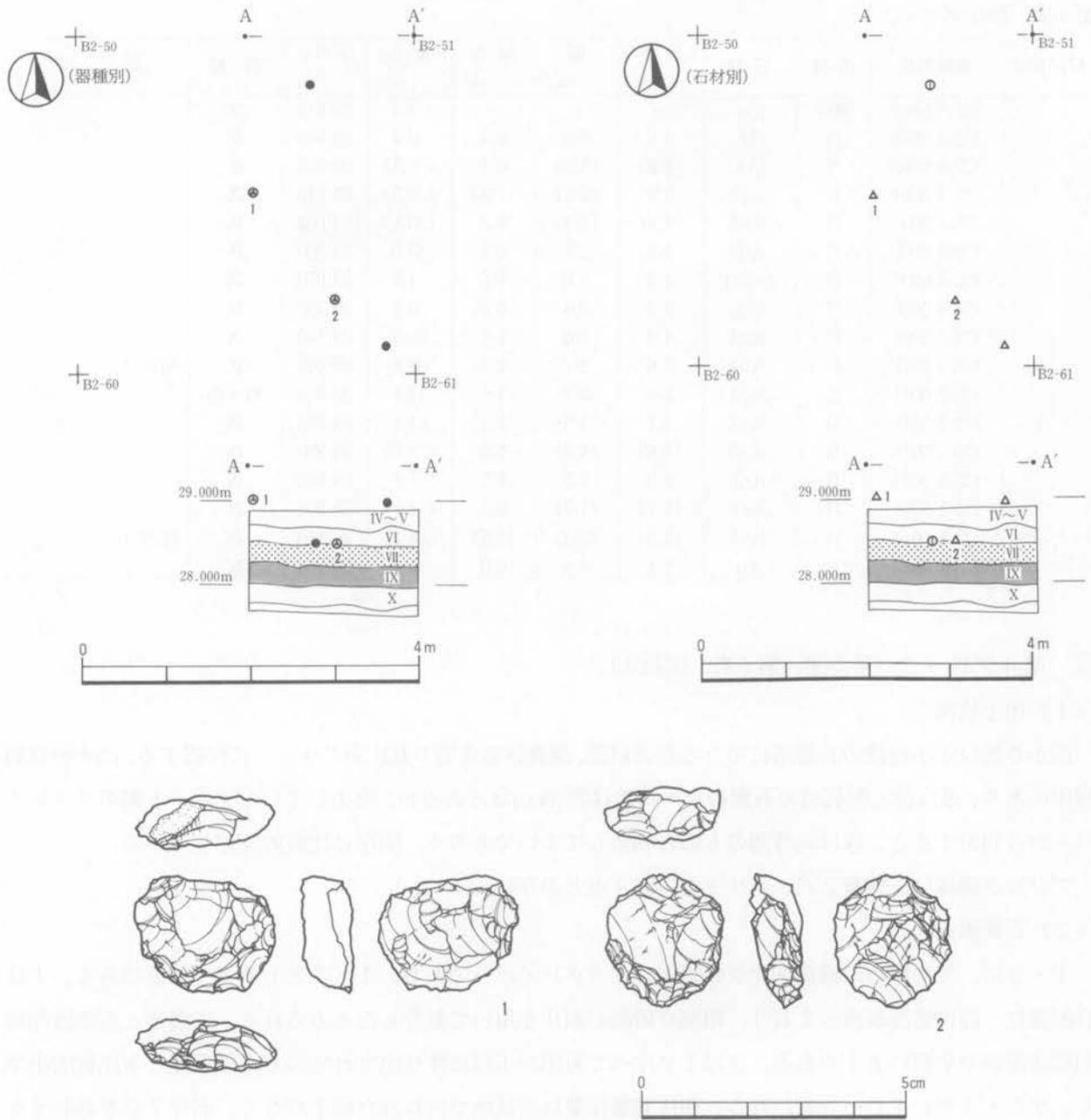
6 第5ブロック (第24図、第9表、図版3・17)

(1) 出土状況

西から延びる小谷津の谷頭部に当たる斜面肩部、調査区の北寄りB2-20・31グリッドに位置する。出土面はVII層中にあり、剥片2点、礫及び礫片7点の計9点である。

(2) 石器組成

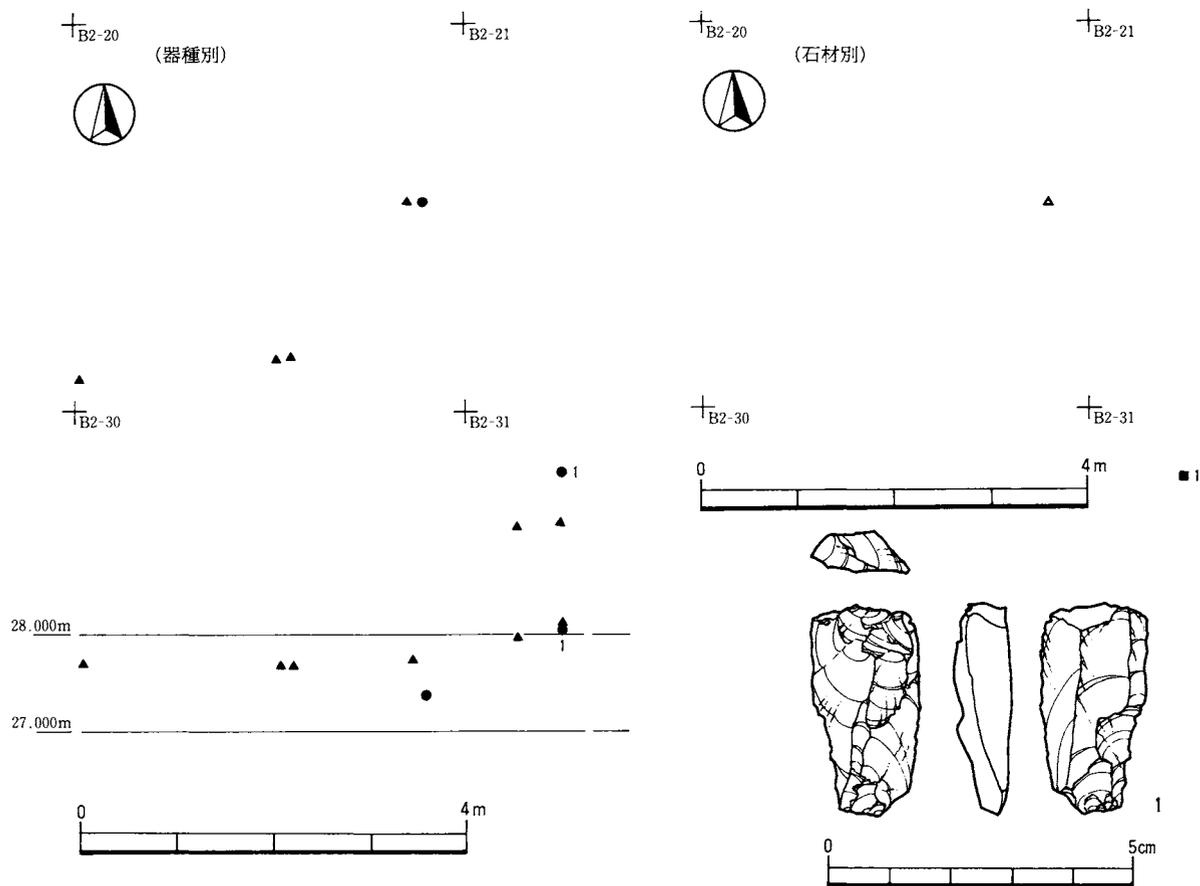
1は安山岩製の剥片である。上・下両方向からの剥離状況からすると、楔形石器(ピエス・エスキーユ)として使われた可能性もある。主要剥離面と考えられる面が観察されないことから、石核として用いられていたとも考えられる。



第23図 第4ブロック遺物出土状況及び出土遺物

第8表 第4ブロック

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	レベル (m)	層位	備考
1	B2-9 0001	Es	Ch	2.1	2.7	1.0	6.4	29.008	IV~V	
	B2-9 0002	B	Ch	2.9	3.1	1.5	9.2	28.996	IV~V	
	B2-9 0003	B	Ag1	(2.6)	(4.2)	0.8	(7.8)	28.490	VI	
2	B2-9 0004	Es	Ch	2.5	2.2	0.9	5.7	28.490	VI	



第24図 第5ブロック遺物出土状況及び出土遺物

第9表 第5ブロック

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	レベル (m)	層位	備考
1	B2-5 0001	礫	Ch	2.7	1.9	1.3	8.9	—	VII	
	B2-5 0002	礫片	Sa	—	—	—	(17.5)	27.720	VII	
	B2-5 0003	礫片	Sa	—	—	—	(32.7)	27.680	VII	
	B2-5 0004	礫片	Sa	—	—	—	(7.2)	27.660	VII	
	B2-5 0005	礫片	Sa	—	—	—	(19.1)	27.752	VII	
	B2-5 0006	B	Ch	(2.7)	1.3	0.7	(1.9)	27.400	VII	
	B2-5 0007	B	An1	(3.4)	1.8	0.9	(5.7)	28.056	VII	
	B2-5 0008	礫片	Mu	—	—	—	(12.3)	28.095	VII	
	B2-5 0009	礫片	Sa	—	—	—	(40.3)	27.962	VII	

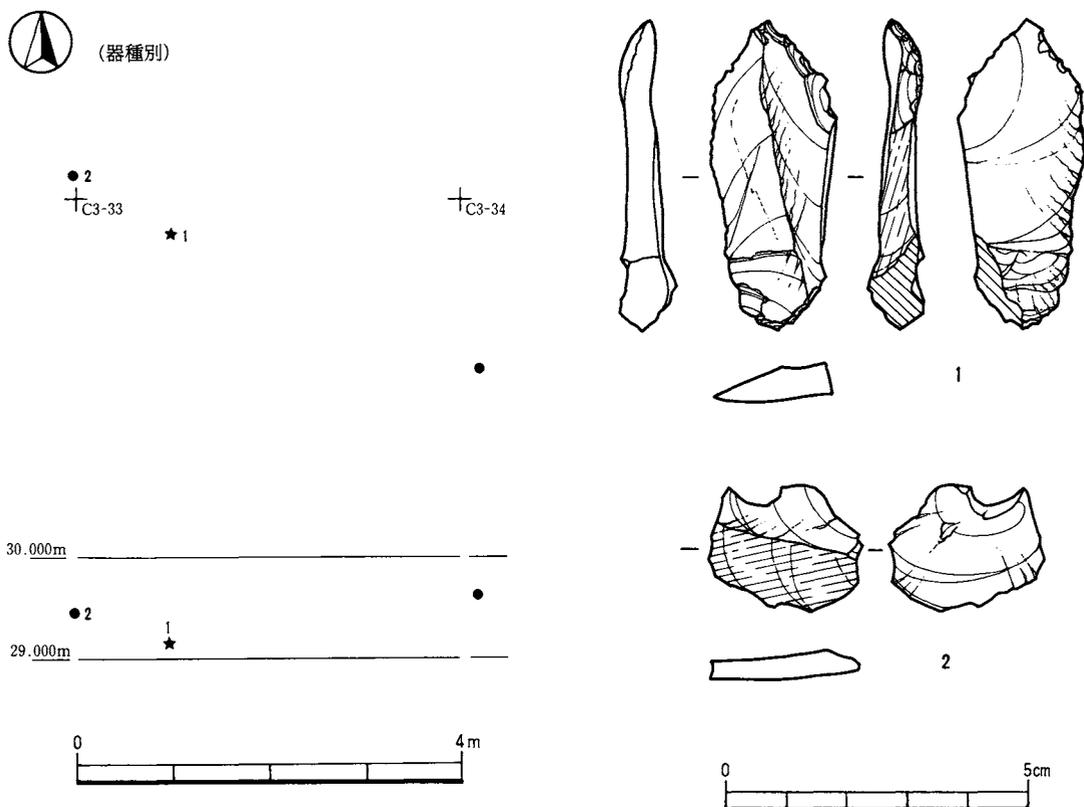
7 第6ブロック (第25図、第10表、図版3・17)

(1) 出土状況

台地上の平坦面、調査区の東寄りC3-33・34グリッド付近に位置する。出土面はIX層上部～VII層下部にかけてである。ナイフ形石器1点、剥片2点の計3点である。

(2) 石器組成

1はやや横長の剥片を利用した珪質頁岩製のナイフ形石器である。腹面右側縁部に微細剥離痕が観察される。2は珪質頁岩製の剥片である。打点側にノッチのようなものが形成されているが、これは発掘時における裏面側からの欠失と思われる。ほかに微細剥離などは認められない。



第25図 第6ブロック遺物出土状況及び出土遺物

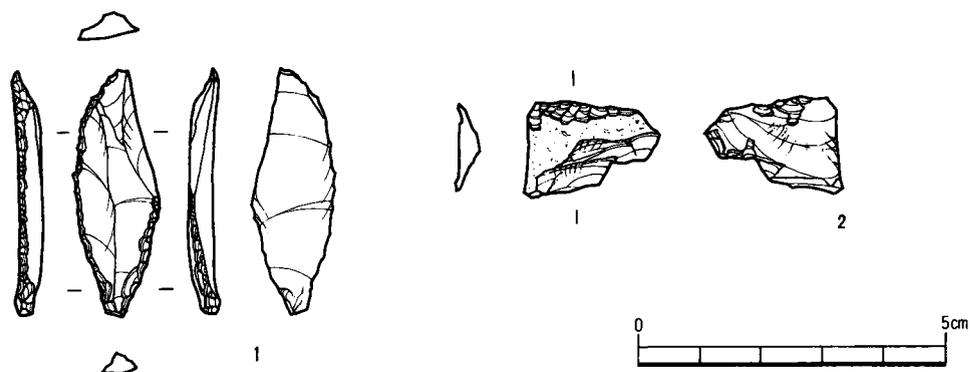
第10表 第6ブロック

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	レベル (m)	層位	備考
1	C3-6 0001	B	S-Sh	1.4	2.8	0.6	2.4	29.650	VII	
	C3-6 0002	Kn	S-Sh	5.1	2.1	0.9	6.5	29.148	IX	
2	C3-6 0003	B	S-Sh	(2.0)	(2.4)	0.6	(2.0)	29.460	VII	

8 単独出土ブロック・表採 (第26図、第11表)

単独出土ブロックは、西側から延びる小谷津の谷頭部に面する斜面肩部、調査区の北東端でC2-03グリッドに位置する。第3ブロックに西隣する。凝灰岩製の剥片1点が出土しているのみである。

表採資料は13点あり、そのうち2点を図化した。1は縦長剥片を利用したナイフ形石器で、形の非常に整った石器である。左側縁部には全面に、また右側縁部には器体のほぼ中央部にまで及ぶプランティングが施されている。バルブは完全には除去されていない。刃部に使用痕とも考えられる微細剥離が認められる。2は両極打法により剥離されたと考えられる剥片である。自然面が残されており、打点側には二次加工が施されている。1・2とも珪質頁岩製である。図化した2点以外では、メノウ製の剥片1点(第11表K)が検出されている。6点の礫片(第11表-B~G)については原石の一部ばかりである。そのうちチャート製のもの(第11表E)は剥片の可能性もある。



第26図 表採石器

第11表 単独出土・表採・グリッド

挿図番号	遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	レベル (m)	層位	備考
	C2-2-0001	B	Tu	1.3	1.6	0.4	0.7	26.834		単独出土ブロック
	A	B	An1	(2.8)	2.5	0.6	(3.6)	—	表採	
	B	礫片	Sa	—	—	—	4.8	—	表採	003.004-001
	C	礫片	Sa	—	—	—	11.9	—	表採	003.004-001・被熱
	D	礫片	Sa	—	—	—	10.2	—	表採	003.004-001・被熱
	E	礫片	Ch	—	—	—	9.6	—	表採	003.004-001・被熱
	F	礫片	Tu	—	—	—	6.8	—	表採	003.004-001・被熱
	G	礫片	Sa	—	—	—	47.5	—	表採	62-60・被熱
2	H	Rf	S-Sh	(1.5)	2.2	0.4	(1.0)	—	表採	A3-78・C
	I	B	An	2.5	1.2	0.4	0.8	—	表採	A3-78・D
	J	B	S-Sh	2.2	2.3	1.2	5.7	25.371	グリッド	B1-8
	K	B	Ag	3.5	5.3	1.4	16.4	25.385	グリッド	B1-43
	L	B	S-Sh	(1.7)	(2.1)	0.4	(1.4)	28.882	グリッド	B2-73
1	M	Kn	S-Sh	4.1	1.4	0.5	2.0	—	表採	007-301

注1 昭和63年度の発掘調査段階では旧土層区分であったが、その後、平成4年度以降に採用されている新土層区分に伴い、報告段階で土層の名称を一部改めた。変更したもののみ、旧名称と新名称を併記しておく。VII a → VII、VIIb → IX、VIII → X。

第3節 縄文時代の遺構と遺物（第27～36図、第12～14・21表、巻頭図版・図版4・18～21）

1 遺構と出土遺物

縄文時代に帰属すると判断した遺構は、草創期の炉跡1基、前期の集石遺構1基、前期の可能性のある炉跡1基・土坑1基、中期の土器片囲炉1基の5遺構を数える（第12表）。以下、調査時の番号順に遺構と主な出土遺物について報告する。

第12表 縄文時代の遺構

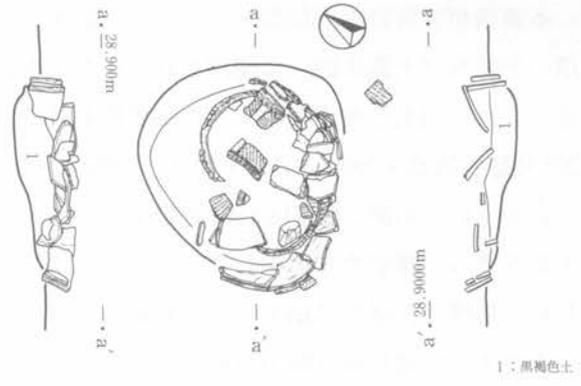
遺構番号	遺構の種類	位置	時期	挿図番号	図版番号	備考
017号跡	土器片囲炉	A3-27	中期・加曾利EⅡ式	27	4・18	住居跡の可能性あり
025号跡	集石遺構	B2-74・75	前期・花積下層式	28・29	4・18・19	住居跡の可能性あり
026号跡	土坑	B2-64	前期?	30	4	
027号跡	炉跡	B2-75	前期?	30	4	
028号跡	炉跡	A3-36	草創期・多縄文系土器期	30	巻頭・4・18	

017号跡（第27図、第12・14・21表、図版4・18）

南西及び西から延びる小谷津の両谷頭部に挟まれた台地上、調査区の中央やや西寄りA3-27グリッドに位置する。複数個体の土器片が、やや歪んだ円形に巡る土器片囲いといえる状態で出土し、その周囲を精査したところ、北方向に一回り大きい不整形円形を呈する掘り方プランが検出された。土器片囲いの規模は長径53cm×短径39cm、掘り方は長径57cm×短径53cm、深さ2cm～6cmを測る。長軸方位は土器片囲いがN-37°-E、掘り方がN-46°-Eで、土器片囲いの長軸が掘り方に比べ9°北に振れる。土器片囲い内及び掘り方内の覆土は黒褐色土を主体とし、焼土粒等は全く含まれていない。出土した土器片の器面には二次焼成を受けたものがあり、またその形状から住居の炉の可能性を考えて、範囲を広げて周辺の精査を行ったが、床面及びピット等の施設は検出できなかった。

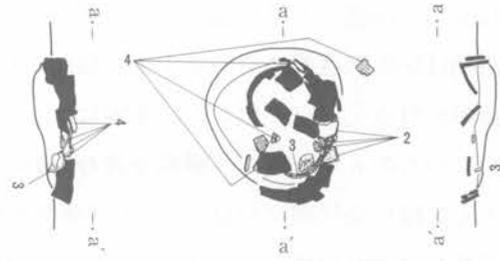
土器片囲いに利用されていた土器片からは、胴上半部以上及び底部を欠く曾利系の深鉢（1）が復元でき、また別個体の深鉢胴部片のうち、接合した3点（2・3・4）について図化した。土器片囲い内には被熱した礫片（重量178.6g）も1点出土している。1は括れ部に2段の交互刺突文が巡り、以下地文の単節縄文（LR）上に多様な沈線を垂下するものである。交互刺突文は、3本の沈線を引いた後、結果的に沈線間に残った隆帯部分に棒状工具の端部を用いて、上下両方向から施文している。胴部に垂下する沈線は、交互刺突文の最下段の沈線と上部を重ねた逆U字状区画を8区画構成する。区画内には上端に渦巻文をもつ蛇行沈線が垂下するが、8か所のうち1か所は沈線が垂下せず、地文のみである。区画間は磨消懸垂帯が垂下するが、7か所のうち図化した右端部分とその右隣の2か所には磨消懸垂帯内に1本の沈線が垂下している。遺存部の上端は成形時の輪積み部分に沿ってほぼ水平に割れており、割れ面の摩耗が著しい。2・3は地文の単節縄文（LR）上に2本一組の沈線を垂下するもので、4は地文の撚糸文（1）上に横位に巡る3本の沈線が引かれる。二次焼成による器面の劣化は、1・2・4の内・外面及び3の内面に顕著である。土器片囲いの周辺からは、少量の土器片、剝片2点（安山岩1・石材不明1）、碎片1点（黒曜石）、礫1点が出土した。そのうち土器片2点（5・6）を図化した。5は2本の沈線間を磨り消した懸垂帯の垂下する胴下半部～底部片である。地文は単節縄文（LR）である。6は7本一組の櫛歯状工具による弧状条線の見られる胴部片である。いずれも内・外面ともに二次焼成による器面の劣化が著しく、本来は土器片囲いを構成するものの一部であった可能性が高い。

+A3-27から
南へ2m

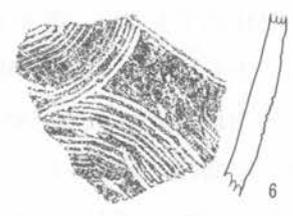
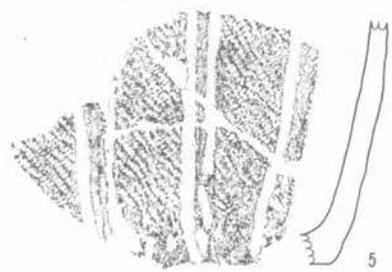
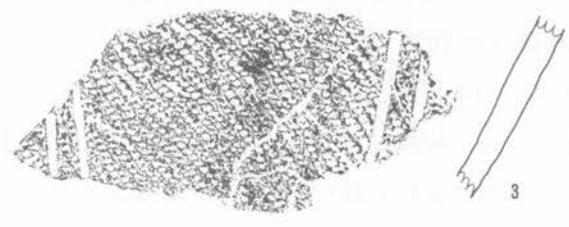
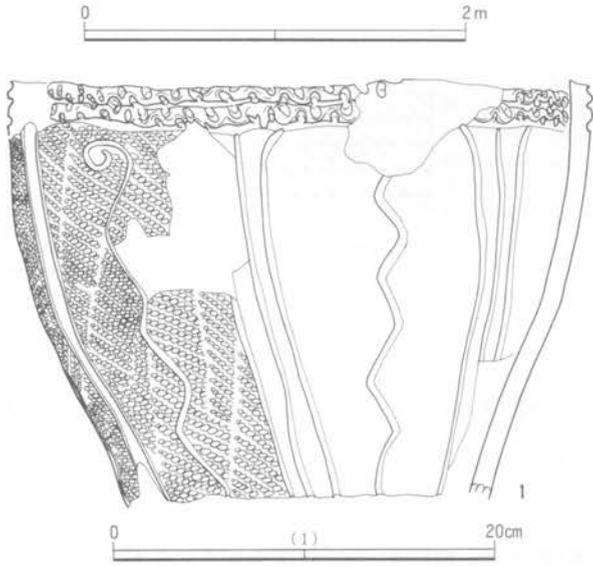


1:黒褐色土

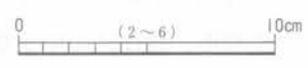
+A3-37



塗りつぶしたものは1



第27図 017号跡と出土遺物

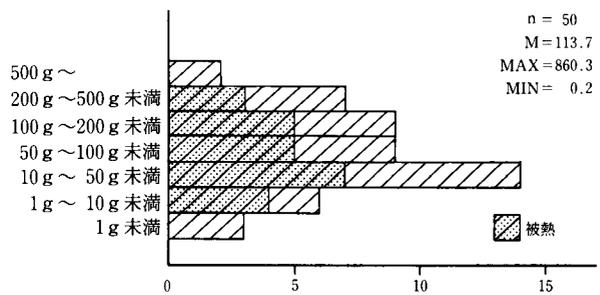


本遺構が住居の内部施設としての炉と断定できる根拠は得られなかったが、屋内・屋外はともかく、遺構の形状及び土器片囲いに使用されていた土器に残された二次焼成の痕跡から、土器片囲炉として報告する。また、出土した土器はすべて加曾利E II式であり、本遺構の時期を該期に比定する。

025号跡 (第28・29図、第12・14表、図版4・18・19)

台地上の平坦面、調査区の中央部B2-74・75グリッド付近に位置する。II層下位～III層上面にかけて縄文土器を伴って礫がやや集中して出土し、その周囲に長軸方位をN-56°-Eにとる不整形のプランを検出した。規模は長径3.95m×短径3.45mを測る。プラン内は周囲と比べてややしまっているものの、床面といえるような硬化面は検出されなかった。プラン内の北東部にやや偏して炉が検出された。長径50cm×40cm、深さ2cm～6cmを測り、長軸方位はN-81°-Wにとる。平面図に図示した範囲のロームが焼成を受けており、茶褐色あるいは赤褐色に変色していた。覆土は黒褐色土中に少量の焼土粒を含む。炉の検出面及び10cm～15cm掘り下げた面で炉の周辺を精査したが、ピット等の施設は検出できなかった。

遺物は炉の南西部にやや集中する傾向が見られる。プランの周辺出土のものを含めて、土器21点、礫等60点の計81点をドット化した。土器はすべて小破片で、前期の所産である。胎土に繊維を含むもの13点・含まないもの8点を数え、繊維を含むものうち4点を図化した。1は口縁部片、2～4は胴部片で、4点とも文様に羽状縄文が見える。羽状縄文を構成する原体は、1・3が単節縄文(RL)、2が単節縄文(LR)、4が撚糸文(ℓ)である。礫等60点のうち礫は50点で、被熱したもの29点・被熱していないもの21点を数える。ほかには楔形石器・打製石斧(7)・磨製石斧(6)・敲石(8)各1点、剥片2点(5)、碎片4点が出土している。5はチャート製の剥片である。6は砂岩製の磨製石斧である。研磨により両刃の刃部を作り出し、また表・裏両面とも基部の一部を研磨している。7は砂岩製の打製石斧である。撥形を呈する小型品である。8は砂岩製の敲石である。



第28図 025号跡出土礫重量別点数

本遺構は集石遺構として報告したものの、炉をもった径約4mのプランは住居跡としての可能性もある。出土した土器は花積下層式であり、本遺構の時期を該期に比定する。

026号跡 (第30図、第12・14表、図版4)

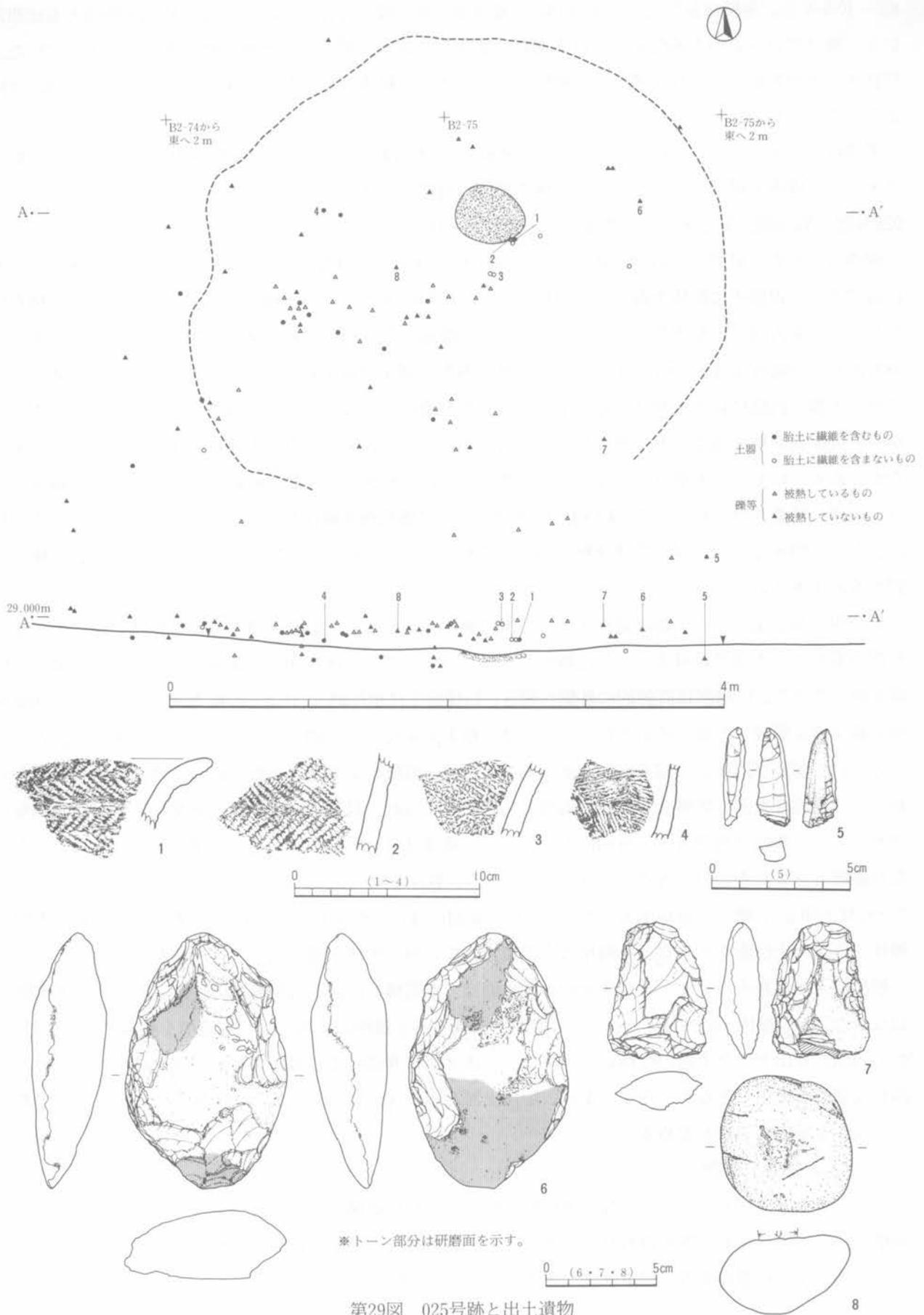
台地上の平坦面、調査区の中央部B2-64グリッドに位置する。楕円形のプランを呈し、長軸方位はN-31°-Eをとる。規模は長径1.85m×短径1.67m、検出面からの深さ22cm～30cmを測る。底面はハードローム層中に掘り込まれており、やや凹凸が認められる。覆土はソフトロームが大部分で、わずかながらしまりが弱いこと及び混入物があることにより、セクションでは壁の立上りを明確にとらえることができた。

遺物は極めて少ない。覆土中から、土器3点(黒浜式1・前期としかいえない繊維を含む土器2点)、剥片2点(チャート1・石材不明1)、碎片2点(チャート1・安山岩1)が出土したのみである。

南東方向に隣接して025号跡があり、出土した土器が小片・少量ながら他時期のものを含まないことから、本遺構を前期の可能性のある土坑として報告する。

027号跡 (第30図、第12表、図版4)

台地上の平坦面、調査区の中央部B2-74グリッドに位置する。不整形のプランを呈し、長軸方位はN-



第29図 025号跡と出土遺物

85°-Eをとる。規模は長径52cm×短径48cm、検出面からの深さ7cm～13cmを測る。底面・壁面ともに非常によく焼けてロームが茶褐色あるいは赤褐色に変色しており、覆土中には焼土粒が多量に含まれていた。形状から住居の炉の可能性を考えて、範囲を広げて周辺の精査を行ったが、床面及びピット等の施設は検出できなかった。

遺物は全く出土していないが、北西方向に隣接して025号跡があり、その炉跡と規模・形状等がよく似ることから、屋内・屋外はともかく、本遺構を前期の可能性のある炉跡として報告する。

028号跡（第30図、第12・14表、巻頭図版・図版4・18）

南西及び西から延びる小谷津の両谷頭部に挟まれた台地上、調査区の中央やや南西寄りA3-36グリッドに位置する。III層中に炉体土器のような状態でほぼ円形に巡る土器の口縁部が出土し、その周囲を精査したところ、東方向に不整形を呈する炉のプランを検出した。規模は長径50cm×短径42cm、深さ4cm～7cmを測り、長軸方位はN-67°-Eをとる。土器の外側の覆土は焼土粒を含み、底面は若干ながら焼けているが、土器の内側には焼土粒は全く含まれず、底面も焼けていなかった。土器の口縁部が残っていることから、火床面が検出面よりも上位にあったとは考えにくく、火床面を含む内側の焼土をかき出してしまったか、あるいはもともと焼けていなかった可能性が高い。形状から住居の炉跡の可能性を考えて範囲を広げて周辺の精査を行ったところ、P1・P2及びP2の付近に硬化面を検出した。2か所のピットは炉に伴うものかどうか明確ではないが、形状は柱穴のようである。また、硬化面も炉跡に伴う床面とするには検出位置が離れすぎている。

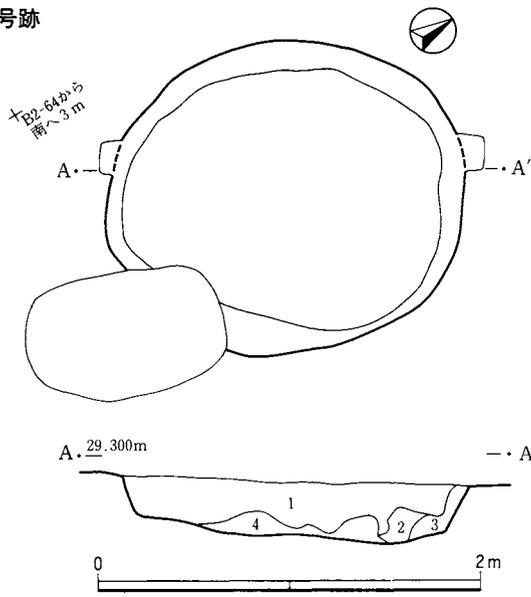
炉の内部から出土した土器の遺存状況は非常に悪く、かろうじて取り上げたものの粉状に砕けてしまった部分もある。1は図化可能だった比較的残りの良い3片で、口径16.6cmの不規則な緩い波状を呈する口縁が復元できた。口縁部は直線的に外側へ開き、口縁直下に単節縄文（LR）の縦方向施文による幅18mm前後の縄文帯を形成した後、その下位に同一原体の横方向施文による縄文帯を巡らせて羽状縄文を描出している。口唇部及び内面の上部6mm～8mmの部分にも同一原体による縄文が施される。内面の縄文が施されている部位は煮沸の影響と思われる器面の劣化が認められ、以下はミガキ状に非常に丁寧に器面調整がされている。器面の色調は内・外両面とも黒色で、焼成は良い。胎土には乳白色微粒子を微量含み、少量だが繊維も含まれる。炉の周辺からは、土器片1点、剥片1点（安山岩）、碎片4点（黒曜石1・チャート2・石材不明1）、礫片5点が出土した。図示した範囲には、土器片1点、剥片1点、碎片1点（石材不明）、礫片3点の出土位置を示した。土器片は直接接合しないが、炉体土器と同一個体と思われる。

検出できた2か所のピット及び床面状の硬化面は、本遺構が住居の内部施設の炉跡と断定できる根拠にはならないが、屋内・屋外はともかく、草創期・多縄文系土器期の炉跡として本遺構を報告する。ただし、炉の内部から出土した土器の性格については、内面上部に煮沸による器面の劣化が認められるものの、内部に火床面が検出できなかったことから、炉体土器あるいは土器を立てるための施設のようなものであった可能性を示唆するにとどめる。

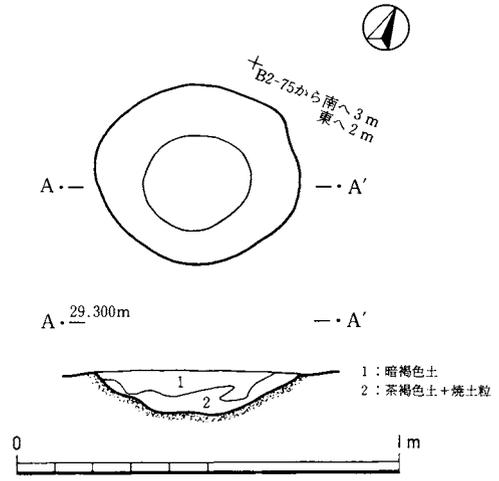
2 グリッド出土遺物

グリッド出土遺物としたものには、遺構精査時に出土した遺構外出土のもの及び明らかに異なる時期の遺構内から出土したもの等を合わせた。そのうち、縄文時代の所産と判断したものは縄文土器、土器片錘等の土製品及び石器がある。以下、主な出土遺物について報告する。

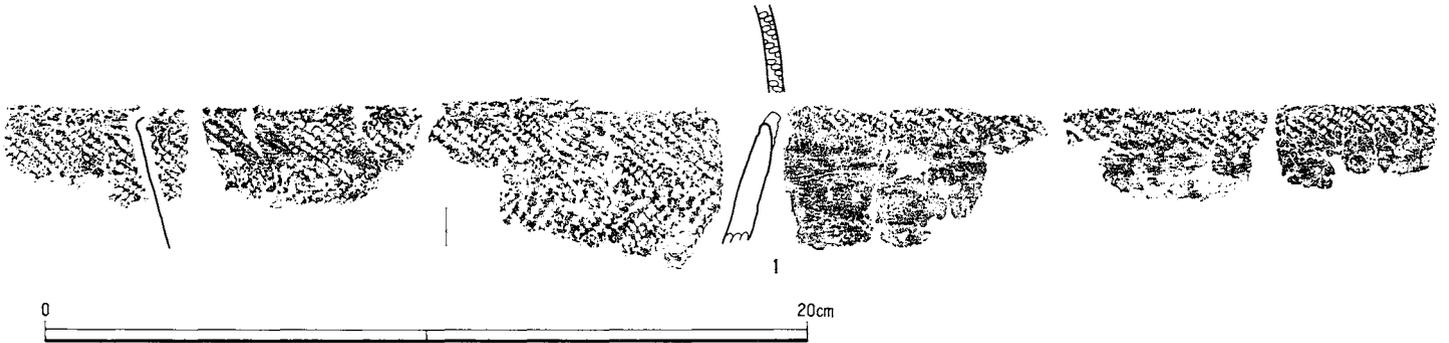
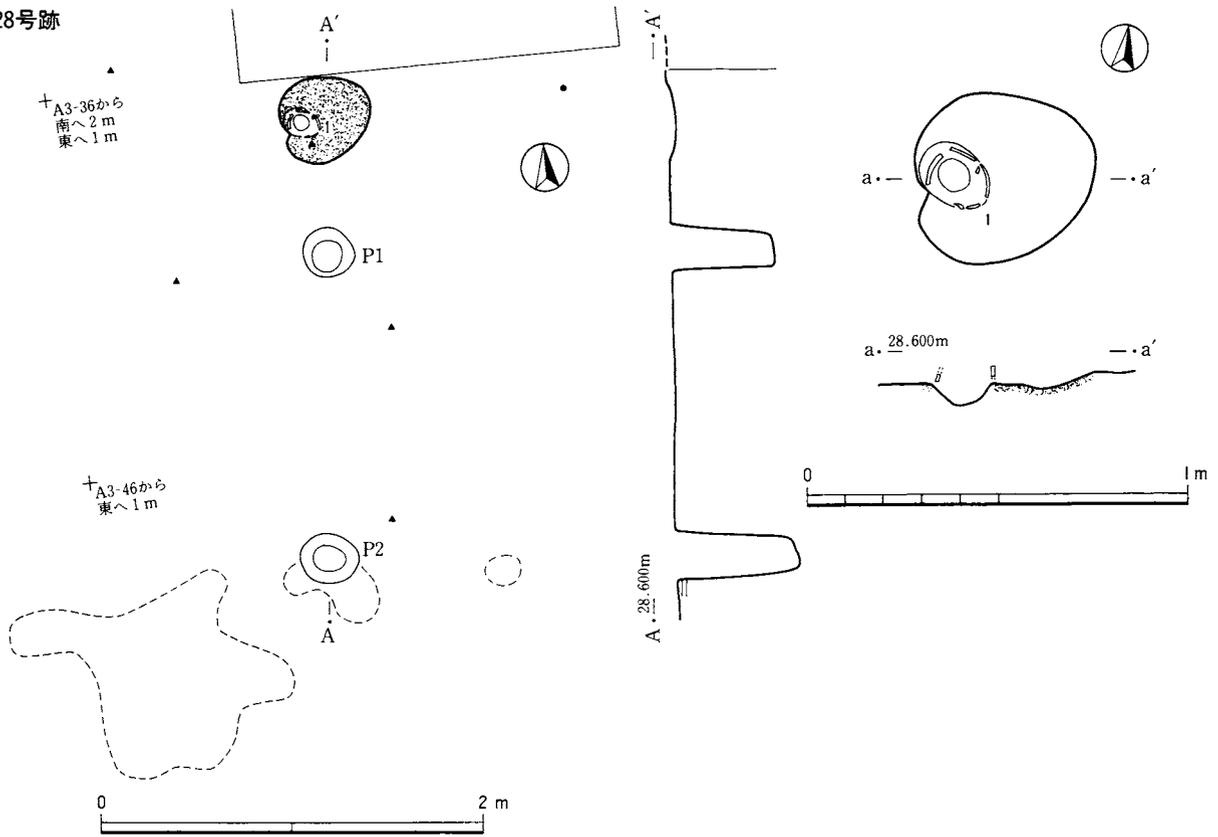
026号跡



027号跡



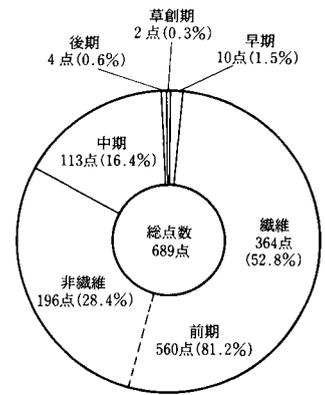
028号跡



第30図 026号跡・027号跡・028号跡及び出土遺物

(1) 土器 (第31・32・33・35図、図版20・21)

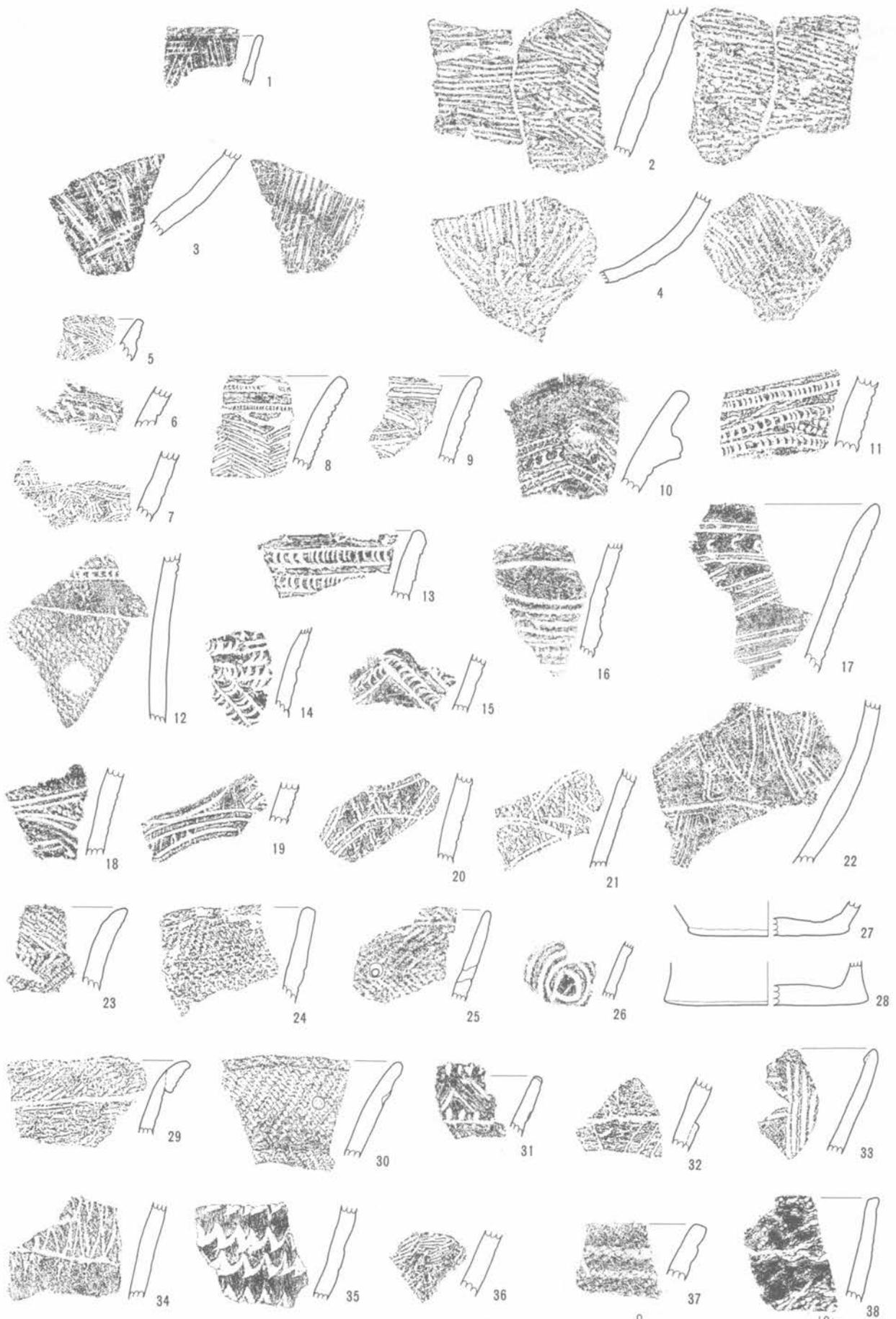
グリッド出土の土器片は、時期の判明したものを単純に数量化すると総数689点を数える。時期別では、草創期と思われるもの2点、早期10点、前期560点(胎土に繊維を含むもの364・含まないもの196)、中期113点、後期4点であり、圧倒的に前期が多い。前期の土器は調査区全域から出土しているが、025号跡(縄文前期・集石遺構)のある台地上の平坦面から、西側から延びる小谷津の谷頭部に面する台地の肩部にかけて、やや集中する傾向にある。出土した土器の大部分は小片の状態であり、土器のもつ諸要素をすべてとらえての分類は不可能である。以下、図化した50点について説明する。



第31図 グリッド出土の縄文土器時期別点数

1～4は早期の土器である。1は3本一組の鋭く密な条線が横位あるいは斜位に施文された口縁部で、胎土には細かい砂粒を多く含む。三戸式である。2～4は表・裏両面ともに条痕文が施文され、胎土には繊維を含む。2は胴部、3・4は底部に近い部分で、2の内面は器面の剥落及び劣化が著しい。茅山上層式と思われる。

5～38は前期の土器をまとめた。5～7は同一個体と思われ、口縁部に撚糸の側面圧痕文による平行直線文及び蕨手状文が施文され、列点状の刺突文を加えたものである。胎土には繊維を含む。花積下層式に比定できる。8～38は黒浜式・諸磯式・浮島式・興津式等である。いずれかに分別しにくいものを含むため、主要な文様要素別にまとめて説明をする。8・10～15は広義の竹管文のうち、半截竹管による連続爪形文を主文様としてもつものである。8・11・12は細い半截竹管による細密な連続爪形文が施されたもので、8は口縁部に無文帯を挟んで2段の連続爪形文が巡り、以下同一工具による綾杉文が描かれる。11は連続爪形文間に撚糸文・縄文が観察される。12は連続爪形文の上位に綾杉文、下位に縄文が施文される。器面は内・外両面とも火熱による器面の劣化が著しく、外面には大きく剥落している部分もある。胎土には8・12は細かい雲母、11は乳白色微粒子を多く含む。10・13～15はやや幅広の半截竹管による文様が施されたもので、10は無文の波状口縁部の波頂下に突起を付け、半截竹管の半截した側を用いた連続刺突によって結節沈線文を描出したものである。13～15は密に連続した爪形文による幾何学文が描かれたもので、13は口縁部、14・15は胴部で、いずれも胎土には乳白色微粒子を多く含む。9・16～22は半截竹管による集合沈線を主文様としてもつものである。9・16・18～22は肋骨文の系統上にある弧状の集合沈線が施されたもので、21の集合沈線には結節沈線化している部分もある。16は刻みの付く太い浮線文が横位に巡り、18～21は集合沈線間に縄文あるいは撚糸文が施文される。胎土中には18は赤色スコリア、22は乳白色粒子及び角閃石が目立つ。17は半截竹管による直線的の集合沈線と同一工具の刺突によるC字状文をもつ口縁部である。胎土中には繊維をわずかながら含む。23～25・29・30・37・38は縄文のみの口縁部である。そのうち23～25・30には羽状縄文が施され、30は口唇部外面側にも縄文が施文される。25は火熱のため器面外面の劣化が著しく、また補修孔が穿孔されている。30には穿孔途中の補修孔と思われる円形のくぼみが見られる。29は折り返して肥厚した口縁部に同一方向に施文した2段の縄文が施文される。37・38はやや角張った口唇上に縄文が施された口縁部で、37は地文の単節縄文上に同一原体の側面圧痕を上下2段に巡らし、38は結節した原体の回転圧痕が巡る。37・38とも、口縁部内面の上位6mm～10mmほどの部分に煮沸の影響と思われる著しい器面の劣化が認められる。胎土中には23～25・38は繊維、29は細かい雲母、37は



第32図 グリッド出土の縄文土器 (1)

白色微粒子を多く含む。26・33は沈線文を主文様としてもつものである。26は渦巻文が描出されたもので、中期の可能性もある。33は口縁部から垂下する複数の沈線とそれに直交する複数の沈線が見えるもので、口縁部は内側に折り返し、やや肥厚している。いずれも器壁の厚さ及び胎土は25によく似ている。27・28は底部である。27は底部周縁が摘まれたようにやや突出し、底部中央が膨らんでいる。底面には煤の付着が見え、内・外両面とも器面の劣化が著しい。胎土中には繊維を多く含む。28は強く張り出した底部で、底部中央がやや膨らみ、胎土中には細かい雲母を多く含む。31・32は器面に輪積成型時の粘土紐による段差を残し、文様施文時にその段差を区画的に利用したものである。31は口縁部にヘラ状工具による鋸歯状の擦痕、その下位に列点状の刺突を加え、口唇上にはヘラ状工具の端部による刻みをもつ。32は鋭利な工具による斜位の沈線が施文され、胎土には白色微粒子・長石を多く含む。34～36は貝殻文を主文様とする。34・35は波状貝殻文が施文されたもので、34はアナグラ属貝殻腹縁を用いた細く振幅の大きいものである。内・外両面とも火熱による器面の劣化が著しい。36は殻表圧痕文が施文される。胎土に白色微粒子を多く含む。

39～47は中期の土器である。39は強く外反して角張った口縁部下に、3本一組の沈線による文様を描いたもので、胎土には雲母・長石・白色微粒子等の混入物を多量に含む。火熱による器面の劣化が著しい。中峠式に比定できる。40・41は無文の鉢で、40は角張った口縁部、41は胴下半部～底部である。いずれも胎土中に長石及び白色微粒子を多量に含み、41は雲母の混入も目立つ。阿玉台式と思われる。42～47は加曽利E式をまとめた。42～44は胴部に沈線間を磨消した磨消懸垂帯が垂下するもので、42は隆帯とそれに沿う沈線とにより区画された口縁部文様帯の一部が観察される。3点とも火熱で器面の劣化が著しい。45は波状口縁に細い縄文帯を挟んで2本の浅い凹線が巡り、下位に隆帯が施される。46は口縁部に3本の沈線が巡り、下段の沈線から3本一組の沈線が垂下している。47は無文の口縁部をもつ鉢の括れ部で、肩部には隆帯とそれに沿う沈線とで描出された多様な区画文が見られる。色調は淡褐色を呈し、胎土中に雲母・長石等を多量に含む。42～44は加曽利E II式、45～47は加曽利E III式に比定できる。

48～50は後期の土器である。48・49は同一個体で、口縁部には2段の隆起帯縄文が巡り、胴部に磨消縄文が施される。口唇上には浅い凹線が巡り、外側の磨滅が著しい。安行1式である。50は無文粗製土器で、口唇上に粘土紐による把手が貼り付けられる。把手下に穿孔途中の補修孔がある。

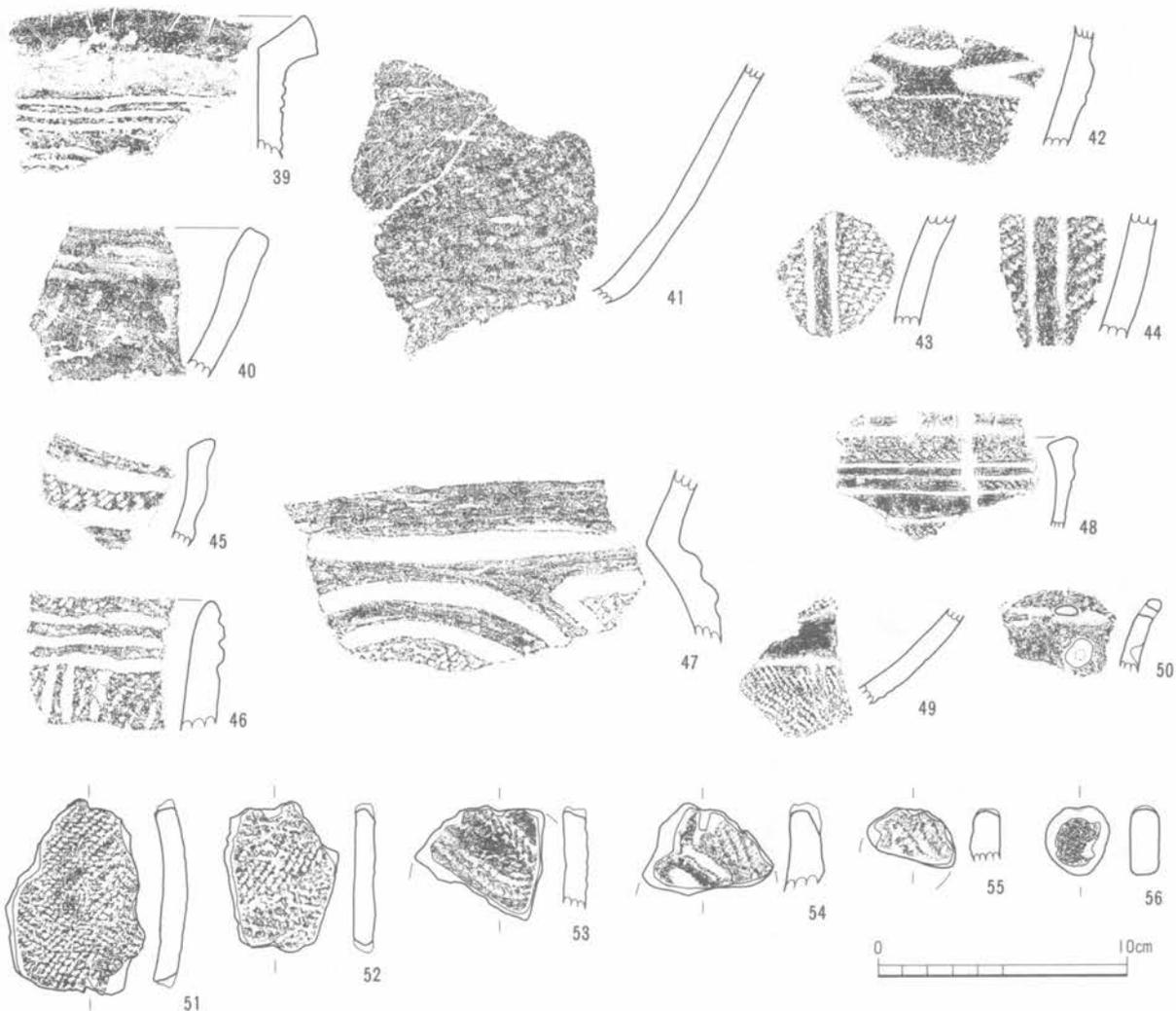
(2) 土製品 (第33図、第13表、図版21)

グリッド出土の土製品は土器片錘4点、土製円板2点の計6点を数える。素材となった土器片は前期のもの4点(土器片錘3・土製円板1)、中期2点(土器片錘・土製円板各1)である。土器片錘・土製円板ともにそれぞれ半数が欠損している。6点は調査区の南東部を除く範囲に散在して出土した。

第13表 土製品

挿図番号	図版番号	遺物番号	分類	時期	遺存度	長軸	短軸	厚	重量	切込み		周縁調整	備考
						(mm)	(mm)	(mm)	(g)	位置	数		
第33図51	21	A3-0078	土器片錘	前期	完形	76.8	56.7	10.3	46.8	短辺側	1	無	繊維含む
第33図52	21	007-0037	土器片錘	前期	完形	60.1	46.0	8.5	23.2	短辺側	1	無	繊維含む
第33図53	21	B2-0091	土器片錘	前期	<30%>	(46.0)	(51.5)	(9.8)	(22.1)	<短辺側>	1	(無)	繊維含まない
第33図54	21	016-0040	土器片錘	中期・加曽利E式?	<30%>	(37.0)	(53.0)	(14.5)	(24.0)	<短辺側>	1	(無)	
第33図55	21	004-0082	土製円板	前期	<40%>	(20.2)	(36.8)	(11.5)	(8.0)			(無)	土器片錘の欠損品の可能性、繊維を含む
第33図56	21	B2-14・15-0083	土製円板	中期	完形	27.0	25.0	11.8	10.2			研磨	

* () は遺存値 < > は推定値 空欄は該当項目なし



第33図 グリッド出土の縄文土器(2)・土製品

51～54は土器片錘である。51・52は完形品で、短辺に1か所ずつの切込みを対向してもつ。53・54は一方の切込みしか遺存していない半欠品である。いずれも1か所の切込みが見える。55・56は土製円板としたものである。55は土器片錘の欠損品の可能性もある。56は全周にわたり側面が磨滅している。

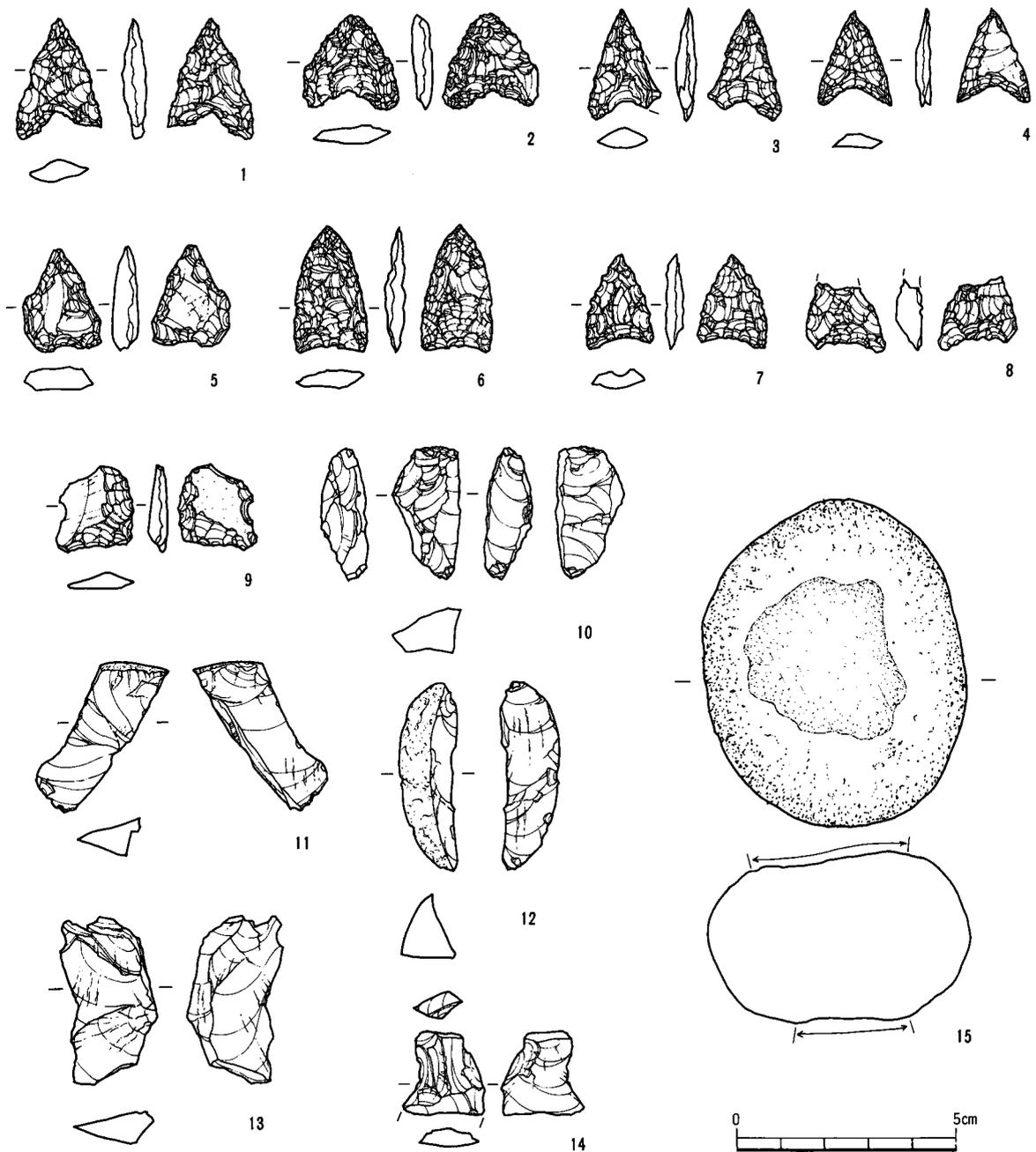
(3) 石器 (第34・35図、第14表、図版19)

グリッド出土の石器のうち、縄文時代のものと判断したものは62点を数える。機種別では、石鏃11点、石鏃未製品と思われるもの3点、楔形石器7点、打製石斧1点、敲石1点、磨石2点、石皿1点、Uf1点、Rf2点、不明石製品1点、剥片32点である。以下、図化した15点について器種別に説明する(第34図)。

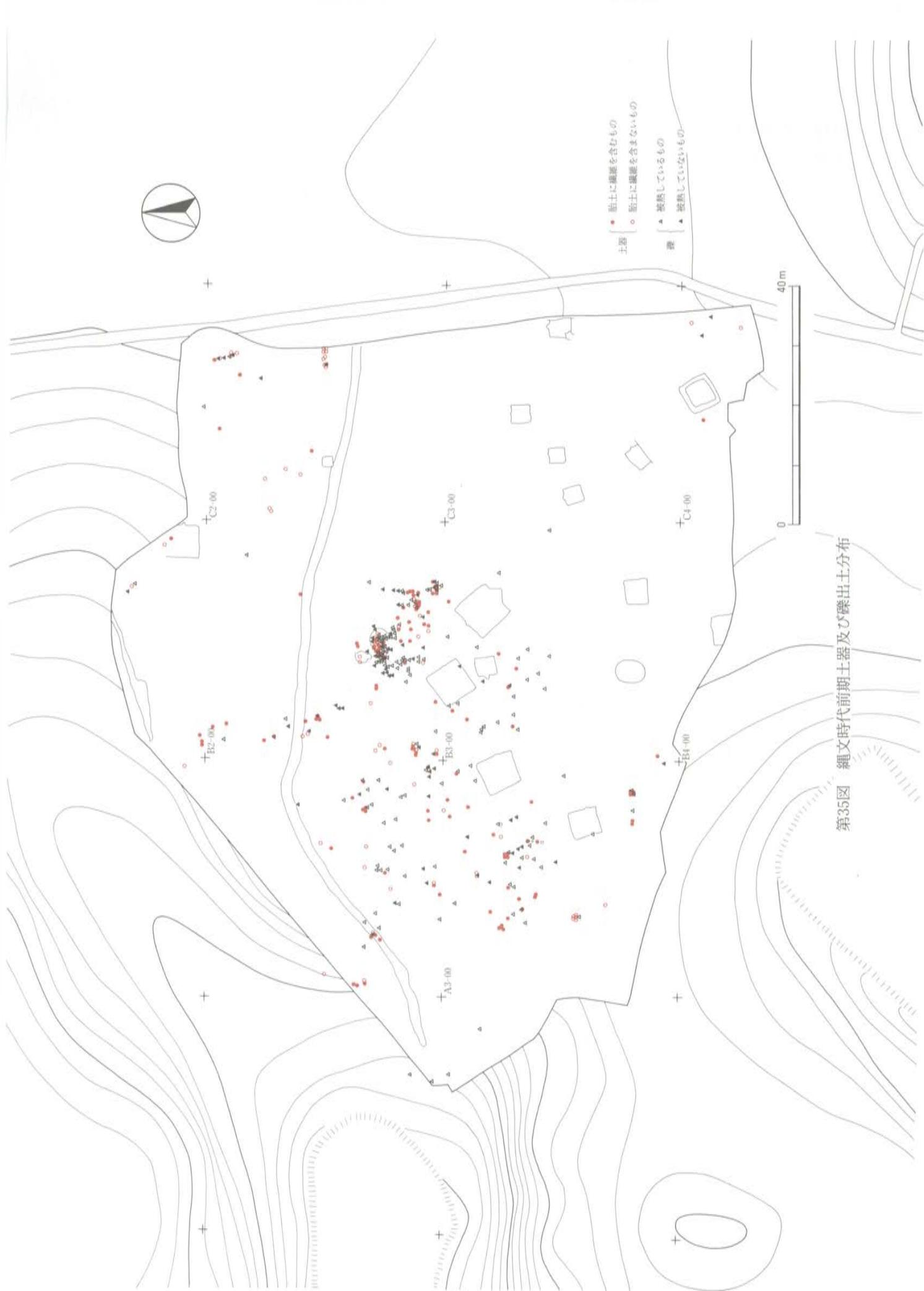
1～8は石鏃である。すべて凹基無茎鏃で、全体形状は正三角形に近いもの(2・4・5・7)と二等辺三角形を呈するもの(1・3・6・8)とに、また基部の形状は抉りの大きいもの(1～4)と抉りの小さいもの(5～8)とに分類される。石材は黒曜石5点(1・2・6～8)、頁岩(3)・珪質頁岩(4)・チャート(5)各1点である。1～3・6・7は表・裏両面に微細な調整加工を施し、断面はレンズ状を呈する。7は表面に大きな剝離痕を残している。1・3は脚部端が折損している程度でほぼ完形、2・6・7は完形である。4・5は素材面を残すものである。4の素材面を残す裏面は、右側縁を除く周縁部には微細な調整加工を施している。完形である。5は表・裏両面に素材面を残し、表面周縁及び裏面左側縁には微細な調整加工を施している。脚部端を折損するが、ほぼ完形に近い。8はやや厚手の剥片を素材

として、裏面には平坦剝離を施したもので、素材面は残っていない。先端部約1/2が折損している。9は石鏃未製品と思われる。薄手の剝片を素材として、基部及び右側縁に微細な調整加工が見られる。石材は珩質頁岩である。10は折断面をもついわゆる楔形石器である。石材はチャートである。11はUf、12～14は剝片で、石材は11・14は珩質頁岩、12はチャート、13は安山岩である。12は原石である小型円礫の礫面が見える。15は磨石である。掌大の円礫の平坦面を表・裏両面とも研磨している。石材は石英安山岩である。

これ以外に礫・礫片が多量に出土している（第35図）。単純に数量化すると、火熱を受けているもの312点、火熱を受けていないもの210点、総数522点を数える。礫・礫片は調査区全域から出土しており、縄文時代前期の土器の分布と同様、025号跡（縄文前期・集石遺構）のある台地上の平坦面から、西側から延びる小谷津の谷頭部に面する台地の肩部にかけて、やや集中する傾向が認められる。



第34図 グリッド出土の石器



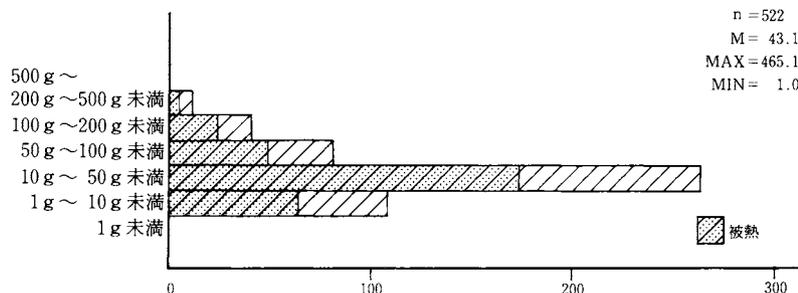
第35図 縄文時代前期土器及び礫出土分布

第14表 縄文時代石器

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	石材	遺存度	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量	備考
		017-0005	剥片	安山岩		2.1	0.8	0.7	5.5	
		0016	剥片	不明		1.8	1.9	1.1	3.1	
		0029	碎片	黒曜石		0.8	0.5	0.1	<0.1	
第29図 6	19	025-0035	磨製石斧	砂岩	完形	11.3	7.3	3.4	313.1	
第29図 8	19	0039	敲石	砂岩	完形	6.0	5.9	3.5	175.1	
		0056	碎片	不明		0.6	0.6	0.1	<0.1	
		0057	碎片	黒曜石		0.6	0.5	0.1	<0.1	
		0058	碎片	不明		—	—	—	<0.1	
		0061	碎片	黒曜石		0.5	0.4	0.1	<0.1	
		0062	楔形石器	黒曜石	一部欠損	1.6	1.6	0.8	1.6	
		0067	剥片	チャート		1.6	2.1	0.7	1.9	
第29図 7	19	B2-0033	打製石斧	砂岩	完形	6.3	4.5	1.8	50.2	
第29図 5	19	B2-14・15-0087	剥片	チャート		3.5	1.1	0.6	3.3	
		026-0002	剥片	チャート		0.9	1.0	0.2	0.2	
		0003	碎片	チャート		0.7	0.6	0.1	<0.1	
		0004	剥片	不明		1.4	1.4	0.3	0.4	
		0008	碎片	安山岩		0.7	1.2	0.2	0.2	
		028-0003	碎片	不明		0.6	0.8	0.2	0.1	
		0005	碎片	黒曜石		1.0	0.7	0.2	0.1	
		0007A	碎片	チャート		0.8	0.5	0.1	<0.1	
		0007B	碎片	チャート		0.5	0.5	0.1	<0.1	
		0010	剥片	安山岩		2.3	1.7	0.5	1.9	
		001-0001J	剥片	珩質頁岩		1.7	2.1	0.7	2.4	
		002-0001A	剥片	珩質頁岩		1.5	3.4	0.6	3.1	
		0001B	Rf	黒曜石		1.8	1.5	0.3	0.7	
		0002D	磨石	ホルンフェルス	完形	7.3	6.8	3.6	283.6	
		0005C	剥片	珩質頁岩		1.5	1.2	0.5	0.9	
		0007B	剥片	チャート		2.3	2.3	0.6	3.0	
		0012A	剥片	珩質頁岩		1.7	2.0	0.3	0.6	
第34図 5	19	0012B	石鏃	チャート	脚端部折損	2.3	1.8	0.6	(2.2)	表・裏面：素材面が残る
		0012C	剥片	珩質頁岩		2.0	0.9	1.3	0.2	
		0012D	剥片	珩質頁岩		1.6	1.9	0.5	1.0	
		0047	剥片	安山岩		1.9	1.8	0.3	0.9	
		004-0100H	石鏃	黒曜石	一部欠損	1.8	1.0	0.3	0.4	
		005-0001D	剥片	珩質頁岩		1.9	1.5	0.7	1.3	
		0005C	剥片	安山岩		2.4	1.8	0.4	1.8	
第34図 1	19	0041	石鏃	黒曜石	脚端部折損	2.8	1.9	0.5	(1.8)	
第34図10	19	007-0275	楔形石器	チャート	完形	3.0	1.5	1.1	4.7	折断面あり
		0302	剥片	チャート		1.3	1.5	0.3	0.6	
		0344	剥片	チャート		2.4	3.2	0.4	3.7	
第34図 3	19	0486	石鏃	頁岩	脚端部折損	2.5	1.7	0.4	1.1	
第34図 2	19	0537	石鏃	黒曜石	完形	2.1	2.2	0.4	1.5	
		0619	楔形石器	石英	完形	4.1	2.3	0.9	10.5	
		018-0088	楔形石器	チャート	完形	2.0	1.3	0.6	1.4	
		0094	石鏃未製品	安山岩	完形	2.3	1.6	0.4	1.2	
		0101	剥片	安山岩		2.1	2.9	0.8	3.8	
		0130	剥片	安山岩		1.7	1.2	0.3	0.5	
第34図 9	19	0180	石鏃未製品	珩質頁岩	完形	2.0	1.7	0.5	1.3	
		0217	剥片	黒曜石		2.1	1.3	0.7	2.1	
第34図15	19	0229	磨石	石英安山岩	完形	7.4	6.0	4.1	215.8	表・裏面：研磨
		0242	打製石斧	砂岩	完形	10.0	4.9	3.0	145.1	
		0252	石鏃	黒曜石	一部のみ	1.7	1.1	0.3	0.4	
		0264	楔形石器	メノウ	一部欠損	2.1	1.6	0.6	2.0	
第34図11	19	0268	Uf	珩質頁岩		3.2	3.0	1.1	4.5	
		0272	剥片	珩質頁岩		3.1	2.0	1.0	4.9	
		0276C	剥片	安山岩		2.2	3.3	0.9	5.3	
		0257	剥片	黒曜石		1.5	1.6	0.3	0.3	
		Z2-0007	楔形石器	安山岩	完形	2.8	3.2	0.8	7.7	

挿図番号	図版番号	遺物番号	器種	石材	遺存度	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量	備 考
第34図12	19	Z3-0002	剝片	安山岩		3.1	1.2	0.7	3.6	風化が著しい
		A3-0001	楔形石器	黒曜石	完形	2.0	1.6	1.2	2.9	
		0035	剝片	ホルンフェルス		3.0	2.6	0.4	3.5	
		0037	剝片	黒曜石		1.3	1.9	0.4	0.7	
		0039	石鏃	黒曜石	一部のみ	1.3	1.1	0.3	0.3	
		0050C	Rf	安山岩		1.1	1.9	0.3	0.6	
		0071	楔形石器	珪質頁岩	完形	3.3	1.5	1.2	6.6	
		B1-0039	石鏃未製品	チャート	下半部欠損	2.1	1.9	0.4	2.1	
		B2-0022	石皿	砂岩	一部のみ	6.9	8.0	6.4	433.2	
		0037	石製品?	不明		(4.7)	(2.6)	(2.1)	(31.5)	
		B2-14・15-0021	剝片	珪質頁岩		0.7	1.9	0.2	0.3	
		0023	剝片	珪質頁岩		1.0	1.1	0.2	0.2	
		0045	剝片	珪質頁岩		1.3	0.6	0.2	0.2	
		0048	剝片	黒曜石		0.9	0.7	0.2	0.1	
		0052	剝片	チャート		1.6	1.2	0.4	0.4	
		0068	剝片	チャート		4.2	1.3	1.8	0.4	円礫面が残る
		0075	剝片	黒曜石		1.3	1.8	0.4	0.6	
		0082	剝片	安山岩		2.4	1.4	0.6	2.2	
		0083K	剝片	チャート		2.1	1.5	1.1	5.9	
		第34図14	19	0084	剝片	珪質頁岩		1.8	1.9	0.5
第34図8	19	0086	石鏃	黒曜石	先端部半欠	1.4	1.8	0.6	1.2	未成品?
第34図13	19	C2-0030	剝片	安山岩		3.8	2.2	0.8	4.6	
第34図4	19	C3-0010	石鏃	珪質頁岩	完形	2.1	1.7	0.3	0.8	裏面：素材面が残る
		C4-0022	敲石	チャート	一部のみ	10.8	7.3	4.4	468.3	
第34図6	19	表採 A	石鏃	黒曜石	完形	2.8	1.6	0.5	1.9	
第34図7	19	表採 B	石鏃	黒曜石	完形	2.1	1.4	0.4	1.0	

* ()は遺存値 < >は推定値 -は計測不可能 空欄は該当項目なし



第36図 グリッド出土礫重量別点数

第4節 弥生時代の遺構と遺物 (第37図、第15・18・21表、図版4・18)

弥生時代に帰属すると判断した遺構は、010号竪穴住居跡1軒のみである。ここでは、遺構と主な出土土器について報告する。

第15表 弥生時代の遺構

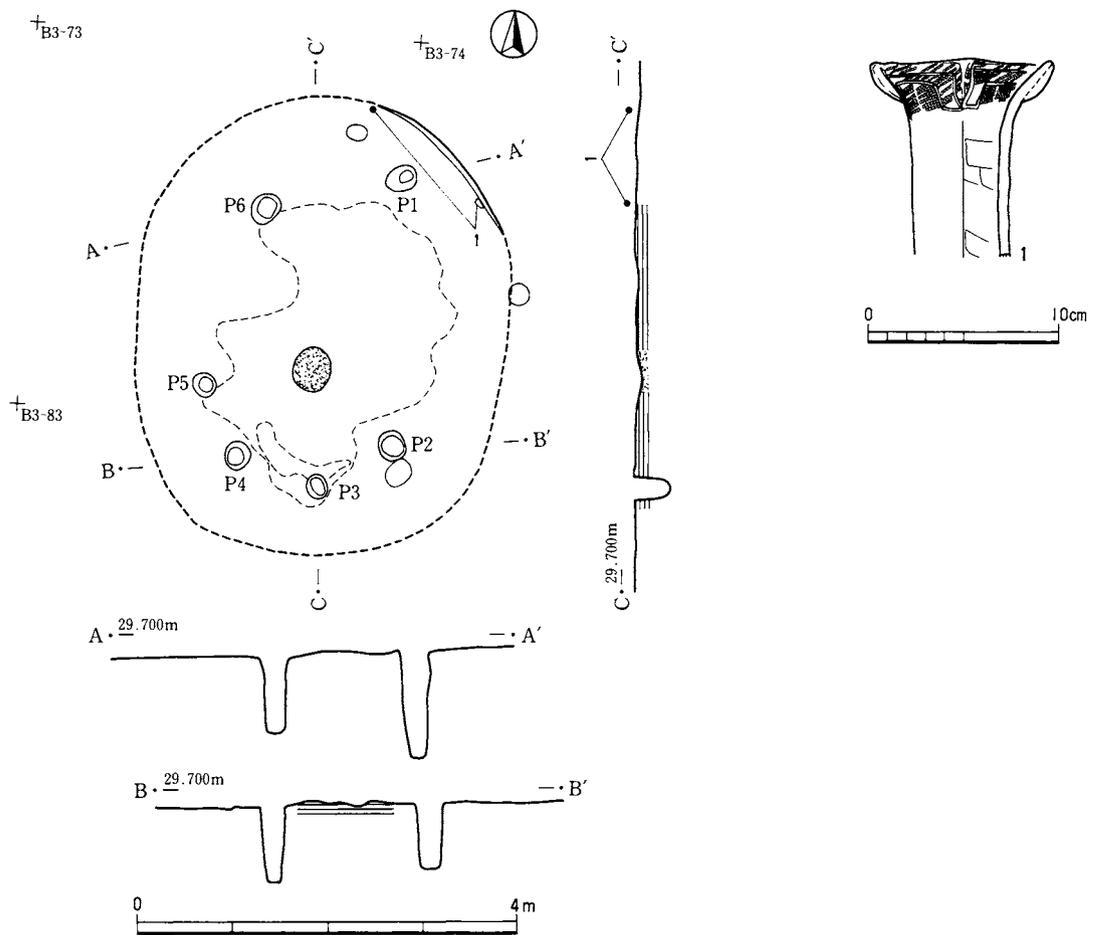
遺構番号	遺構の種類	位置	時期	挿図番号	図版番号	備 考
010号跡	竪穴住居跡	B3-73・83	中期・須和田式	37	4・18	

010号竪穴住居跡

南西から延びる小谷津の谷頭部に当たる台地上、調査区の南寄りB3-73・83付近に位置する。炉とその周辺の硬化した床面及び6本のピットを検出したため、住居跡と判断した。検出面が床面であり、住居跡の規模等不明だが、北東部で検出された壁の立上りの一部と思われるわずか1cm～2cmの段差及びピットの配列から、長径4.71m×短径3.95mを測る楕円形プランを推定した。推定プラン内の面積15.50㎡を測る。

炉は推定プランの中央やや南寄りに位置する。長径45cm×短径40cmを測る略円形を呈し、3cm～4cmほどの極めて浅い掘込みをもつ地床炉である。炉の底面は焼けて硬化・変色しており、覆土内には焼土粒が少量含まれていた。炉の周囲の床面はよく踏みしめられて硬化している。特に、炉の東・西両脇部分及びP3付近は硬化が顕著である。P3の内側の図示した弧状の範囲は、床面より1cm～3cmほど高く硬化部分が認められた部分である。ピットは深さにややばらつきはあるものの、検出された6か所のうち、P1-P2-P4-P6の4か所が支柱穴と思われ、4本の支柱をもつ上屋構造が推定できる。P3は位置的・規模的に、また内側の床面の状況からも、出入口施設に伴うピットの可能性が指摘できる。炉とP3を結んだ延長線は、推定した住居プランの主軸方向とも一致する。壁溝は検出されなかった。北東部の壁下の状況を見ると、もともと壁溝を掘り込んでいない可能性も考えられる。

遺物は極めて少ない。1は、わずかに検出された北壁際及び北東壁際で出土した2点が接合したもので、壺の口縁部から頸部にかけての破片である。小さく外反する口縁部には縦位の棒状突起が貼り付けられ、単節LR縄文を施文した後に、突起を挟むように逆凹字状文を細い沈線で描いている。細く長い頸部は丁寧なナデが縦方向に施され、口縁部の縄文が部分的に消されている。ほかに出土した弥生土器は、それぞれ別個体の壺の口縁部及び頸部の小片が各1点のみである。いずれも地文に単節縄文が施文されている。



第37図 010号住居跡と出土遺物

第5節 古墳時代の遺構と遺物 (第38～47図、第16・18・19・21表、図版5～8・22～24)

1 遺構と出土遺物

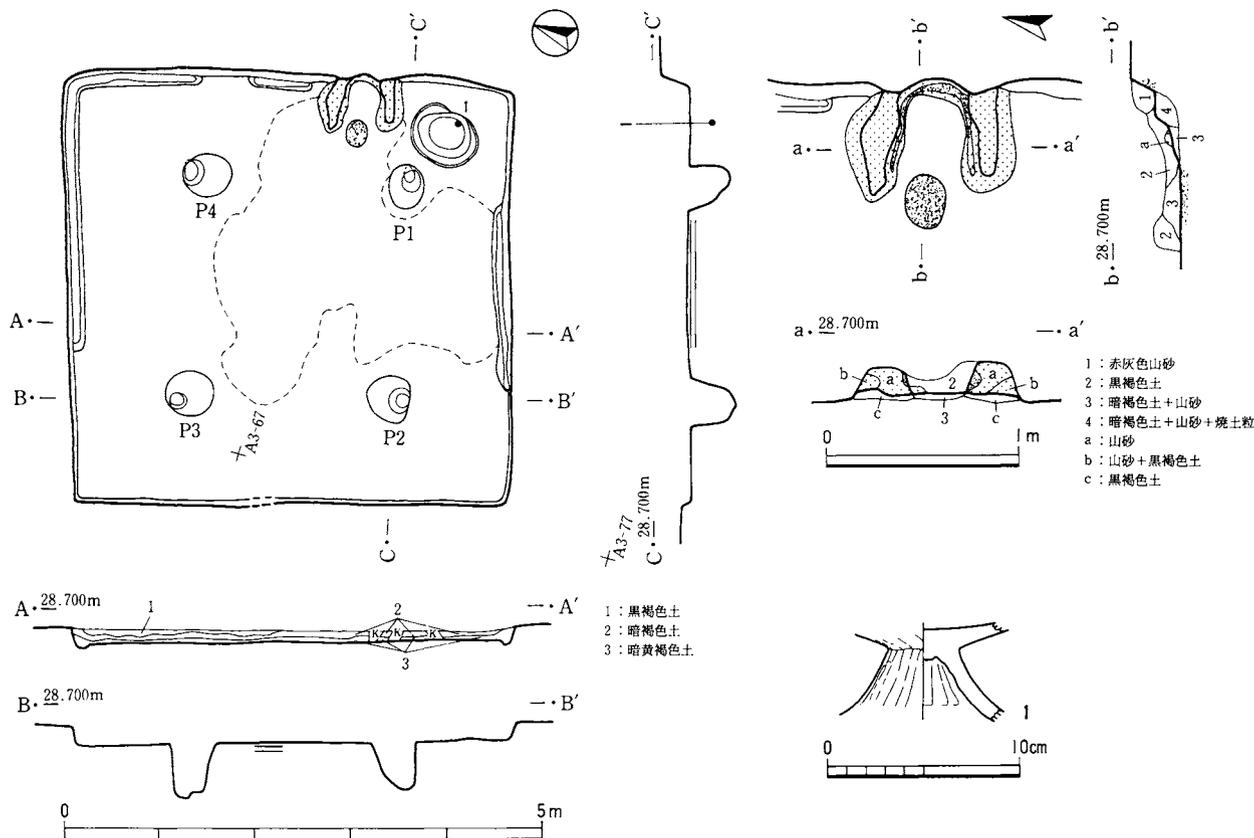
古墳時代に帰属すると判断した遺構は、竪穴住居跡8軒を数える(第16表)。以下、調査時の番号順に遺構と主な出土遺物について報告する。

第16表 古墳時代の遺構

遺構番号・遺構の種類	位置	時期	挿図番号	図版番号	備考
001号竪穴住居跡	A3-57・67	後期・7c中	第38図	5・22	
002号竪穴住居跡	A3-19・29	後期・6c後	第39図	5・22	
004号竪穴住居跡	B3-02・03	後期・6c後	第40図	6・22・23・24	003号住居跡と重複
007号竪穴住居跡	B3-15・16	後期・6c後～	第41・42図	6・22・23・24	006号住居跡と重複
008号竪穴住居跡	B3-77・87	後期・6c中	第43図	7・22・23・24	
009号竪穴住居跡	B4-15	後期・7c後	第44図	7・22	南半部は第2次調査185号址
011号竪穴住居跡	C3-72・82	後期・7c後	第45図	8・22	
016号竪穴住居跡	B1-89・99	後期・7c前	第46図	8・23	

001号竪穴住居跡 (第38図、第16・18・21表、図版5・22)

南西及び西から延びる小谷津の両谷頭部に挟まれた台地上、調査区の南西部A3-57・67グリッド付近に位置する。西壁側の一部を攪乱により失っている。平面形はほぼ方形を呈し、カマドのある側を主軸とすると、N-75°-Eに主軸方位をとる。規模は主軸4.36m×対向軸4.66m、推定床面積18.48㎡、検出面から床面までの深さ10cm～25cmを測る。カマドは東壁やや右寄りに位置する。検出面が低かったため、遺存状況は悪い。火床面はそれほど焼けておらず、焼土がこびりついている程度である。煙道奥壁の焼土が4層



第38図 001号住居跡と出土遺物

下面に及んでいないこと、4層中に焼土粒が含まれており、層全体が焼けて赤みを帯びていることをあわせて考えると、4層の上面が煙道の底面であった可能性も考えられる。床面はほぼ平坦で、カマドの前面から柱穴を結んだ内側にかけて、よく踏みしめられて硬化している。また、P1-P2間から南壁直下にかけての部分にも硬化範囲が広がっており、梯子穴等の施設こそないものの、出入り口の存在を想起させる。貯蔵穴はカマドの右側、住居の南東隅に位置する。床面から2cm～3cmほど下がったところに平坦面をもち、そこから一回り小さい範囲で底面まで掘り込まれており、貯蔵穴として機能していた際には蓋状器具が設置されていた可能性もある。床面から底面までの深さはわずか9cmを測る浅いものである。支柱穴は4か所検出され、ほぼ対角線上に整然と配される。P3の底面付近からは硬化した柱座を1か所検出した。壁溝は途切れた状態で部分的に巡っており、西側1/3の壁下からは全く検出されなかった。

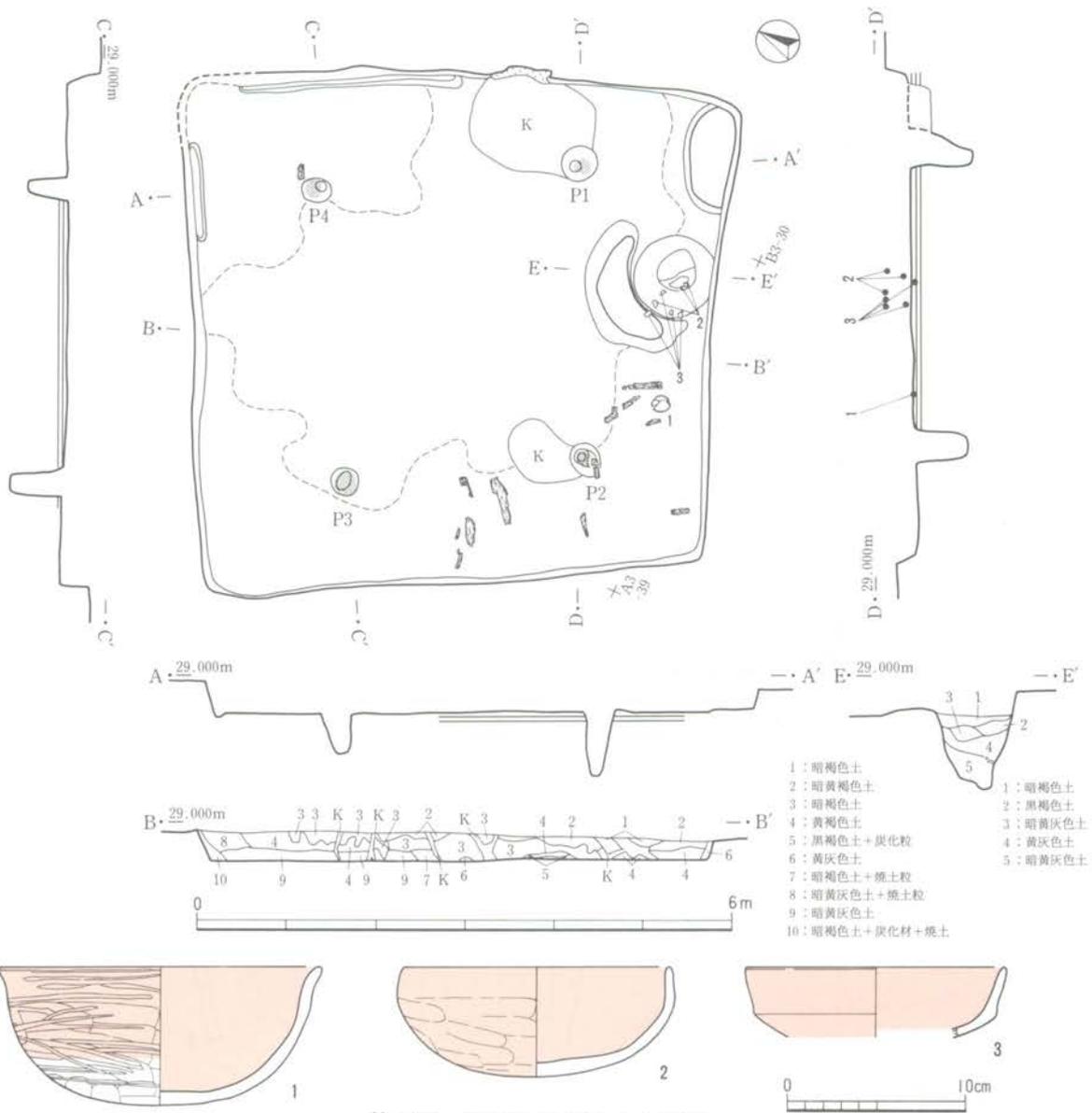
遺物は少量の小片が散在して出土したのみで、1点を図化するにとどまった。1は貯蔵穴内出土の土師器高杯の底部～脚部片である。脚高は低く、裾部端は全周にわたり打ち欠かれたように割れている。器面・割れ口ともに磨滅が著しい。全面に赤彩が施されていた可能性がある。

002号竪穴住居跡（第39図、第16・18・21表、図版5・22）

南西及び西から延びる小谷津の両谷頭部に挟まれた台地上、調査区の中央部A3-19・29グリッド付近に位置する。北東隅付近を攪乱により失っている。平面形は北東壁がやや長い不整な方形を呈し、カマドのある側を主軸とすると、N-62°-Eに主軸方位をとる。規模は主軸5.45m×対向軸5.87m、推定床面積30.62㎡、検出面から床面までの深さ20cm～40cmを測る。カマドは北東壁やや右寄りに位置するが、奥壁構築材と思われる被熱した山砂をわずかに検出したのみで、大部分は後世の攪乱により破壊されており、遺存状況は極めて悪い。床面はほぼ平坦で、カマドの周囲から柱穴を結んだ内側にかけて、よく踏みしめられて硬化している。また、P3-P4間から北西壁側にかけても硬化範囲の広がりが認められた。貯蔵穴は南東壁左寄りに位置し、床面からの深さ81cmを測る深いものである。貯蔵穴の内側及び住居の南東隅にテラス状の高まり部分がある。いずれも床面からの高さが5cm以内であり、貯蔵穴の内側のものは貯蔵穴を囲むように弧状の平面形を呈している。支柱穴は4か所検出された。だが、P1の位置が対角線上からずれ、カマド前面に配されている。床面の観察によって、柱穴内にはいずれも直径20cmほどの柱痕が、また底面にはそれぞれ1か所ずつの硬化した柱座が認められた。壁溝は住居の北側2辺に、途切れた状態で部分的に検出された。平面図には床面直上で検出された比較的残りの良い炭化材の出土状況を重ねて図化した。また、これ以外にも炭化材・焼土粒等を多く含む層（5・7・8・10層）が覆土内から検出されており、本竪穴住居跡は焼失したものと考えられる。

遺物は床面及び覆土内から散在して出土した。量的には多くない。比較的大きな破片は貯蔵穴の周辺から出土し、そのうち土師器杯3点を図化した。1はほぼ床面出土の土師器杯である。器高が高く、底部は丸底を呈する。口縁部は緩やかに外反し、口縁部と体部の境には稜をもたない。口唇部及び外面の体部下端以下は器面の磨滅が著しく、その部分を除いた外面及び内面全体に赤彩が施される。2は覆土中層出土の土師器杯である。器高がやや高く、底部は丸底を呈する。口縁部はわずかに内弯し、体部との境には稜をもたない。外面は全体的に磨滅しており、内面は底面を中心に器面の剝落が著しい。そのため内・外面に赤彩が施されているが、残りは悪い。外面の約1/2に黒斑が見られる。3は床面～覆土下層出土の土師器杯である。底部は遺存していない。口縁部高が体部高より高く、口縁部はわずかに外傾しながら上方に立ち上がる。内・外面ともに赤彩が施されているが、器面の磨滅が著しく、残りは悪い。また、器面調

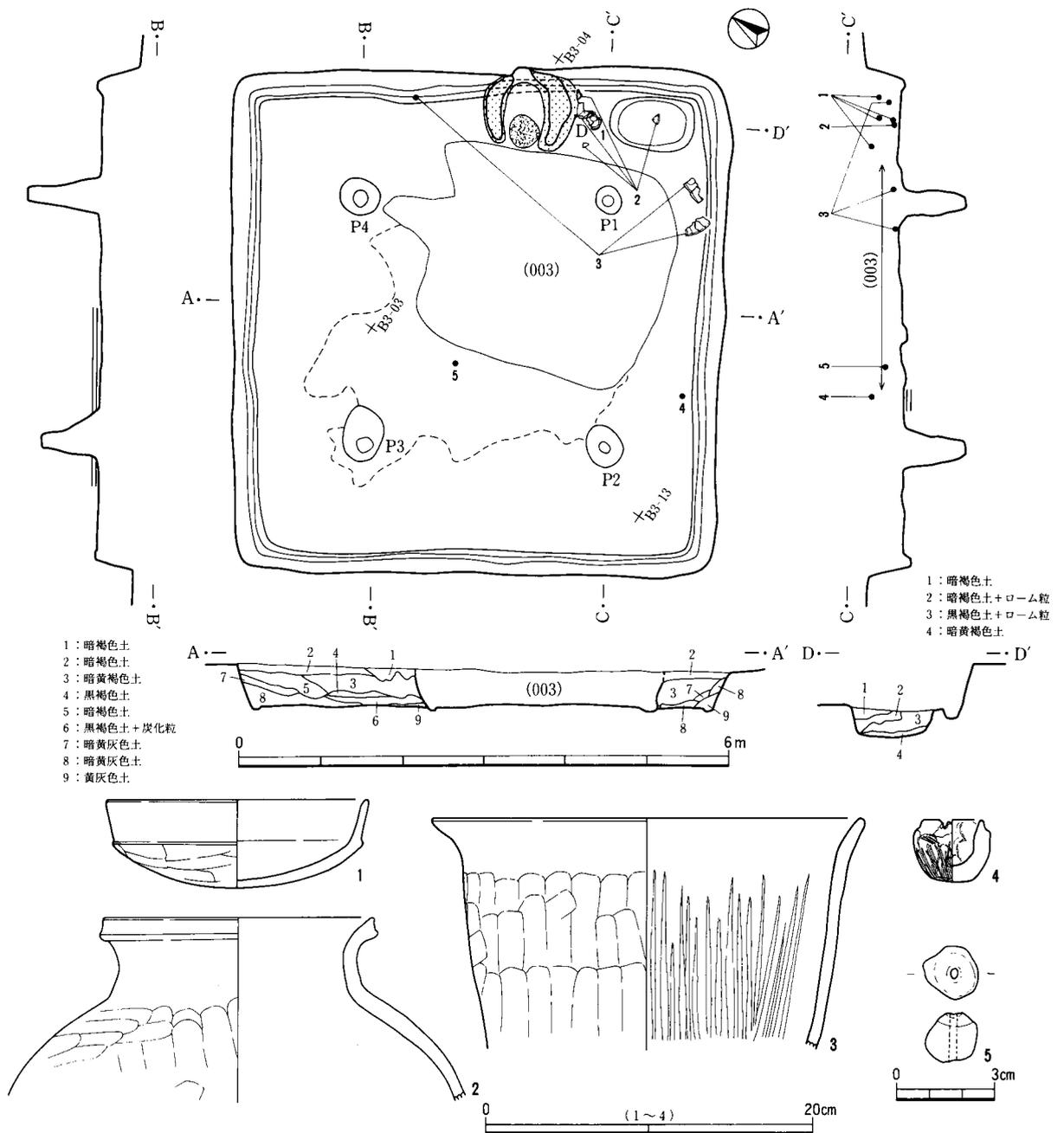
整の詳細も不明である。また、この他に北西壁寄り中央付近の覆土下層から鉄鏝が1点出土したが、腐蝕がひどく、図化することはできなかった。



第39図 002号住居跡と出土遺物

004号竪穴住居跡 (第40図、第16・18・19・21表、図版6・22・23・24)

台地上の平坦面、調査区の中央部B3-02・03グリッド付近に位置する。平面形はほぼ方形を呈する。床面をほぼ同じくして、平安時代の003号竪穴住居跡が構築されている。カマドのある側を主軸とすると、N-54°-Eに主軸方位をとる。規模は主軸6.12m×対向軸5.85m、床面積29.22㎡、検出面から床面までの深さ30cm~60cmを測る。カマドは北東壁右寄りに位置する。遺存状況は悪い。袖を観察すると、純粋な山砂及び山砂とくすんだ黒褐色粘質土の混土を構築材に使用しており、内壁は全体的に焼けて赤く変色している。同様に、火床面もロームが焼けて硬化・変色している。火床面以下には暗褐色土混じりのソフトローム及び均質な山砂を充填しており、焼土粒は認められなかった。床面はほぼ平坦で、003号竪穴住居跡構築の影響を受けている部分を除いて、柱穴を結んだ内側がよく踏みしめられて硬化している。貯蔵穴はカマドの右側、住居の東隅に位置し、床面からの深さ39cmを測る。主柱穴は4か所で検出され、対角線上に整然と



第40図 004号住居跡と出土遺物

配される。P1・P2・P4は床面で検出された径が小さく、半截したところP1・P2では断面に柱痕が観察できた。一方、P3は床面での検出径が比較的大きいことから、断面も柱の抜き取りあるいは倒壊等が考えられる。また、P2の底面には硬化した柱座が1か所認められた。壁溝は壁直下に全周する。

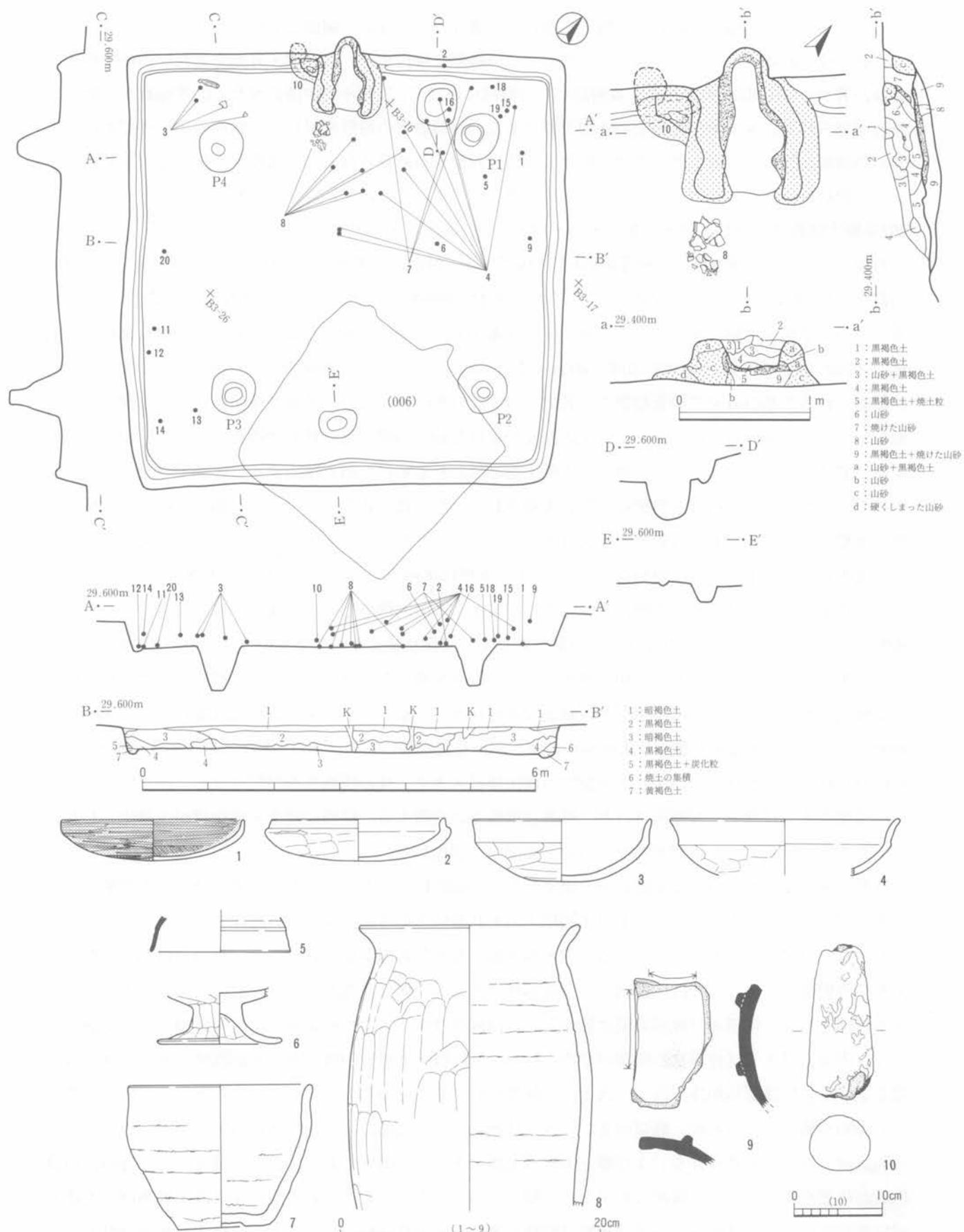
遺物は覆土内に散在して出土した。量的にはやや多い。平面的には西隅を除く住居の隅付近にややまとまって分布し、比較的大きな破片はカマドの右側から住居の東隅付近にかけて分布している。5点を図化した。1は覆土中層出土の土師器坏である。底部は丸底を呈する。口縁部高が体部高より低く、口縁部はわずかに外傾しながら上方に立ち上がる。口唇部及び外面底部の一部は器面の磨滅が著しい。2は覆土上層及び検出面出土の土師器甕である。胴中位以下は遺存していない。口縁部は一度直立気味に立ち上がって、上方で短く外反し、口縁端部がつまみ上げられている。口唇部がやや磨滅している。3は覆土上層出

土のもので、土師器甕と思われる。胴下半部以下は遺存していない。胴部上半部にわずかな張りをもち、一度弱く絞られるようにして、緩やかに外反する口縁部に移行する。口唇部・外面全面及び内面口縁部の磨滅が著しい。外面の180度対向する胴部から口縁部にかけて、及びその中間に当たる90度振れた口縁部に黒斑が見られる。4は検出面出土の手捏土器である。短頸壺状の器形を呈し、口縁部の内・外面に成形時の指頭痕が残る。口縁上にヘラ状工具による切込みが1か所見られる。5は覆土上層出土の土製小玉である。形状は全体にいびつで、全面にススが付着している。孔は両側から穿孔されている。

007号竪穴住居跡（第41・42図、第16・18・19・21表、図版6・22・23・24）

台地上の平坦面、調査区の中央部のB3-15・16グリッド付近に位置する。平面形は方形を呈し、南東壁側の覆土中に、床面の位置をわずかに高くして、平安時代の006号竪穴住居跡が一部重複して構築されている。カマドのある側を主軸とすると、N-46°-Eに主軸方位をとる。規模は主軸6.52m×対向軸6.50m、床面積35.92m²、検出面から床面までの深さ40cm～55cmを測る。カマドは北西壁中央に位置する。2度の作替えが認められる3基のカマドの重複例で、黄色みの少ない灰白色の山砂が多量に検出された。重複の最終形態を示している最も新しいカマドは、火床面及び焼けた袖の内壁が良い状態で遺存していた。崩落していて原位置は保っていないものの、煙出し内壁上面と思われる焼けた面も検出することができた。また、煙出しの立上がり部分に当たる奥壁は山砂が充填されていた。最も新しいカマドの左袖の外側には同様の山砂の堆積があり、その下から新カマド又は旧カマドのものと思われる支脚が出土した。最も新しいカマドの火床面は住居の床面よりも幾分高く、火床面下の9層は黒褐色土中に山砂及び焼土を多く混入していた。また、左袖内壁の焼けた面は2層に分けることができ、その内側のものは火床面下にも及んでいることが観察できた。これらのことをあわせて、位置を同じくして作り替えられた2基のカマドの存在を想定した。また、重複した2基のカマドの左側に隣接して、山砂を充填したより古いカマドの煙出しと思われる掘込みが検出された。床面はほぼ平坦だが、軟弱な部分が多く、踏みしめによる硬化面は検出できなかった。貯蔵穴はカマドの右脇に位置し、床面からの深さ58cmを測る深いものである。主柱穴は4か所で検出され、ほぼ対角線上に配される。いずれも床面での検出径が大きく、柱の抜取りを想起させる。カマドと対向する南東壁中央には梯子穴が検出された。壁溝は壁直下に全周する。壁際に焼土・炭化材が少量出土した。いずれも小さいもので、実測可能な1点を平面図中に図化した。

遺物は床面及び覆土内から非常に多く出土した。平面的には、カマドのある北側半分に大半が集中して分布していた。20点を図化した。1は床面出土の土師器坏である。丸みの弱い底部とわずかに内弯する体部をもち、口縁部は上方に立ち上がる。内・外面とも黒色処理が施されている。外面口縁部～体部は器面がやや磨滅している。2は床面出土の土師器坏である。全体に器高が低く、丸底の底部とわずかに内弯する体部をもつ。体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は短く、やや内傾する。内・外面とも磨滅が著しく、内面にはスス状付着物の痕跡が認められる。3は覆土下層～中層出土の土師器坏である。底部は丸底を呈する。口縁部高が体部高より低く、口縁部はわずかに外傾しながら上方に立ち上がる。内・外面とも赤彩が施されているが、磨滅が著しく残りは悪い。内面底部には器面の細かい剝落が目立つ。また、外面底部には黒斑が見られる。4は覆土中層～上層出土の土師器坏である。底部は遺存していない。口縁部高が体部高より低く、口縁部はわずかに外傾しながら上方に立ち上がる。遺存部は内・外面とも赤彩が施されているが、外面及び内面口縁部は磨滅が著しく、残りは悪い。特に内面口縁部の劣化はひどく、薄く層状に器面が剝落している。5は覆土下層出土の須恵器坏蓋である。半球状に高さのある天井部をも



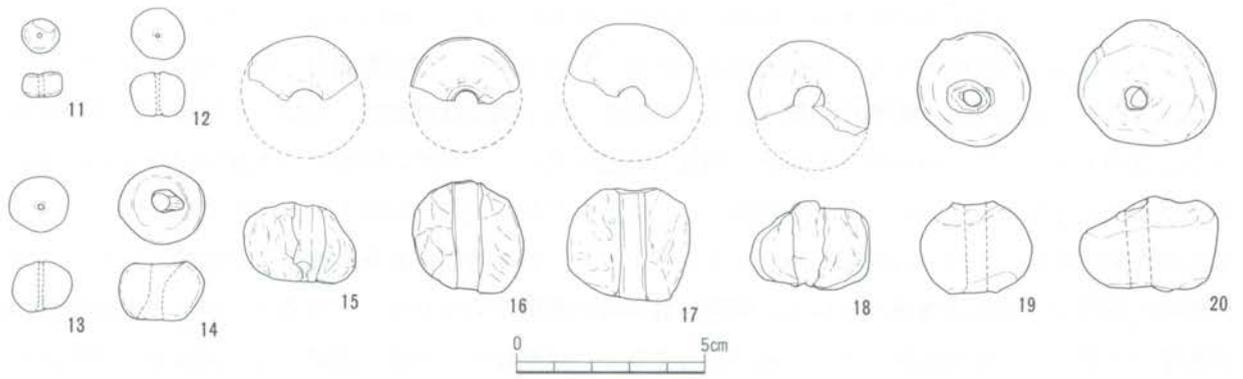
第41図 007号住居跡と出土遺物(1)

つと思われる。6は覆土中層出土の土師器高坏底部～脚部片である。脚高は低く、裾部は大きく拡がって端部がまくれあがり気味になる。坏部内面及び外面に赤彩を施す。裾部裏面の一部に黒斑が見られる。7は覆土下層～上層出土の土師器小型甕である。輪積痕を残す胴部は直線的に外傾し、口縁部はほぼ垂直に上方に立ち上がる。内・外面とも器面の剝離・磨滅が著しく、平底の底部には木葉痕が認められるが、中央部が大きく剝落している。8は床面出土の土師器甕である。胴下半部以下は遺存していない。長胴で、最大径が胴部中位にあり、口縁部が外反して立ち上がる。胴部内面に6条の輪積痕が明瞭に残る。口縁部外面の一部及び口唇部は磨滅している。胴部に数か所の黒斑が見られる。9は覆土上層出土の須恵器長頸壺底部片を利用した転用砥石である。貼付高台を有する底部片の2か所に研磨による磨滅部分が認められる。10は最も新しいカマドの左袖下出土の土製支脚である。二次焼成のため、表面は非常に脆弱である。11～20は土製小玉・土製丸玉である。いずれも床面及び床面直上からの出土であり、出土地点のわかる9点は、北隅付近に土製丸玉4点、南隅付近に土製小玉4点・土製丸玉1点と集中地点が2か所に分かれる。11・14は両面とも小口面が平坦に整えられ、稜を作り出している。穿孔方向は、13・14・19・20は片側から、15～18は両側からである。15・17・18は両側穿孔の穿孔ズレが観察できる。11は穿孔方向不明、12は両側穿孔の可能性が高い。11・13は全面、12・20は外面の一部、16は孔内面にススが付着している。

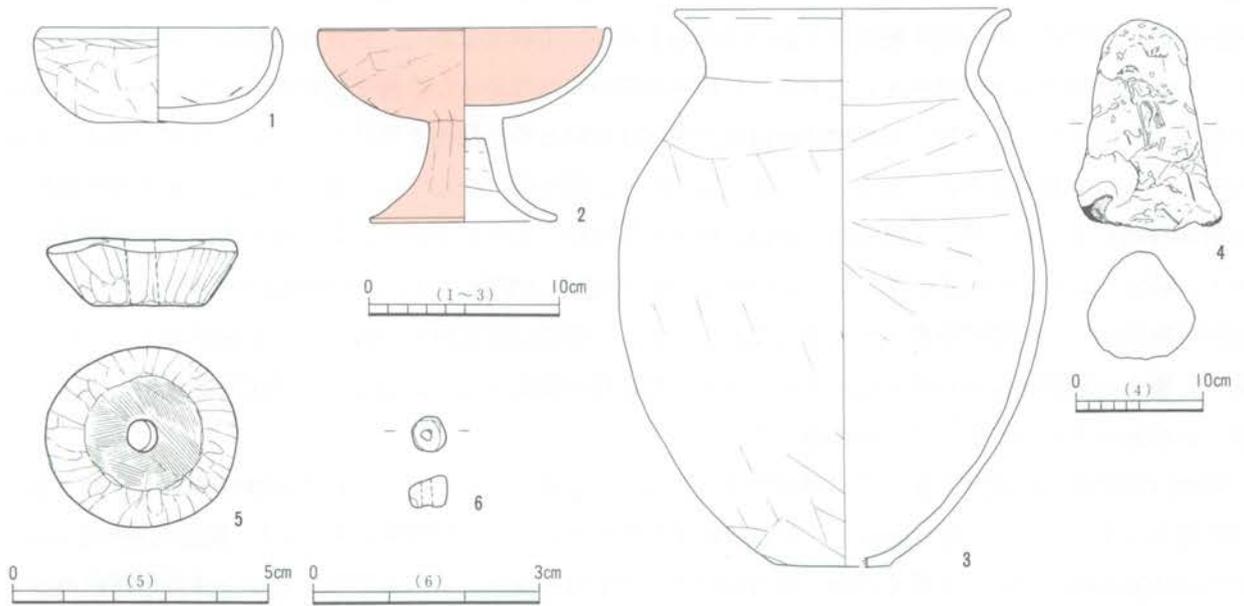
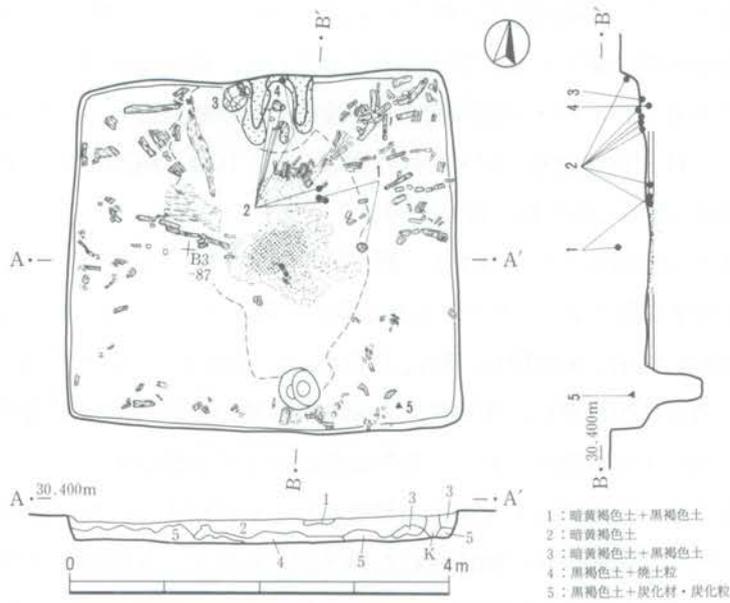
008号竪穴住居跡（第43図、第16・18・19・21表、図版7・22・23・24）

南西から延びる小谷津の谷頭部に当たる台地上、調査区の南寄りB3-77・87グリッド付近に位置する。焼失住居である。平面形はほぼ方形を呈し、カマドのある側を主軸とすると、 $N-6^{\circ}-W$ に主軸方位をとる。規模は主軸3.63m×対向軸4.00m、床面積13.78 m^2 、検出面から床面までの深さ25cm～40cmを測る。カマドは北壁中央に位置する。遺存状況は悪い。黒褐色土と非常に少量の山砂の混土を構築材として使用している。住居の焼失に際して袖の上面が焼けており、焼失以前にカマドが壊されたことを推察させる。カマド内には支脚が正立して出土し、火床面らしき焼土の堆積がわずかに検出された。床面はほぼ平坦で、カマドの前面からカマドに対向する南壁中央に検出された梯子穴にかけて、住居の中央部分が踏みしめにより硬化している。また、上屋構築材あるいは施設の一部が火熱を受けて発泡したと思われるガラス質発泡物を床面直上で検出した。硬化範囲の外側は黒褐色土が多い土軟弱であり、貼床及び踏みしめは認められない。梯子穴は覆土が水平堆積をしており、柱痕等は認められなかった。梯子穴以外は床面には一切の施設痕は検出されなかった。覆土の堆積状況は他の竪穴住居跡とやや様相を異にしている。覆土上層は大量のロームによって埋め戻されており、以下ロームの少ない層を間に挟んで、下層には焼土・炭化材が集積する層が堆積している。焼土・炭化材の層は、焼土を取り除くとその下位から炭化材が露出する堆積状況であり、断面でもかなり明確に分層することができる。炭化材は壁近くのものでも床面から検出されており、住居廃絶後の早い段階で堆積したと考えられる。また、壁際の炭化材には直立した状態で出土したのものもある。覆土の堆積状況及び梯子穴のあり方から、本住居の焼失は被災ではなく、住居廃絶に伴う焼却行為をうかがわせるものであることが推察できる。

遺物は他の竪穴住居跡と比して少量の出土であった。6点を図化した。1は土師器坏である。丸みをもつ器形を呈するが、ヘラ削りによって平らな底面を作出する。2は土師器高坏である。脚部は裾が広がり、中空の内面を横方向のヘラ削りの後、縦方向にナデて平滑に調整する。さらに、外面全体及び坏部内面に赤彩を施す。なお、坏部は床面より検出されているが、脚部は009号竪穴住居跡の覆土中より検出されたものである。3は土師器甕である。口縁部が大きく外反し、胴部に膨らみをもつ器形を呈する。しかし、器



第42図 007号住居跡出土遺物 (2)



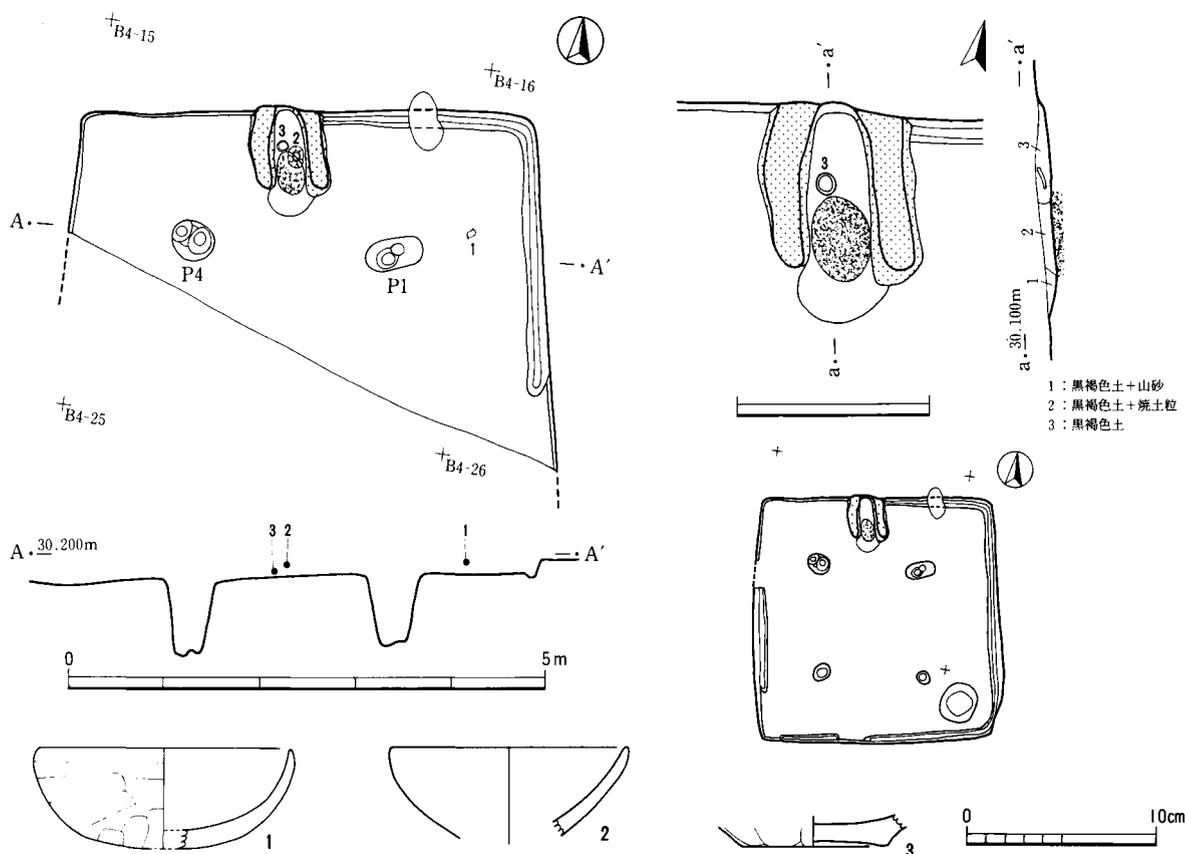
第43図 008号住居跡と出土遺物

形にはゆがみが見られ、胴部の膨らみは均一でない。4は土製支脚である。胎土中に繊維質のものを多く含んでいるが、堅緻である。5は石製紡錘車である。滑石を用い、上下両面に成形時の擦痕が顕著である。6はガラス小玉である。覆土中より検出した。青緑色を呈し、形状は全体的に歪んでいる。

009号竪穴住居跡（第44図、第16・18・21表、図版7・22）

南西から延びる小谷津の谷頭部に当たる斜面肩部、調査区域の南側境界上B4-15グリッド付近に位置し、カマドをはじめ、住居の北側約1/2が検出された。南側部分は第2次調査で185号址として調査・報告された竪穴住居跡が相当する。ここでは第4次調査で得られた成果を中心に報告する。平面形はほぼ方形を呈すると思われ、カマドのある側を主軸とすると、N-10°-Wに主軸方位をとる。規模は遺存主軸3.65m×対向軸5.00m、遺存床面積10.67㎡、検出面から床面までの深さ3cm~20cmを測る。カマドは北壁やや左寄りに位置する。遺存状況は極めて悪く、両袖とわずかに火床面が検出できたのみである。床面はほぼ平坦だが、踏みしめによる硬化面は検出できなかった。支柱穴は2か所で検出され、いずれも隣接した2か所の掘込みをもっており、建替えが想定できる。壁溝は北壁のカマド右側から東壁にかけて部分的に検出された。第2次調査の成果とあわせると、一辺約5mのほぼ方形を呈するプランの北壁にカマドをもち、建替えの可能性のある4本の支柱構造、南東隅に貯蔵穴及び部分的に途切れながら全周する周溝をもつ住居全体像が復元できる。

出土遺物はわずかに3点が図化できた。1・2は土師器杯である。丸みを帯びた器形を呈する。1の内面には赤彩の痕跡が見られる。2は内・外両面ともに橙色化し、器面が粗れていることから、二次焼成を受けたと考えられる。3は土師器甕の底部である。やや凹む底面は、ヘラ削りによって調整されている。

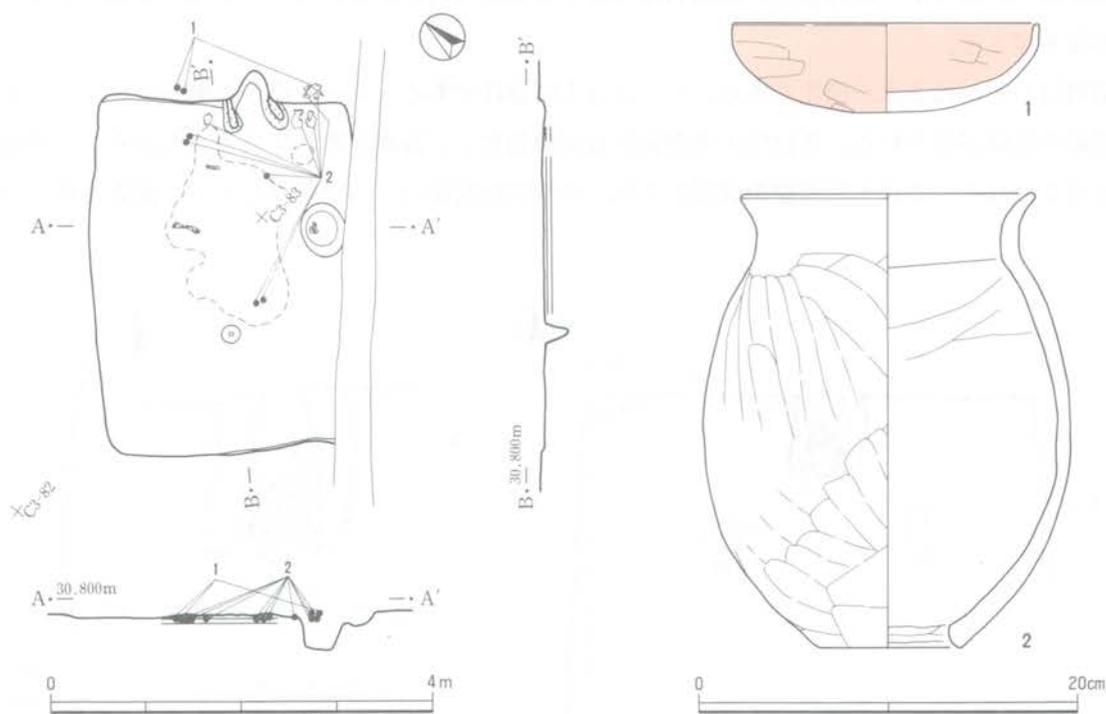


第44図 009号住居跡と出土遺物

011号竪穴住居跡（第45図、第16・18・21表、図版8・22）

台地上の平坦面、調査区の南東部C3-72・82グリッド付近に位置する。近世以降のものと判断した溝状遺構によって南東壁の大部分を切られている。カマドのある側を主軸とすると、 $N-47^{\circ}-E$ に主軸方位をとる。規模は主軸3.71m×対向軸2.72m、遺存床面積9.22m²、検出面から床面までの深さ2cm~10cmを測る。主軸方向に長い矩形を呈する平面形をなすが、掘込みが非常に浅い部分が多い。検出はされなかったが、梯子穴のやや外側に壁が巡っていたと仮定すると、ほぼ方形の平面形を呈することになる。カマドは北東壁やや右寄りに位置する。遺存状況は悪く、多量の山砂を構築材に用いた両袖がわずかに確認できたのみである。床面はほぼ平坦で、カマドの前面からカマドに対向する南西壁中央に検出された梯子穴にかけて、住居の中央部分が踏みしめにより硬化している。なお、硬化面上に少なくとも14本以上を数えることのできるカヤ状炭化物が出土したほか、床面上に炭化材が散在していた。貯蔵穴は南東壁側のほぼ中央に位置し、床面からの深さ35cmを測る。梯子穴以外の柱穴及び壁溝は検出されなかった。

遺物は少量であり、2点を図化するとどまった。1は土師器坏である。やや扁平な器形を呈し、器面全面に赤彩を施す。2は土師器甕である。胴部中央に膨らみをもつ器形を呈する。



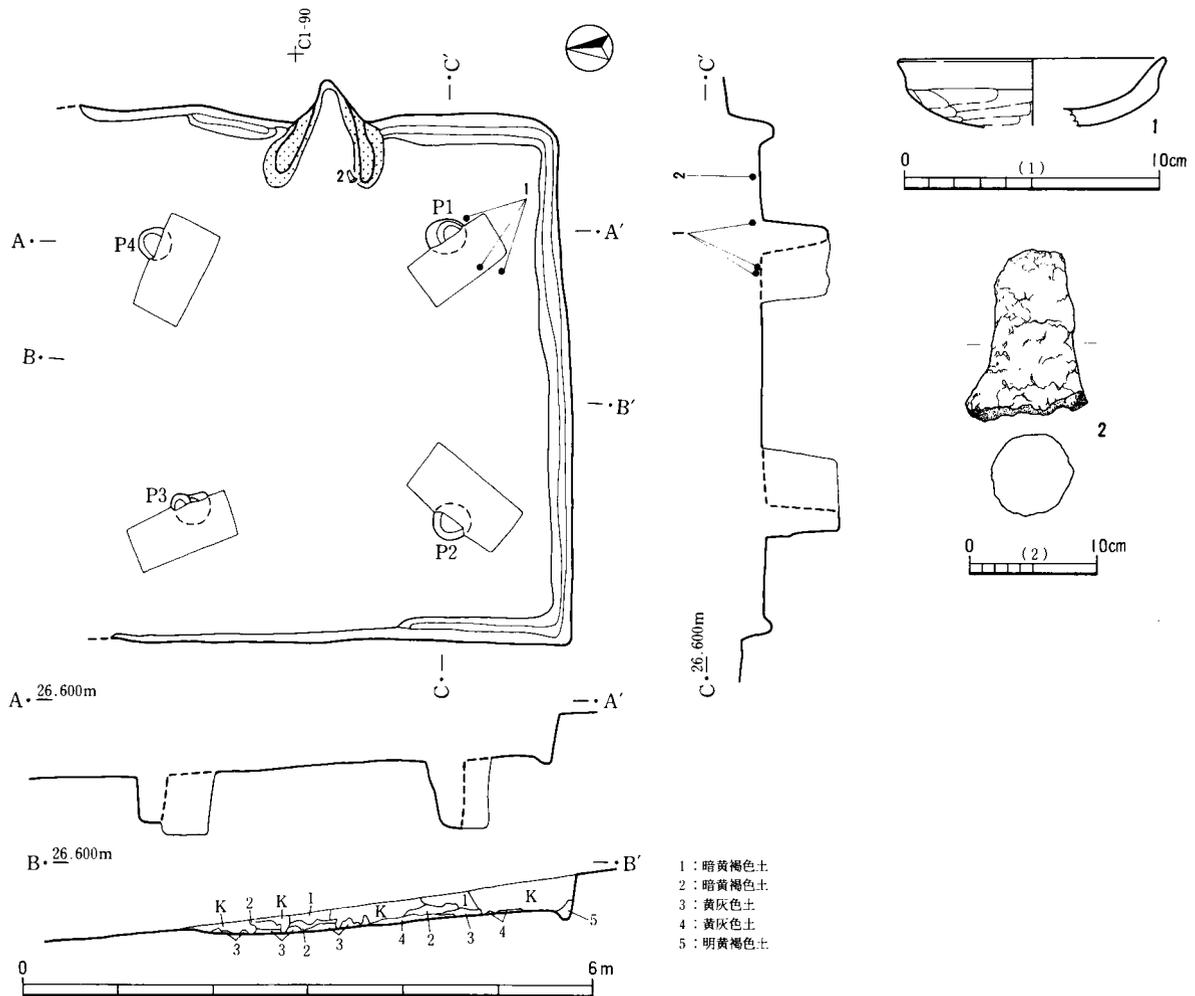
第45図 011号住居跡と出土遺物

016号竪穴住居跡（第46図、第16・18・21表、図版8・23）

西から延びる小谷津の谷頭部に当たる斜面肩部、調査区の北端B1-89・99グリッド付近に位置する。斜面下位側に当たる北側は壁が失われていた。平面形はほぼ方形を呈するものと思われる、カマドのある側を主軸とすると、 $N-89^{\circ}-E$ に主軸方位をとる。規模は主軸5.55m×遺存対向軸4.90m、遺存床面積24.31m²、検出面から床面までの深さは最大で45cmを測る。カマドは東壁中央付近に位置する。黒褐色粘質土と少量の山砂の混土で構築された両袖が検出されただけで、遺存状況は極めて悪い。同様に床面の遺存状況も極めて悪く、検出できた面も斜面下位側にわずかに傾斜している。貯蔵穴は検出できなかった。支柱穴は4

か所で検出され、対角線上に配されていたものと思われる。支柱穴は床面の観察だけでは検出が難しかったため、半載して断面でも追確認したところ、P3では柱痕と裏ごめの関係が明確にとらえられた。壁溝は斜面上位側1/2及びカマドの左側部分で検出された。

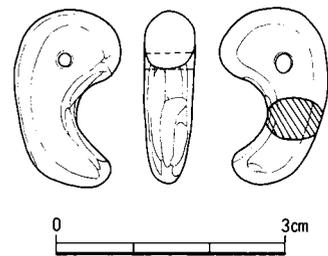
遺物は少量であり、わずかに2点が図化できた。1は土師器坏である。口縁部と体部の間に稜を有し、口縁部がゆるく外反する器形を呈する。2は土製支脚である。胎土に繊維質物を多く含むが、堅緻な焼成である。



第46図 016号住居跡と出土遺物

2 グリッド出土の遺物 (第47図、第19表、図版24)

石製勾玉1点を図化した。緑黒色の蛇紋岩を用い、全体の研磨は比較的丁寧で器表面には光沢をもつ。穿孔も丁寧であり、径はほぼ均一である。



第47図 グリッド出土の勾玉

第6節 平安時代以降の遺構と遺物（第48～56図、第17～21表、図版9～13・23・24）

平安時代以降に帰属すると判断した遺構は、竪穴住居跡7軒、土坑1基、方形周溝状遺構1基、溝状遺構2条を数える（第17表）。以下、検出した遺構と主な出土遺物について報告する。

第17表 平安時代以降の遺構

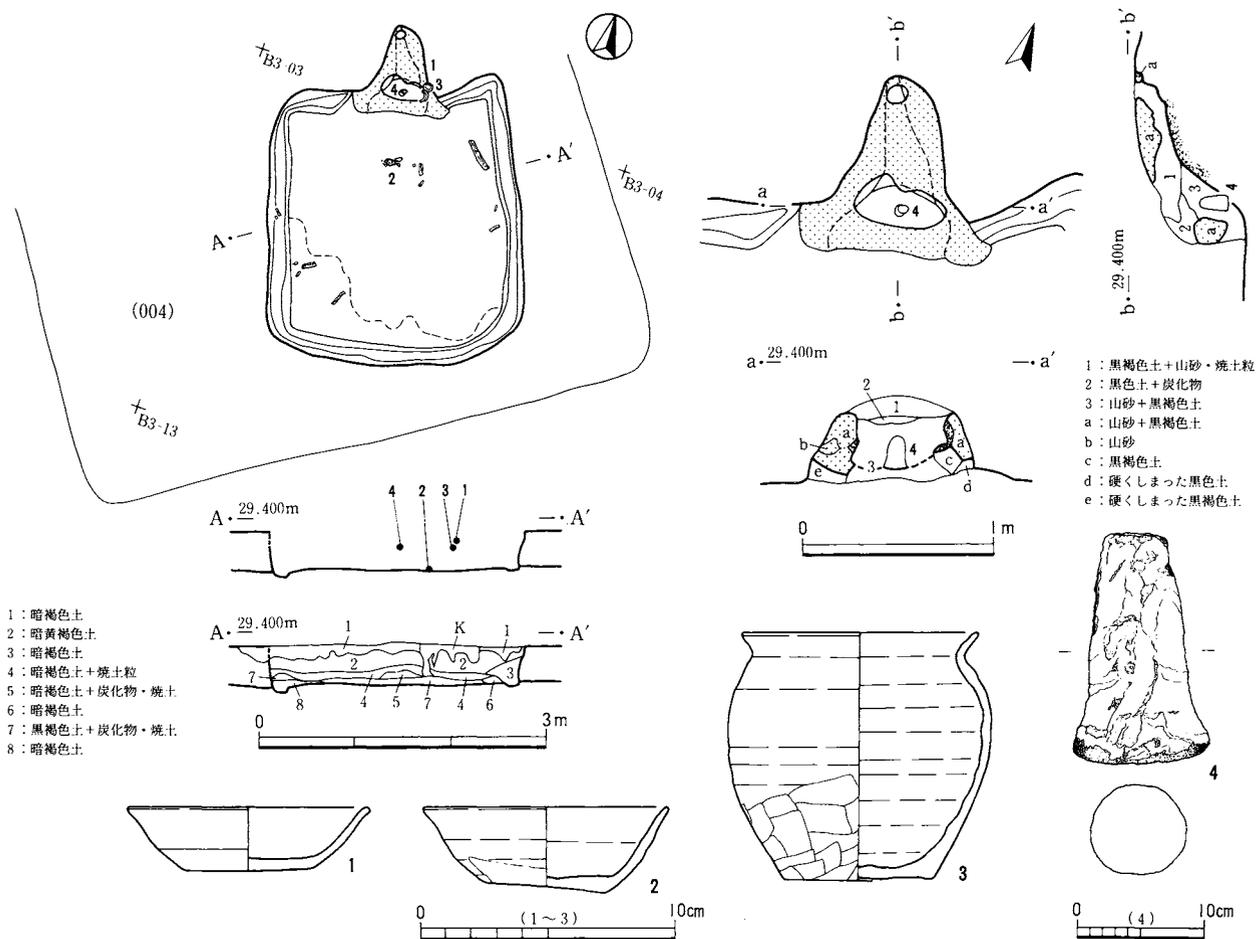
遺構番号・遺構の種類	位置	時期	挿図番号	図版番号	備考
003号竪穴住居跡	B3-03	平安・9c 中	第48図	9・23	004号住居跡と重複
005号竪穴住居跡	B3-13・14	平安・10c 前	第49図	9・23・24	
006号竪穴住居跡	B3-16・26	平安・9c 末	第50図	10・23	007号住居跡と重複
012号竪穴住居跡	C3-51	平安・9c 中	第51図	10・23	
013号竪穴住居跡	C3-42・43	平安・9c?	第52図	11	
014号竪穴住居跡	C3-24・34	平安・10c 前	第53図	11・23	
015号竪穴住居跡	C3-48	平安・9c 末	第54図	12・24	
021号土坑	C2-52	平安・9c 後	第55図	12・24	
020号方形周溝状遺構	C4-05	平安	第55図	12	
018号溝状遺構	Z2～C2	古代・中世	第56図	13	東半部は第1次調査061号址
022号溝状遺構	B1	平安	第56図	13	

1 竪穴住居跡

003号竪穴住居跡（第48図、第17・18・21表、図版9・23）

台地上の平坦面、調査区の中央部B3-03グリッド付近に位置する。平面形は方形を呈し、床面のレベルをほぼ同じくする古墳時代の004号竪穴住居跡内に構築されている。カマドのある側を主軸とすると、N-21°-Wに主軸方位をとる。規模は主軸2.72m×2.67m、床面積5.27㎡、検出面から床面までの深さ35cm～40cmを測る。カマドは北西壁中央に位置する。火袋部の天井部は構築材の山砂が橋状に残り、カマド上面には掛け口が、また掛け口下には支脚（4）が正立した状態で検出された。ただし、いずれも本来の位置・規模を示しているとは限らない。特に、支脚が出土したのは天井部の崩落土と思われる3層中であり、カマド底面から浮いた状態であること等、カマド廃絶の際の何らかの行為に伴うものであることを想起させる。住居の外に長く延びる煙道内壁の下面は、非常によく焼けており、また天井部も山砂を多量に用いて構築されている。奥壁は火袋部から急角度で立ち上がった後、緩やかに40cmほど延びており、検出面に近いところは再び急角度で立ち上がっている。図示した範囲がカマドの本来の形態ではないにしても、煙道が長く住居外へ延びているのに対し、内部施設の住居内側への張出しが極めて少ないのは、床面積の確保を図ったためと考えられる。床面はほぼ平坦で、南壁側の一部を除いてよく踏みしめられて硬化している。貯蔵穴・柱穴・梯子穴は検出されなかった。壁溝は壁直下に全周する。覆土の堆積状況を見ると、炭化材・焼土を多く含む7層及び5層が床面上に堆積し、その上位を覆うように被熱して層全体が橙色がかった4層が堆積している。床面に散在する炭化材の出土状況とあわせて、本住居の焼失は被災ではなく、住居廃絶に伴う焼却行為をうかがわせるものであることが推察できる。

遺物は量的に多くない。4点を図化した。1・2は土師器坏であり、口縁がかなり開いた器形を呈する。1は口縁部に横ナデの後、底面から体部下半に回転ヘラ削りを施す。2は底面及び体部下半に手持ちヘラ削りを施す。3は小型甕である。ロクロを用いた製作であるが、色調は暗赤褐色～黒褐色を呈している。口縁部が大きく外反し、体上部に膨らみをもつ器形を呈する。調整は口縁部に横ナデ、体部下半にヘラ削りを施し、体上部及び内面はロクロ痕がそのまま残る。底面は未調整であるが、粘土が薄く剝落したように小さな凹凸に富んでいる。4は土製支脚である。



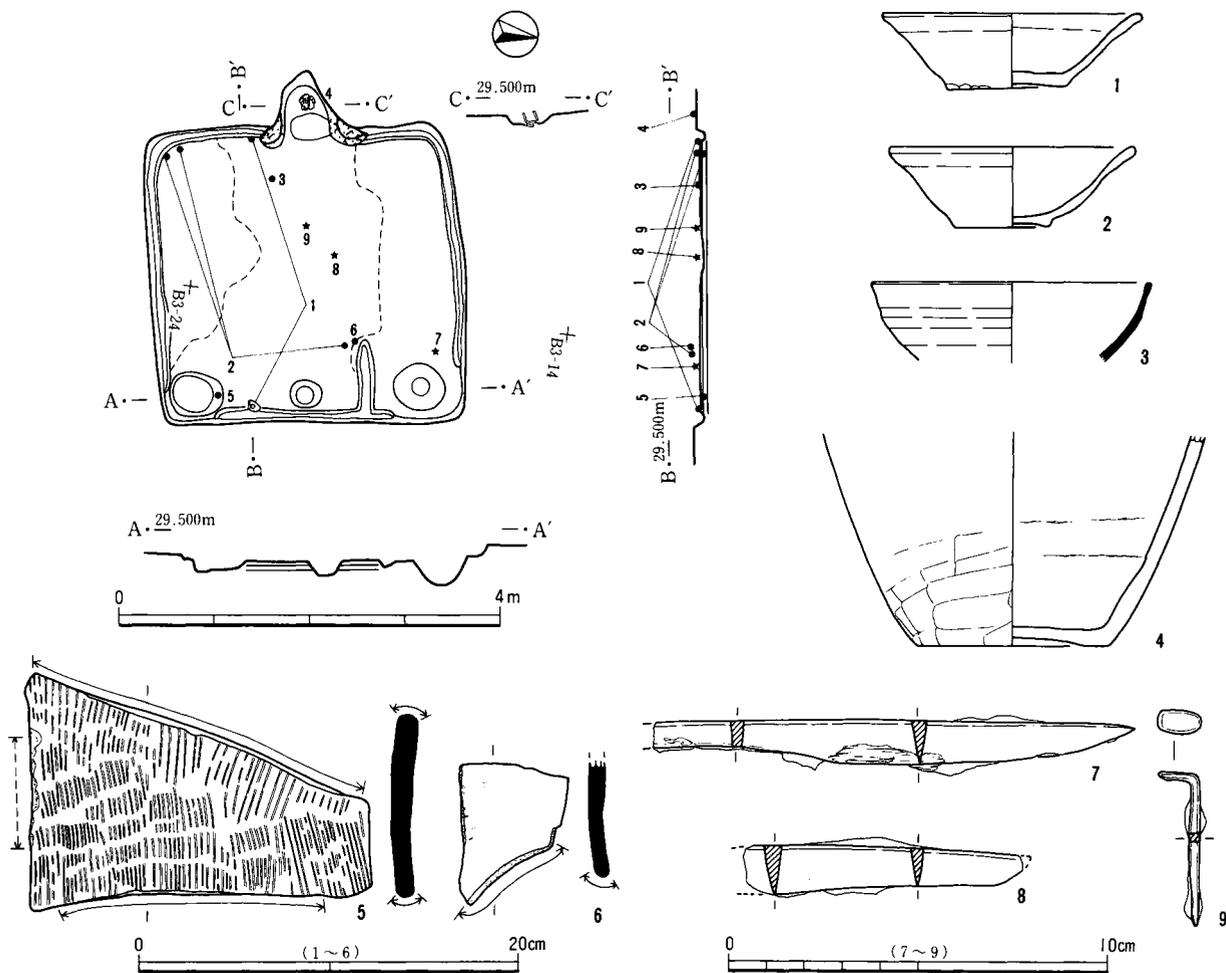
第48図 003号住居跡と出土遺物

005号竪穴住居跡 (第49図、第17・18・20・21表、図版9・23・24)

台地上の平坦面、調査区の中央部B3-13・14グリッド付近に位置する。平面形は方形を呈し、カマドのある側を主軸とすると、 $N-103^{\circ}-W$ に主軸方位をとる。規模は主軸 $3.10\text{m} \times 3.18\text{m}$ 、床面積 8.38m^2 、検出面から床面までの深さ $5\text{cm} \sim 15\text{cm}$ を測る。カマドは西壁中央に位置する。山砂で構築された両袖の一部を検出したのみで、遺存状況は悪い。なお、カマドの奥部から甕の体底部がまとまった形で検出された。床面はほぼ平坦で、カマドの前面からカマドに対向する東壁中央に検出された梯子穴にかけての住居の中央部分、及び南東隅付近がよく踏みしめられて硬化している。硬化範囲の外側には貼床は検出されず、ローム層に漸移する軟弱な面に床面が構築されている。貯蔵穴は北東隅に位置し、床面からの深さ 29cm を測る。支柱穴は検出されなかった。南西隅に検出された性格不明なピットは、床面からの深さ 10cm を測る浅いものだが、周縁まで床面の硬化範囲が及ぶことから、何らかの施設の痕跡である可能性が高い。壁溝は貯蔵穴及び不明ピットの部分は途切れるが、他の部分は壁直下に巡っている。また、貯蔵穴の南側には壁溝から垂直方向に分岐する溝が検出された。貯蔵穴と出入口とを画する間仕切り施設と考えられる。

遺構の確認面が浅かったこともあり、遺物の出土状況は散漫であるが、9点が図化可能であった。1・2は土師器である。ロクロにより成形の後、体部にはナデ、口縁部には横ナデを施し、ロクロ痕を消している。底面には回転糸切り痕を有する。器形は上方に大きく開き、色調は明赤褐色を呈する。3は灰釉陶器である。内・外両面ともに施釉を認めるが、内面に比して外面は薄いものである。さらに、内面に

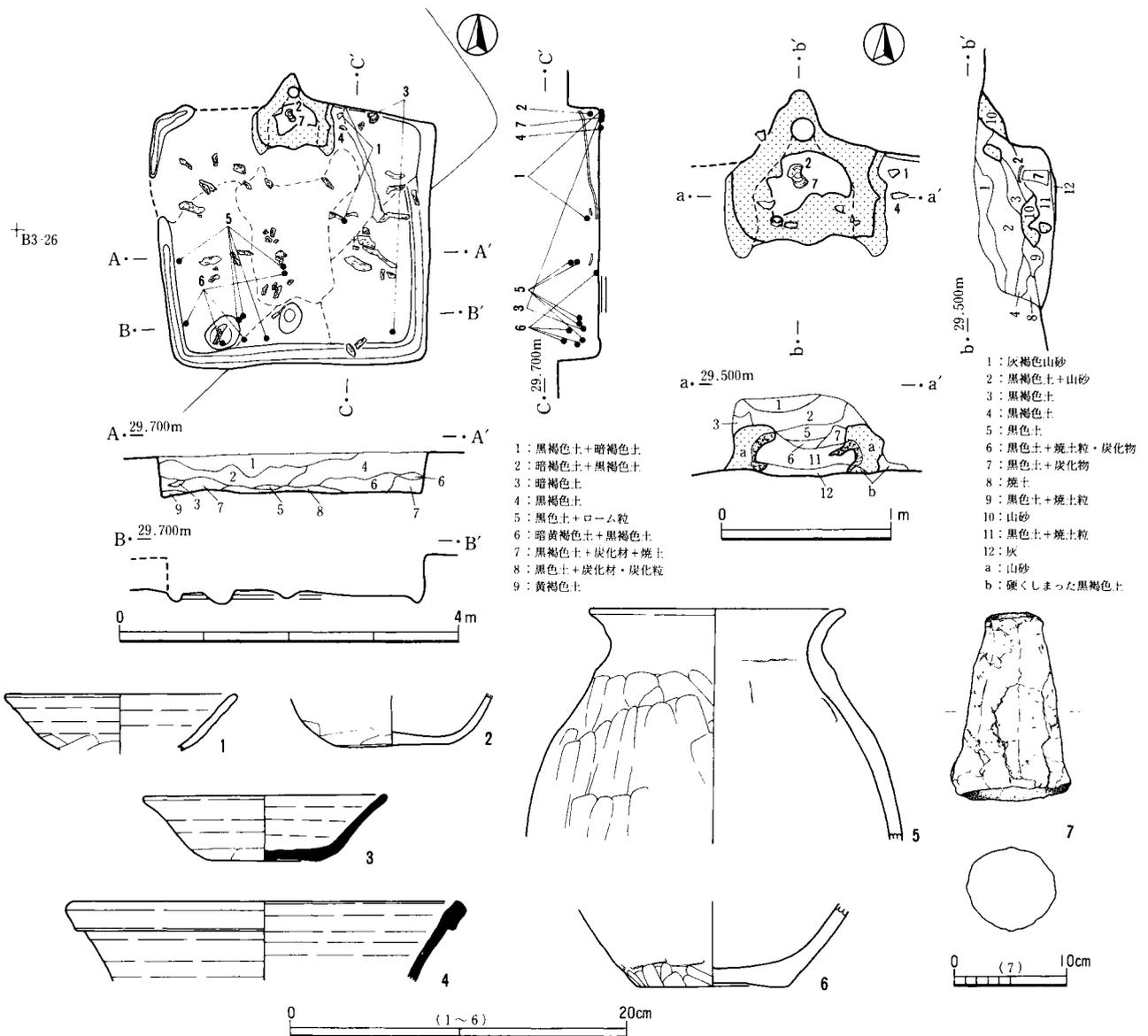
は自然釉が顕著に付着している。口端部は外側に向かってやや肥厚し、その上端は平坦に近い様相を呈する。4は土師器甕である。体底部をヘラ削りにより調整し、色調は褐色を呈する。5・6は須恵器転用砥石である。5は外面に叩き痕を有する灰白色の須恵器大甕の破片を利用し、図の上下両方の割れ口部分が顕著に利用されている。6は暗灰色の須恵器破片を利用している。外面はやや暗褐色を呈し、胎土には骨針状物質を多く含んでいる。7～9は鉄製品である。7・8は刀子である。7は茎部の一部を欠損している以外は、ほぼ原形をとどめている。8は身部のみが残存である。9は完形の折頭釘である。



第49図 005号住居跡と出土遺物

006号竪穴住居跡 (第50図、第17・18・21表、図版23)

台地上の平坦面、調査区の中央部B3-16・26グリッド付近に位置する。平面形はほぼ方形を呈し、古墳時代の007号竪穴住居跡の覆土中に1/2以上を重複して構築されている。カマドのある側を主軸とすると、N-3°-Wに主軸方位をとる。規模は3.01m×3.47m、推定床面積7.48㎡、検出面から床面までの深さ40cm～50cmを測る。カマドは北壁中央に位置する。カマドは構築材の表面が焼けて赤く変色している。火袋部の天井内壁は構築材の山砂が橋状に残り、カマド上面には掛け口が、また掛け口下に土師器坏(2)を被せた支脚(7)が正立して検出された。煙道は山砂を多量に用いて構築されており、下面が非常によく焼けている。床面は、大部分が下位の竪穴住居跡の覆土である暗褐色土中に構築されているが、踏みしめにより硬化している部分が多い。住居中央部分が最も硬く、梯子穴周辺部分、西側部分、南東側部分の順に硬い。また、梯子穴をカマドと対向する南壁中央に検出した。床面からの深さ10cmほどを測る浅いもので、



第50図 006号住居跡と出土遺物

掘込みは外側方向に傾斜する。南西隅に検出されたピットは、床面からの深さ12cmを測る浅いもので性格不明である。壁溝は北東部・カマド左側及び西壁の一部を除く部分から検出された。覆土の堆積状況は、炭化材・焼土を多く含む8層及び7層が床面上に堆積し、その上位をロームブロックを含む6層・4層・2層が覆うように堆積している。カマド右側の長い炭化材の出土状況は、壁際の北側部分が高く、南端に向かって徐々に床面に近くなる。同様に、炭化材の多くは住居の中心に近いものほど床面に近い傾向にある。このような出土状況等から、本住居跡の焼失は廃絶に伴う故意の焼却であると考えられる。

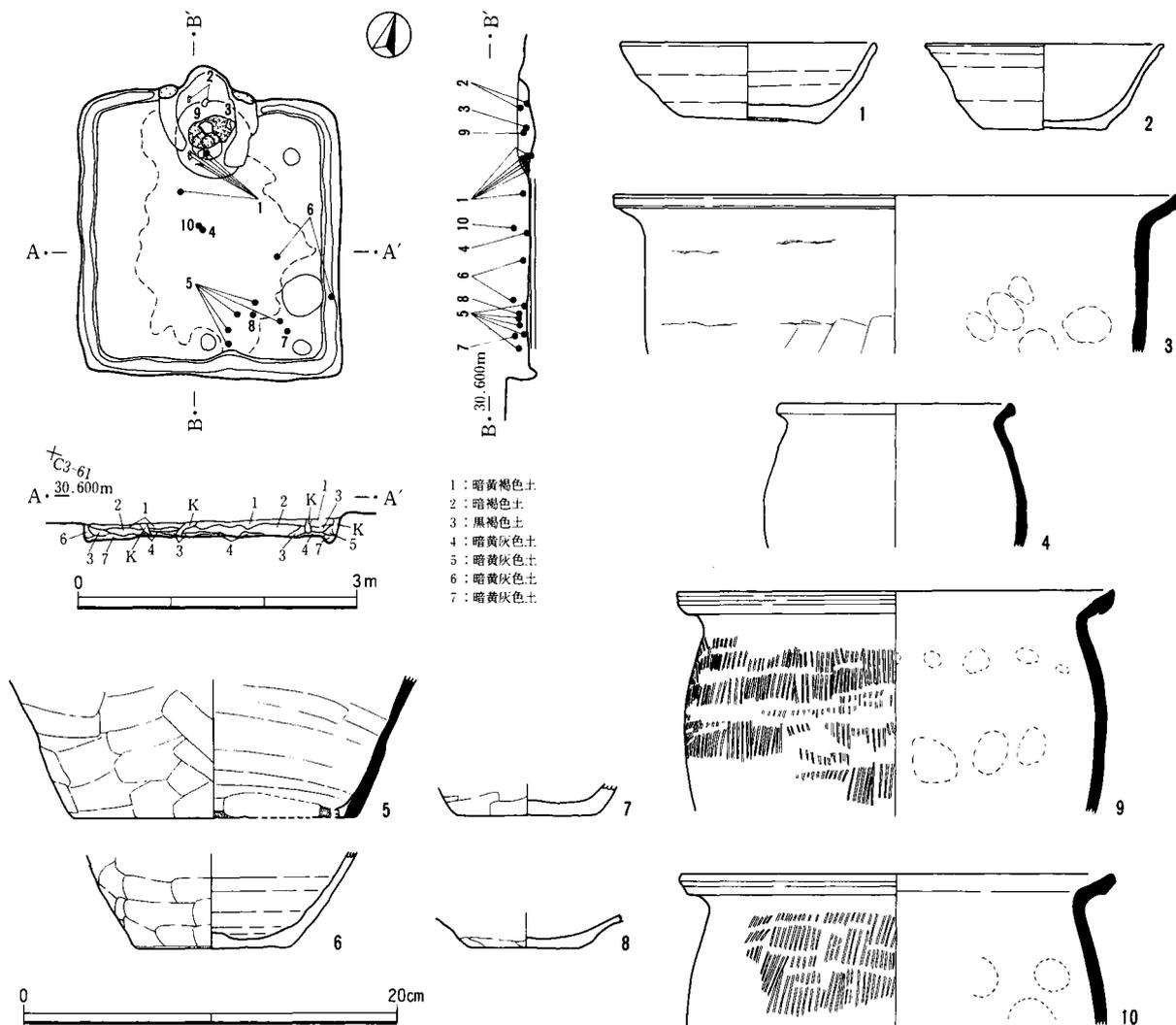
遺物は確認面が高かったこともあり、比較的多く出土した。うち7点が図化可能であった。1・2は土師器坏である。ロクロで成形し、色調は灰褐色～暗褐色・黒褐色を呈する。体下部には手持ちヘラ削りを施し、2は底面にも認められる。また、2は1に比して硬質な焼成である。3は須恵器坏である。暗灰色を基本とする色調を呈する。ロクロ成形の後、体部内面にナデ、外面体下部から底面にかけて手持ちヘラ削りを施す。4は須恵器甕である。色調は灰白色を呈する。5は土師器甕である。球胴の器形を呈するものと考えられる。6は土師器甕の底部である。体部下端に幅狭で縦方向の強いヘラ削りを施す。底面には

木葉痕を認めるが、中央部付近に粗いヘラ削り加えられ、一部が消されている。7は土製支脚である。

012号竪穴住居跡 (第51図、第17・18・21表、図版10・23)

台地上の平坦面、調査区の東寄りC3-51グリッド付近に位置する。平面形はやや隅円の方形を呈し、カマドのある側を主軸とすると、N-17°-Wに主軸方位をとる。規模は主軸2.95m×2.70m、床面積5.84㎡、検出面から床面までの深さ10cm~25cmを測る。カマドは北壁中央に位置する。作替えの認められる2基のカマドの重複例であるが、遺存状況は極めて悪い。図示した火床面は旧カマドのもので、その上位及び同位置に新・旧各カマドの構築面である重層した2枚の貼床が検出された。新カマドのものと思われる両袖は、袖の付け根部分に構築材の山砂がわずかに検出されたのみである。床面は木根等による攪乱が部分的にあるもののほぼ平坦で、カマド前面から南壁方向にかけて、住居の中央部分がよく踏みしめられて硬化している。貯蔵穴・柱穴・梯子穴は検出されなかった。壁溝は壁直下に全周する。

遺物はカマド内及び覆土中を中心に、比較的多く出土した。10点を図化した。1・2は土師器坏である。ロクロ成形、回転糸切りの後、器面全面にナデ調整を施す。内面調整は比較的丁寧に行われるが、底面には糸切り痕を完全に消さない程度の調整しか加えず、切離し時についた凹凸もそのままである。3・9・10は須恵器甕である。3は叩きにより成形した後、体部内・外両面にナデ調整を施している。その結果、



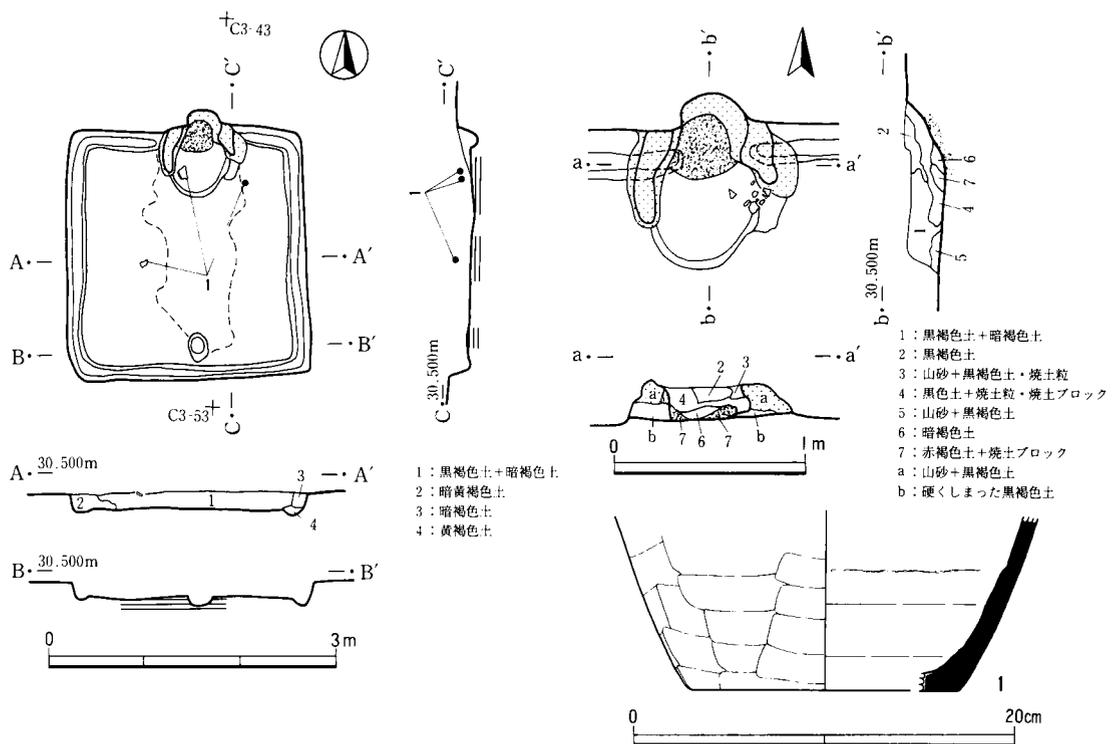
第51図 012号住居跡と出土遺物

外面では叩き目が痕跡程度しか観察できなくなっている。胴部に膨らみをもたない比較的寸胴な器形であり、色調は明赤褐色を呈する。9・10は胴上半に膨らみをもつ器形を呈し、外面には叩き目を顕著に残す。色調は、9の外面が赤灰色、内面が灰色、10の内・外面ともに橙色を呈する。4は須恵器小型甕である。球胴の器形を呈する。器表面は剝離及び磨滅が著しく、調整等は不明である。胎土には石英粒及び長石粒を多く含んでいる。5は須恵器甕である。色調は明赤褐色を呈する。6・7は土師器小型甕である。ロクロにより成形し、体下部及び底面にヘラ削りを施す。7の底面には静止糸切り痕がわずかに残る。色調は、6が赤褐色～明赤褐色、7が明褐色を呈する。8は土師器皿である。内・外面ともに丁寧なナデの後、外面体下部及び底面に手持ちヘラ削りを施す。色調は明赤褐色を呈する。

013号竪穴住居跡 (第52図、第17・18・21表、図版11・23)

台地上の平坦面、調査区の東寄りC3-42・43グリッド付近に位置する。平面形はほぼ方形を呈し、カマドのある側を主軸とすると、N-2°-Wに主軸方位をとる。規模は主軸2.55m×2.45m、床面積4.51m²、検出面から床面までの深さ15cm～40cmを測る。カマドは北壁中央に位置する。遺存状況は悪く、両袖の構築材の一部及び奥壁際の火床面をわずかに検出した。図中には床面状況より推定した右袖及びカマド掘り方を示した。床面はほぼ平坦で、カマド前面から南壁中央の梯子穴にかけて、中央部分がよく硬化している。硬化面の外側では床面は明確ではなく、黒褐色土とロームの混土を掘り方に充填している。梯子穴は床面からの深さ10cmほどの浅いもので、掘込みは外側方向にわずかに傾斜する。壁溝は壁直下に全周する。

遺物は覆土中より少量検出したにすぎず、わずかに1点が図化可能であった。1は須恵器甕である。焼成時の還元が不十分で、色調は赤褐色～黒褐色を呈する。外面の体下部及び底面にはヘラ削りを施し、内面には粗い横方向のナデを加えるにとどまる。

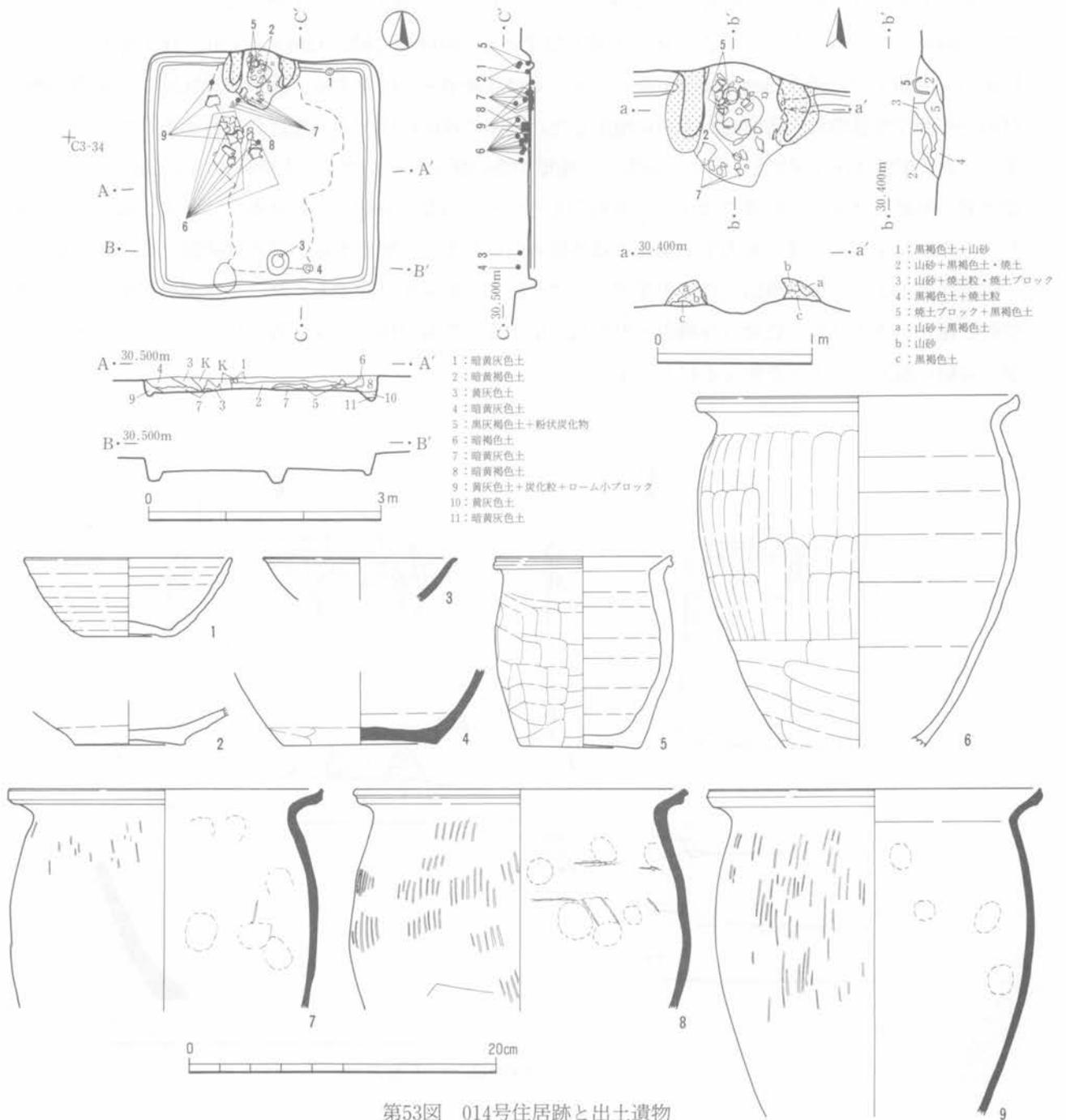


第52図 013号住居跡と出土遺物

014号竪穴住居跡 (第53図、第17・18・21表、図版11・23)

台地上の平坦面、調査区の東寄りC3-24・34グリッド付近に位置する。平面形は方形を呈し、カマドのある側を主軸とすると、N-5°-Wに主軸方位をとる。規模は主軸3.00m×2.93m、床面積6.97㎡、検出面から床面までの深さ10cm~25cmを測る。カマドは北壁中央に位置する。両袖の構築材が検出できたのみで、遺存状況は悪い。床面はほぼ平坦で、全体に硬化している。特に、カマドの前面から南側中央に位置する梯子穴周辺にかけて、顕著な硬化面を検出した。壁溝は壁直下に全周する。

遺物はカマド付近及びその周辺を中心に、比較的多くの遺物を検出した。9点を図化した。1は土師器環である。ロクロ成形、回転糸切りの後、器面全面にナデを施す。しかし、外面及び底面のナデは粗いた

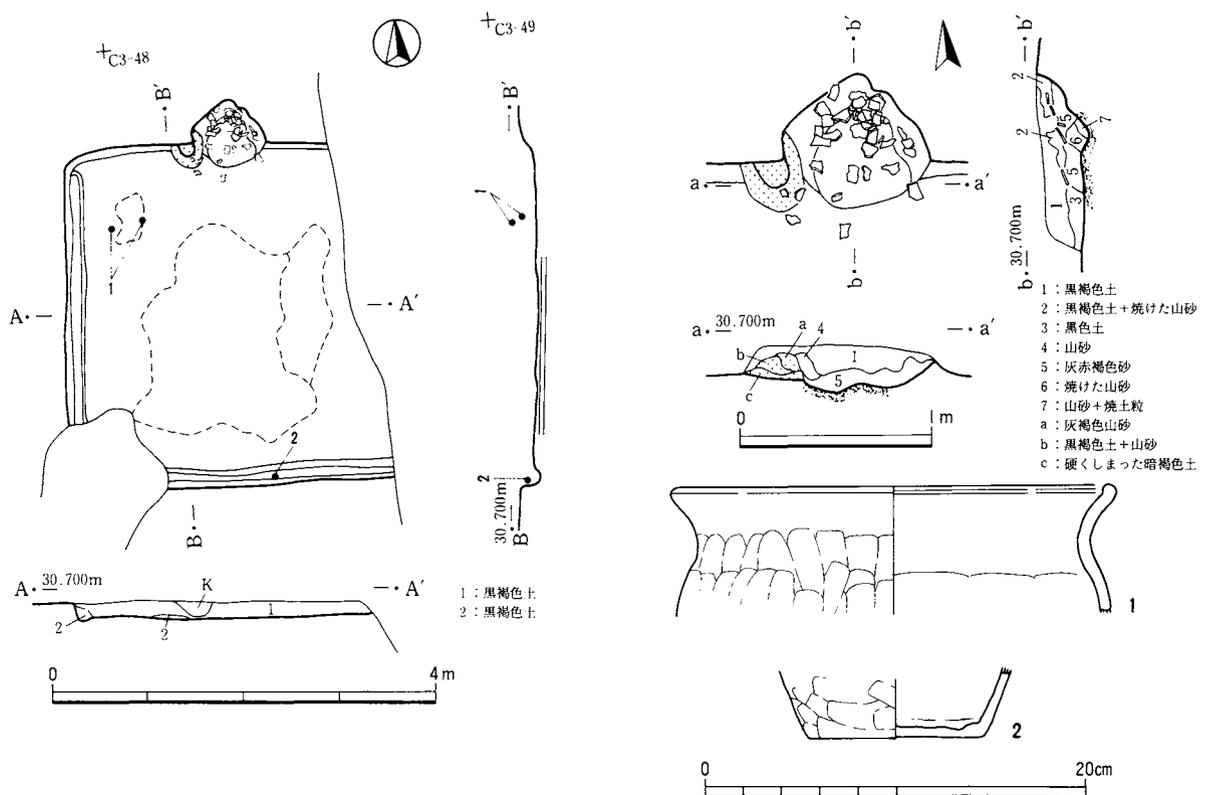


第53図 014号住居跡と出土遺物

め、ロクロ目や糸切り痕が残っている。2は土師器皿である。ロクロ成形の後、内面を中心にロクロナデを施し、回転糸切りによる切離しを行っている。3は灰釉陶器碗である。口縁部は外側につまみ上げられ、内面には釉の付着が認められる。色調は灰白色を呈する。4・7～9は須恵器甕である。いずれも還元不十分な焼成であり、色調は暗褐色～黒褐色を呈する。4は底部のみの破片である。底面にはヘラ削りが施されるが、わずかに凹み、中央部付近に回転糸切りの痕跡が観察できる。7は叩き成形後、内・外面に丁寧なナデを施し、外面の叩き目をほぼ完全に消している。8・9も叩き成形後にナデを施すが、叩き目の痕跡が観察できるものである。5はロクロ成形の土師器小型甕である。色調は明赤褐色を呈する。底面がやや凹むことから回転糸切りを行ったと考えられるが、その後何らかの調整で糸切り痕を消し、粘土があまり乾かないまま置いたため、台に付着し薄く剥落したように表面が粗れてしまっている。体部外面に横方向のヘラ削りを行った後、口縁部に横ナデを施す。内面には横方向のヘラナデが粗く施されているだけで、ロクロ目が残っている。6は土師器甕である。口縁部の作出は須恵器の甕と同一であるが、体部外面調整にヘラ削りを用いている。色調は暗褐色～黒褐色を呈する。

015号竪穴住居跡（第54図、第17・18・21表、図版12・24）

台地上の平坦面、調査区の東端C3-48グリッド付近に位置する。東壁側と南西隅を攪乱されている。平面形はほぼ方形を呈するものと思われる、カマドのある側を主軸とすると、N-3°-Wに主軸方位をとる。規模は主軸3.50m×遺存対向軸3.43m、遺存床面積8.87㎡、検出面から床面までの深さ10cm～20cmを測る。カマドは北壁中央付近に位置する。火床面及び左袖が検出されたのみで、遺存状況は悪い。火床面及び煙道部の上位には、天井構築材の中に土師器甕破片が混在して出土した。量的には比較的多いが、複数個体が含まれており、接合しないものが多い。床面はほぼ平坦で、部分的に硬化面が検出された。中央部分及



第54図 015号住居跡と出土遺物

び北西部分での硬化が顕著であるのに対し、中央東寄りの部分はやや硬度が劣る。硬化範囲の広がりから、梯子穴等の施設こそないものの、カマドと対向する南壁側に出入口の存在が想起できる。壁溝は南壁及び西壁直下には検出できたが、カマドのある北壁側には掘り込まれていない。

遺物は覆土中及びカマド内を中心に比較的多くを検出したが、いずれも小破片である。図化できたものは、土師器甕2点のみである。1は口縁部がゆるく外反し、口端部が内側に向かってわずかに肥厚する。器面調整は外面が縦方向のヘラ削り、内面が横方向のヘラナデの後、口縁部に横ナデを施す。2は底部のみの破片である。底面は未調整で、回転糸切り痕が観察される。

2 その他の遺構

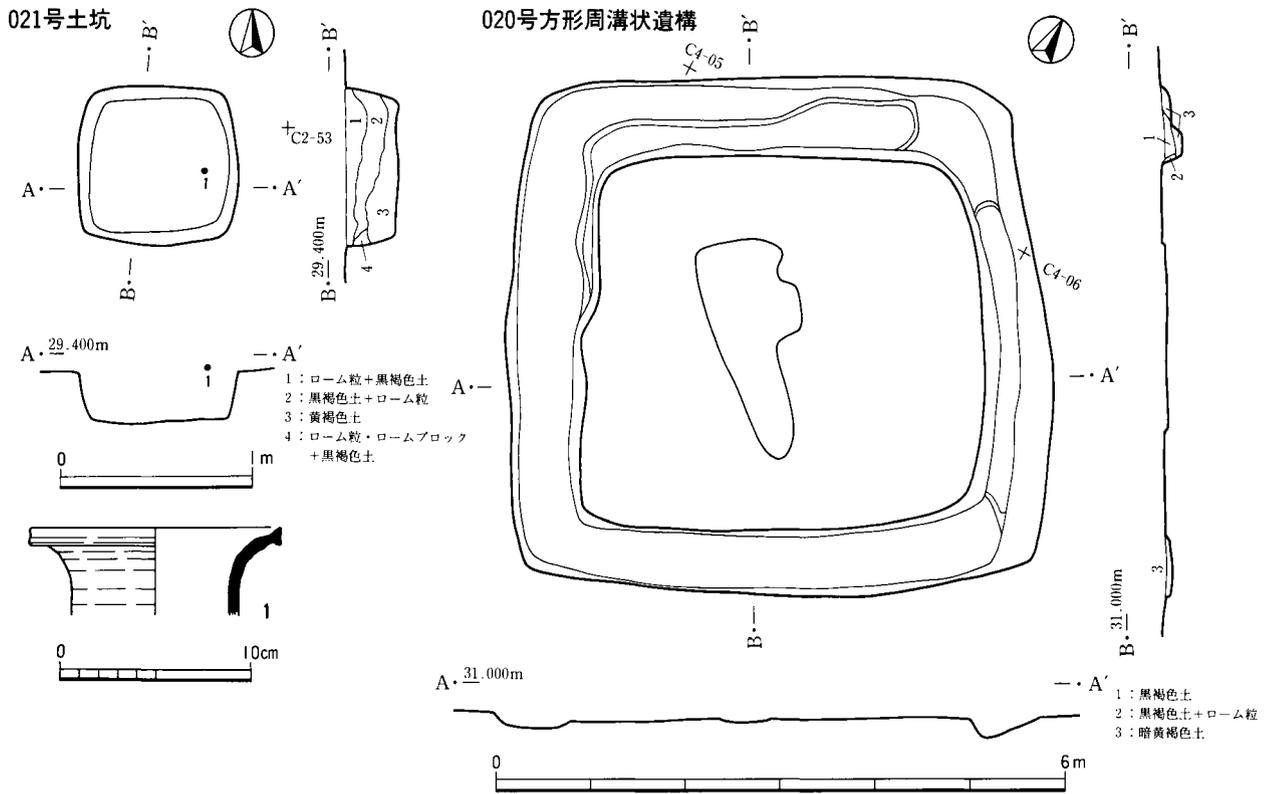
021号土坑 (第55図、第21表、図版12・24)

本土坑は、西側へ注ぐ小谷津に向かう緩斜面部、調査区の北東部C2-52グリッド付近に位置する。規模は一辺が0.85mを測る正方形を呈し、深さは約30cmである。覆土はローム粒の量によって分層されるものの、黒褐色土を中心に充填されている。遺物は、覆土上層から土師器及び須恵器片を十数点検出したにすぎない。遺構の性格については不明確な部分が多いが、このような状況はいわゆる有天井土坑と類似し、土坑墓の可能性を指摘できる。

遺物は1点のみが図化可能であった。1は須恵器甕の口縁部～頸部にかけての破片である。内・外面に自然釉が付着する。ロクロによる成形が行われ、肥厚する口端部は上方へつまみ上げられている。色調は灰色を呈し、胎土には白色及び黒色粒子を多く含む。

020号方形周溝状遺構 (第55図、図版12)

台地上の平坦面、調査区の南東端C4-05グリッド付近に位置する。平面形はやや胴の張る方形を呈し、主



第55図 021号土坑と出土遺物・020号方形周溝状遺構

軸方位はN-38°-Wをとる。規模は周溝外縁で主軸5.35m×対向軸5.72m、周溝内縁で主軸3.86m×対向軸4.20m、周溝の上面幅60cm～95cm、下面幅15cm～75cmを測る。周溝底面は凹凸が多く、北側2辺及び南西辺の一部では一段深く掘り込まれている。検出面からの深さは上段で2cm～10cm、下段で15cm～30cmを測る。周溝内側のほぼ中央に不整形の掘込みが検出された。位置的には埋葬施設の可能性も考えられるが、周囲との段差わずか1cm～5cmであり、詳細については不明な部分が多い。

周溝内から土器片が極めて少量出土した。すべて磨滅した小片で、本遺構の時期を示すものはない。

018号溝状遺構（第56図、図版13）

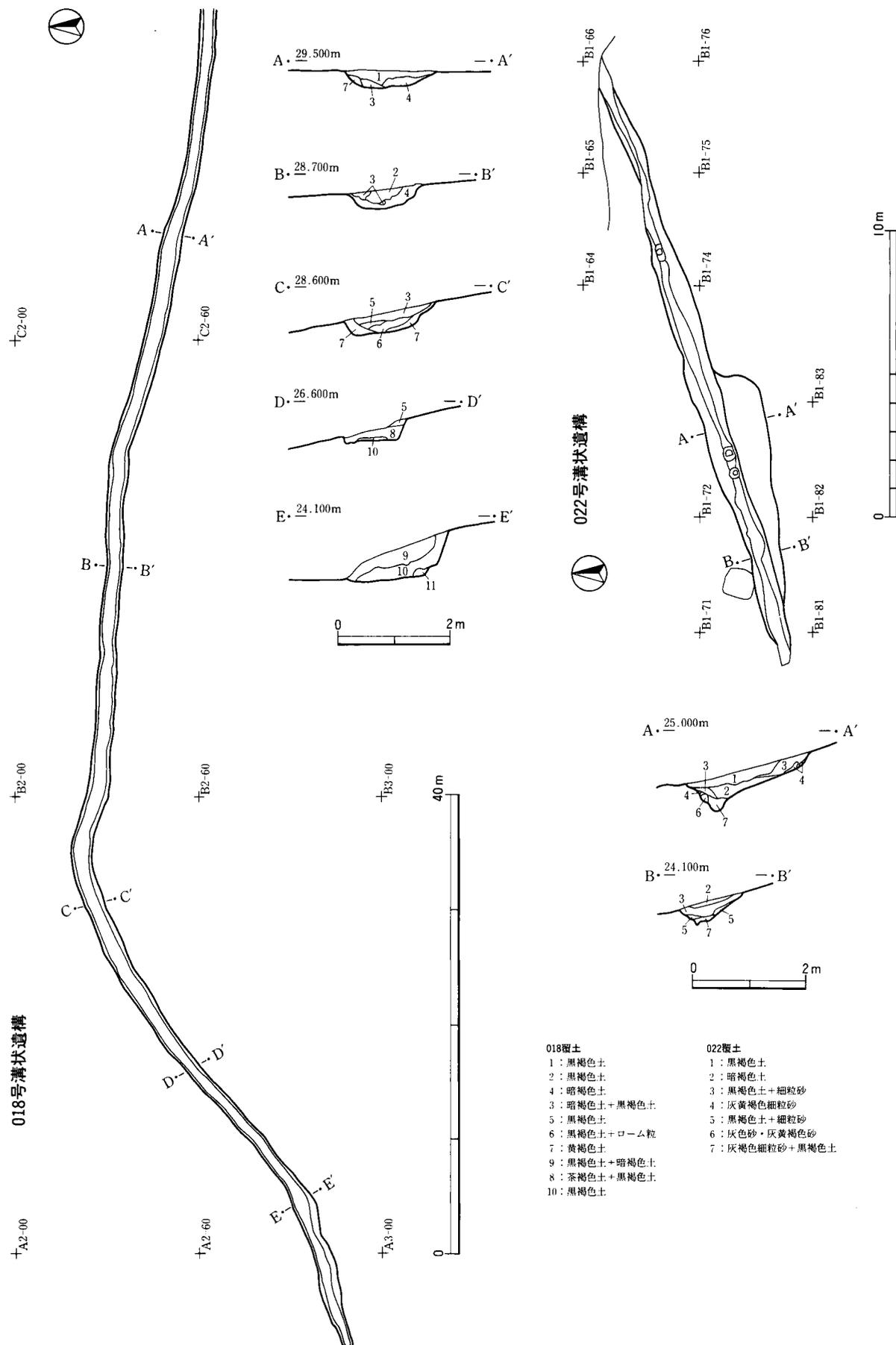
西から延びる小谷津の谷頭部に面した斜面中位から始まり、斜面にほぼ直交して東方向に台地上へと続く溝状遺構である。調査区Z2～C2グリッドを横断して調査区外へと延び、東側部分は第1次調査で061号址として調査・報告された溝状遺構に相当する。第4次調査の範囲では長さ122m、上面幅60cm～190cm、下面幅50cm～130cm、検出面からの深さ15cm～60cmを測る。溝底面はほぼ平坦で、北方向にやや傾斜している。

検出された全域から多量の土器片及び礫等が出土した。すべて覆土上層への流込みであり、本遺構構築以前のものと判断した。

022号溝状遺構（第56図、図版13）

西から延びる小谷津の谷頭部に面した斜面中位、調査区の北端B1グリッドから始まり、等高線にほぼ平行して、北東方向に調査区外へと続く溝状遺構である。検出できた範囲では長さ21.2m、上面幅40cm～230cm、下面幅10cm～40cm、検出面からの深さ6cm～75cmを測る。周溝底面は凹凸が多く、3か所でピットが検出された。底面からのピットの深さは10cm～20cmを測る。B1-71～73では、斜面上位側に当たる南壁が緩やかに立ち上がり、溝幅が膨らんでいる。覆土内及び溝底面には、酸化鉄の付着が部分的に認められた。これは、本遺構の埋没後、伏流した雨水等による影響と思われる。

検出された全域から少量の土器片が出土した。小片ではあるが、平安時代以降の陶器及び須恵器も多く含まれており、本遺構の時期を示す可能性が考えられる。



第56図 018号溝状遺構・022号溝状遺構

第18表 竪穴住居跡構造

遺構番号	時期	主軸方位	規模 (m)		床面積 (㎡)	カマド	貯蔵穴・深さ (cm)	主柱穴の深さ (cm)						梯子ビット	壁溝	備考	
			主軸×対向軸					P1	P2	P3	P4	P5	P6				
001号竪穴住居跡	古墳後期	N-75°E	4.36×4.66		<18.48>	東壁右寄り	カマド右・9	43	65	49	61			なし	一部あり	西壁一部欠	
002号竪穴住居跡	古墳後期	N-62°E	5.45×5.87		<30.62>	北東壁右寄り (煙道部のみ)	南東壁左寄り・81	72	54	50	41			なし	一部あり	焼失・北東隅欠 テラス状遺構2 (東隅・貯蔵穴周囲)	
003号竪穴住居跡	平安	N-21°W	2.72×2.67		5.27	北西壁中央	なし	なし						なし	全周	焼失 004号住居跡と重複	
004号竪穴住居跡	古墳後期	N-54°E	6.12×5.85		29.22	北東壁右寄り	カマド右・39	84	77	68	93			なし	全周	003号住居跡と重複	
005号竪穴住居跡	平安	N-103°W	3.10×3.18		8.38	西壁中央	北東隅・29	なし						東壁側	北隅・南隅欠	不明ビット1 (南東隅) 間仕切り溝 (東壁左寄り)	
006号竪穴住居跡	平安	N-3°W	3.01×3.47		<7.48>	北壁中央	なし	なし						南壁側	一部あり	焼失 007号住居跡と重複	
007号竪穴住居跡	古墳後期	N-46°E	6.52×6.50		35.92	北西壁中央	カマド右・58	77	78	63	66			南東壁側	全周	カマドの作替え (2回) 006号住居跡と重複	
008号竪穴住居跡	古墳後期	N-6°W	3.63×4.00		13.78	北壁中央	なし	なし						南壁側	なし	焼失	
009号竪穴住居跡	古墳後期	N-10°W	(3.65)×5.00		(10.67)	北壁左寄り	*南東隅・40	73	*40	*70	71			なし	一部あり	柱の建替え *は第2次調査時の計測値	
010号竪穴住居跡	弥生中期	N-5°W	<4.71×3.95>		<15.50>	なし	なし	109	70	37	78	42	59	なし	(なし)		
011号竪穴住居跡	古墳後期	N-47°E	3.71×2.72		(9.22)	北東壁右寄り	南東壁中央・35	なし						南西壁側	(なし)	南東壁側一部欠	
012号竪穴住居跡	平安	N-17°W	2.95×2.70		5.84	北壁中央	なし	なし						なし	全周	カマドの作替え	
013号竪穴住居跡	平安	N-2°W	2.55×2.45		4.51	北壁中央	なし	なし						南壁側	全周		
014号竪穴住居跡	平安	N-5°W	3.00×2.93		6.97	北壁中央	なし	なし						南壁側	全周		
015号竪穴住居跡	平安	N-3°W	3.50×(3.43)		(8.87)	北壁(中央)	(なし)	(なし)						(なし)	一部あり	東壁側・南西隅欠	
016号竪穴住居跡	古墳後期	N-89°E	5.55×(4.90)		(24.31)	東壁中央	(なし)		53	77	50	46		なし	一部あり	北壁側欠	

()は遺存値、<>は推定値

第19表 玉 類

挿図番号	図版番号	遺物番号	分類	遺存度	最大径 (mm)	最大孔径 (mm)	最小孔径 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	穿孔方向	成形	色調	備考
第40図5	24	003-0008	土製小玉	完形	11.3	2.5	1.2	10.0	1.1	両側	いびつ	黒色	スス付着
第42図11	24	007-0564	土製小玉	80%	6.8	1.2	0.9	(4.3)	(0.2)	不明	丁寧	黒褐色	小口面・側面：研磨 スス付着
第42図12	24	007-0563	土製小玉	完形	9.0	1.5	0.8	7.8	0.7	両側?	丁寧	黒褐色	スス付着
第42図13	24	007-0009	土製小玉	完形	10.4	2.4	1.3	8.8	1.0	片側	丁寧	黒色	スス付着
第42図14	24	007-0006	土製小玉	完形	22.3	9.1	4.4	15.9	7.3	片側	丁寧	にぶい橙	小口面：平滑 穿孔：いびつ
第42図15	24	007-0234	土製丸玉	40%	-	(8.5)	(4.4)	(20.6)	(7.5)	両側	いびつ	にぶい黄褐色	穿孔：ずれ
第42図16	24	007-0221	土製丸玉	40%	-	(7.0)	(4.9)	(30.2)	(11.6)	両側	丁寧	にぶい橙	孔内面：スス付着
第42図17	24	007-不明	土製丸玉	40%	-	(11.4)	(7.0)	(29.5)	(15.2)	両側	丁寧	にぶい黄褐色	穿孔：ずれ 器面：磨滅
第42図18	24	007-0237	土製丸玉	60%	(31.8)	(9.5)	(6.5)	(24.1)	(13.0)	両側	いびつ	にぶい黄褐色	穿孔：ずれ
第42図19	24	007-0210	土製丸玉	完形	30.5	10.8	4.4	24.3	21.5	片側	いびつ	にぶい黄褐色	
第42図20	24	007-0550	土製丸玉	完形	35.3	10.7	6.0	25.3	28.3	片側	いびつ	赤褐色	スス付着
第43図5	24	008-0010	石製紡輪	完形	37.0	7.0	6.2	13.4	26.9	片側	丁寧	灰色	側面：整形時工具痕 側面上位：面取り
第43図6	24	008-0018	ガラス小玉	完形	5.0	1.6	1.3	4.4	0.1		丁寧	青緑色	側面下位：気泡による割れ
第47図	24	B4-0001	石製勾玉	完形	22.7	13.4	2.3	6.4	2.9	片側	丁寧	緑黒色	

* ()は遺存値 -は計測不可能 空欄は該当項目なし

第20表 鉄 製 品

挿図番号	図版番号	遺物番号	分類	遺存度	全長(mm)	身 部 (mm)			茎 部 (mm)			重量 (g)	備考
						長	幅	厚	長	幅	厚		
第49図7	24	005-0034	刀子	茎部一部欠	(78.0)	(47.2)	(6.9)	(3.3)	(30.8)	(4.5)	(3.2)	(3.4)	
第49図8	24	005-0026	刀子	身部の一部	(45.9)	(45.9)	(8.0)	(3.2)	-	-	-	(3.2)	
挿図番号	図版番号	遺物番号	分類	遺存度	全長(mm)	頭 部 (mm)			足 部 (mm)			重量 (g)	備考
						長	幅	厚	長	幅	厚		
第49図9	24	005-0016	釘	完形	25.0	6.8	4.4	1.2	23.8	2.0	1.6	0.5	折頭釘

* ()は遺存値 -は計測不可能 空欄は該当項目なし

第21表 遺構出土土器

遺構番号 棟図番号	図版番号	器種	遺存度	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土/混人物	焼成	色調・外面		調整・外面 ・内面	備考
									・外面	・内面		
001号住居跡 38-1	22	土師器 高坏	脚部 70%	-	(5.2)	-	密/少+スコリア	良好	にぶい橙 にぶい橙	坏部・脚部：へう削り→ナデ 坏底部：ナデ 脚部：へう削り 体部～底部：へう削り 全面：磨き 口縁部：ナデ 体部～底部：へう削り へう削り→ナデ ナデ	内外面：赤彩の可能性 外面の一部・内面：赤彩 底部：黒斑・磨減 内外面：赤彩 外面：磨減・黒斑 底部内面：剥離 脆弱 二次焼成の可能性 内外面：赤彩・磨減	
002号住居跡 39-1 -2	22	土師器 环	完形 口縁部・体部 70% 底部 全	17.8 14.8	7.7 6.1	-	密/少 密/多	良好 良好	明赤褐色 明赤褐色 明赤褐色 明赤褐色	口縁部：ナデ 体部：へう削り→ナデ 口縁部～体部：ナデ 口縁部：ナデ 体下部～底部：回転へう削り ナデ 口縁部～体部：ナデ 体下半部～底部：手持ちへう削り ナデ	内面：スス状付着物 口縁部：ナデ 口縁部～体部：ナデ 体下半部～底部：手持ちへう削り ナデ 口縁部～体部：ナデ 体下半部～底部：手持ちへう削り ナデ	
003号住居跡 48-1 -2	22	土師器 环	完形 体部 50%	12.4	3.4	6.3	密/少	良好	にぶい橙 にぶい橙	口縁部：ナデ 体部：へう削り→ナデ 口縁部～体部：ナデ 口縁部：ナデ 体下部～底部：回転へう削り ナデ 口縁部～体部：ナデ 体下半部～底部：手持ちへう削り ナデ	内面：スス状付着物 口縁部：ナデ 口縁部～体部：ナデ 体下半部～底部：手持ちへう削り ナデ 口縁部～体部：ナデ 体下半部～底部：手持ちへう削り ナデ	
003号住居跡 -3	23	土師器 小型甕	完形 口縁部 80% 底部 全 胴部 70%	12.0	13.0	7.8	密/少	良好	黒褐色 黒褐色	口縁部～胴部：ナデ 胴下半部：へう削り ナデ	スス付着 口縁部～胴部：黒斑 底外面：縄目状瓦痕・赤変 二次焼成の可能性	
004号住居跡 40-1 -2	22	土師器 环	完形 口縁部 50% 底部 全 体部 70% 胴部 全	15.6	5.3	-	密/少	良好	暗褐色 暗褐色 橙	口縁部：ナデ 体部～底部：手持ちへう削り→ナデ ナデ 口縁部：ナデ 胴部：へう削り→ナデ 口縁部：ナデ 胴部：へう削り 口縁部：ナデ 胴部：へう削り→ナデ 口縁部：ナデ 胴部：へう削り→ナデ ナデ	外面：磨減 外面：黒斑・磨減 内外面：指頭痕 口縁部：へう削り工具による切込み	
004号住居跡 -3	22	土師器 甕	完形 口縁部 20% 胴部 全 胴部 20%	26.0	(14.0)	-	密/少	良好	橙 橙 黒褐色	口縁部：ナデ 体部～底部：へう削り→ナデ ナデ 口縁部：ナデ 胴部：へう削り→ナデ 口縁部：ナデ 胴部：へう削り→ナデ 口縁部：ナデ 胴部：へう削り→ナデ ナデ	外面：磨減 外面：黒斑・磨減 内外面：指頭痕 口縁部：へう削り工具による切込み	
004号住居跡 -4	23	手捏	完形 口縁部 80%	3.6	3.8	-	密/少	良好	褐色 褐色	口縁部：ナデ 体部～底部：へう削り→ナデ ナデ 口縁部：ナデ 胴部：へう削り→ナデ 口縁部：ナデ 胴部：へう削り→ナデ 口縁部：ナデ 胴部：へう削り→ナデ ナデ	外面：磨減 外面：黒斑・磨減 内外面：指頭痕 口縁部：へう削り工具による切込み	
005号住居跡 49-1 -2	23	土師器 环	完形 口縁部 50% 底部 30% 体部 60%	14.6 13.0	3.9 4.5	6.2	密/少+スコリア 密/少	良好 良好	明赤褐色 明赤褐色 明赤褐色 灰白色	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り→ナデ 底部：ナデ へう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	
005号住居跡 -3	23	土師器 甕	完形 口縁部 10% 底部 全 胴部 10%	14.0	(10.2)	(11.0)	密/少	良好	灰白色 灰白色 褐色 褐色	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	
006号住居跡 50-1 -2	23	土師器 环	完形 口縁部 40% 体部 10% 底部 全 体部 10%	13.6	(3.3)	-	密/少	良好	暗褐色 暗褐色 暗褐色 暗褐色 緑灰色 暗緑灰色	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	
006号住居跡 -3	23	土師器 环	完形 口縁部 60% 体部 60% 底部 全	14.0	3.9	6.5	密/少	良好	灰白色 灰白色 黒褐色 黒褐色	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	
006号住居跡 -4	23	土師器 甕	完形 口縁部 20% 胴部 20% 胴部 10%	(22.8)	(4.7)	-	密/少	良好	灰白色 灰白色 黒褐色 暗褐色	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	
006号住居跡 -5	23	土師器 甕	完形 口縁部 20% 胴部 10% 胴部 20% 底部 80%	(15.0)	(13.5)	-	密/少	良好	灰白色 灰白色 黒褐色 暗褐色	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	
006号住居跡 -6	23	土師器 甕	完形 口縁部 20% 胴部 10% 胴部 20% 底部 80%	-	9.0	(5.0)	密/少	良好	暗褐色 暗褐色	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ 口縁部：ナデ 体下部：手持ちへう削り ナデ	

遺構番号	図版番号	器種	遺存度	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土/混入物	焼成	色調・外面・内面	調整・外面・内面	備考	
012号住居跡 神田番号 51-5 -6 -7 -8 -9 -10		須恵器 甕	胴部 20% 底部 10%	-	(7.3)	(15.0)	密/少	良好	明赤褐色	胴部：へら削り→ナデ 底部：手持ちへら削り へらナデ 底部穿孔面：へら削り 胴部～底部：手持ちへら削り ナデ	底部：スス状付着物	
		土師器 甕	胴部 20% 底部 全	-	(5.0)	7.8	密/少	良好	明赤褐色	胴部～底部：手持ちへら削り ナデ	底部：静止糸切り	
		土師器 甕	胴部 10% 底部 30%	-	(1.7)	7.4	密/少	良好	明赤褐色	胴部～底部：手持ちへら削り ナデ		
		土師器 皿	胴部 10% 底部 全	-	(1.9)	5.5	密/多	良好	明赤褐色	体部：ナデ 体下部～底部：手持ちへら削り ナデ		
		須恵器 甕	胴部 20% 底部 全	(23.6)	(11.8)	-	密/少	良好	赤灰色	口縁部：ナデ 胴部：叩き→ナデ ナデ	内面上段：指頭痕列 内面下段：あて具痕列 内面：あて具痕 内外面：ヒビ 二次焼成の可能性	
		須恵器 甕	胴部 10%	(22.8)	(7.8)	-	密/少	良好	橙	口縁部：ナデ 胴部：叩き ナデ		
		須恵器 甕	胴部・底部 20%	-	(9.1)	(13.8)	密/少	良好	赤褐色	胴部：へら削り 底部：手持ちへら削り ナデ	内面：輪郭痕 内外面：スス状付着物	
		土師器 杯	口縁部・体部 50% 底部 全	(12.2)	5.0	5.8	密/少	良好	にぶい橙	ナデ	口縁部：へら削り 胴部：手持ちへら削り ナデ	口縁部：スス状付着物
		土師器 皿	底部 70%	-	(2.4)	6.8	密/少	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	口縁部：スス状付着物
		灰釉陶器 碗	口縁部 20% 体部 10%	(12.6)	(3.2)	-	密/少	良好	灰白色	ナデ	ナデ	口縁部：スス状付着物
013号住居跡 52-1 014号住居跡 53-1 -2 -3 -4 -5 -6 -7 -8 -9		須恵器 甕	胴部 10% 底部 全	-	(4.6)	9.8	密/少	良好	明赤褐色	胴部：ナデ 胴下部～底部：手持ちへら削り ナデ	口縁部：スス状付着物	
		土師器 小型甕	口縁部 70% 胴部 80% 底部 全	11.4	12.3	7.8	密/少	良好	明赤褐色	口縁部：ナデ 胴部：手持ちへら削り ナデ	口縁部：スス状付着物	
		土師器 甕	胴部 70% 口縁部 40%	20.6	(22.5)	-	密/少	良好	明赤褐色	口縁部：ナデ 胴部：手持ちへら削り ナデ	口縁部：スス状付着物	
		須恵器 甕	胴部 20% 口縁部 40%	(20.1)	(14.0)	-	密/少	良好	黒褐色	口縁部：ナデ 胴上部：叩き→ナデ ナデ	口縁部：スス状付着物	
		須恵器 甕	胴部 40% 胴部 20%	(21.4)	(14.1)	-	密/少	良好	暗褐色	口縁部：ナデ 胴上部：叩き→ナデ 胴下部：手持ちへら削り→ナデ 口縁部：ナデ 胴部：ナデ	口縁部：スス状付着物	
		須恵器 甕	口縁部 40% 胴部 40%	(21.4)	(20.7)	-	密/少	良好	暗褐色	口縁部：ナデ 胴上部：叩き→ナデ ナデ	口縁部：スス状付着物	
		土師器 甕	胴部 20% 胴部 10%	(23.2)	(6.6)	-	密/少	良好	にぶい黄褐色	口縁部：ナデ 胴部：へら削り→ナデ 胴部：ナデ 胴部：へらナデ	口縁部：スス状付着物	
		土師器 甕	胴部 10% 底部 80%	-	(3.5)	(9.0)	密/少	良好	にぶい黄褐色	胴部：手持ちへら削り ナデ	口縁部：スス状付着物	
		土師器 杯	口縁部・体部 30% 底部 10%	(13.6)	(3.5)	-	密/少	良好	褐色	口縁部：ナデ 体部：へら削り ナデ	口縁部：スス状付着物	
015号住居跡 54-1 -2 016号住居跡 46-1 017号跡 -1 021号土坑 55-1		須恵器 甕	胴部 10% 底部 20%	-	(22.7)	-	密/少	良好	明赤褐色	口縁部：ナデ 胴部：へら削り ナデ	口縁部：スス状付着物	
		須恵器 甕	胴部 10% 底部 20%	(13.0)	(4.5)	-	密/少	良好	明赤褐色	口縁部：ナデ 胴部：へら削り ナデ	口縁部：スス状付着物	
		須恵器 甕	口縁部・胴部 20%	-	-	-	密/少	良好	灰色+黒灰色	口縁部：ナデ 胴部：へら削り ナデ	口縁部：スス状付着物	

* < > は推定値 () は遺存度 空欄は該当項目なし

第3章 高沢古墳群

第1節 概要 (第57図)

当初は、8基の古墳を想定して調査を行ったが、そのうちの2基は近世塚、2基は現代の土盛りであることが明らかとなった。4基は古墳時代後期～終末期の円墳で、豊富な副葬品をもつものもあり注目される内容であった。また、出土土器から奈良時代に追葬を行っている可能性を窺わせている。その他の遺構としては、方形周溝状遺構1基、土坑1基、溝状遺構2状（うち1条は土塁を伴う）を検出した。また、調査範囲全体から縄文時代遺物を少量検出した。

第2節 遺構と遺物

1 古墳

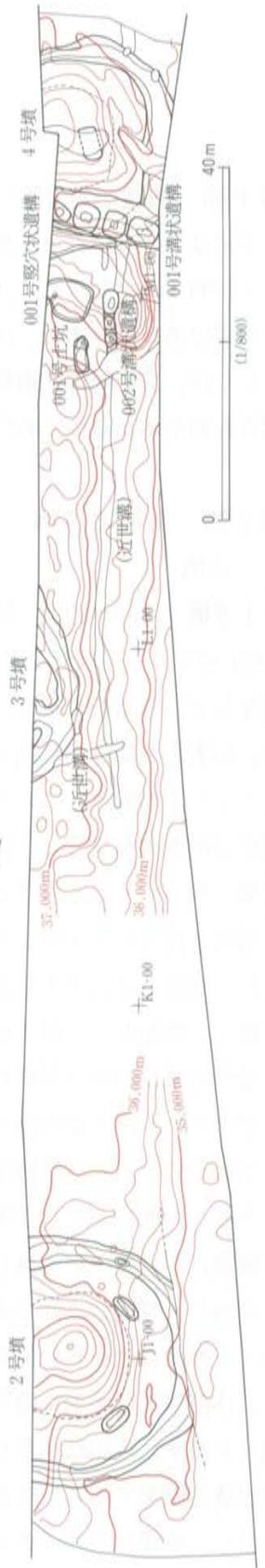
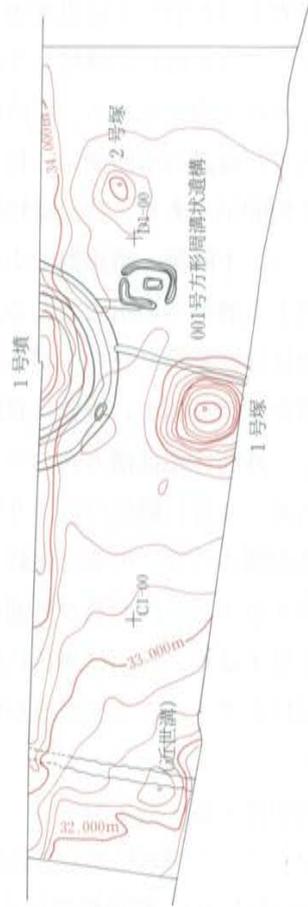
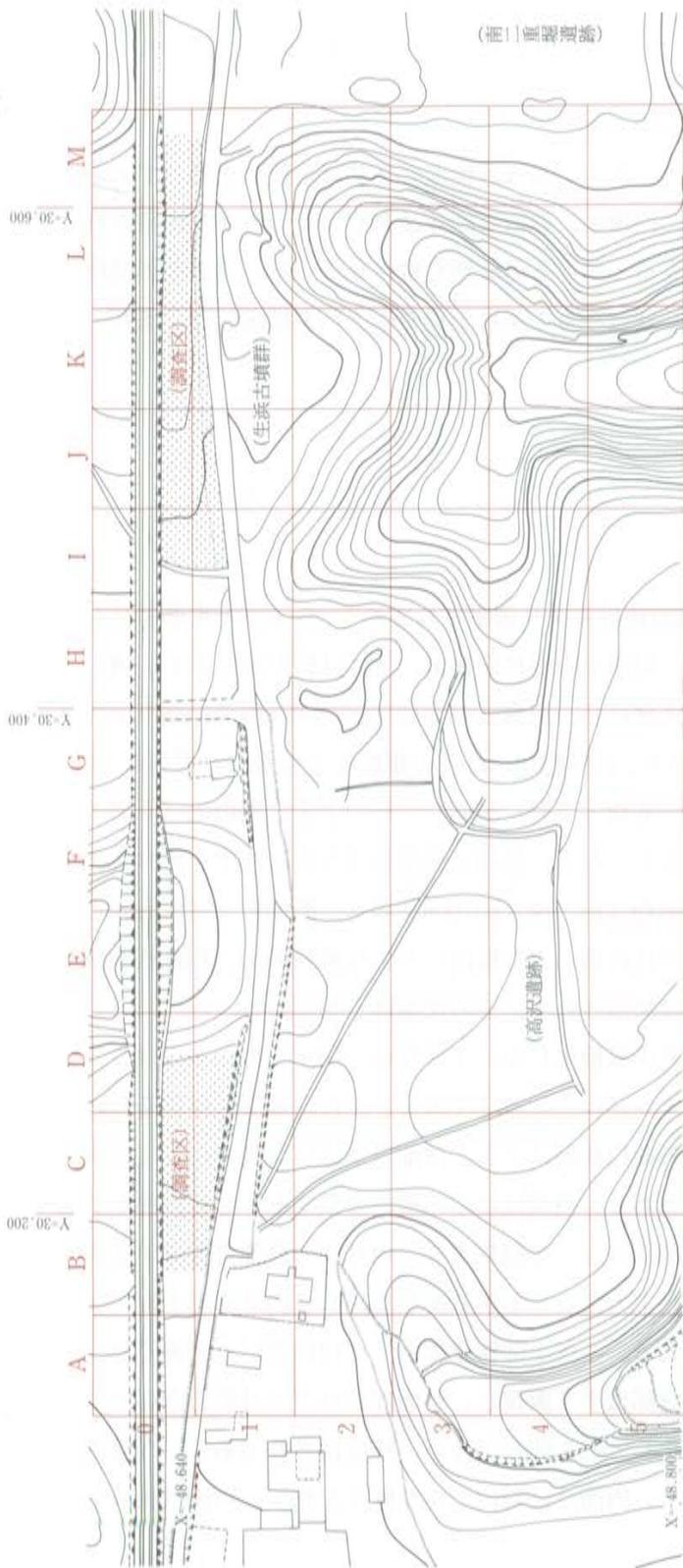
1号墳 (第58～59図、図版25・26)

C0-97グリッド付近に位置する円墳である。北側は鉄道建設により削平されており、ちょうど南側半分が残存している状況であり、主体部は検出されなかった。周溝の内径は約16m、外径は約23mである。墳丘は、旧表土を50cm程度削り出すことにより裾部をテラス状にし、旧表土の上に70cm～80cm程度の盛り土を行うことで形成されていた。墳丘上はほぼ平坦に構築され、直径約10mほどの規模をもつものと思われる。墳丘の断面図を見ると、旧表土（8層）上に黒褐色土（6層・7層）があり、その上方に褐色土（3層・4層）やハードロームブロック（5層）が堆積していることから、最初に裾部の削り出した土を盛り、次に周溝を掘った土を盛ったものと考えられる。周溝は幅約3m、深さ約70cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。周溝の南西側から長形状の掘込みを検出した。長軸約90cm、短軸約30cmを測り、底面からの深さは約60cmである。特に遺物等は検出されず、その性格は不明である。

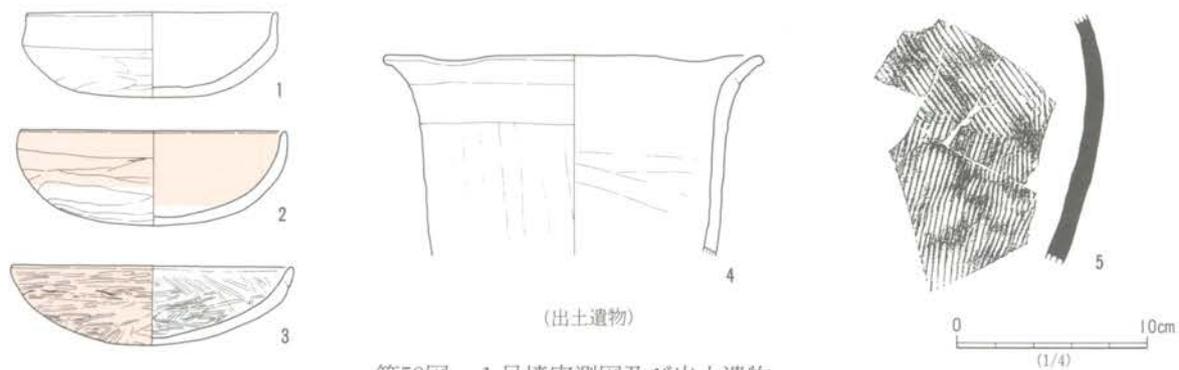
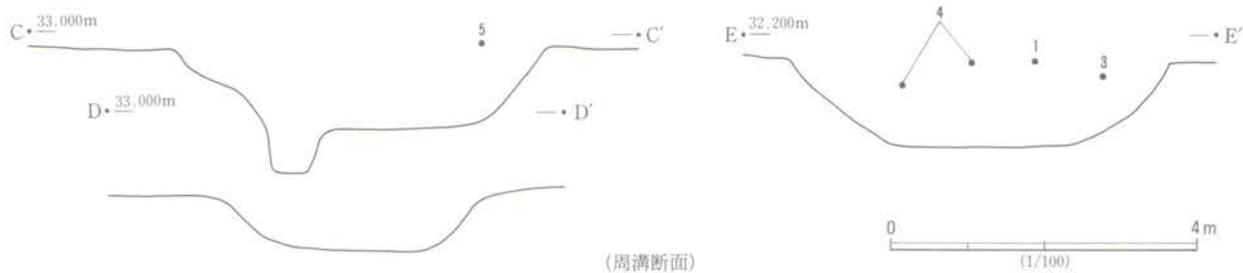
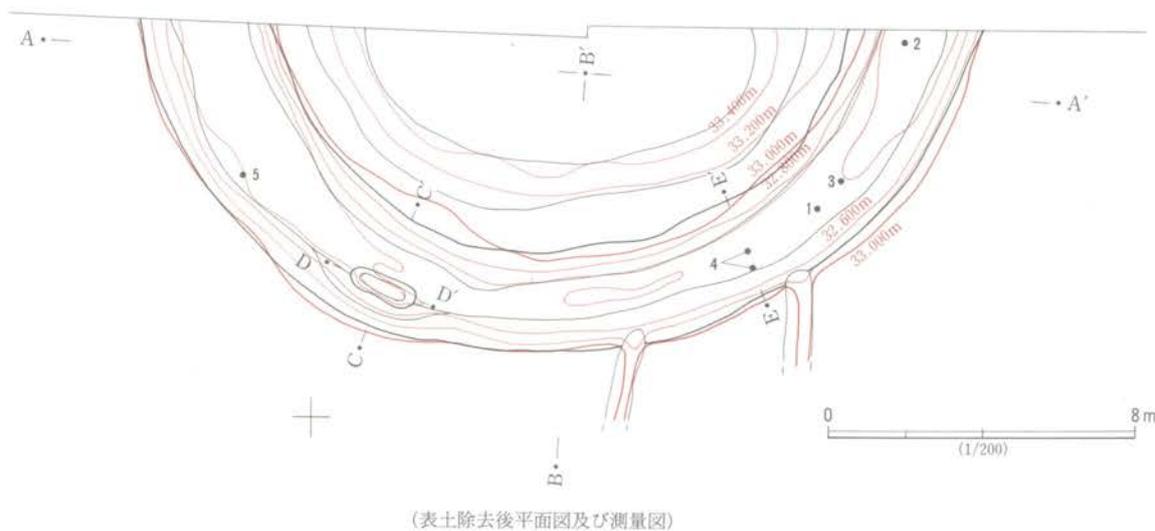
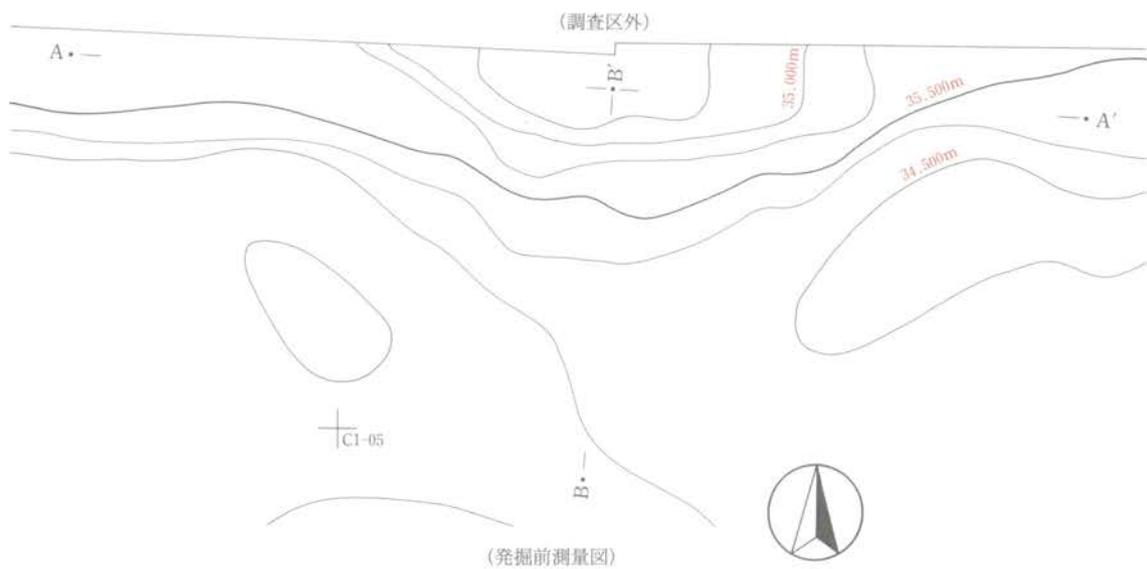
遺物は墳丘内及び周溝から、土師器・須恵器の小片を少量検出したにすぎない。図示し得たものは、5点でありいずれも周溝内覆土上層からの出土である。1～3は土師器坏である。1は口縁部と体部を分ける明確な稜をもち、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。外面口縁部はナデ、体部以下はヘラ削りによって調整する。内面はかなり丁寧なナデを施す。焼成は良好であり、色調はにぶい橙色を呈する。2は内面から口縁部にかけてナデを施し、外面体部は横方向のヘラ削りによって調整する。内外面の底部付近を除き赤彩を施し、焼成は良好である。3は口縁部付近よりやや上方に立ち上がる器形を呈し、内外面にミガキを施す。外面には赤彩の痕跡が認められ、焼成は良好である。4は土師器甕である。口縁部付近で強く外反し、体部以下は寸胴な器形を呈する。内面及び外面口縁部はナデ調整し、外面体部以下には縦方向のヘラ削りを施す。色調は褐色を呈するが、外面は黒色に変化している部分が多い。焼成は良好である。5は須恵器甕の胴部である。外面はタタキによる成形痕が残り、内面には斜位のヘラ削りを施す。色調は黄灰色を呈し、焼成は良好である。

2号墳 (第60～63図、図版27・28・35・37)

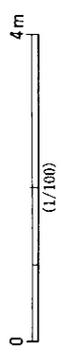
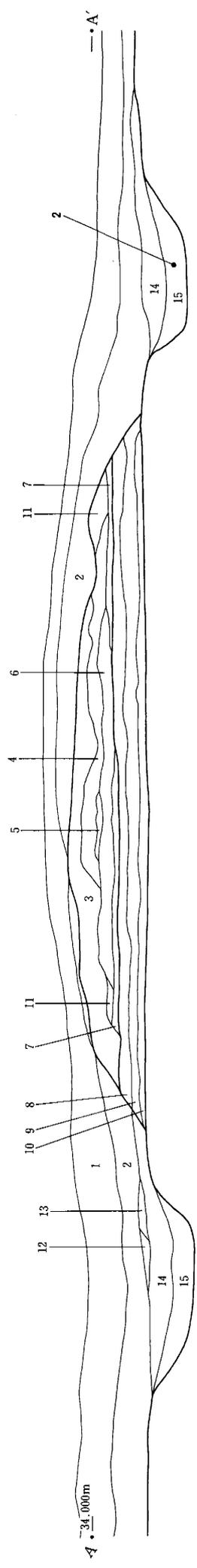
I0-77グリッドからJ1-02グリッド付近にかけて位置する円墳である。南半の墳丘裾部から木棺直葬の主体部を2基検出した。北側の約1/3は、鉄道建設により削平されていた。また、周溝の南端部も近世以降の



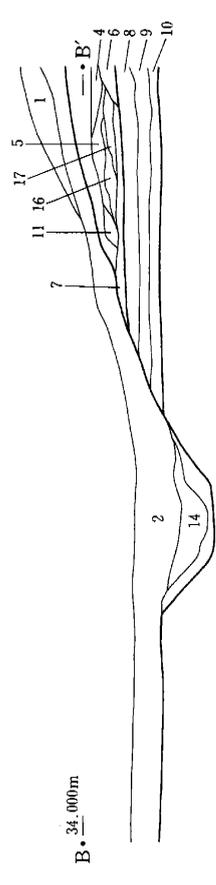
第57図 高沢古墳群周辺地形及び遺構配置



第58図 1号墳実測図及び出土遺物



- 1. 鉄道建設時の盛土
- 2. 表土
- 3. 褐色土 ローム粒を少量含む。
- 4. 褐色土 ローム粒をやや多く含む。
- 5. A・D・D・D7 叩か 褐色土を多量に含む。
- 6. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 7. 原褐色土 ローム粒を少量含む。
- 8. 黒褐色土 非常に固くしまっている。旧表土。II a層。
- 9. 原褐色土 暗褐色土粒を斑状に含む。II b層。
- 10. 暗褐色土 ソフトロームとの漸移層。II c層
- 11. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む
- 12. 暗褐色粘質土
- 13. 青灰色砂
- 14. 暗褐色土 暗褐色土粒を少量含む。
- 15. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
- 16. 暗褐色土 ソフトローム土を少量含む。
- 17. 暗褐色土 ソフトローム土をやや多く含む。



B・34.000m

第59図 1号墳墳丘断面図

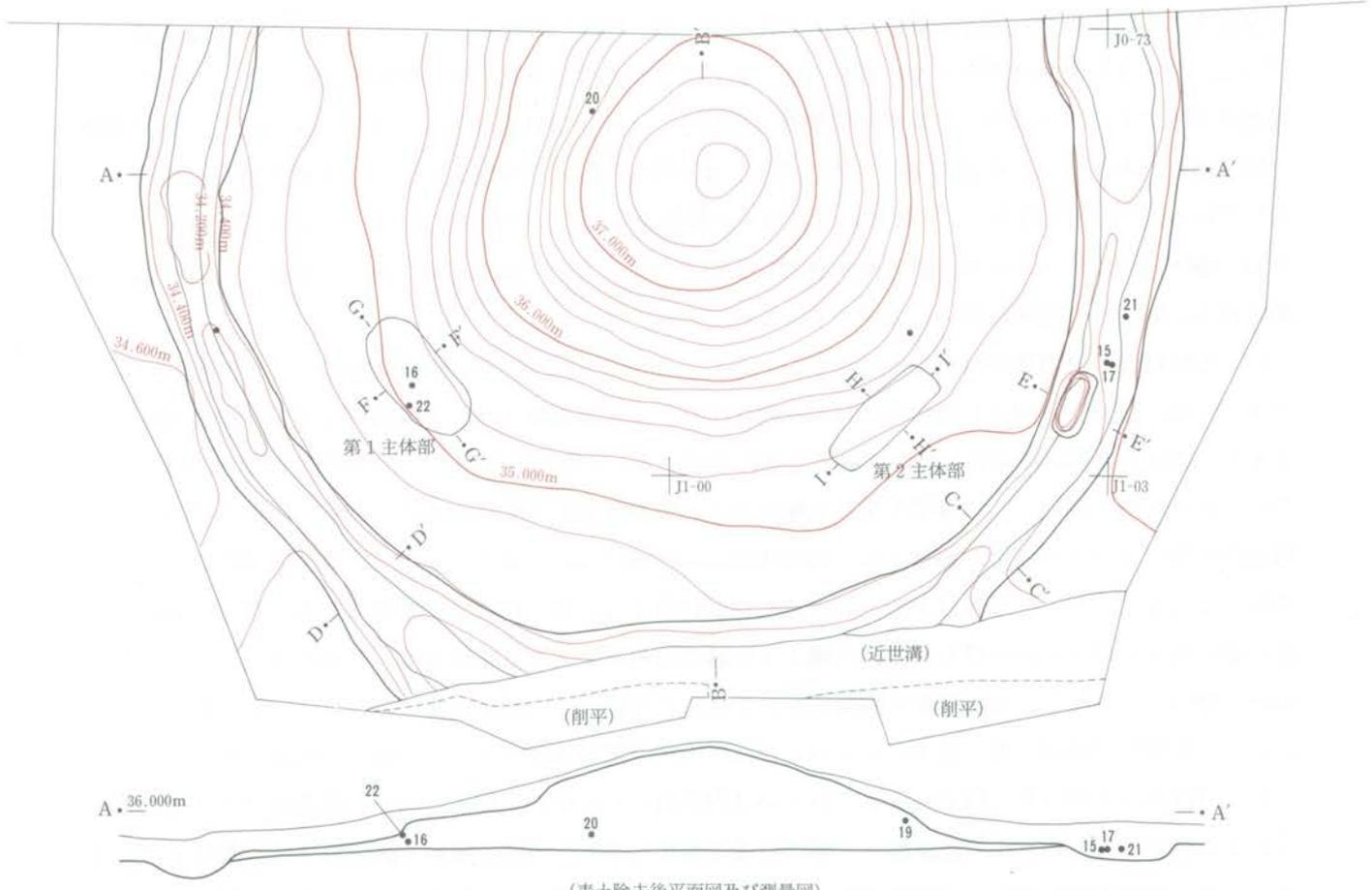
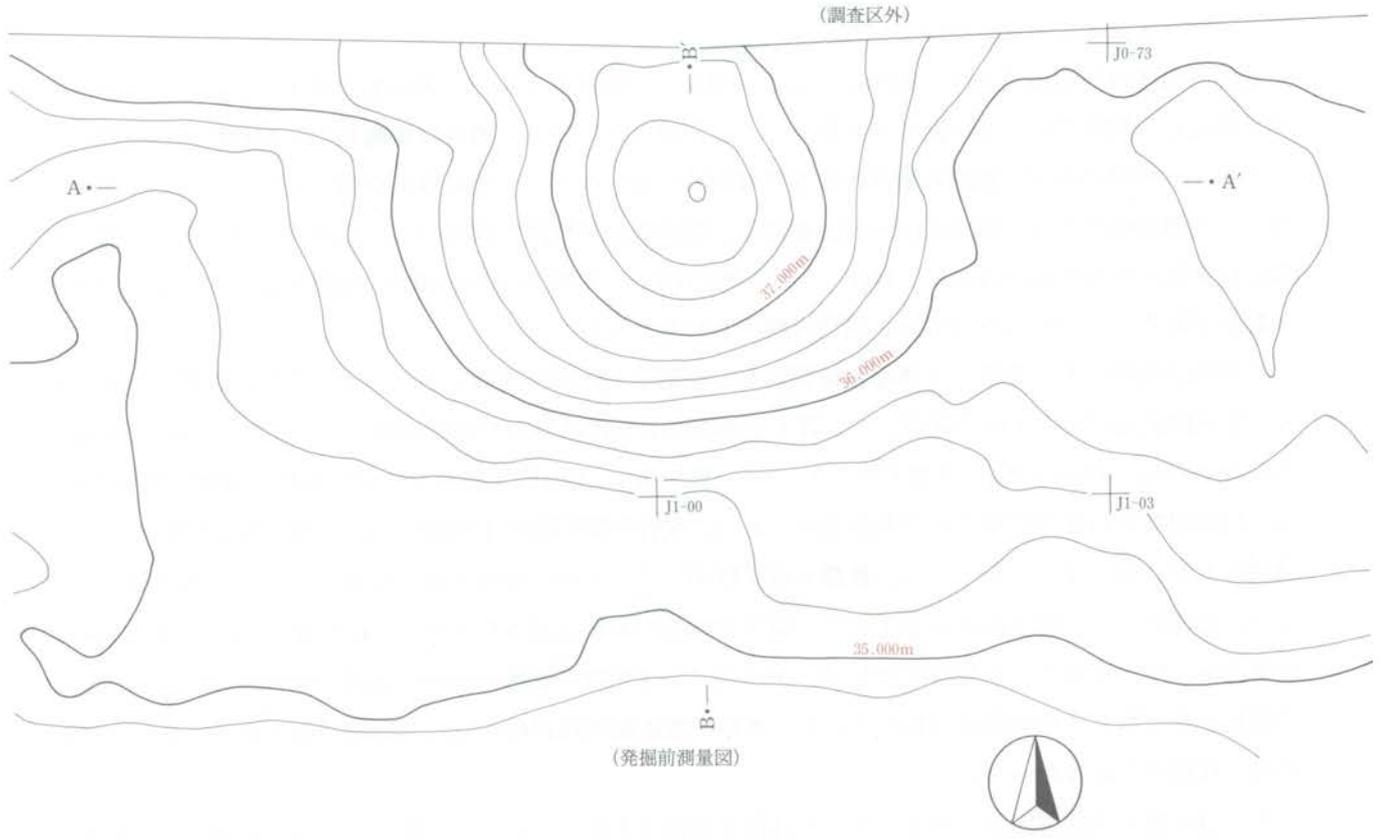
溝や地形改変による攪乱を受けていた。

周溝の内径は約23m、外径は約29mである。墳丘は、旧表土を30cm～40cm削り出すことにより裾部をテラス状にし、頂部で約2mの盛り土を行うことで形成されていた。墳丘は黒褐色土と明褐色土が互層になっており、周溝の掘削と裾部の削り出しをほぼ同時に行いながら、その排土を盛っていったものと考えられる。周溝は幅約3m、深さ30cm～40cmを測る。断面形は半楕円形状を呈し、底面はほぼ平坦である。周溝の南東部に長方形の掘込みを検出した。長軸約180cm、短軸約70cmを測り、周溝底面からの深さは30cm～40cmである。この掘込みの中から遺物は検出されなかった。

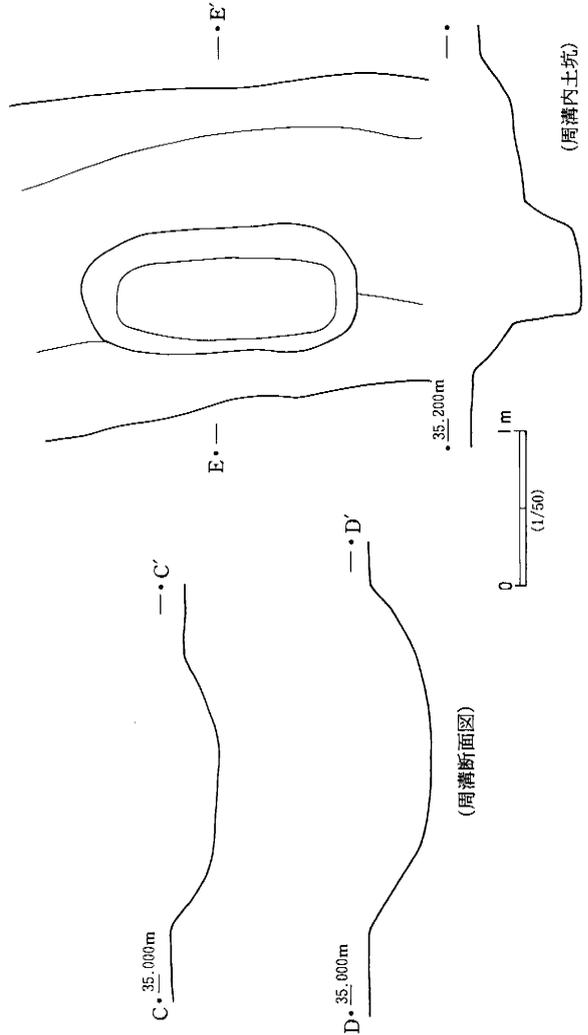
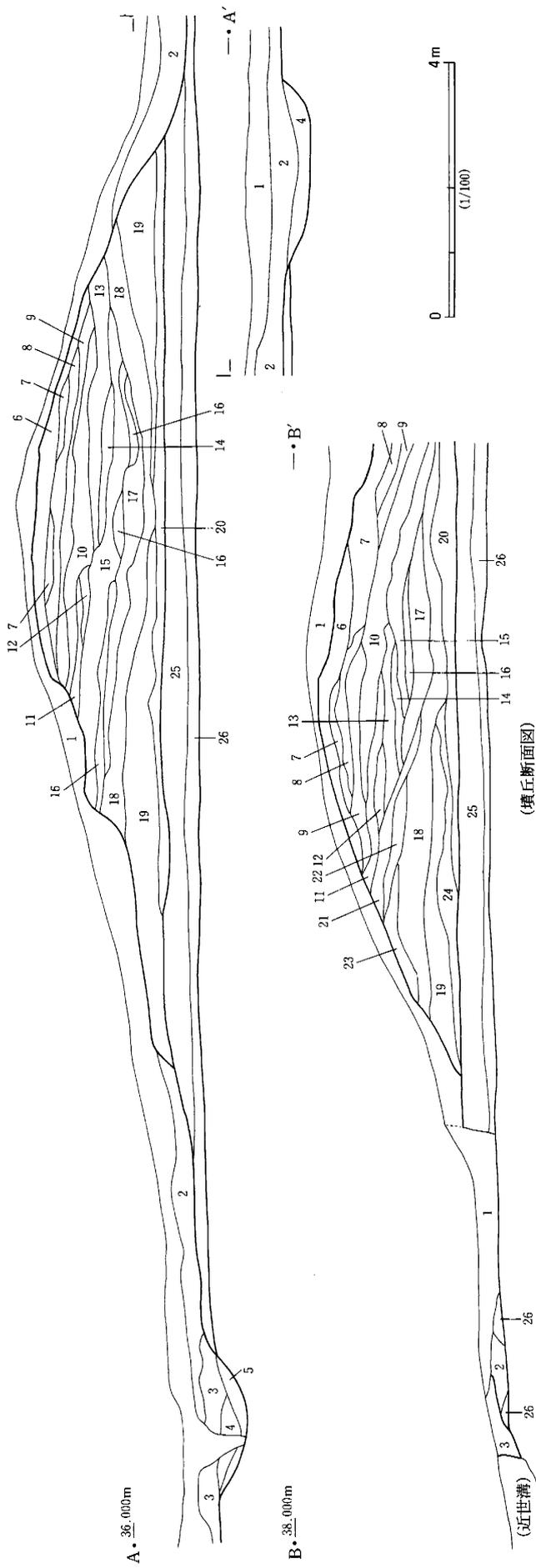
主体部は西側のものを第1主体部、東側のものを第2主体部と呼称した。いずれも木棺直葬の土坑であり、盛土除去後の旧表土面で確認した。第1主体部の土坑はゆがんだ長楕円形を呈し、長軸3.6m、短軸1.7m、深さ25cm～40cmを測る。主軸方位はN-53°-Wを指す。第61図1層及び2層が木棺の範囲と推定され、両小口部付近には灰白色粘土の分布が認められた。木棺の埋置範囲は長軸2.5m、短軸0.5mと推定される。遺物として、短刀1口、刀子2点、鉄鏃8点を検出した。木棺の中央部から北側にかけての西側側面に沿って、底面近くの2層上面から出土した。第2主体部の土坑は長方形を呈し、長軸3.5m、短軸1.3m、深さ30cm～35cmを測る。主軸方位はN-40°-Eを指す。木棺推定範囲の両小口部及び東側面部付近には、灰白色粘土が3層と4層の間に分布していた。木棺の埋置範囲は長軸2.3m、短軸0.5mと推定される。遺物の出土は認められなかった。

1～11は第1主体部内から出土した。1は鋒を欠損する短刀である。平棟、平造りで両側にほぼ直角に切り込まれる関をもつ。茎尻は錆のために明確でないが、角状と観察される。刀身の一部に木質が遺存している。2・3は両側に関をもつ小形の刀子である。2は鋒及び茎の大半を欠損している上、錆もひどく詳細は不明である。3は茎に木質が一部遺存している。4～11は鉄鏃である。4～7・10・11は棘篋被鏃（長頸鏃）であり、4～6は両関長三角形式、7は片関片刃箭式に分類される。いずれも篋被の先端を欠損している。7の刃部は長く、篋被長とほぼ同一の長さを有する。10・11は茎の一部の遺存である。4～7と同一個体の可能性もあるが、接合せず詳細は不明である。8・9は無茎鏃であり、腸挟長三角形式に分類される。いずれも腸挟は弱いものである。

12～22は墳丘及び周溝内から出土したものである。図示したもののほかに須恵器片11点、土師器片114点が出土した。復元し、図示し得たものは須恵器坏1点、須恵器提瓶1点、土師器坏7点、土師器高坏2点である。12は須恵器坏である。かなり扁平な丸底を呈する。受部は張り出し、その先端は尖り気味になる。立ち上がりは短く内傾し、口唇部も尖り気味に作る。外面底部から受部にかけて回転ヘラ削りを施し、口縁部内外面はヨコナデにより調整する。内面体部から底部にかけてはナデを施す。外面底部付近に1条の線刻による窯印を有し、受部以下の全面に自然釉が付着する。13～19は土師器坏である。13は口縁部と体部の間に丸みを帯びる弱い稜をもち、内傾する口縁部の先端は尖り気味になる。外面体部以下はヘラ削りの後、軽いナデを施す。口縁部から内面にかけてはナデを施し、内面にはまばらな縦方向のミガキが加えられる。赤彩を内外面全面に施す。14・18・19は半円状の深い体部をもつ。口縁部と体部の間に弱い稜をもち、口縁部の先端は丸く納められる。14・18は内外面ともに赤彩を施す。14は口縁部はヨコナデの後にミガキを施す。外面体部から底部はヘラ削りの後に雑なミガキ、内面体部から底部はナデの後にミガキを施す。18・19は体部外面をヘラ削りの後、ナデを施す。体部内面には丁寧なナデを施す。口縁部はヨコナデし、外面にミガキを施す。15～17は口縁部と体部の境に明確な稜をもち、口縁部が内傾し、丸底を呈す

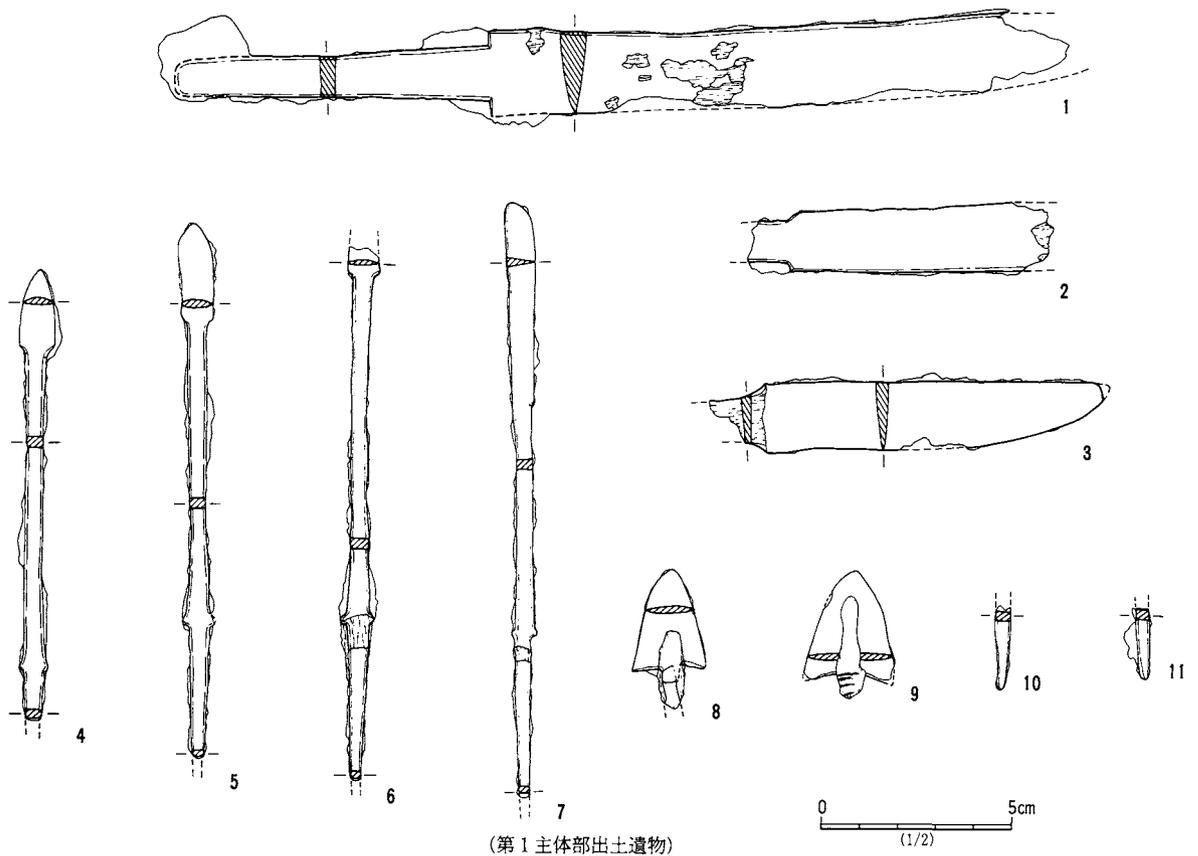
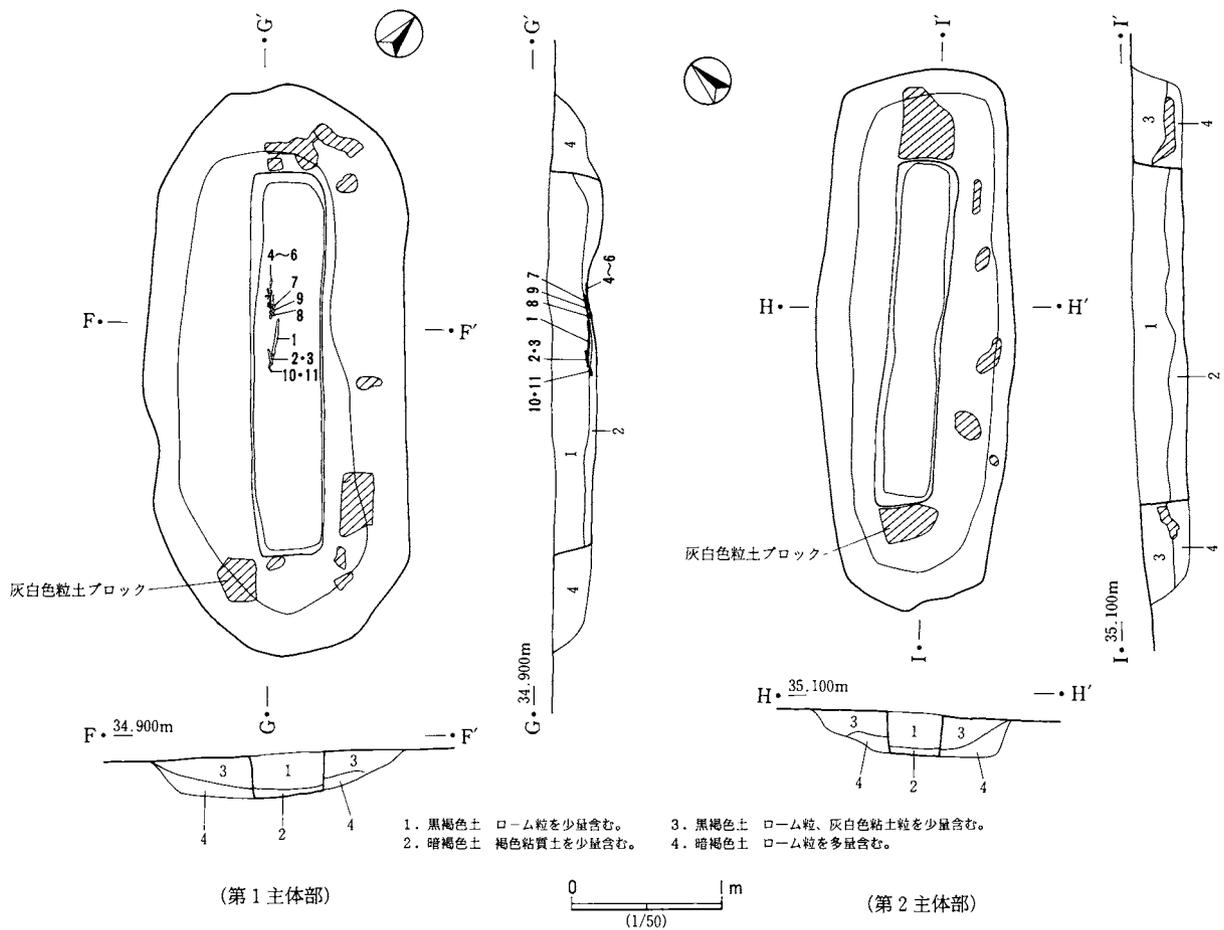


第60図 2号墳実測図



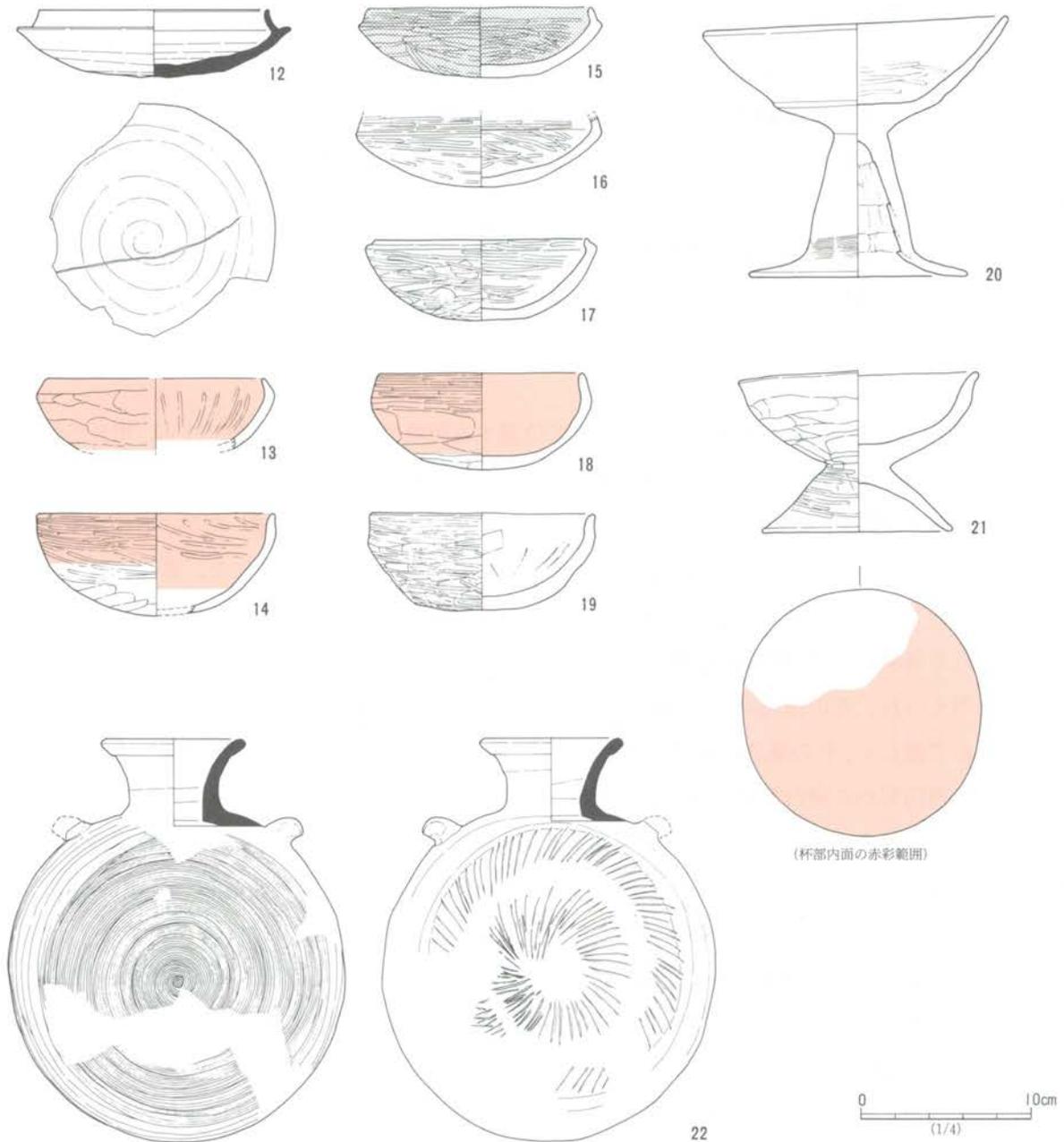
1. 灰土・礫層 しまり悪い。
2. 黒褐色土 ローム粒を多量含む。
3. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
4. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
5. 黒褐色土 ローム粒をやや多く含む。
6. 明褐色土 細粒でしまり悪く、ローム粒を少量含む。
7. 黒褐色土 しまり悪く、ローム粒を少量含む。
8. 明褐色土 ロームプロックを主体とし、黒褐色土を少量含む。
9. 暗褐色土 ソフトローム土を多く含む。
10. 明褐色土 ロームプロックを主体とし、黒褐色土を少量含む。
11. 黒褐色土 ロームプロックを少量含む。
12. 明褐色土 ロームプロック(小)及びローム粒子を少量含む。
13. 黒色土 ロームプロック(小)及びローム粒子を少量含む。
14. 明褐色土 ロームプロック(小)及びローム粒子を主体とし、黒褐色土を少量含む。
15. 黒色土 ロームプロック(小)及びローム粒子を少量含む。
16. 明褐色土 ロームプロック(小)及びローム粒子を主体とし、黒褐色土を少量含む。
17. 黒褐色土 ソフトローム土をラミナ状に含む。
18. 黒色土 ロームプロックをラミナ状に含む。
19. 暗褐色土 しまりよく、ソフトローム土を多く含む。
20. 黒褐色土 ロームプロック(小)を多く含む、硬くひきしまっている。
21. 明褐色土 ロームプロックを主体とし、黒褐色土を少量含む。
22. 明褐色土 ロームプロック(本・小)を多く含む。
23. 明褐色土 ソフトローム土を主体とし、暗褐色土を少量含む。
24. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
25. 黒褐色土 旧表土層 (IIa層)。
26. 暗真褐色土 ソフトローム層との漸移層 (IIc層)。

第61図 2号墳墳丘断面図及び周溝断面図



第62図 2号墳主体部及び出土遺物

る。いわゆる須恵器坏身模倣坏である。15・16は扁平な形態をなし、口縁部が明確に立ち上がる。15・16は内外面ともにミガキを施す。15はさらに黒色処理を施す。16は口縁先端部を欠損し、体部外面の荒れが激しい。17は口縁部が短く内傾し、浅い凹線がめぐる。内外面ともにミガキを施すが、外面体部のものは雑であり、ヘラ削りの痕跡を顕著に残す。20・21は土師器高坏である。20の坏部は下位に稜を有し、そこから直線的に大きく開く形態を呈する。脚部は高く、中空で内面下部には明確な輪積み痕が見られる。脚



第63図 2号墳出土遺物

部はあまり開かないまま移行し、裾部で大きく開く様相を呈する。坏部の内面はナデの後に粗いミガキ、外面はヨコナデを施す。なお、口縁部は内外面ともヨコナデを施す。脚部外面はナデ、内面は上部がナデ、中間部が縦方向の粗いナデ、下半部が輪済み痕を消さない程度のナデをそれぞれ施す。裾部は内外面ともヨコナデが行われている。色調は明赤褐色を呈するが、赤彩などは認められない。ここに図示した土器の中では唯一古相を示すものである。21の坏部は深い丸底を呈し、口縁部と体部の境にわずかな稜を形成する。わずかに開く口縁部の先端は、丸く納められる。脚部は低く、大きく開きながら移行する。坏部の口縁部外面はヨコナデ、体部外面は横方向のヘラ削りの後にナデ、内面全体は丁寧なナデが施される。脚部の内面はナデ、外面は縦方向のヘラ削りの後に雑なミガキが行われる。裾部は内面がナデ、外面がヨコナデで調整される。坏部は内外面とも、約2/3に赤彩の痕跡が認められる。器面が多少荒れているため、その詳細は不明確である。22は須恵器提瓶である。実測図表面側がやや膨らむ形態を呈する。側面部の肩付近に、形骸化した把手が2か所取り付けられる。体部外面の実測図表面側は、全体に左回りのカキ目を施し、側面はカキ目の上にヘラナデを加える。裏面側はロクロヘラ削り後ヘラ描文を施し、帯状のナデを中心部から外側に向かって加えるため、渦巻状にヘラ描文が磨り消されている。口縁部から頸部にかけては内外面ともヨコナデで調整するが、頸部内面の下部はヘラ削りが残る。実測図裏面側全体に自然釉が付着する。色調は灰色を呈し、胎土に白色砂粒（直径1mm～5mm）を少量含んでいる。

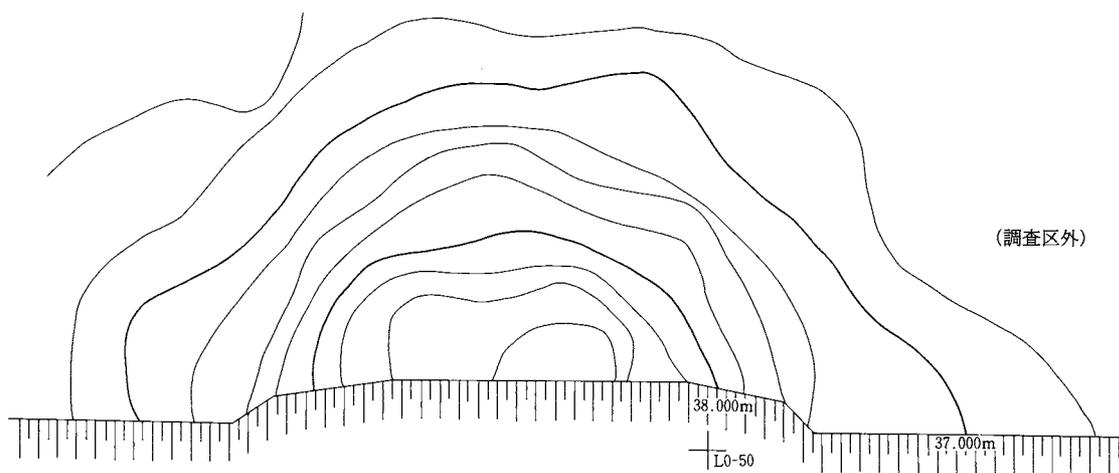
3号墳（第64～72図、図版29・30・36～43）

I0-77グリッドからJ1-02グリッド付近にかけて位置する円墳である。調査範囲内では、墳丘の痕跡はわずかに見出しせるにすぎなかったが、北側の線路を越えた調査範囲外の地区からは良好な墳丘を確認することができた。調査の結果、範囲内からは周溝の南側約1/4と主体部の一部を確認したが、墳丘は盛土の大部分が削平され、ちょうど墳丘の中央部が鉄道により削平されていたことが判明した。また、検出された主体部は軟質砂岩ブロックが散乱するなど完全に破壊されており、その範囲も推定とせざるを得なかった。

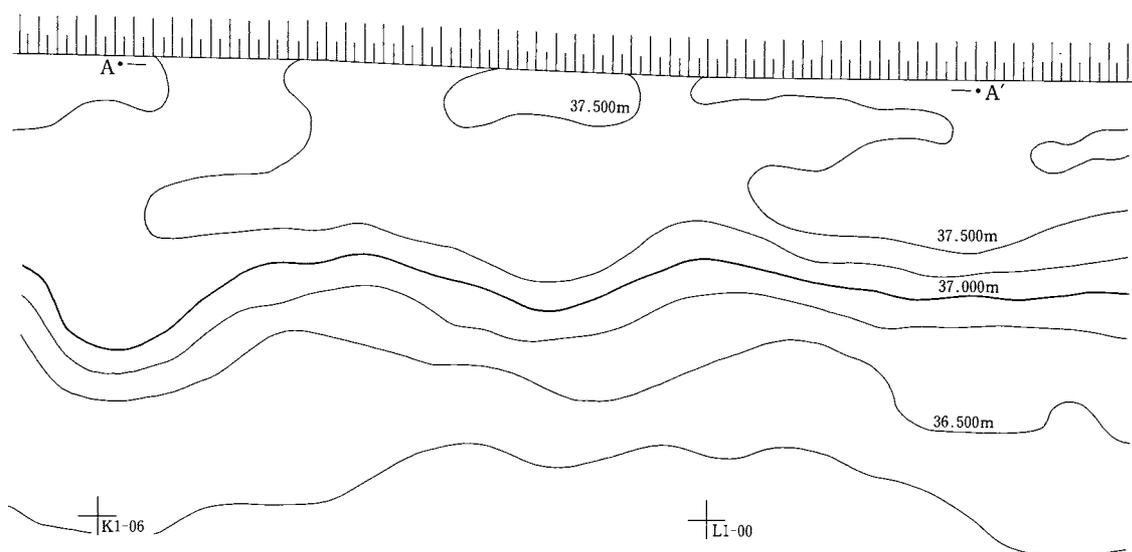
推定される周溝の内径は約24m、外径は約30mである。調査範囲外墳丘の南端（K0-59グリッド付近）が墳頂部と考えられ、その標高は約38.8mである。墳丘は断面図（第65図）を見てもわかるように、後世の攪乱が極めて激しく、その築造の様子を窺うことはできない。周溝は幅約3m、深さ約70cm～100cmを測る。断面形は半楕円形から逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。主体部は南向きに開口する横穴式石室であったと考えられる。散乱する軟質砂岩ブロックによって石室が構築されていたと思われるが、その規模や形態は不明である。周溝の掘込みからの深さは約70cmであると推定される。

遺物は前庭部周辺を中心として検出された。以下、種別に記載する。

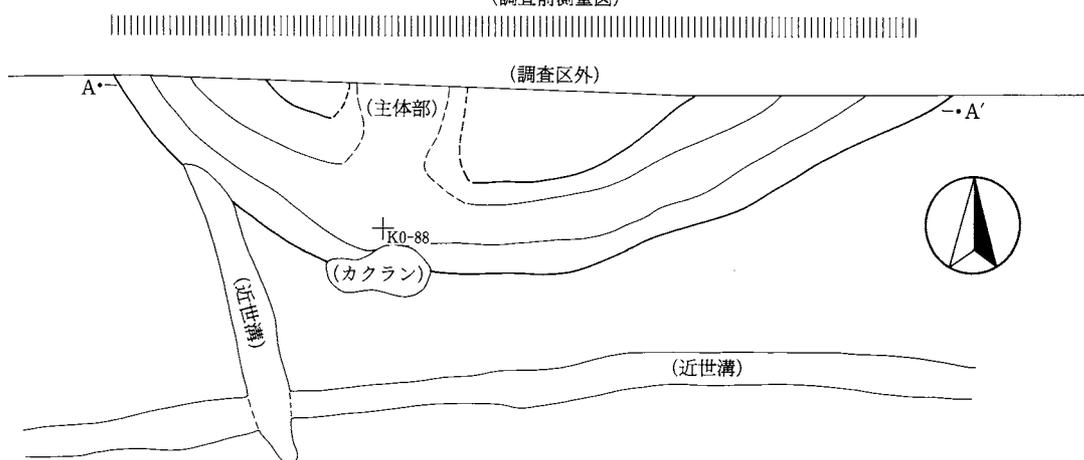
1～17は土師器及び須恵器である。出土状況は1・3・12及び6～11がそれぞれ主体部付近からまとめて、15は旧表土直上から、2・4・5・13・16は攪乱された墳丘内及び表土から、14・17は周溝覆土上層及び表土から検出された。5は土師器坏である。球面状の底部形態をなし、口縁部と体部の間に稜を有し、口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。器壁も薄く、全体的に小ぶりな作りである。体部外面には不定方向のヘラ削り、内面はナデが施される。口縁部は内外面ともにヨコナデが施される1・2・6・8・10は須恵器蓋である。1・2については天井部から口縁部にかけて半球状の丸さを持ち、天井部と口縁部の境が明確でない。また、天井部には窯印と考えられる一条の線刻が施されている。2は外面に自然釉が付着し、口唇部が丸く納められ、口縁部内面に1条の凹線が施される。6・8・10は宝珠形のつまみを取り付けられるものである。いずれもロクロ整形し、天井部に回転ヘラ削りを施す。8・10にはやや緑



(線路-JR外房線)

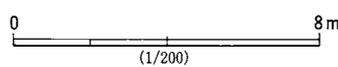


(調査前測量図)



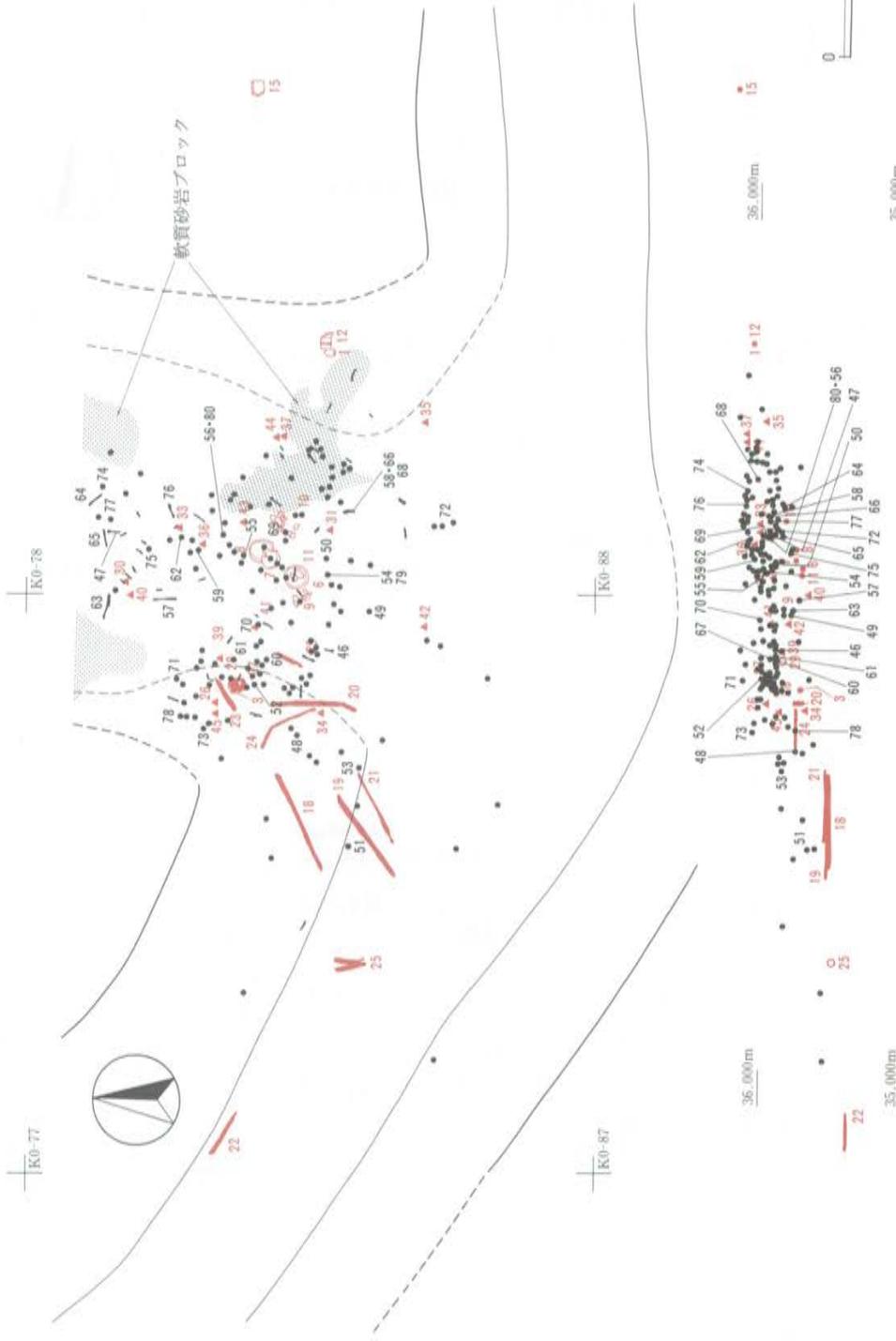
(調査後平面図)

第64図 3号墳実測図



A・37.500m

→・A'



36.000m

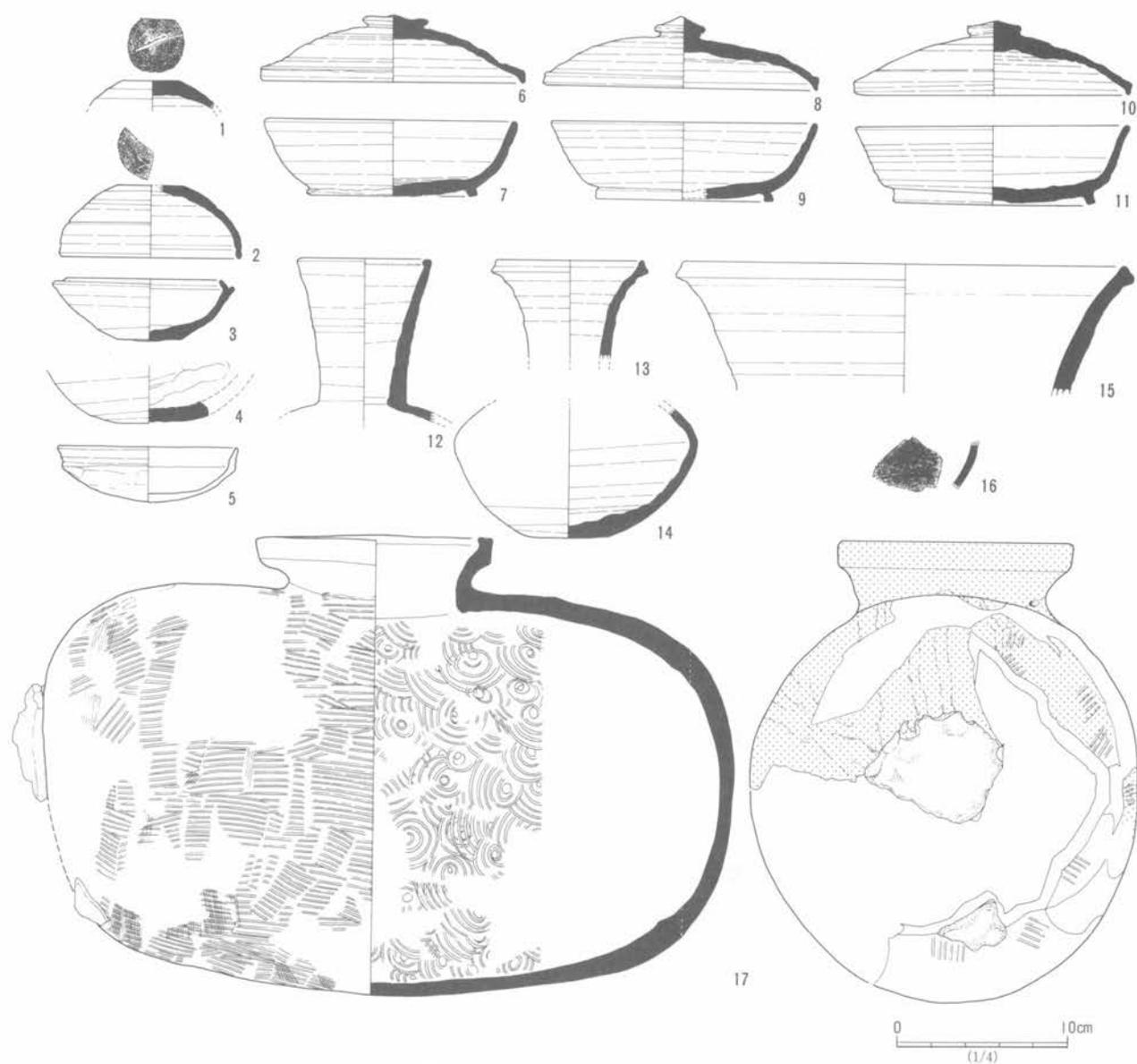
36.000m

35.000m

35.000m

第65図 3号墳丘断面図及び主体部遺物出土状況

色がかった自然釉が付着する。3・7・9・11は須恵器坏である。3は口径が9.1cmと小形の坏で、口縁部の立上がりが短く内傾して終わるものである。体部はやや丸みをもつが、底部は完全に平底をなす。底部及び体部下には回転ヘラ削りが施される。口縁部付近はヨコナデで調整される。7・9・11は高台が付くものである。7・9は体部にやや丸みをもち、底部には回転ヘラ削りが施される。11は箱形の器形を呈し、体部下及び底部に回転ヘラ削りを施し、高台内面にはナデを加える。12~14は須恵器長頸壺である。12は口頸部のみの残存である。わずかに反りながら立ち上がり、口唇部内面側が細く肥厚する。口頸部中央には2条の平行凹線が描かれる。13・14は同一個体である。口頸部(13)は大きく外反しながら立ち上がり、口唇部上端はつまみ上げられるように納められる。内面に自然釉が顕著に付着する。体底部(14)は形がやや張るものの、全体に丸みを帯びた器形を呈し、底部及び体部下には回転ヘラ削りが施される。内底面及び肩より上部には自然釉が顕著に付着する。15は須恵器甕の口頸部である。長く開きながら立ち上がり、口唇部上端はつまみ上げられるように納められる。17は須恵器横瓶である。正面形は隅丸長方形、側面形は円形を呈する。口頸部は中央部付近に取り付けられ、頸部は短い。口縁部との境に明確な稜を有



第66図 3号墳出土遺物(1)

し、口縁部は角状に納められる。体部全面にタタキ目が残し、実測図左側面から裏面にかけて自然釉が顕著に付着する。また、実測図左側面に砂の混じった土が付着していることから、この面を下にして焼成したものと考えられる。4は須恵器の底部であるが、内面がひどく焼き膨れを起こしているため、その器種は不明である。外面には回転ヘラ削りが施され、自然釉が付着している。16は小さな列点状の刺突が施される須恵器の一部である。器種の詳細は不明であるが、隼の一部とも考えられる。

以下に記す鉄製品、銅製品、石製品などは、特記したものを除き、いずれも前庭部付近から出土したものである。

18から28は直刀及び関連鉄製品である。18～25はいずれも平棟・平造りの直刀である。18は全長75.8cmを測り、鋒はふくらを有し、棟側に関をもつ。19は全長69.7cmを測り、鋒はややふくらを有し、両側に関をもつ細身のものである。20は茎部先端を欠損する。鋒はわずかにふくらを有しているが、カマス鋒に近い形をなす。関は刃側に有する。21は全長54.4cmを測り、茎部と刀部の一部に木質が残存する。刀身は鋒に近づくとつれ、わずかに細くなっていく。鋒はふくらを有し、両側に関をもつ。22は鋒を欠損しているものの、全長は40cm程度と推測され、短刀とした方がよいかもしれない。関は両側にもつ。23は刀身の下部を欠損する。鋒はふくらを有する。24は刀身の鋒部側を欠損する。茎部は長目で、木質が残存している。関は刃部側に有する。25は刀身部が破損した状態であり、鋒・茎部ともに欠損している。26は鞆尻金具と考えられる。幅3.0cm、厚さ0.2cmの鉄板を卵形に丸めて作られている。両端は閉じられておらず、筒抜けである。側面から鉄板の接合部が確認でき、叩きしめられたものと思われる。内面には木質の付着が認められる。27・28は鐺である。重なって出土したが、どの直刀と関連するものかは不明である。いずれもいわゆる宝珠形を呈するが、窓は開いていない。

29・30は刀子である。29は茎の先端部を欠損しているが、全長23cmを越える大型品であり、短刀の可能性もある。平棟・平造りで、鋒はふくらを有し、関を棟側にもつ。30は関付近に縁金具の一部及び木質が残存している。茎の先端部を欠損しているが、茎の大きさに比して刀身が小さいことから、何度も研いで使い込んだものと考えられる。

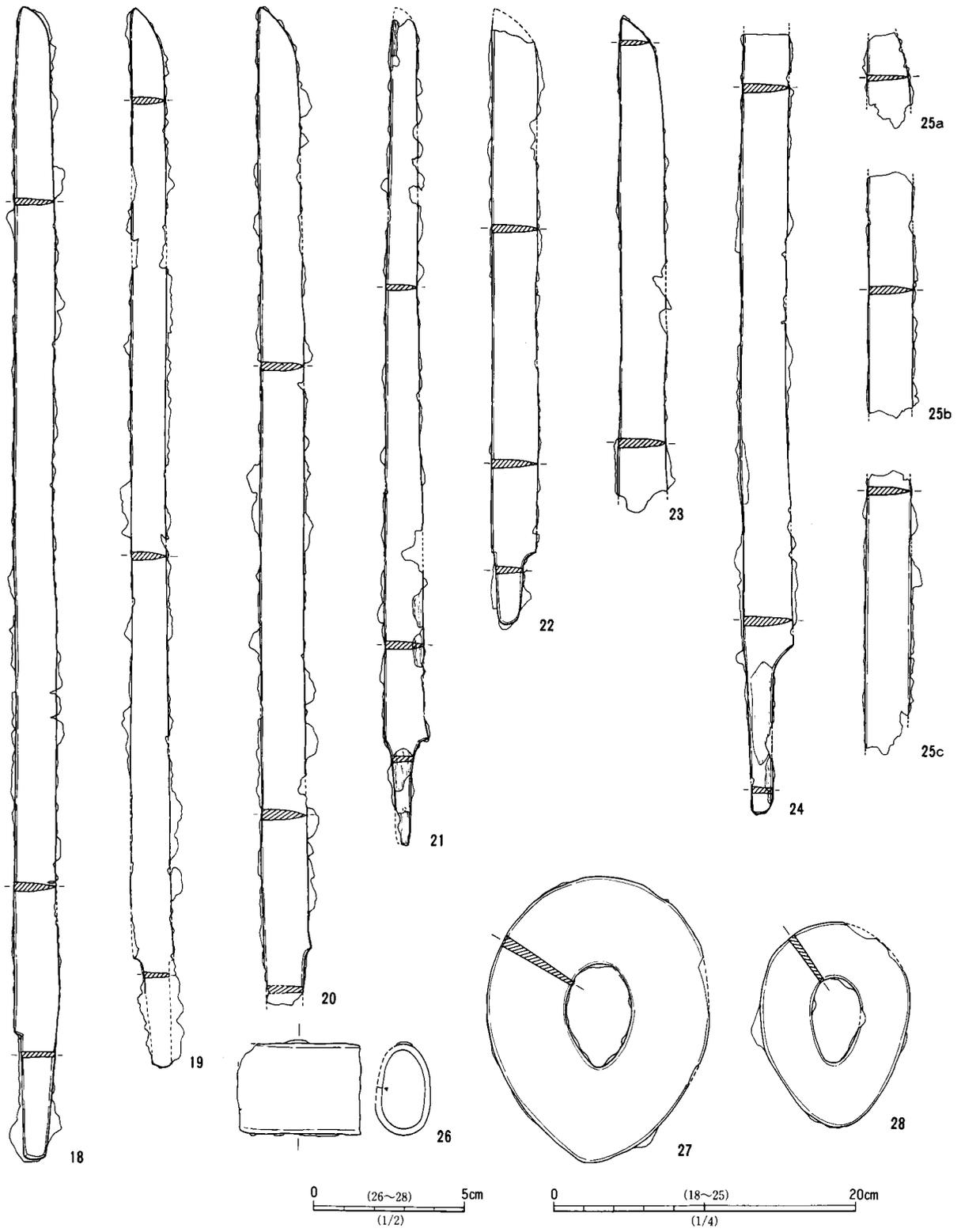
31～33はいずれも破損品である上、劣化も激しいが、馬具の鉸具（かこ）と考えられる。31及び32・33の2個体が確認された。いずれも断面長方形の鉄棒を加工し、T字状に製作されている。33の基部には厚さ約8mmの木質及びその両側に緑青が見られることから、両面に金銅版を貼り付けた座金具を装着していたものと考えられる。なお、31は周溝内覆土上層より出土した。34もやはり断面長方形の鉄棒を加工しているものであるが、その用途は判然としない。鉄鏃を曲げたものとも考えることもできるが、篋被の形状が本古墳出土のものとは異なり、疑問が残る。

35・36は水晶製切小玉である。いずれも、断面は六角形で、一方（実測図上方）より穿孔している。35は貫通面（実測図下面）の穴を、鏃の先端部を回転するようにして押し広げている。

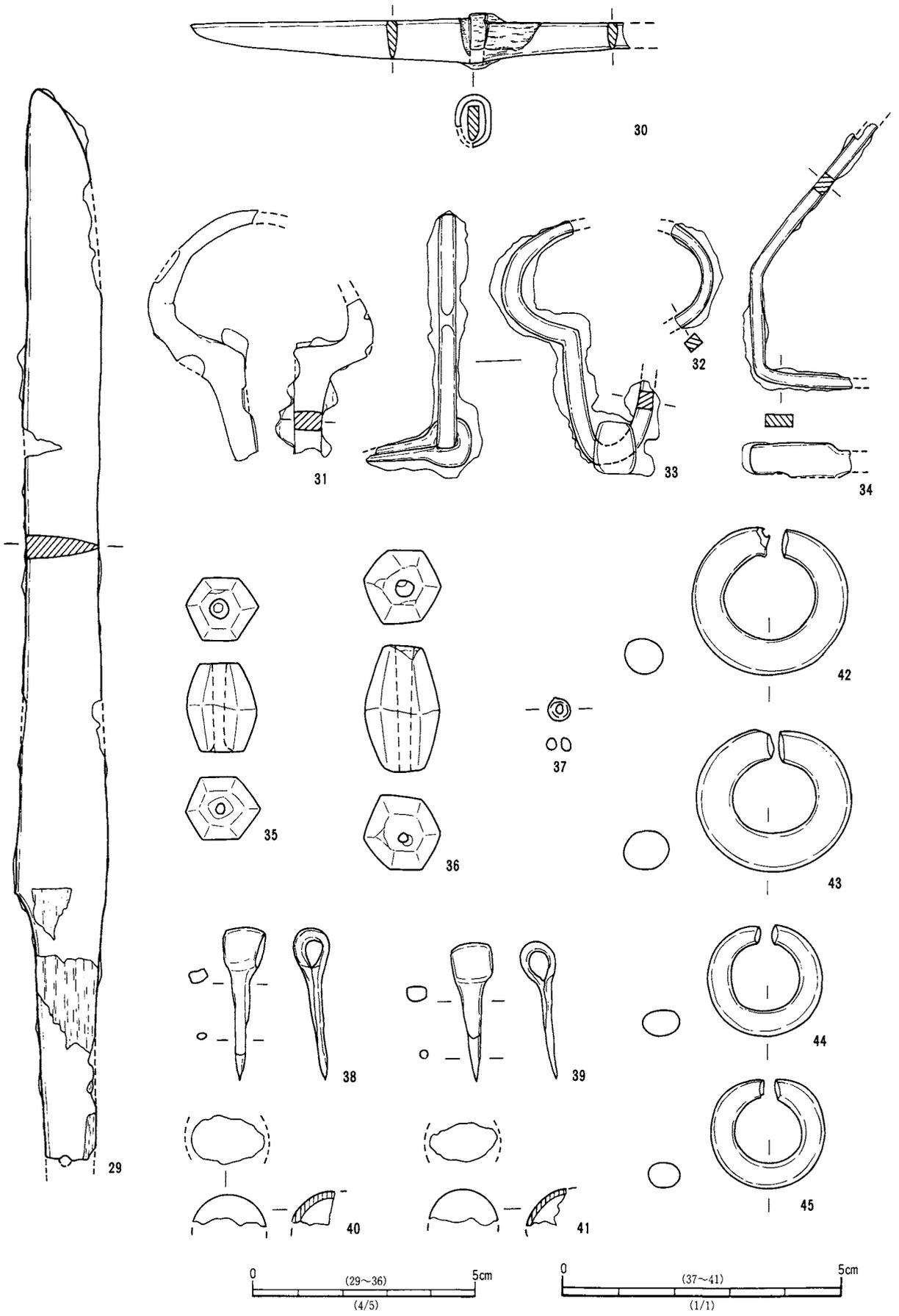
37はガラス小玉である。直径は3.5mmで、青形の色調を呈する完形品である。

38・39は座付環金具の環状部から脚である。帯状の銅板を折り曲げて製作し、脚部に向かって徐々に幅狭となり薄くなる。いずれも全体が緑青に覆われ、鍍金の有無は不明である。38は周溝内覆土上層より出土した。

40・41は空玉と思われるが、双脚飾鋌半球部破片の可能性もある。薄い銅板をたたき出して製作され、外面には鍍金が施されている。



第67图 3号墳出土遺物(2)



第68图 3号墳出土遺物(3)

42～45は耳環である。いずれも中実の銅棒を曲げて環としたものである。大きさをみると、42・43が大形で、44・45が小形のものとなる。それぞれほぼ同じ大きさで対となるものと考えられるが、出土状況からはその様子を窺い知ることはできない。42・43は比較的保存が良く緑青は部分的で、金色の部分が多く残存する。いずれも口の部分には、絞り込むようなシワが認められる。44・45はほぼ全面が緑青に覆われ、鍍金はわずかにその痕跡が観察できるにすぎない。

46～223は鉄鏃である。そのすべてが棘篋被鏃（長頸鏃）に分類されるものと考えられるが、破損品が大半を占め、茎部まで完全に残存しているものはわずかに1点のみである。したがって、篋被長や茎部長を計測できるものは極めて少ない上、正確な出土本数についても不明な点が多い。また、出土位置に関しては主体部付近よりまとまってはいるものの、原位置を保っているとはいえない状況であり、埋葬状況を復元することは極めて困難である。46は腸扶長三角形式、47～61は両関長三角形式、62は小形三角形式、63～72・82・85～87は片関片刃箭式、73～81・83・84は無関片刃箭式に分類される。88・89は判然としないが、明確な関を有せず鏃身が両側に開く様相を見せることから無関鏃箭式の可能性がある。以下、90～223は篋被から茎部にかけての破片である。鏃身部が残存しているものと同一個体ものも多いと思われるが、接合するものは少なく、その詳細は不明である。篋被と茎部を分ける棘状突起を多く見出すことができる。その形態を大きく分けると先端部へ行くにつれすぼまり、先端が尖り気味になるもの（114など）と方形をなすもの（57など）との2種類が見出せる。錆により不明確なものがあるが、全体として後者の方が多いようである。

4号墳（第73～75図、図版31・32・36）

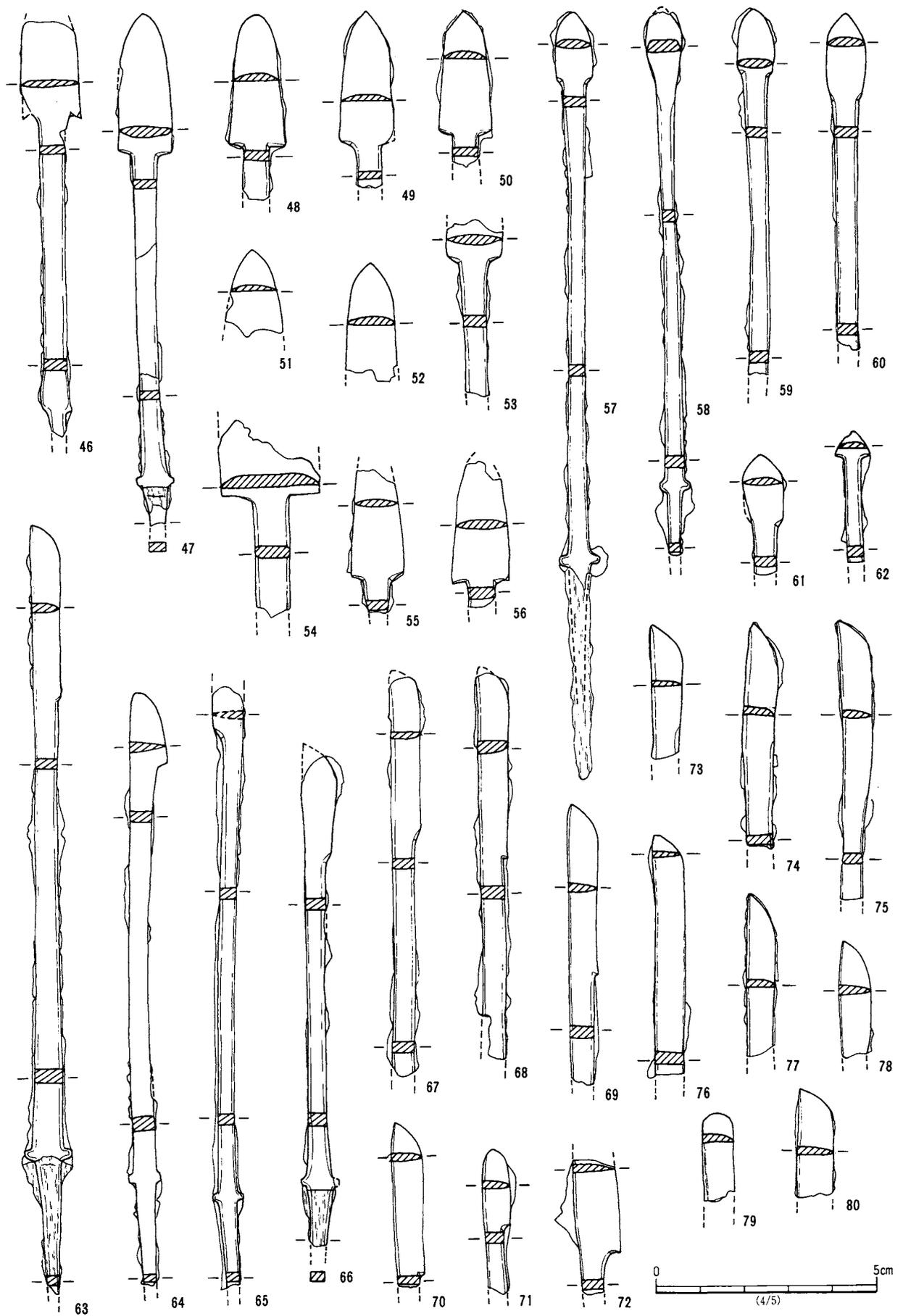
M0-85グリッド付近からM1-07グリッド付近に位置する円墳である。南北が線路と道路によって削平されており、調査範囲内からは全体の約2/3を検出した。しかし、主体部は盗掘を受けており、墳丘西側も中世の溝（1号溝状遺構）によって破壊されていたことが判明した。

周溝の外径は約23.5m、内径は約20mである。墳丘裾部は旧表土を削り出すものの、テラス状にはせず、そのままならかに周溝へと移行する。墳丘下部は黒褐色土を中心に、上部は明褐色土と黒褐色土が交互に堆積していることから、最初に裾部の旧表土を削り出し、次に周溝を掘り、その排土を盛土していると推測される。墳頂部で旧表土から約1mの盛土がなされている。

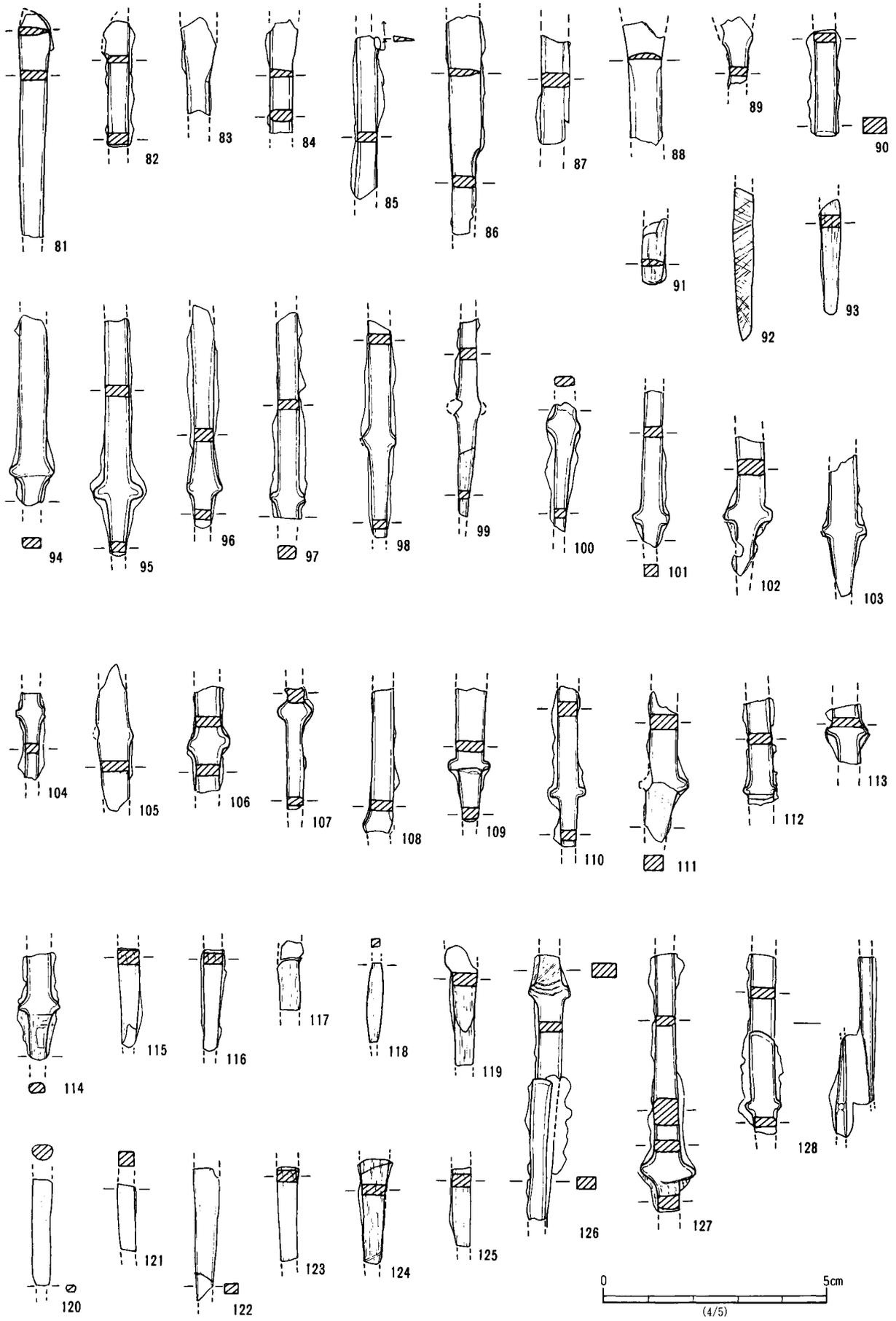
主体部は墳頂部付近から検出された。木棺直葬の土坑と思われるが、盗掘により激しく攪乱されており、わずかに土坑の範囲を推定復元することができるにすぎない。土坑は長軸約3.9m、短軸約1.9mを測り、深さは約90cmである。断面形は逆台形状を呈すると考えられる。両小口部付近には、充填していたと思われる灰白色粘土の分布が認められた。

1・2は主体部付近攪乱層中から検出された。1は両側に関をもつ小形の刀子である。関から茎の一部の遺存である。茎には木質が残存し、紐(?)を巻いていたと思われる痕跡が認められる。2は鉄鏃である。棘篋被鏃（長頸鏃）で両関長三角形式に分類される。茎部の先端を欠くものの、ほぼ完形であり、茎部には木質が良好に遺存し、矢柄への巻きつけ痕も観察される。

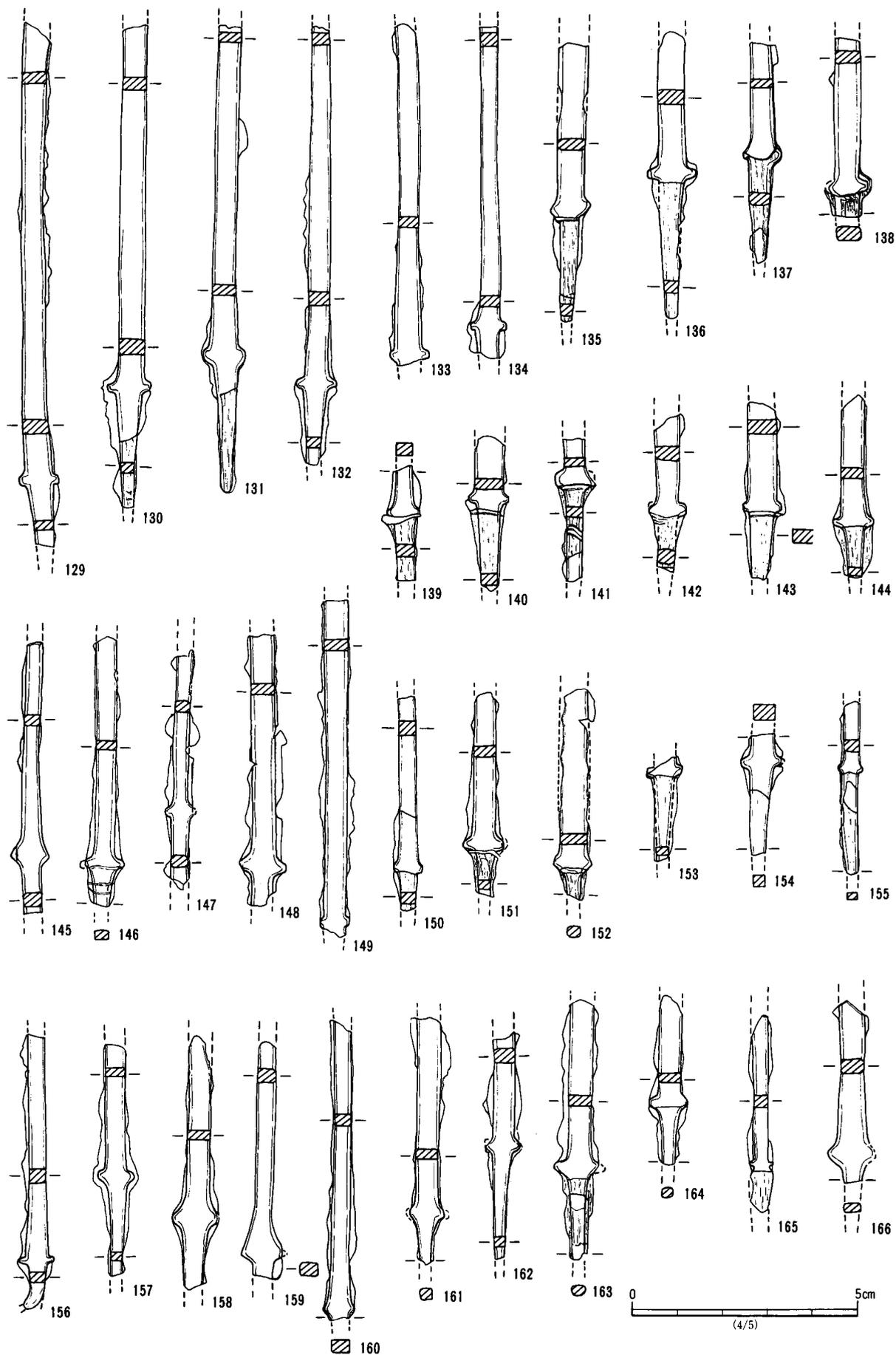
3・4は須恵器坏である。いずれも口縁部の立上りが短く内傾して終わるものである。体部はやや丸みをもつが、底部は平底をなす。底部及び体部下には回転ヘラ削りが施される。口縁部はつまみ上げられるようにして納められ、横ナデが施される。3は器面及び割口の磨耗が著しい。4は外面の一部及び内面において、焼成時の還元が不十分であるためか、色調が鈍い褐色を呈する。5・6・10・11・12は土師



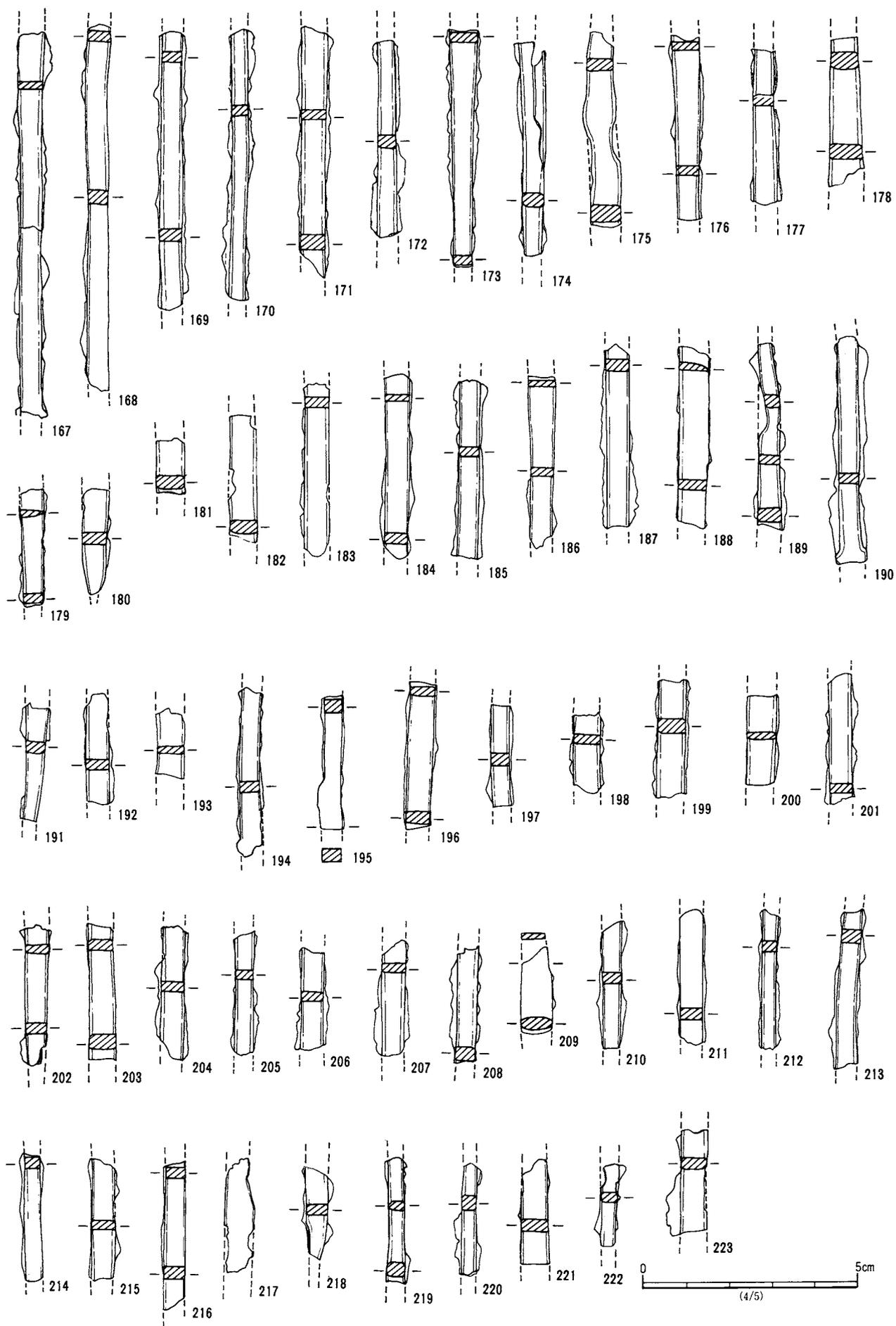
第69图 3号墳出土遺物(4)



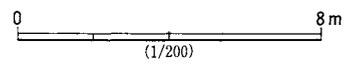
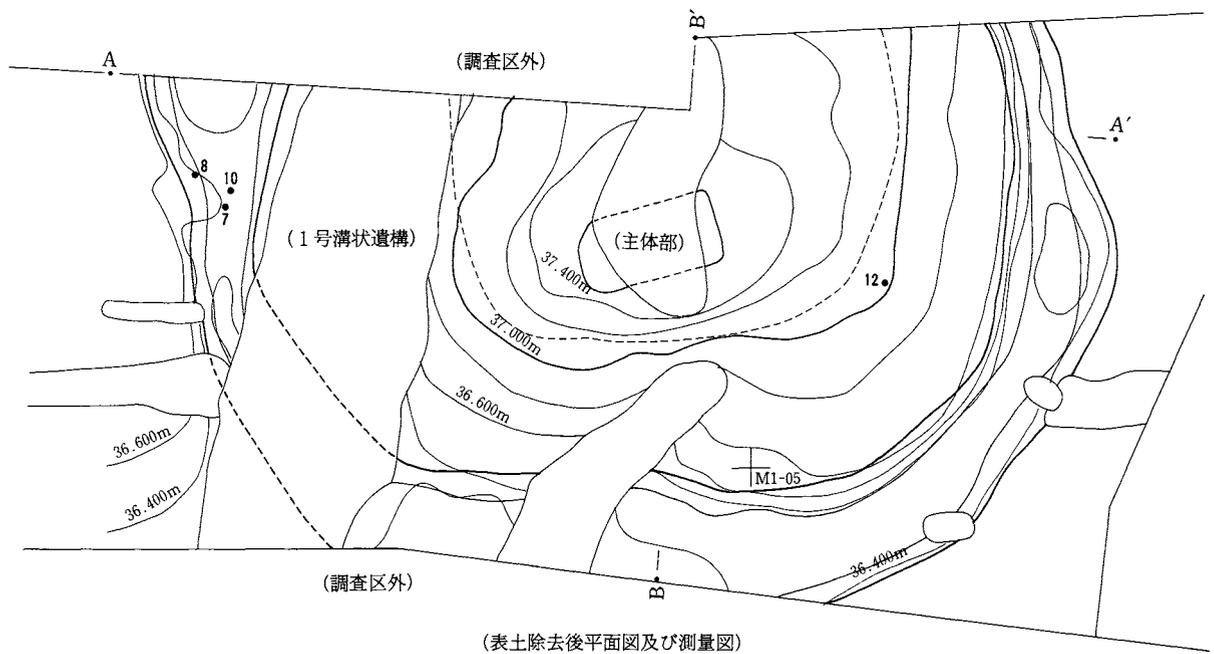
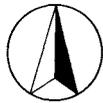
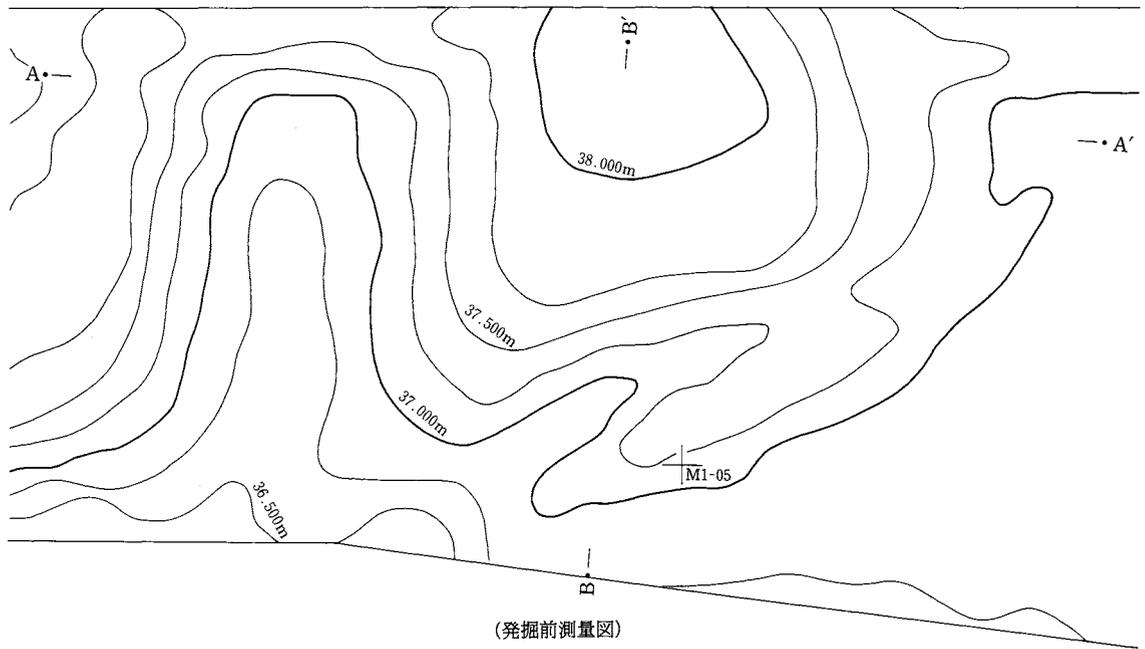
第70图 3号墳出土遺物(5)



第71图 3号填出土遗物(6)



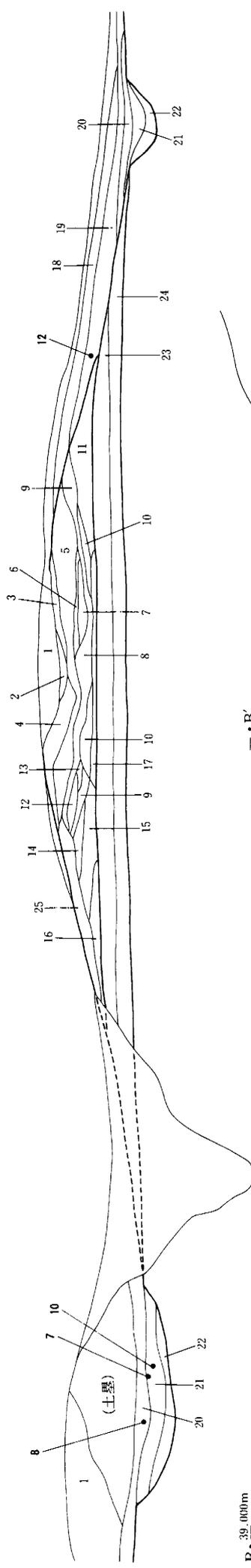
第72图 3号墳出土遺物(7)



第73図 4号墳実測図

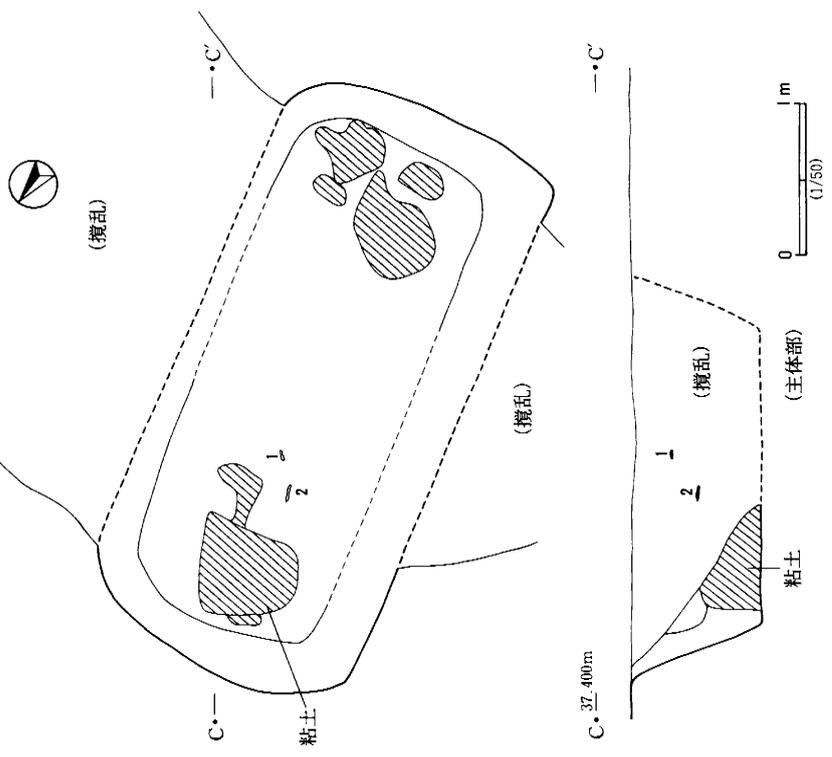
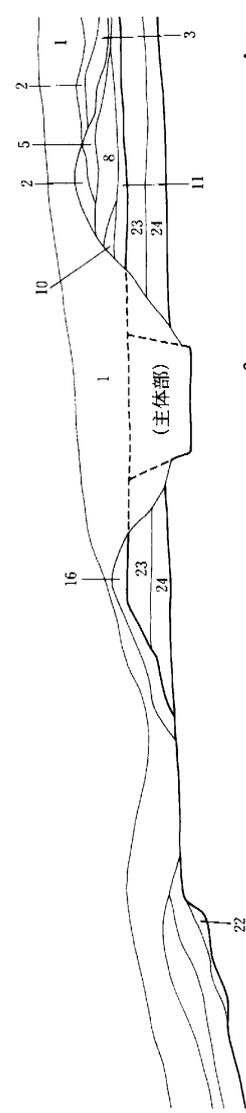
A・39,000m

—・A'



B・39,000m

—・B'

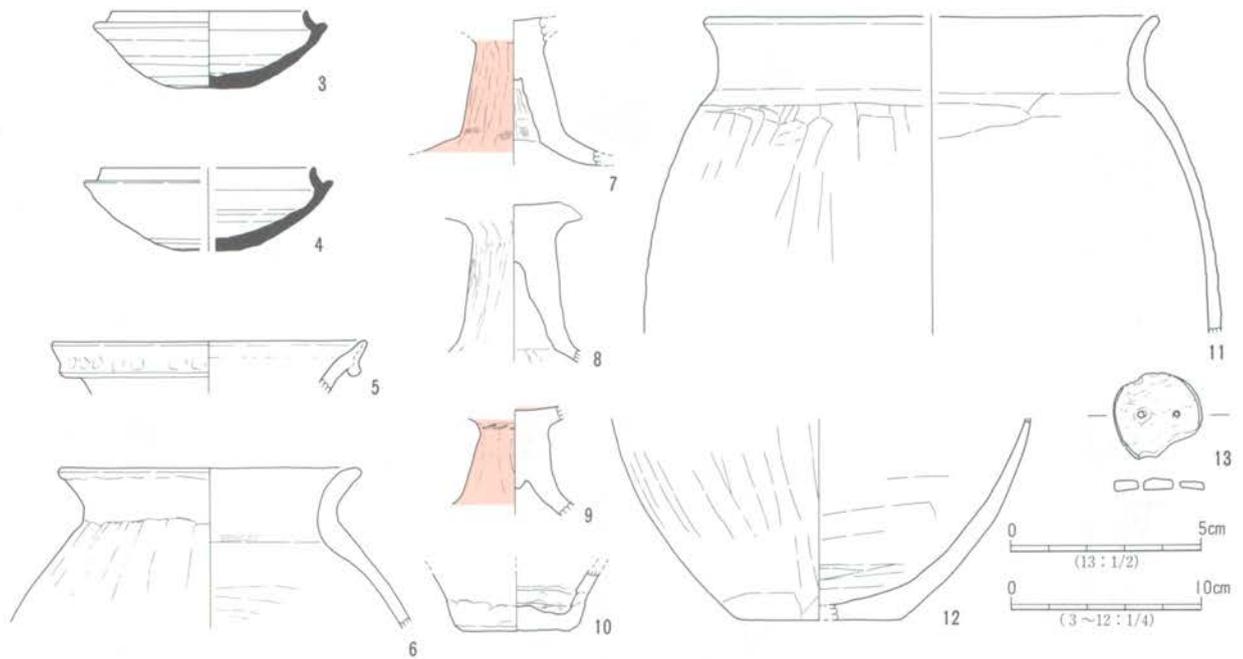


1. 表土・擾乱層
2. 明褐色土 ローム粒・ロームブロックを主体とし、黒褐色土を少量含む。
3. 黒褐色土 ロームブロック(小)を少量含む。
4. 黒褐色土 ローム粒を微量含む。
5. 明褐色土 ローム粒・ロームブロックを主体とし、黒褐色土を微量含む。
6. 黒褐色土 ロームブロックを多量含む。
7. 明褐色土 ロームブロックを主体とし、黒褐色土を微量含む。
8. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを微量含む。
9. 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
10. 明褐色土 ロームブロックを主体とし、黒褐色土を少量含む。
11. 黒褐色土 ロームブロックを多量含む、固くしまっている。
12. 黒褐色土 ロームブロックを多量含む。
13. 明褐色土 ロームブロックを主体とし、黒褐色土を微量含む。
14. 暗褐色土 ソフトローム土を少量含む。
15. 黒褐色土 ロームブロックをやや多く含む。
16. 黒褐色土 ロームの混入はなく、しまり弱い。
17. 黒褐色土 ローム粒を微量含む。
18. 黒褐色土 ローム粒を微量含む、しまり弱い。
19. 黒褐色土 ローム粒を少量含む、しまり弱い。
20. 黒褐色土 ロームの混入はない、固くしまっている。
21. 黒褐色土 ローム細粒を少量含む、しまり弱い。
22. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む、粘性あり。
23. 黒褐色土 団表土、固くまじまる。
24. 暗褐色土 ソフトロームとの漸移層。

第74図 4号墳墳丘断面図・主体部実測図及び出土遺物

器甕である。5は口縁部が肥厚し、肥厚部の下半に指頭によるとみられる圧痕列を施す。古墳時代前期の所産と考えられ、4号墳と直接関係あるものではないと思われる。6は体部が大きく膨らむ形態を呈する。10は底部片であり、輪積みなど制作時の痕跡を顕著に残す。11と12は同一個体の可能性がある。口縁部の外反は弱く、体部はあまり膨らまず底部へと移行するものと思われる。7～9は土師器高坏の脚部である。いずれも基部から小さく開きながら下降し、裾部が水平方向に広がるものと思われる。8の外面には赤彩を施している。7・8は中空になるが、9は短く中実である。なお、7・8・9・10は周溝内、12は墳丘裾部内、その他は表土内から検出された。

13は滑石製有孔円盤である。周溝内覆土から検出された。中央部付近に2か所の穿孔を施す。直径は約2.3cmである。



第75図 4号墳出土遺物

2 塚

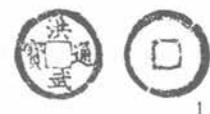
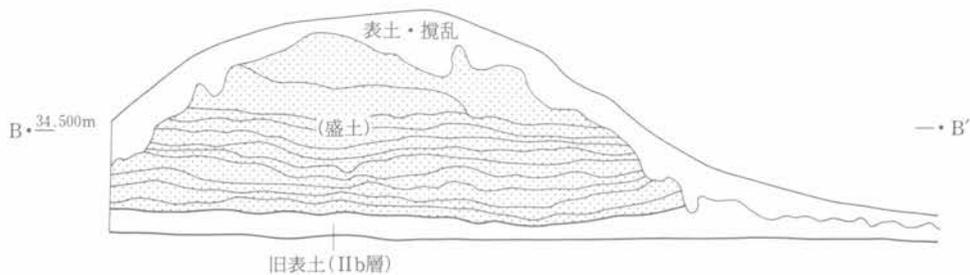
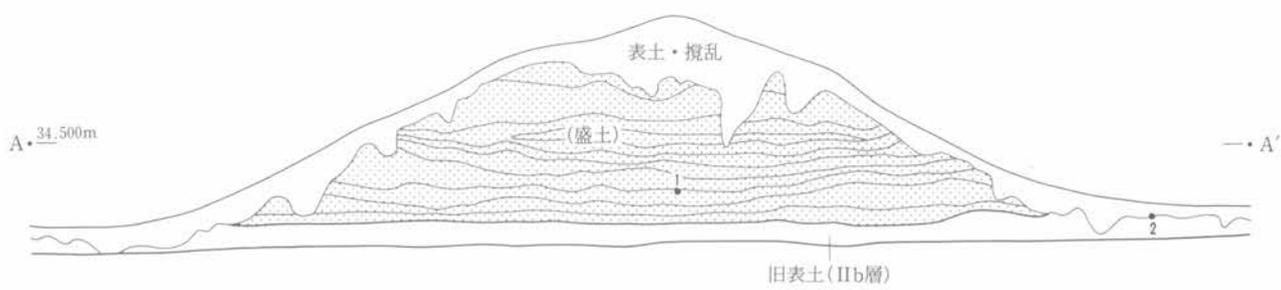
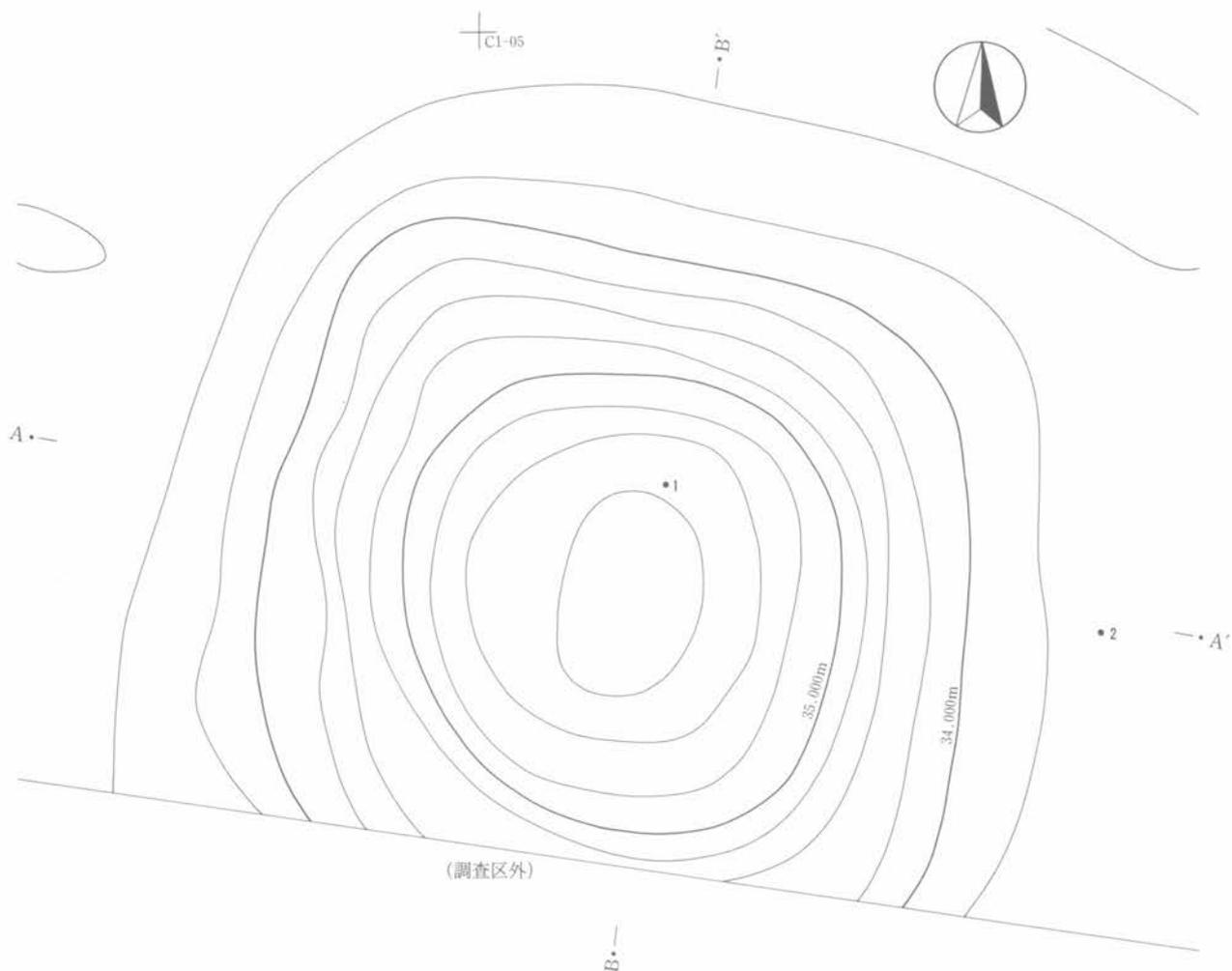
1号塚 (第76図、図版32・43)

C1-05グリッド付近に位置する。平面形は方形を呈するが、墳頂部に近づくと円形に近くなる。一辺は約12.5m、墳頂部の現地表からの高さは約2.5mである。南側の約1/5は道路によって削平されていた。断面を見ると墳頂部の攪乱が著しく、木根のほかに盗掘などを受けているとも考えられる。盛土はほぼ水平に堆積し、土をならしてはつき固めながら構築したものと思われる。

塚に関連する遺物として、盛土中及び裾部近くの旧表土直上から、各1点の古銭を検出した(1・2)。いずれも中世の所産である洪武通宝である。遺存状況は比較的良好である。2の裏面右側には「銭」の文字が入る。

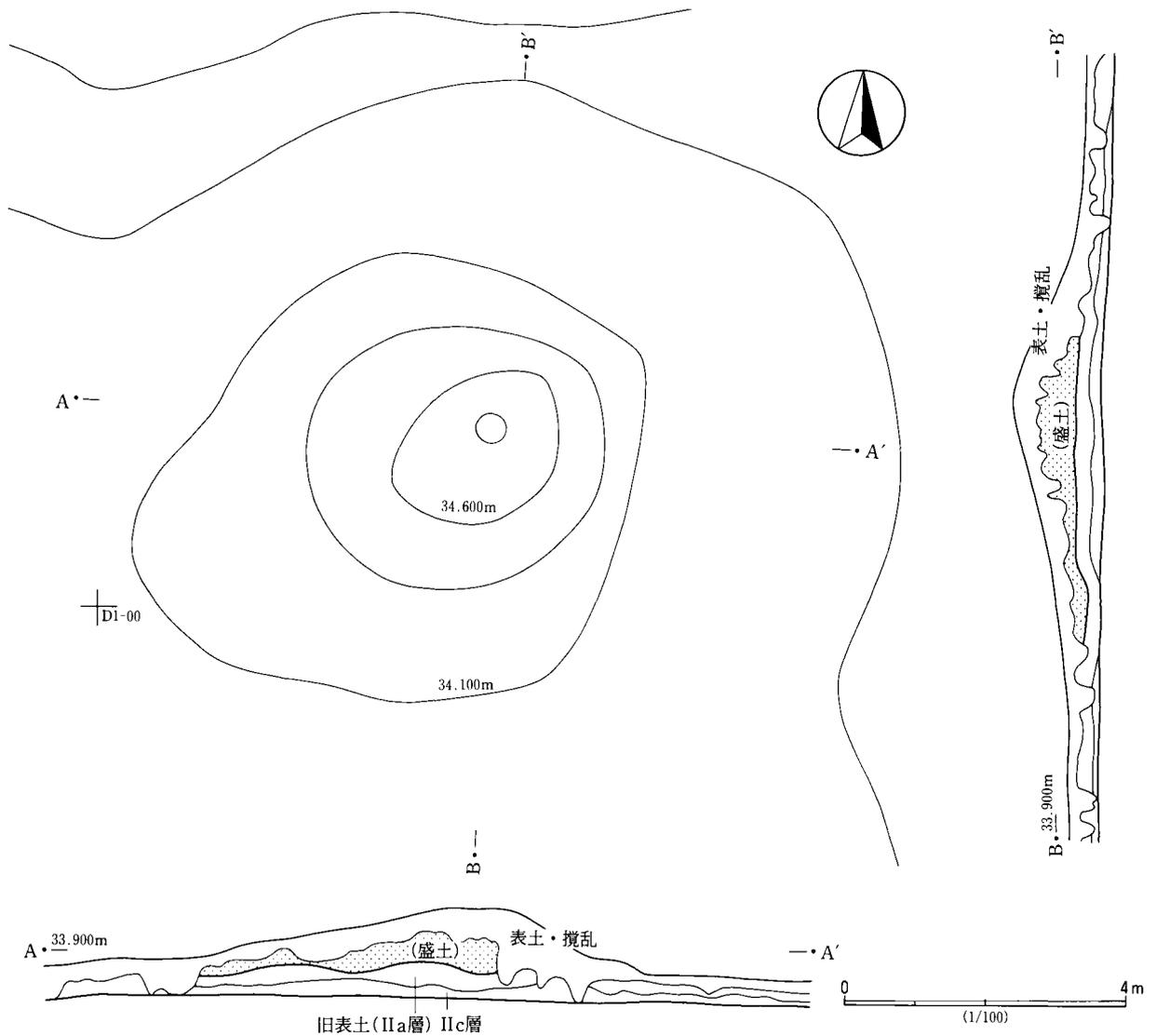
2号塚 (第77図、図版33)

D1-00グリッド付近に位置する。攪乱部分が多い上、墳丘も低く不明な点が多いが、旧表土の上に暗褐色



第76図 1号塚実測図及び出土遺物

の盛土が確認できることから塚として報告することにする。断面などから推定される盛土の範囲は径約6m、現地表からの高さは約70cmである。なお、本塚に関連する遺物の出土は認められなかった。

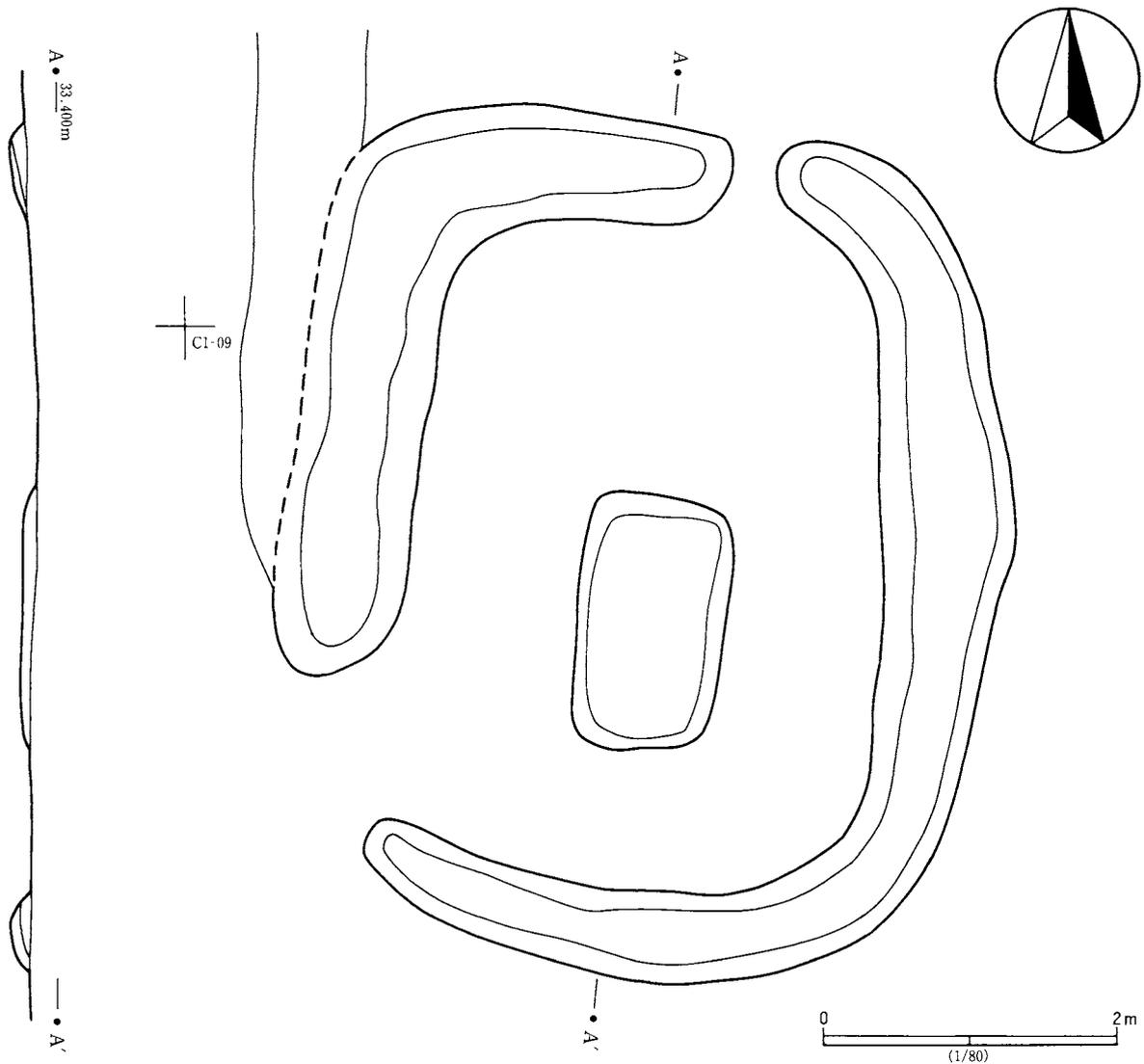


第77図 2号塚実測図

3 その他の遺構

1号方形周溝状遺構 (第78図、図版33)

4号墳の西側、C1-09グリッド付近に位置する。周溝が隅丸形状に巡り、周溝内部のやや南寄りに主体部をもつ。周溝の幅は約60cm~90cm、深さは約15cm~20cm、長軸は約5.6m、短軸は約4.9mである。主体部は長軸約1.7m、短軸約1.0mの長方形を呈し、深さは約8cmである。III層(いわゆるソフトローム層)上面で確認したが、確認面からの掘込みが浅く、北側の一部と南西隅は検出することができなかった。なお、本遺構に関連する遺物の出土は認められなかった。



第78図 1号周溝状遺構

1号土坑 (第79図、図版33)

4号墳の西側、L0-88グリッド付近に位置する。平面形は東側にやや歪みが見られるが、長軸約3.9m、短軸1.5mの長方形を呈し、深さは約40cmである。東側の底面に、径約70cm、深さ約30cmのピット状の掘り込みを有する。断面図を見ると、本遺構埋没後の掘込みが見られ、このピット状の掘込みや平面形の歪みと関連する可能性があるが、現地調査では判然としなかった。なお、本遺構に関連する遺物の出土は認められず、時期・性格ともに不明である。しかし、中世のものと考えられる塚や古銭の出土が近隣にあることから、本遺構も中世の土坑墓と推測することも可能である。

1号竪穴状遺構 (第79図、図版34)

4号墳の西側、M0-80グリッド付近に位置する。平面形は北端が狭まって伸びる不定形を呈する。床面はゆるやかな皿状をなしており、覆土はいわゆるレンズ状堆積で自然堆積と考えられる。北側の一部は調査区外に伸びており、全体の形態及び規模は不明である。調査範囲内における規模として、長軸約5.0m、短軸約4.6mを測る。掘込みは皿状で、深さ20cm～40cmを測る。北側の部分に2段掘込みのピットを1基検

出した。1段目の上面径は50cm～60cm、底面径は約40cmを測る。2段目の上面径は約15cm、底面径は約7cmを測る。

本遺構に関連する遺物として、カワラケ1点を検出した。回転糸切痕を残す底部はやや厚手である。短く立ち上がる口縁部は、つまみ上げられるように納められる。断面形は逆台形状を呈する。

1号溝状遺構（第80図、図版34）

4号墳の西側墳丘及び裾部の一部を削平して構築され、M0-92グリッド付近に位置する。完全には埋まりきっておらず、北から南へゆるく傾斜するように溝の落ち込みが見られた。4号墳の調査とともに検出したため、東側は墳丘裾部上面、西側は4号墳周溝底面がそれぞれ確認面となった。小規模な障子堀状の土坑列を伴うものであり、規模は幅4.7m（確認面において）、旧表土からの深さは約2mである。平面では全く認識することができなかったが、北壁の断面から溝に伴うと考えられる土塁の所在を確認した。溝の掘削排土を西側に、断面カマボコ状に盛ったものと考えられる。断面から推定される土塁の規模は、底面において幅約4.7m、高さ約1.2mである。なお、本遺構に関連する遺物の出土は見られなかった。

2号溝状遺構（第81図、図版34・35・43）

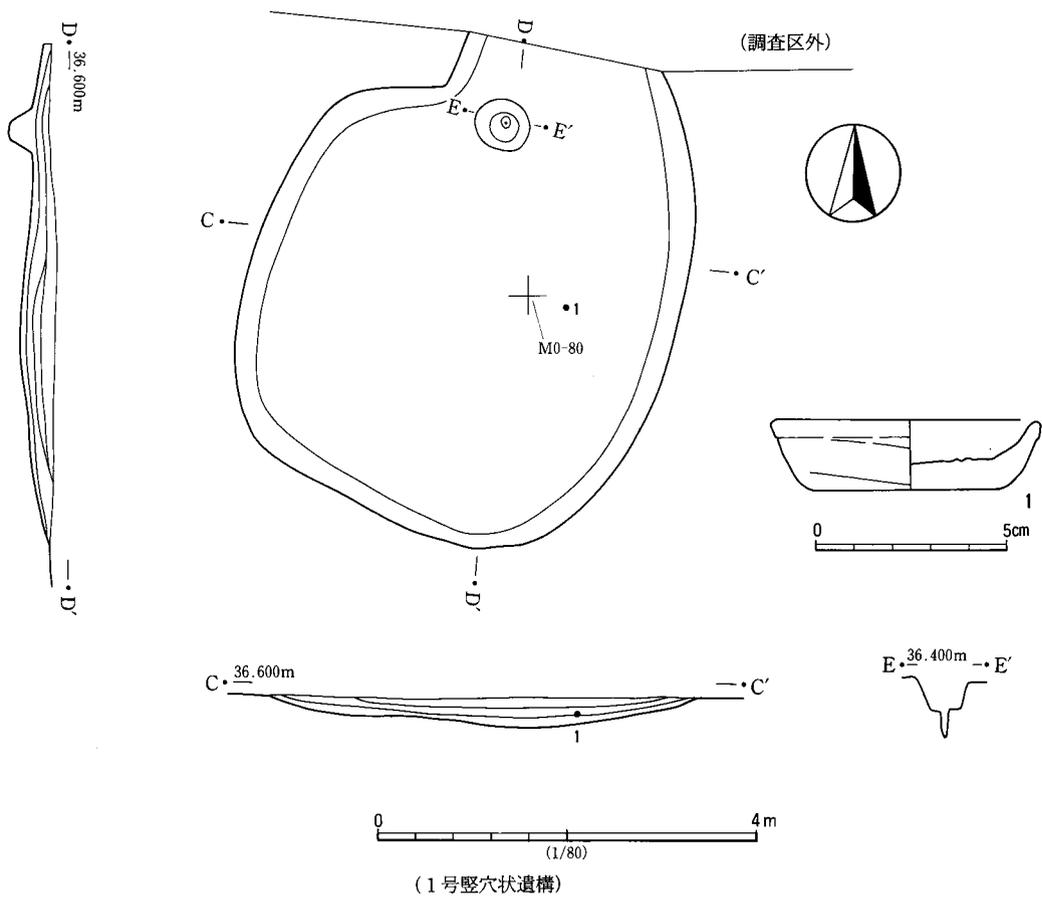
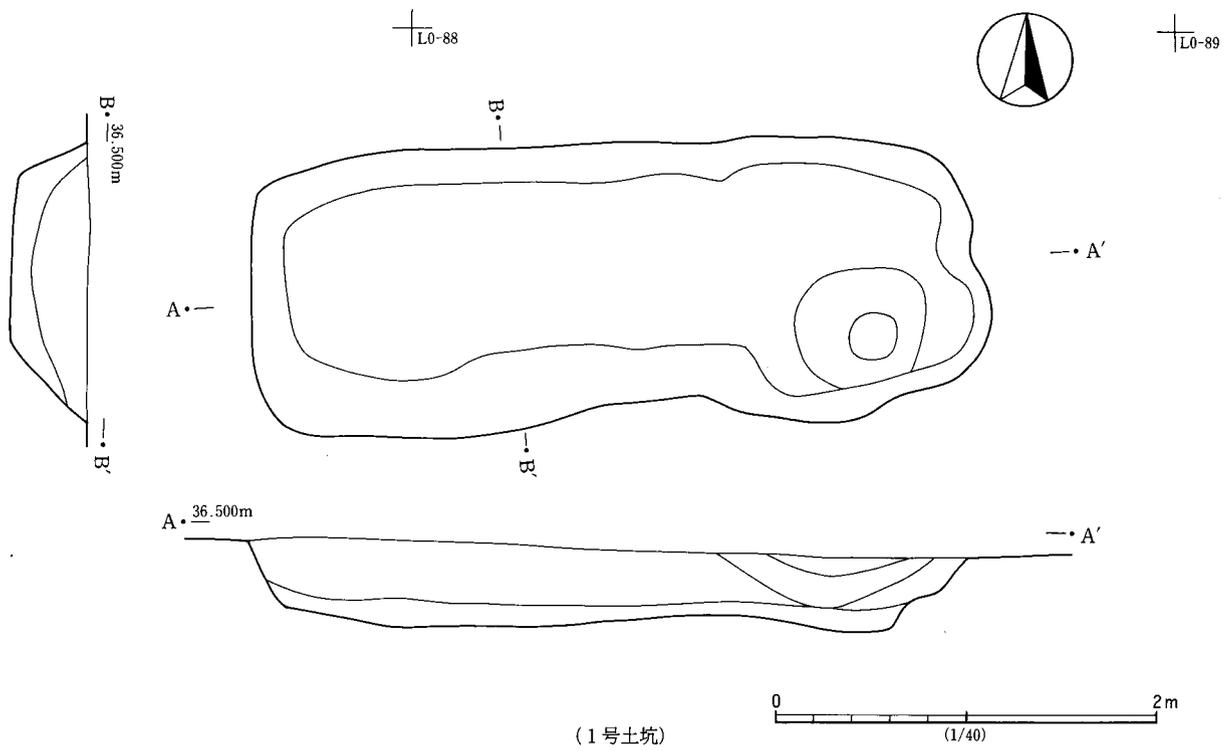
1号土坑、1号竪穴状遺構の南側M0-99グリッド付近に位置する。溝の中に土坑列を伴うものであり、東西方向に伸びるものであるが、東西の両端を近世溝によって破壊されており、どのように展開するか不明である。規模は幅約1.2m～1.6m、深さ約20cm～80cmを測る。

本遺構に関連する遺物として、土製内耳鍋及び古銭を検出した。1は土製内耳鍋である。口径30.0cm、底径19.2cm、器高14.9cmを測る。口縁内側に3か所の釣り手を有する。色調は暗褐色～黒褐色を呈し、焼成は良好である。2は政和通宝である。完形だが、表面は磨耗している。3は1/5程度しか残存していないが、永楽通宝と考えられる。

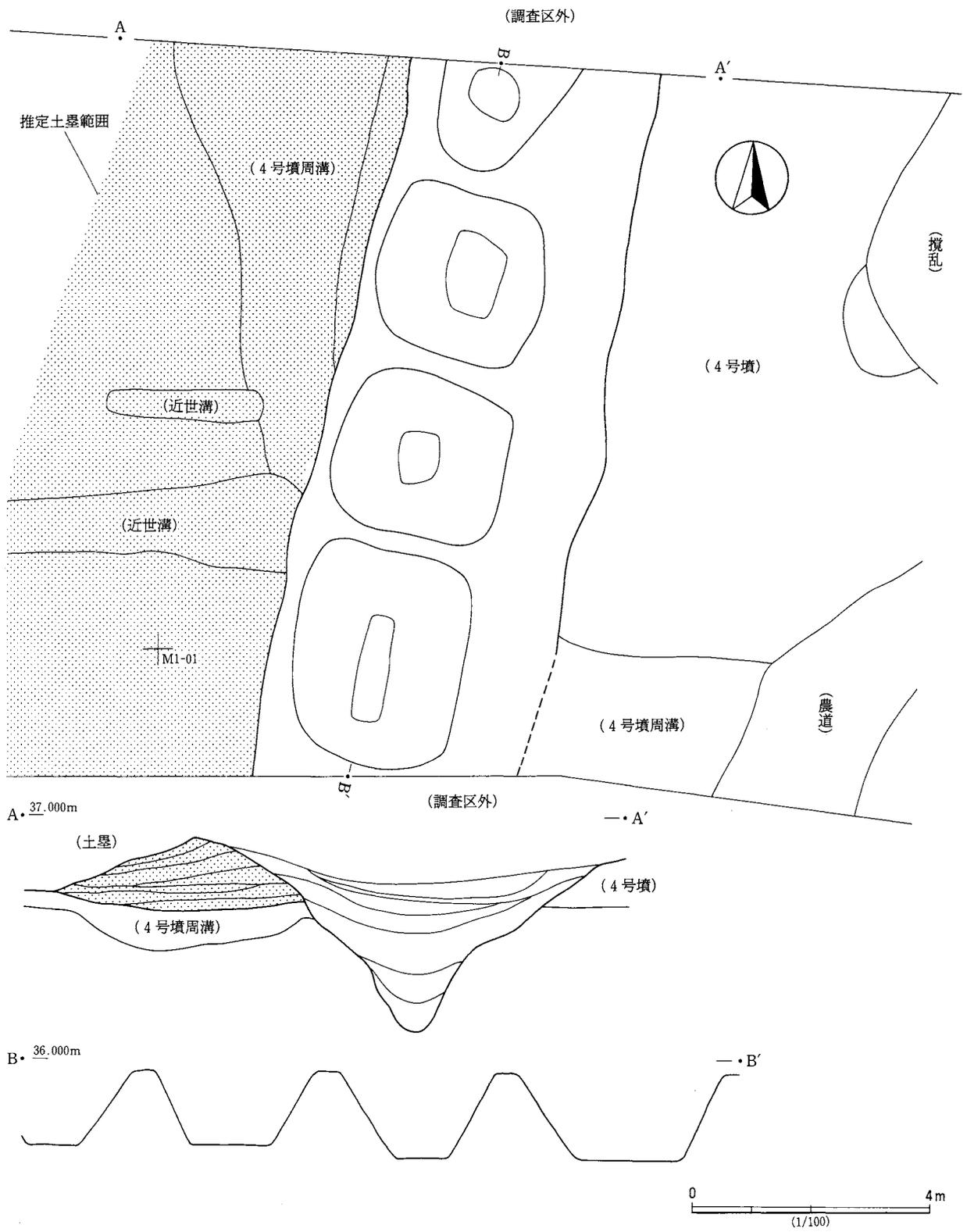
4 グリッド出土の遺物（第82図、図版43・44）

（1）縄文土器（1～18）

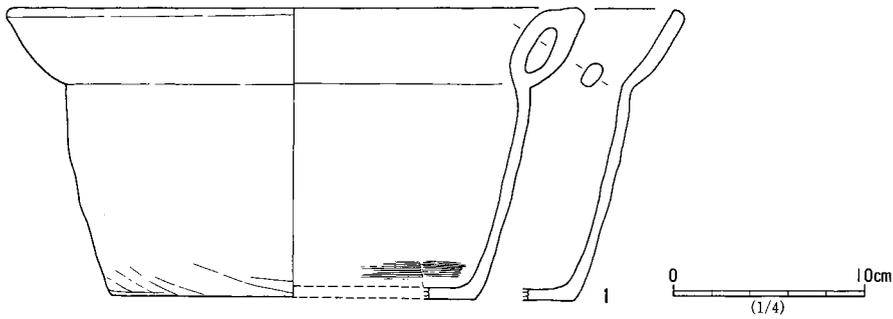
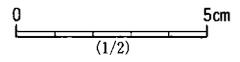
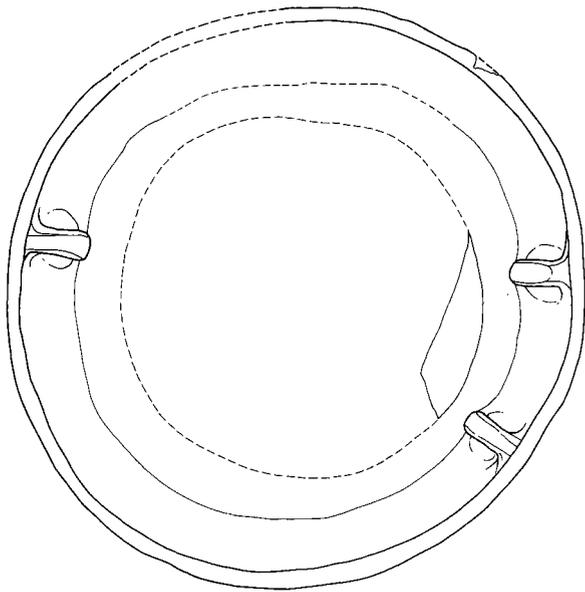
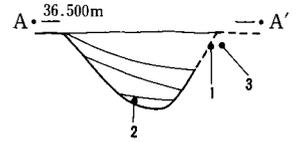
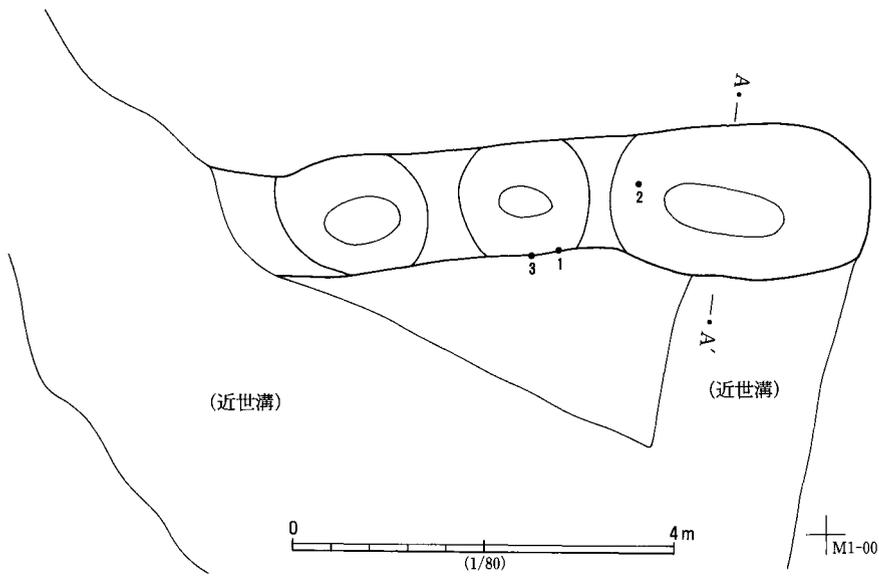
縄文土器は調査区内から散発的に出土した。その多くが細片であり、18点を図示した。1～11は早期の土器である。1～7は同一個体であり、多条の細沈線で鋸歯状文を描く。1のように区画内に貝殻縁線文を充填する部分も見られる。内面調整は丁寧なナデを施すのに対し、外面のナデは粗い。制作時の指頭圧痕を顕著に残す。胎土には砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈する。文様から田戸下層式に比定される。9は櫛歯状の集合細沈線を縦位波状に施紋する。胎土には少量の繊維を含む。子母口式に比定される。8も胎土に少量の繊維を含み、円形刺突文及び押引文を施文する。鶉ヶ島台式に比定される。10・11は内外面に条痕を施すもので、胎土には繊維を多く含む。茅山式に比定される。12・13は前期の土器であり、同一個体の可能性が高い。器面には無節R及びLの結節縄文が横位方向を基調として施文される。胎土には細砂粒を多く含むが、繊維は認められない。色調は暗灰褐色を呈する。焼成は良好である。14は中期初頭のものである。深く、えぐるような沈線及び交互刺突が観察される。胎土には細砂粒を少量含み、色調は褐色を呈する。五領ヶ台式に比定できる。15～18は中期の土器である。15は縦位沈線間に、単節縄文RLを充填する。底部に近い破片のため、二次焼成により器表面は荒れている。18は把手部破片である。図左側が大きく外側へせり出し、右側の口唇部と連続して刻目が施される。また、器面の起伏に区画されるように2条の平行結節沈線を施文する。阿玉台II式に比定される。



第79图 1号土坑・1号竖穴状遺構



第80図 1号溝状遺構



第81図 2号溝状遺構及び出土遺物

(2) 縄文時代土製品 (19～22)

19～22は土器片錘である。いずれも中期の土器片を利用し、19・20は完形だが、21・22は一部を欠損している。19・22の周縁調整は打ち欠きのままであり、刻目も明確でない。20・21の周縁はよく研磨されており、刻目も明確である。

(3) 縄文時代石器 (23・24)

23・24は石鏃である。どちらも入念な両面調整により製作され、鋭利な先端部を有する。いわゆる衝撃剝離痕などは観察されない。23は2号墳の墳丘上表土から検出された。やや透明で灰色がかった黒曜石をもちいており、脚部の先端を欠損する。24はD1-50グリッド付近に位置する近世の溝中から検出された。チャートを用いた完形品である。

(4) 古墳時代石製品 (25)

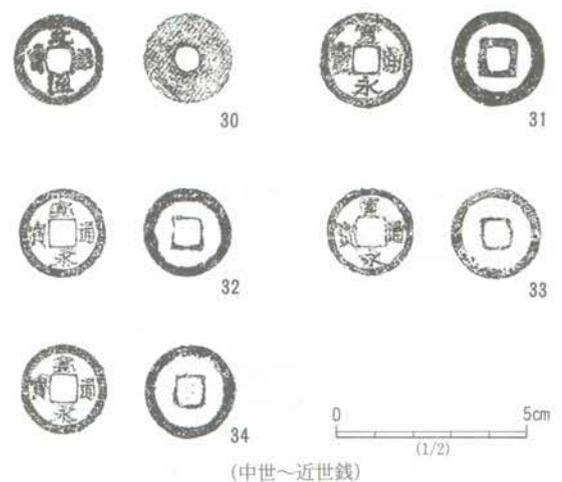
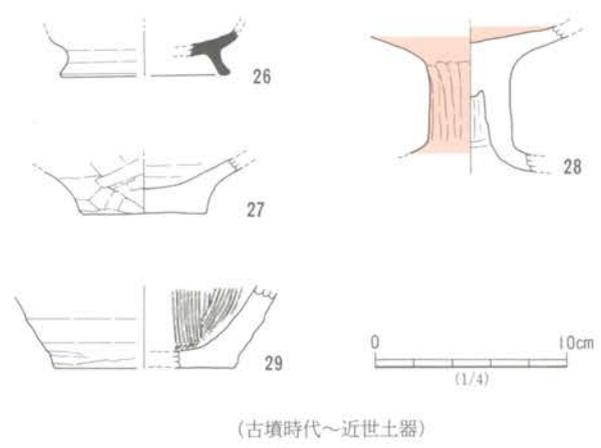
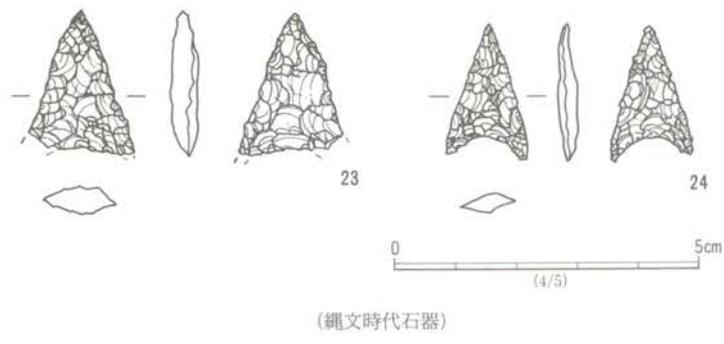
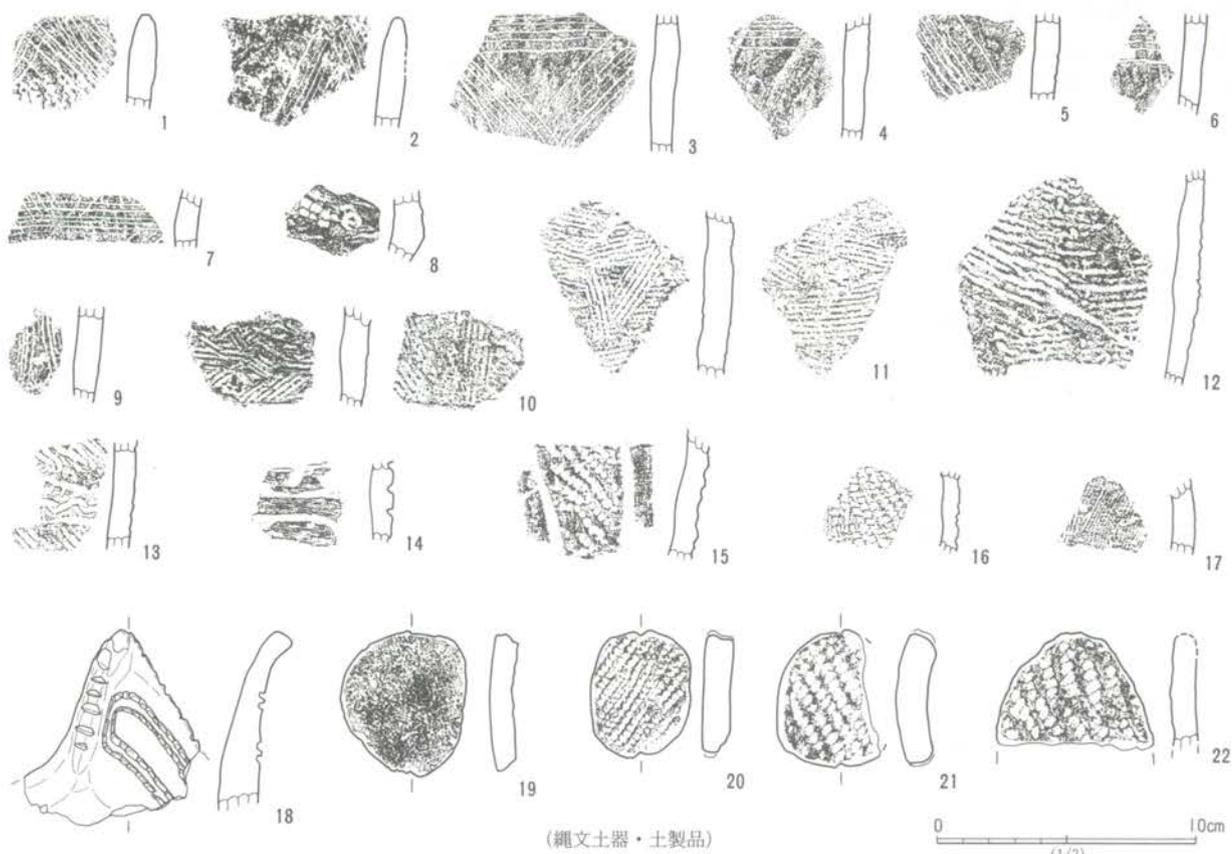
25は滑石製の有孔円板である。2号墳の周溝南側を削平する近世の溝中から検出された。中央部付近に2か所の穿孔を有する。器表面の凹凸は制作時のものと思われ、ほぼ完形である。器表面には研磨痕が顕著に残る部分も見られる。

(5) 古墳時代以降の土器 (26～29)

26は須恵器高台付坏である。高台部付近のみの残存であり、全体の様相は不明である。高台はやや細身で下端は丸みを帯び、外側へせり出している。付部底面はさほど丸みは帯びないようである。色調は外面が暗灰色、内面が暗灰褐色を呈する。27は土師器甕の底部である。全体に粗い調整で体部側には工具痕が顕著に残り、底面も平滑でない。内面には丁寧なヘラナデを施すが、煮沸のためか荒れている部分が多い。色調は暗褐色を呈する。28は古墳時代中期の高坏脚部である。4号墳を削平する1号溝状遺構覆土中から検出されたが、4号墳出土資料に類するものであり、本来は4号墳に伴うものと考えられる。脚は寸胴、中空であり、内面は制作時の絞り込みにより縦方向のしわがよる。外面には縦方向のヘラ削りを施す。坏部内外面及び脚部外面には赤彩が施される。29は陶質土器擂鉢である。内外面とも極暗褐色の釉薬をかけているが、光沢はなく、いわゆる在地産と考えられる。また、内面の刻みは明確であることから、近世の所産と思われる。

(6) 銭貨 (30～34)

30は中世の渡来銭である元祐通宝、31～34は寛永通宝である。なお、31は「古寛永」である。いずれも、腐食が進み表面の摩滅も激しい。



第82図 グリッド出土の遺物

第22表 古墳出土土器

遺構名	挿図番号	名称	器種	口径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
1号墳	第58図1	土師器	坏	13.7	13.8	4.4	—	
1号墳	第58図2	土師器	坏	14.0	14.4	5.1	—	赤彩
1号墳	第58図3	土師器	坏	15.0	—	5.2	—	赤彩
1号墳	第58図4	土師器	甕	20.4	—	—	—	
1号墳	第58図5	須恵器	甕	—	—	—	—	
2号墳	第63図12	須恵器	坏	13.2	16.0	3.8	—	窯印
2号墳	第63図13	土師器	坏	11.8	13.0	5.4	—	赤彩
2号墳	第63図14	土師器	坏	13.6	14.0	5.8	—	赤彩
2号墳	第63図15	土師器	坏	13.0	14.2	4.0	—	黒色処理
2号墳	第63図16	土師器	坏	—	14.4	—	—	
2号墳	第63図17	土師器	坏	12.4	13.4	4.6	—	
2号墳	第63図18	土師器	坏	11.8	12.8	5.4	—	赤彩
2号墳	第63図19	土師器	坏	12.8	13.2	5.4	—	
2号墳	第63図20	土師器	高坏	17.4	—	14.8	12.4	
2号墳	第63図21	土師器	高坏	13.8	—	9.2	10.6	坏部内面赤彩
2号墳	第63図22	須恵器	提瓶	7.8	19.6	23.2	—	自然釉
3号墳	第66図1	須恵器	蓋	—	—	—	3.4	
3号墳	第66図2	須恵器	蓋	10.2	10.5	4.2	3.8	
3号墳	第66図3	須恵器	坏	8.9	10.6	3.4	3.9	
3号墳	第66図4	須恵器	—	—	—	—	—	
3号墳	第66図5	土師器	坏	10.3	10.5	3.1	—	
3号墳	第66図6	須恵器	蓋	15.1	15.4	3.7	—	
3号墳	第66図7	須恵器	坏	14.3	14.7	4.3	9.8	
3号墳	第66図8	須恵器	蓋	15.8	15.9	4.0	—	自然釉
3号墳	第66図9	須恵器	坏	15.5	15.7	4.5	10.3	
3号墳	第66図10	須恵器	蓋	15.9	16.3	4.1	—	自然釉
3号墳	第66図11	須恵器	坏	15.7	15.9	4.5	11.2	
3号墳	第66図12	須恵器	長頸壺	7.3	—	—	—	
3号墳	第66図13	須恵器	長頸壺	8.5	9.2	—	—	14と同一個体
3号墳	第66図14	須恵器	長頸壺	—	14.2	—	4.8	13と同一個体
3号墳	第66図15	須恵器	甕	25.8	—	—	—	
3号墳	第66図16	須恵器	ハソウ?	—	—	—	—	
3号墳	第66図17	須恵器	横瓶	13.6	40.5/22.4	25.8	—	自然釉
4号墳	第75図3	須恵器	坏	10.1	12.1	3.9	—	
4号墳	第75図4	須恵器	坏	11.1	12.9	4.2	—	
4号墳	第75図5	土師器	甕	16.3	—	—	—	
4号墳	第75図6	土師器	甕	15.4	—	—	—	
4号墳	第75図7	土師器	高坏	—	—	—	—	赤彩
4号墳	第75図8	土師器	高坏	—	—	—	—	
4号墳	第75図9	土師器	高坏	—	—	—	—	赤彩
4号墳	第75図10	土師器	甕?	—	—	—	5.8	
4号墳	第75図11	土師器	甕	23.5	30.4	—	—	12と同一個体
4号墳	第75図12	土師器	甕	—	—	—	9.6	11と同一個体

第23表 鉄製品①(鉄鏃)

遺構名	挿図番号	種別	現存重量(g)	鏃身長(mm)	鏃身幅(mm)	頸部長(mm)	頸部幅(mm)	鏃被幅(mm)	茎上端幅(mm)	茎長(mm)
2号墳	第62図	4	棘篋被鏃	22.1	9.6	81.0	4.7	7.5	4.9	—
2号墳	第62図	5	棘篋被鏃	—	25.0	9.2	77.9	3.9	8.8	5.6
2号墳	第62図	6	棘篋被鏃	—	—	8.8	88.5	5.5	8.8	6.0
2号墳	第62図	7	棘篋被鏃	—	52.4	7.8	59.2	4.9	6.8	4.5
2号墳	第62図	8	無茎鏃	—	26.3	20.0	—	—	—	—
2号墳	第62図	9	無茎鏃	—	(30.4)	23.7	—	—	—	—
2号墳	第62図	10	棘篋被鏃	—	—	—	—	—	—	—
2号墳	第62図	11	棘篋被鏃	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	46	棘篋被鏃	5.3	—	13.5	65.8	6.2	7.1	4.2
3号墳	第69図	47	棘篋被鏃	7.5	31.2	12.4	73.0	5.4	8.5	5.9

遺構名	挿図番号	種 別	現存重量 (g)	鍍身長 (mm)	鍍身幅 (mm)	頸部長 (mm)	頸部幅 (mm)	篋被幅 (mm)	茎上端幅 (mm)	茎長 (mm)
3号墳	第69図	48	棘篋被鍍	2.8	30.3	12.9	—	6.0	—	—
3号墳	第69図	49	棘篋被鍍	2.9	30.8	12.8	—	5.7	—	—
3号墳	第69図	50	棘篋被鍍	2.1	28.3	12.5	—	6.3	—	—
3号墳	第69図	51	棘篋被鍍	1.0	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	52	棘篋被鍍	2.0	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	53	棘篋被鍍	2.8	—	13.3	—	5.6	—	—
3号墳	第69図	54	棘篋被鍍	0.9	—	22.5	—	8.2	—	—
3号墳	第69図	55	棘篋被鍍	1.8	—	11.9	—	5.1	—	—
3号墳	第69図	56	棘篋被鍍	2.7	—	13.1	—	6.7	—	—
3号墳	第69図	57	棘篋被鍍	10.2	16.6	8.5	107.3	5.6	9.2	(5.1)
3号墳	第69図	58	棘篋被鍍	6.9	(17.0)	8.4	90.9	4.5	7.0	3.7
3号墳	第69図	59	棘篋被鍍	5.0	15.9	8.6	—	5.0	—	—
3号墳	第69図	60	棘篋被鍍	3.9	19.7	9.1	—	5.5	—	—
3号墳	第69図	61	棘篋被鍍	2.8	16.2	9.1	—	5.0	—	—
3号墳	第69図	62	棘篋被鍍	1.0	6.1	7.4	—	4.0	—	—
3号墳	第69図	63	棘篋被鍍	10.9	39.4	6.5	101.2	6.5	10.7	6.0
3号墳	第69図	64	棘篋被鍍	7.3	16.3	8.6	91.8	5.1	7.4	4.9
3号墳	第69図	65	棘篋被鍍	7.0	—	7.5	102.5	4.1	6.9	4.5
3号墳	第69図	66	棘篋被鍍	7.0	(26.9)	8.4	71.6	5.0	(8.9)	6.0
3号墳	第69図	67	棘篋被鍍	4.6	(37.4)	7.0	—	5.5	—	—
3号墳	第69図	68	棘篋被鍍	6.1	(42.2)	7.0	—	6.2	—	—
3号墳	第69図	69	棘篋被鍍	4.2	37.9	7.0	—	5.5	—	—
3号墳	第69図	70	棘篋被鍍	1.9	34.8	6.9	—	5.4	—	—
3号墳	第69図	71	棘篋被鍍	1.7	18.6	6.1	—	4.7	—	—
3号墳	第69図	72	棘篋被鍍	2.5	—	10.2	—	5.1	—	—
3号墳	第69図	73	棘篋被鍍	1.3	—	7.3	—	—	—	—
3号墳	第69図	74	棘篋被鍍	2.9	—	7.6	—	—	—	—
3号墳	第69図	75	棘篋被鍍	3.5	47.9	7.6	—	4.7	—	—
3号墳	第69図	76	棘篋被鍍	3.4	—	7.3	—	—	—	—
3号墳	第69図	77	棘篋被鍍	1.9	—	6.9	—	—	—	—
3号墳	第69図	78	棘篋被鍍	1.3	—	7.3	—	—	—	—
3号墳	第69図	79	棘篋被鍍	1.2	—	7.3	—	—	—	—
3号墳	第69図	80	棘篋被鍍	1.4	—	8.5	—	—	—	—
3号墳	第69図	81	棘篋被鍍	2.9	—	7.4	—	—	—	—
3号墳	第69図	82	棘篋被鍍	1.0	—	(6.1)	—	4.6	—	—
3号墳	第69図	83	棘篋被鍍	0.7	—	—	—	4.7	—	—
3号墳	第69図	84	棘篋被鍍	1.2	—	—	—	5.3	—	—
3号墳	第69図	85	棘篋被鍍	1.9	—	—	—	4.0	—	—
3号墳	第69図	86	棘篋被鍍	2.7	—	7.9	—	5.4	—	—
3号墳	第69図	87	棘篋被鍍	1.8	—	6.2	—	5.5	—	—
3号墳	第69図	88	棘篋被鍍	1.5	—	—	—	7.5	—	—
3号墳	第69図	89	棘篋被鍍	0.5	—	—	—	4.3	—	—
3号墳	第69図	90	棘篋被鍍	1.7	—	—	—	4.9	—	—
3号墳	第69図	91	棘篋被鍍	0.3	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	92	棘篋被鍍	1.2	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	93	棘篋被鍍	0.8	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	94	棘篋被鍍	3.5	—	—	—	6.5	10.2	5.1
3号墳	第69図	95	棘篋被鍍	3.9	—	—	—	5.5	11.2	6.2
3号墳	第69図	96	棘篋被鍍	4.5	—	—	—	4.6	8.1	4.1
3号墳	第69図	97	棘篋被鍍	3.7	—	—	—	5.1	7.8	4.6
3号墳	第69図	98	棘篋被鍍	3.0	—	—	—	5.3	8.0	4.6
3号墳	第69図	99	棘篋被鍍	2.3	—	—	—	3.8	(9.3)	5.3
3号墳	第69図	100	棘篋被鍍	1.9	—	—	—	—	7.6	4.8
3号墳	第69図	101	棘篋被鍍	2.0	—	—	—	4.3	7.7	4.6
3号墳	第69図	102	棘篋被鍍	2.7	—	—	—	6.4	10.4	4.9
3号墳	第69図	103	棘篋被鍍	1.3	—	—	—	6.6	10.0	6.2
3号墳	第69図	104	棘篋被鍍	1.1	—	—	—	4.3	6.6	3.3
3号墳	第69図	105	棘篋被鍍	2.1	—	—	—	7.5	(9.0)	7.3
3号墳	第69図	106	棘篋被鍍	1.8	—	—	—	6.2	9.7	6.0

遺構名	挿図番号	種別	現存重量 (g)	鍍身長 (mm)	鍍身幅 (mm)	頸部長 (mm)	頸部幅 (mm)	筥被幅 (mm)	茎上端幅 (mm)	茎長 (mm)	
3号墳	第69図	107	棘筥被鍍	1.0	—	—	—	4.4	7.5	3.8	—
3号墳	第69図	108	棘筥被鍍	1.6	—	—	—	5.6	(7.5)	(5.4)	—
3号墳	第69図	109	棘筥被鍍	2.4	—	—	—	6.5	9.2	5.1	—
3号墳	第69図	110	棘筥被鍍	1.9	—	—	—	4.6	8.1	4.4	—
3号墳	第69図	111	棘筥被鍍	2.7	—	—	—	6.2	(11.0)	7.3	—
3号墳	第69図	112	棘筥被鍍	1.7	—	—	—	5.2	7.6	5.6	—
3号墳	第69図	113	棘筥被鍍	0.8	—	—	—	(7.2)	9.2	5.1	—
3号墳	第69図	114	棘筥被鍍	1.7	—	—	—	5.3	9.5	5.0	—
3号墳	第69図	115	棘筥被鍍	0.9	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	116	棘筥被鍍	0.8	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	117	棘筥被鍍	0.4	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	118	棘筥被鍍	0.3	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	119	棘筥被鍍	1.6	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	120	棘筥被鍍	0.7	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	121	棘筥被鍍	0.5	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	122	棘筥被鍍	1.3	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	123	棘筥被鍍	0.7	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	124	棘筥被鍍	1.1	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	125	棘筥被鍍	0.7	—	—	—	—	—	—	—
3号墳	第69図	126	棘筥被鍍	4.3	—	—	—	4.7	9.3	5.8	—
3号墳	第69図	127	棘筥被鍍	4.4	—	—	—	5.6	12.1	5.2	—
3号墳	第69図	128	棘筥被鍍	3.2	—	—	—	5.2	8.0	5.4	—
3号墳	第69図	129	棘筥被鍍	9.2	—	—	—	5.9	8.7	5.8	—
3号墳	第69図	130	棘筥被鍍	7.8	—	—	—	5.8	9.4	5.5	—
3号墳	第69図	131	棘筥被鍍	4.5	—	—	—	5.5	9.4	5.4	27.7
3号墳	第69図	132	棘筥被鍍	5.9	—	—	—	5.2	9.2	5.1	—
3号墳	第69図	133	棘筥被鍍	4.0	—	—	—	4.7	8.9	(5.4)	—
3号墳	第69図	134	棘筥被鍍	4.8	—	—	—	4.3	7.9	5.3	—
3号墳	第69図	135	棘筥被鍍	4.1	—	—	—	6.4	9.4	4.2	—
3号墳	第69図	136	棘筥被鍍	3.5	—	—	—	6.2	11.1	5.8	—
3号墳	第69図	137	棘筥被鍍	2.0	—	—	—	5.1	8.6	5.0	—
3号墳	第69図	138	棘筥被鍍	2.9	—	—	—	6.2	8.9	5.8	—
3号墳	第69図	139	棘筥被鍍	1.3	—	—	—	3.9	7.3	4.8	—
3号墳	第69図	140	棘筥被鍍	2.4	—	—	—	6.6	9.0	5.4	—
3号墳	第69図	141	棘筥被鍍	1.5	—	—	—	4.6	9.1	4.2	—
3号墳	第69図	142	棘筥被鍍	2.1	—	—	—	5.5	8.7	—	—
3号墳	第69図	143	棘筥被鍍	3.1	—	—	—	6.4	8.7	5.1	—
3号墳	第69図	144	棘筥被鍍	2.0	—	—	—	5.0	8.9	4.5	—
3号墳	第69図	145	棘筥被鍍	2.7	—	—	—	3.1	8.5	4.0	—
3号墳	第69図	146	棘筥被鍍	3.3	—	—	—	4.6	9.6	5.5	—
3号墳	第69図	147	棘筥被鍍	2.8	—	—	—	3.4	6.7	3.8	—
3号墳	第69図	148	棘筥被鍍	4.5	—	—	—	5.5	10.1	4.8	—
3号墳	第69図	149	棘筥被鍍	5.9	—	—	—	5.6	7.0	5.0	—
3号墳	第69図	150	棘筥被鍍	2.7	—	—	—	4.2	6.7	3.8	—
3号墳	第69図	151	棘筥被鍍	2.7	—	—	—	4.8	9.0	4.7	—
3号墳	第69図	152	棘筥被鍍	2.9	—	—	—	5.8	8.5	3.5	—
3号墳	第69図	153	棘筥被鍍	1.0	—	—	—	—	8.1	—	—
3号墳	第69図	154	棘筥被鍍	1.8	—	—	—	4.9	9.3	4.9	—
3号墳	第69図	155	棘筥被鍍	1.4	—	—	—	3.5	5.0	3.4	—
3号墳	第69図	156	棘筥被鍍	3.1	—	—	—	3.6	7.6	3.8	—
3号墳	第69図	157	棘筥被鍍	2.7	—	—	—	4.4	7.9	3.9	—
3号墳	第69図	158	棘筥被鍍	3.4	—	—	—	5.2	10.1	5.6	—
3号墳	第69図	159	棘筥被鍍	3.0	—	—	—	4.0	(10.6)	4.6	—
3号墳	第69図	160	棘筥被鍍	2.7	—	—	—	3.7	7.1	3.9	—
3号墳	第69図	161	棘筥被鍍	3.9	—	—	—	4.9	7.9	3.8	—
3号墳	第69図	162	棘筥被鍍	3.3	—	—	—	4.8	7.6	3.9	—
3号墳	第69図	163	棘筥被鍍	4.1	—	—	—	5.4	(11.7)	4.3	—
3号墳	第69図	164	棘筥被鍍	1.5	—	—	—	5.0	8.7	4.7	—
3号墳	第69図	165	棘筥被鍍	1.6	—	—	—	3.0	5.4	2.9	—

遺構名	挿図番号	種 別	現存重量 (g)	鍍身長 (mm)	鍍身幅 (mm)	頸部長 (mm)	頸部幅 (mm)	筥被幅 (mm)	茎上端幅 (mm)	茎長 (mm)
3号墳	第69図	166	棘筥被鍍	2.0	—	—	—	5.5 (1.8)	4.9	—
3号墳	第69図	167	棘筥被鍍	5.3	—	—	—	5.9	—	—
3号墳	第69図	168	棘筥被鍍	6.2	—	—	—	5.6	—	—
3号墳	第69図	169	棘筥被鍍	3.9	—	—	—	4.8	—	—
3号墳	第69図	170	棘筥被鍍	3.5	—	—	—	3.9	—	—
3号墳	第69図	171	棘筥被鍍	0.9	—	—	—	5.8	—	—
3号墳	第69図	172	棘筥被鍍	2.8	—	—	—	4.5	—	—
3号墳	第69図	173	棘筥被鍍	2.9	—	—	—	6.6	—	—
3号墳	第69図	174	棘筥被鍍	2.9	—	—	—	5.2	—	—
3号墳	第69図	175	棘筥被鍍	3.7	—	—	—	7.2	—	—
3号墳	第69図	176	棘筥被鍍	2.5	—	—	—	6.4	—	—
3号墳	第69図	177	棘筥被鍍	1.8	—	—	—	4.9	—	—
3号墳	第69図	178	棘筥被鍍	3.7	—	—	—	7.8	—	—
3号墳	第69図	179	棘筥被鍍	1.2	—	—	—	5.6	—	—
3号墳	第69図	180	棘筥被鍍	1.4	—	—	—	5.7	—	—
3号墳	第69図	181	棘筥被鍍	1.1	—	—	—	6.9	—	—
3号墳	第69図	182	棘筥被鍍	1.8	—	—	—	6.6	—	—
3号墳	第69図	183	棘筥被鍍	2.4	—	—	—	5.8	—	—
3号墳	第69図	184	棘筥被鍍	2.3	—	—	—	5.8	—	—
3号墳	第69図	185	棘筥被鍍	2.4	—	—	—	4.9	—	—
3号墳	第69図	186	棘筥被鍍	1.7	—	—	—	6.5	—	—
3号墳	第69図	187	棘筥被鍍	3.7	—	—	—	5.8	—	—
3号墳	第69図	188	棘筥被鍍	3.0	—	—	—	6.7	—	—
3号墳	第69図	189	棘筥被鍍	2.2	—	—	—	5.7	—	—
3号墳	第69図	190	棘筥被鍍	4.2	—	—	—	4.6	7.1	5.7
3号墳	第69図	191	棘筥被鍍	1.2	—	—	—	4.5	—	—
3号墳	第69図	192	棘筥被鍍	1.4	—	—	—	5.3	—	—
3号墳	第69図	193	棘筥被鍍	0.8	—	—	—	6.1	—	—
3号墳	第69図	194	棘筥被鍍	1.8	—	—	—	4.6	—	—
3号墳	第69図	195	棘筥被鍍	1.9	—	—	—	4.1	—	—
3号墳	第69図	196	棘筥被鍍	2.5	—	—	—	5.5	—	—
3号墳	第69図	197	棘筥被鍍	1.2	—	—	—	4.4	—	—
3号墳	第69図	198	棘筥被鍍	1.2	—	—	—	6.1	—	—
3号墳	第69図	199	棘筥被鍍	2.6	—	—	—	6.4	—	—
3号墳	第69図	200	棘筥被鍍	0.8	—	—	—	6.4	—	—
3号墳	第69図	201	棘筥被鍍	1.7	—	—	—	5.2	—	—
3号墳	第69図	202	棘筥被鍍	1.7	—	—	—	5.7	—	—
3号墳	第69図	203	棘筥被鍍	2.7	—	—	—	6.2	—	—
3号墳	第69図	204	棘筥被鍍	1.9	—	—	—	5.1	—	—
3号墳	第69図	205	棘筥被鍍	1.3	—	—	—	4.0	—	—
3号墳	第69図	206	棘筥被鍍	1.1	—	—	—	5.0	—	—
3号墳	第69図	207	棘筥被鍍	2.0	—	—	—	5.5	—	—
3号墳	第69図	208	棘筥被鍍	1.9	—	—	—	4.9	—	—
3号墳	第69図	209	棘筥被鍍	1.4	—	—	—	7.2	—	—
3号墳	第69図	210	棘筥被鍍	1.6	—	—	—	4.4	—	—
3号墳	第69図	211	棘筥被鍍	2.3	—	—	—	5.2	—	—
3号墳	第69図	212	棘筥被鍍	1.2	—	—	—	3.3	—	—
3号墳	第69図	213	棘筥被鍍	2.4	—	—	—	4.5	—	—
3号墳	第69図	214	棘筥被鍍	1.4	—	—	—	3.7	—	—
3号墳	第69図	215	棘筥被鍍	1.5	—	—	—	5.4	—	—
3号墳	第69図	216	棘筥被鍍	1.8	—	—	—	4.8	—	—
3号墳	第69図	217	棘筥被鍍	0.9	—	—	—	6.6	—	—
3号墳	第69図	218	棘筥被鍍	1.1	—	—	—	4.8	—	—
3号墳	第69図	219	棘筥被鍍	1.2	—	—	—	4.1	—	—
3号墳	第69図	220	棘筥被鍍	1.5	—	—	—	3.3	—	—
3号墳	第69図	221	棘筥被鍍	1.4	—	—	—	6.2	—	—
3号墳	第69図	222	棘筥被鍍	0.7	—	—	—	3.8	—	—
3号墳	第69図	223	棘筥被鍍	1.9	—	—	—	5.9	—	—
4号墳	第74図	2	棘筥被鍍		28.0	9.3	67.6	3.8	6.4	5.1

第24表 鉄製品② (直刀・刀子等)

遺構名	挿図番号	種 別	現存重量 (g)	全長 (mm)	刀身長 (mm)	身幅 (mm)	身厚 (mm)	茎幅 (mm)	茎厚 (mm)	備 考
2号墳	第62図1	短刀	82.2	—	—	20.9	6.7	10.2	4.2	長軸40.2mm・短軸29.6mm 長軸92.0mm・短軸74.0mm 長軸50.0mm・短軸67.0mm
2号墳	第62図2	刀子	15.0	—	—	—	—	—	—	
2号墳	第62図3	刀子	15.2	—	91.2	17.5	3.2	—	—	
3号墳	第67図18	直刀	333.6	758	676	26.0	5.5	21.7	4.1	
3号墳	第67図19	直刀	320.0	697	626	23.0	5.5	14.5	4.5	
3号墳	第67図20	直刀	488.2	—	624	29.0	5.0	24.2	5.0	
3号墳	第67図21	直刀	221.7	544	476	19.7	3.9	10.0	4.5	
3号墳	第67図22	直刀	218.8	(401)	(354)	29.0	4.5	1.6	4.5	
3号墳	第67図23	直刀	206.7	—	—	32.0	6.0	—	—	
3号墳	第67図24	直刀	404.1	—	—	29.0	5.5	15.0	4.1	
3号墳	第67図25	直刀	236.1	—	—	8.8	5.1	—	—	
3号墳	第67図26	鞘尻金具	12.0	—	—	—	2.1	—	—	
3号墳	第67図27	鐔	60.0	—	—	—	3.0	—	—	
3号墳	第67図28	鐔	20.2	—	—	—	2.0	—	—	
3号墳	第68図29	刀子	65.4	—	176.0	16.5	4.6	2.6	—	
3号墳	第69図30	刀子	5.8	—	63.8	8.2	2.7	5.8	1.9	
4号墳	第74図1	刀子	10.9	—	—	13.8	3.0	8.2	1.8	

第25表 銭 貨

遺構名	挿図番号	名 称	現存重量 (g)	厚さ (mm)	外縁径 (mm)	内縁径 (mm)	穴長 (mm)
1号塚	第76図1	洪武通宝	2.2	1.3	22.7	18.8	5.7
1号塚	第76図2	洪武通宝	2.6	1.0	22.4	16.8	4.9
2号溝	第81図2	政和通宝	1.7	1.0	24.3	20.5	6.8
2号溝	第81図3	永樂通宝	0.5	1.2	—	—	—
グリッド	第82図27	元祐通宝	2.4	1.1	24.0	18.7	6.0
グリッド	第82図28	寛永通宝 (古寛永)	2.5	0.7	24.8	19.4	6.4
グリッド	第82図29	寛永通宝 (新寛永)	2.2	0.6	22.8	18.3	6.6
グリッド	第82図30	寛永通宝 (新寛永)	2.3	0.9	24.3	20.0	6.9
グリッド	第82図31	寛永通宝 (新寛永)	1.6	0.9	22.8	18.7	6.7

第26表 石製品・銅製品・土製品・石器

遺構名	挿図番号	名 称	材 質	現存重量 (g)	備 考
3号墳	第68図35	切子玉	水 晶	5.28	鍍金・双脚飾鋳半球部破片の可能性あり 鍍金・双脚飾鋳半球部破片の可能性あり 鍍金 鍍金 鍍金 鍍金 繩文時代中期土器片 繩文時代中期土器片 繩文時代中期土器片 繩文時代中期土器片 繩文時代 繩文時代
3号墳	第68図36	切子玉	水 晶	8.98	
3号墳	第68図37	小玉	ガラス	0.04	
3号墳	第68図38	座付金具	銅	1.46	
3号墳	第68図39	座付金具	銅	1.14	
3号墳	第68図40	空玉	銅	0.38	
3号墳	第68図41	空玉	銅	0.35	
3号墳	第68図42	耳環	銅	13.97	
3号墳	第68図43	耳環	銅	18.32	
3号墳	第68図44	耳環	銅	6.73	
3号墳	第68図45	耳環	銅	6.99	
4号墳	第75図13	有孔円盤	滑 石	2.22	
グリッド	第82図22	有孔円盤	滑 石	4.91	
グリッド	第82図16	土器片錘	土 器	29.27	
グリッド	第82図17	土器片錘	土 器	29.08	
グリッド	第82図18	土器片錘	土 器	27.95	
グリッド	第82図19	土器片錘	土 器	29.66	
グリッド	第82図20	石鏃	黒曜石	1.07	
グリッド	第82図21	石鏃	チャート	0.58	

第27表 遺構別土器出土量 (実測図掲載分は除く)

遺構名(種別)	2号墳		3号墳		4号墳		1号塚		1号土坑		近世溝内		グリッド出土	
	土師器	須恵器	土師器	須恵器	土師器	須恵器	土師器・等	須恵器	土師器・等	須恵器	土師器・等	須恵器	土師器・等	須恵器
口縁部 (破片数)	24	3	15	11	133	0	38	0	0	0	1	0	3	1
(重量・g)	183.8	84.1	277.1	85.1	898.3	0	416.3	0	0	0	3.4	0	40.2	15.9
胴部 (破片数)	77	7	60	57	1248	7	230	0	5	0	29	4	37	14
(重量・g)	653.1	152.3	540.1	741.1	8633.6	66.2	2462.1	0	27.9	0	183.8	50.1	488.3	402.1
底部 (破片数)	13	0	4	1	22	0	11	0	0	0	1	0	1	3
(重量・g)	782.9	0	238.6	11.4	752.9	0	565.9	0	0	0	23.2	0	19.6	151.7

※4号墳から、他に陶器片3片(27.8g)が出土している。

1号塚、1号土坑、近世溝内、グリッドの「土師器・等」には、中近世カワラケ・陶器及び縄文土器を含む。

第4章 まとめ

第1節 有吉遺跡（第4次）

有吉遺跡の発掘調査は、昭和49年度の第1次調査から昭和63年度の第4次調査に至るまで、断続的に4回行われ、その範囲は台地上及びその斜面部63,000㎡の遺跡全体に及んだ。第4次調査では、縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡としてとらえられてきた第3次調査までの調査成果⁽¹⁾に、時代的にも、内容的にも新たな調査成果を加えることができた。ここでは、第4次調査で得られた調査成果を時代を追ってまとめるとともに、4回の発掘調査を通して有吉遺跡を概観したい。

1 旧石器時代

有吉遺跡の発掘調査の中で、第4次調査において初めて行われた旧石器時代の本調査の調査成果は、複合遺跡である有吉遺跡の時間的範囲を大幅に遡上させることになった。

第4次調査区内からは、IX層からIII層までの間の4枚の文化層に、単独出土を含めて7つのブロックを検出することができた。同時期に存在していたブロック数は1ブロック～3ブロックである。ただし、複数のブロックが同時期存在したとしても、ブロック間には相関性が認められないため、単独で存在していた可能性が高く、各文化層中には一時的な生活面が残された程度といえよう。文化層順にまとめてみたい。

第1文化層には、第3ブロックが該当する。層位的には、立川ロームの第2黒色帯下部に当たるIX層段階に相当する。発掘調査の行われる地域によって、IXa・IXb・IXcと3分層されることもあるが、今回の調査区内では不明瞭で分層することができなかった。

下総台地におけるIX層段階では、石材にメノウを用いる傾向が高く、第3ブロックでも同様の傾向を指摘することができた。剥片剥離技術においては、剥離作業面と打面を入れ替えて寸詰まりの横長剥片を作り出す技術が観察され、縦長剥片を作り出す技術は認められなかった。このことから、メノウ、安山岩という石材が、横長剥片を作り出す剥片剥離の技術体系に組み込まれた石材であったと考えられる。

検出された石器群を見ると、石核はこの地点に廃棄されているが、利器とみられるものは1点も出土していない。また、敲石から石核への転用品が存在している。これらの状況から、第3ブロックは、石材のストックが欠乏状況にある単位集団の一時的な休息地であった可能性も考えられる。

第2文化層には、第2ブロック南側石器集中地点、第5ブロック及び第6ブロックの3ブロックが該当する。層位的には、立川ロームの第2黒色帯上部に当たるVII層段階に相当する。

第2ブロック南側石器集中地点では、比較的まとまった資料が検出された。石材では、IX層段階のメノウ、安山岩に加えて、チャート、珪質頁岩が出土しており、VII層段階でもIX層段階からの影響を受けながら、下総台地で一般的な石材が使用されているといえる。出土している剥片は横長剥片がほとんどで、第1文化層同様、メノウ、安山岩を石材とする剥片剥離技術は、横長剥片剥離を行うものであると考えられる。第19図5の石核のように、半截された盤状剥片の主要剥離面を打面として剥片剥離を行ったものなどは典型的な例ともいえる。また第6ブロックで出土したナイフ形石器も、横長剥片系のものを使用しており、定形的な縦長剥片を使用したものではない。

第3文化層には、第4ブロックが該当する。層位的には、立川ロームの始良丹沢火山灰(AT)を含むVI

層段階に相当する。

第4ブロックは、比較的小さな剥片を利用したエンド・スクレイパー2点、剥片2点の4点で構成される点数の少ないブロックである。いずれの石器も厚手で寸詰まりの剥片を利用したものである。

第4文化層には、第1ブロック北東側石器集中地点及び南西側石器集中地点、第2ブロック北側石器集中地点の2ブロックとして調査した3石器集中地点が該当する。層位的には、立川ロームのソフトローム層に当たるIII層段階に相当する。

第1ブロック北東側石器集中地点は、石材獲得及び石材使用の一連の技術体系から見ると、第11図10・第13図20の剥片の大きさからわかるように、所持していた石材は必ずしも小礫のように小さいものではない。それにもかかわらず、剥離された剥片は薄く小ぶりのものばかりである。これらのことは、このブロックを残した単位集団が比較的儉約した生活を営んでいたか、あるいは無駄の少ない確立された剥片剥離技術を備えていたことの反映と思われる。ただし、その中で緑色凝灰岩だけに関しては、原石に近い状態の礫を搬入し、粗割りを行い、石核及び大形剥片を廃棄するという特徴が指摘できる。一方、第1ブロック南西側石器集中地点では、北東側石器集中地点に比べて、石材使用にやや大雑把さがうかがえる。また、第2ブロック北側石器集中地点では、両極打法による剥片が出土している。礫の中にチャートの小礫が混ざっており、両極打法の石材となる原石があったものと考えられる。

石材利用の点から第4文化層をまとめると、第1ブロック北東側石器集中地点では良質な石材を巧みに利用しているのに対し、第1ブロック南西側石器集中地点では質の落ちる石材を粗く利用している。また、第2ブロック北側石器集中地点では少ない石材を有効的に用いているということができよう。

旧石器時代の調査成果を総合的に見ると、第1ブロック、第2ブロック以外ほどのブロックも小規模で、出土した石器も量的には多くないといえる。また、各ブロック間に相関性が認められないことは、周辺の遺跡で検出されている旧石器時代のブロックの傾向と整合する。これらのことは、有吉遺跡周辺のフィールドが、移動の中継地的な性格をもつものである可能性を示唆しており、その背景に存在する通称赤塚支谷をとりまく人々の行動パターンをうかがうことができるといえよう。

2 縄文時代

これまでの有吉遺跡における縄文時代の調査成果は、第2次・第3次調査において、早期の炉穴群及び土坑、前期の石鏃製造址とした遺構の調査及び早期～後期の各期の土器の出土が報告されている。これに第4次調査では、炉跡3基（草創期・前期の可能性のあるもの・中期各1）、集石遺構1基（前期）、土坑1基（前期の可能性のあるもの）の調査成果を加えることができた。時期ごとにまとめてみたい。

草創期には、028号跡として調査した炉跡が帰属する。028号跡は、その内部に炉体土器あるいは土器を立てる施設のように、深鉢の口縁部が検出された炉跡である。土器の特徴から多縄文系土器の時期に比定できる。炉跡周囲の精査の結果、柱穴状のピット2か所と硬化面を検出したが、竪穴住居跡の痕跡を積極的に裏付ける確証は得られなかった。

前期には、025号跡として調査した集石遺構が帰属する。また、026号跡として調査した土坑及び027号跡として調査した炉跡も、遺構の立地及び形状等から前期の可能性のある遺構として判断した。025号跡は、径約4mのプラン内に50点の礫が集中して検出された集石遺構で、炉の存在から、竪穴住居跡の可能性も考えられるものである。礫に伴って出土した土器片は、いずれも小片ではあるものの、花積下層式に比定できるものと判断した。50点の礫は、平均重量が113.7g（最大860.3g・最小0.2g）を量り、ほぼ6：4

の比で被熱したものがやや多い。土器・礫のほかには、楔形石器・打製石斧・磨製石斧・敲石・剝片各1点、碎片2点が出土している。

中期には、017号跡として調査した炉跡が帰属する。017号跡は、曾利系の深鉢を含む複数個体の土器を土器片囲いとしてもつ炉跡で、加曾利E II式に比定した。慎重な精査の甲斐なく、炉跡の周囲に竪穴住居跡の痕跡を確認できなかったことは、当該期通有の屋内炉としてではなく、同一形態での屋外炉としての存在並びに機能を有するものと思われる。

グリッド出土として扱った遺物を見ると、遺構が検出されなかった時期の土器では、早期の土器10点(三戸式1点・茅山上層式3点を含む)、後期の土器4点(安行1式2点を含む)が出土した。土製品では、前期及び中期の土器片を再利用した土器片錘4点・土製円板2点が出土し、また石器では、石鏃11点・石鏃未製品と思われるもの3点・楔形石器7点・打製石斧1点・敲石1点・磨石2点・石皿1点・Uf1点・Rf2点・不明石製品1点・剝片32点が出土した。

有吉遺跡の縄文時代は、第4次調査の成果を加えることによって、量的にはけっして多くないものの、時期的にも、質的にもバラエティーに富んだ充実したものとなったといえる。とりわけ草創期については、県内で隆起線文系・爪形文系・多縄文系の各土器の出土が確認できた遺跡名を挙げてみても、我孫子市布佐余間戸遺跡⁽²⁾、鎌ヶ谷市林跡遺跡⁽³⁾、印西市地国穴台遺跡⁽⁴⁾・榎峠遺跡⁽⁵⁾・雨古瀬遺跡⁽⁶⁾・高根北遺跡⁽⁷⁾、印旛郡印旛村瀬戸遠蓮遺跡⁽⁸⁾、佐倉市岩富漆谷津遺跡⁽⁹⁾、成田市取香和田戸(空港No.60)遺跡⁽¹⁰⁾、香取郡多古町一畷田甚兵衛山南(空港No.12)遺跡⁽¹¹⁾・下総町成井遺跡⁽¹²⁾・山田町山倉大山遺跡⁽¹³⁾、東金市大谷台遺跡⁽¹⁴⁾、山武郡松尾町赤羽根遺跡⁽¹⁵⁾、千葉市土宇遺跡⁽¹⁶⁾、市原市南原遺跡⁽¹⁷⁾、袖ヶ浦市東郷台遺跡⁽¹⁸⁾・山王台遺跡⁽¹⁹⁾、木更津市台木B遺跡⁽²⁰⁾・下根田A遺跡⁽²¹⁾、君津市本名輪遺跡⁽²²⁾・大和田遺跡⁽²³⁾、富津市前三舟台遺跡⁽²⁴⁾の23遺跡に、本遺跡を含めた24遺跡と少ない⁽²⁵⁾。そのうち、多縄文系土器の中の表裏縄文土器を出土している遺跡に限ってみると、印西市雨古瀬遺跡・高根北遺跡、香取郡山田町山倉大山遺跡、袖ヶ浦市東郷台遺跡、木更津市台木B遺跡・下根田A遺跡及び本遺跡の7遺跡にすぎない。また、今回本遺跡で出土した表裏縄文土器に比較的類似した例は、印西市高根北遺跡において1群2類とされた報告例、及び木更津市下根田A遺跡において1群1類とされた報告例の中に見出すことができるものである。なお、内部施設として土器を出土した草創期の炉跡の調査例となると、全国的に見ても類例がなく、今後の草創期の研究における貴重な資料を提供できたものとする。

3 弥生時代

第3次調査において、後期の竪穴住居跡3軒の調査成果を報告しているが、第4次調査では新たに中期・須和田式期の竪穴住居跡1軒の調査成果を加えることができた。

010号竪穴住居跡は、検出面がほぼ床面であったため、遺構の遺存状況はけっして良いとはいえない。しかし、検出された炉・ピット及び床面の観察等によって得られたわずかな情報から、プラン・主軸方向・上屋構造・出入口施設等、住居跡の規模・構造について推定復元することが可能であった。

出土した遺物は量的に少なく、いずれも小さな破片ではあるものの、遺構の検出状況から考えると、本住居跡の帰属時期を端的に示しているものであると思われる。器形のうかがえるものは、図化した壺1点のみであるが、その特徴から須和田式期の終末期⁽²⁶⁾ととらえた。

房総半島を中心とした関東南東部において、中期・須和田式期の竪穴住居跡の検出例は極めて少ない。今回の報告に際して、県内の遺跡からの検出例で確認できたものは、市川市木戸口遺跡第1地点⁽²⁷⁾3軒、

袖ヶ浦市箕田遺跡⁽²⁸⁾ 2軒、木更津市清水谷遺跡⁽²⁹⁾ 1軒、同祝崎古墳群⁽³⁰⁾ 1軒、香取郡小見川町ササノ倉遺跡⁽³¹⁾ 1軒の例に、本遺跡の1軒を加えた6遺跡9軒を数えるにとどまる。本遺跡の調査成果が、今後の当該期の竪穴住居跡そのものの研究あるいは集落研究といった、関東南東部における弥生文化研究に資する役割は大きい。

4 古墳時代以降

有吉遺跡が古墳時代後期から飛躍的に拡大し、奈良・平安時代へと連綿と続く集落跡を中心とする遺跡であることは、既に刊行された第1次～第3次調査の各調査報告書において明らかである。第4次調査では、奈良時代の遺構こそ検出されなかったが、古墳時代後期については竪穴住居跡8軒、平安時代以降については竪穴住居跡7軒・土坑1基・方形周溝状遺構1基・溝状遺構2条の調査成果を加えることができた。

第4次調査は、遺跡全体の規模と比べると、ちょうど7分の1にすぎない小さな範囲の調査ではあるが、遺物の出土状況の詳細な観察から、集落復元へのアプローチとなる興味深い資料が得られたことは大きな成果といえる。ここでは、調査時にそれぞれ007・008と遺構番号を付けた2軒の竪穴住居跡の調査成果を紹介することで古墳時代以降のまとめに変えたい。

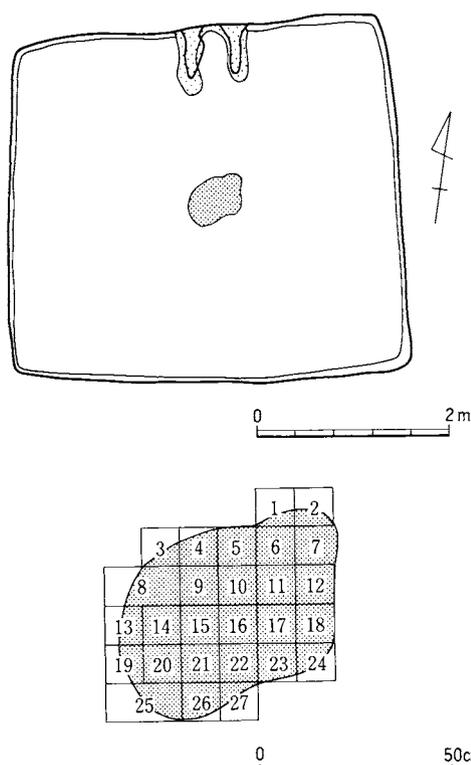
古墳時代後期に帰属する007号竪穴住居跡からは、土製小玉4点及び土製丸玉6点の計10点⁽³²⁾が出土した。007号竪穴住居跡のプラン内には、わずかに床面を高くした形で、平安時代の006号竪穴住居跡が南東壁側に一部重複して構築されており、その部分の情報は残念ながら失われている。10点のうち出土地点のわかる9点は、レベル的にはいずれも床面及びその直上からの出土であるが、平面的な出土分布が小玉と丸玉ではおおむね分かれているといえる。すなわち、小玉4点は丸玉1点とともに住居の南西壁沿いに分布し、一方、住居プランの北隅付近には丸玉4点がまとまって出土している。また、個々の遺物の観察から、ススの付着状況及び付着部位を比べてみると、前者では5点中4点(小玉3+丸玉1)の全面あるいは外面の一部にススの付着が認められるのに対し、後者では4点中1点の孔内面にしか認めることができなかった。数量的に少ないこと、重複遺構により部分的に欠落していること、しかも小玉の分布範囲が重複遺構に近いことなどの情報的な制約はあるものの、興味深い出土例である。

同じく古墳時代後期に帰属する008号竪穴住居跡からは、ガラス質発泡物と称した遺物⁽³³⁾が出土した(図版44)。本住居跡は、覆土の堆積状況等から、住居廃絶に伴う焼却行為による焼失住居であると推定したものである。ガラス質発泡物は、平面的には住居プランのほぼ中央部、レベル的には踏みしめにより硬化した床面の直上に当たる部分から出土し、それを包括する土とともにすべてをサンプリングした。サンプリングは、遺物の分布範囲(面積2262.19cm²)を網羅するように、方位にあわせて10cm四方のメッシュを設定し、原則として各メッシュごとに取り上げるという方法をとった(第83図)。取り上げたサンプルは、乾燥させた後、肉眼で明らかにガラス質発泡物とわかるものを拾い上げ、重量等を測定した(第28表)。その結果、1メッシュ(100cm²)中に占める分布面積は25.51cm²～125.18cm²を測り、重量は0mg～13,620mgを量る⁽³⁴⁾。単位当たり重量を比較すると、130mg/cm²を超えたサンプルNo.10が飛び抜けて多く、70mg/cm²～50mg/cm²のサンプルNo.15、No.11、No.9、No.6、No.7が続いている。また、単位当たり重量の数値の大きいメッシュは、分布範囲中の北半分に集中しており、北東-南西方向に長く分布していることがわかった。この方向は、カマドのある軸を主軸とした場合の対向軸の方向に近いといえる。

ところで、弥生時代から平安時代までの各時代の竪穴住居跡から出土した同様の遺物で、従前「鉄滓状

第28表 ガラス質発泡物計測値

サンプルNo.	重量 (mg)	面積 (cm ²)	単位あたり重量 (mg/cm ²)	調査時遺物No.	備考
1	380	25.51	14.90	0033	
2	400	35.35	11.32	0034	
3	90	31.23	2.88	0035	
4	830	80.35	10.33	0036	
5	1450	100.00	14.50	0037	
6	5330	100.00	53.30	0038	
7	5530	107.71	51.34	0039	
8	1630	125.18	13.02	0040	
9	5690	100.00	56.90	0041	
10	13620	100.00	136.20	0042	
11	6220	100.00	62.20	0043	
12	530	100.00	5.30	0044	
13	200	54.42	3.68	0045	
14	1790	100.00	17.90	0046	
15	7720	100.00	77.20	0047	
16	2050	100.00	20.20	0048	
17	1320	100.00	13.20	0049	
18	250	100.00	2.50	0050	
19	500	50.90	9.82	0051	
20	500	100.00	5.00	0052	
21	200	100.00	2.00	0053	
22	-	100.00	-	0054	微量の土のみ
23	130	94.43	1.38	0055	
24	-	50.55	-	0056	微量の土のみ
25	10	86.73	0.12	0057	
26	20	85.57	0.23	0058	
27	-	34.26	-	0059	微量の土のみ



第83図 008号住居跡出土のガラス質発泡物サンプル採取位置

遺物」という名称で扱われているものがある。ほとんどが焼失住居の床面直上で検出されているもので、その中には磁石やメタルチェッカーに反応せず、鉄分をほとんど含んでいないものがあり、おそらくガラス質発泡物に相当するものが含まれていると思われる。観察できる遺物の特徴としては、発泡したガラス質の不定形の細粒が大部分を占めており、また状態の良いものでは、火熱を受けて硬化した粘土に円筒状の植物体（茎）の圧痕が見えることが挙げられる。成因を推測すると、竪穴住居等の上屋あるいは内部施設の構築材として利用されたカヤ・ワラ等植物体が、同じく構築材として利用されていた粘土等によってパッキングされた状態で住居の焼失に伴う火熱を受け、植物の中の珪酸体が溶けて発泡したものと思われる。今回の報告に際しては、本資料の表面的な観察しか行えなかったが、同様の資料の蓄積及び成分分析等資料のデータ化に伴って、竪穴住居等の上屋あるいは内部施設の構造及びその構築方法の研究、並びに竪穴住居等の復元景観に新たな展開をもたらす可能性があることを示唆しておきたい。

5 有吉遺跡の発掘調査全体の成果から（第84図～第86図、第29表）

本章の冒頭でも記したとおり、最終的に面積63,000m²を測る遺跡全体が調査対象となった有吉遺跡は、4回に調査区域を分けて行われた発掘調査に伴い、本書を含めて4冊の報告書が刊行され、各次の調査成果が報告されたことになる。断続的ではあるが、足かけ15年に及ぶ有吉遺跡の調査によって、もたらされた情報量は膨大なものがあり、第1次調査から四半世紀を経た今、各研究分野における基礎データの提供がようやく成された段階にすぎない。ここで、各報告書から主に数値的に有吉遺跡全体を改めて概観し⁽³⁵⁾、

成果のまとめとしたい。

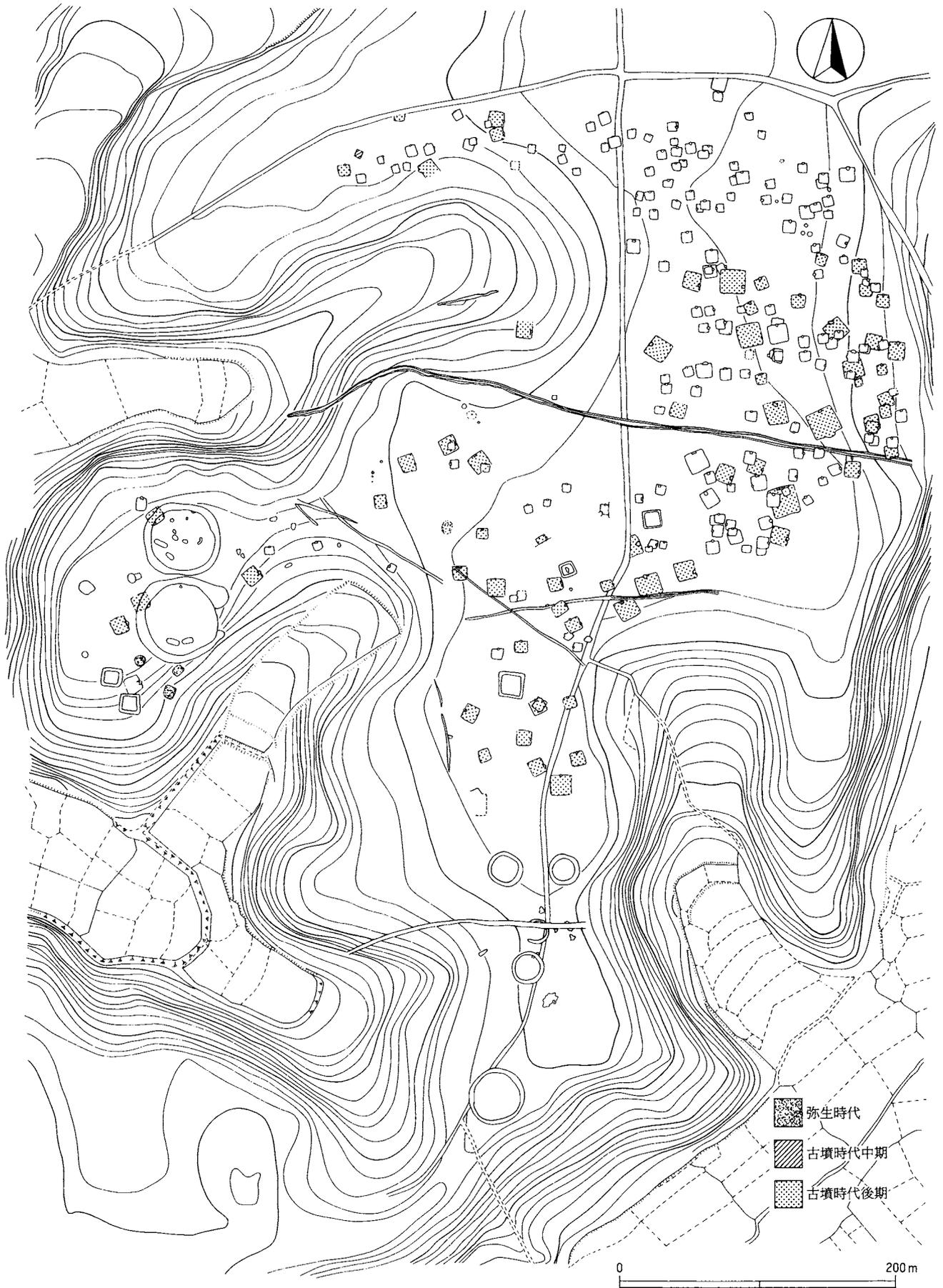
旧石器時代の調査成果は第4次調査で挙げられたもののみである。繰返しになるが、IX層からIII層までの間の4枚の文化層中に、単独出土を含めて7ブロック・9石器集中地点が検出され、出土した遺物は、表採資料を含めると222点を数える。今後は、石器集中地点の立地及び性格などの分析から発展して、周辺遺跡の調査成果をあわせた巨視的な研究の展開が期待される。

縄文時代及び弥生時代に関しては、千葉東南部地区はもちろん県内においても希有かつ貴重な遺構・遺物を含めた調査成果を列挙することができる。縄文時代の調査成果では、竪穴住居跡と確認されるものこそ検出できなかったものの、時期ごとに検出された遺構を挙げると、草創期の炉跡（1基）、早期の炉穴（18群42基）・土坑（1基）、前期の石鏃製造址・集石遺構（各1基）及び該期の可能性のある炉跡・土坑（各1基）、中期の炉跡（1基）がある。出土した遺物も、草創期～後期の土器をはじめ、石器・土製品等多岐にわたる。また、弥生時代では、中期の竪穴住居跡1軒及び後期の竪穴住居跡3軒の調査成果を報告した。その中でも特記すべきは、第4次調査における縄文時代草創期の炉跡及び弥生時代中期の竪穴住居跡の調査例であろう。縄文時代草創期の炉跡は、多縄文系土器を炉体土器あるいは炉内の施設としてもつもので、全国的にも注目しに値するものであり、弥生時代中期・須和田式期の竪穴住居跡の検出例は、県内の例を挙げても10例に満たないほど希有なものであることは、それぞれ前項に記したとおりである。また、弥生時代に関しては、第3次調査において遺跡の西部で検出された後期（少なくとも1軒は久ヶ原式期）の竪穴住居跡3軒は、その立地が台地上とはいえ、南西から延びる小谷津に南面する台地の肩部あるいは

第29表 遺構の種類と時期別総数

遺 構 の 種 類	時 代	時 期	総 数	第1次調査	第2次調査	第3次調査	第4次調査
竪 穴 住 居 跡	弥 生	中 期	1				1
		後 期	3			3	
石 鏃 製 造 址 集 石 遺 構 炉 跡	古 墳	中 期	1	1			
		後 期	68	40	16	5	8
		奈 良	39	39			
		平 安	99	82	6	4	7
石 鏃 製 造 址 集 石 遺 構 炉 跡	縄 文	時 期 不 明	25	25			
		前 期	1		1		
		前 期	1				1
		草 創 期	1				1
		前 期 ？	1				1
		中 期	1				1
炉 穴 土 坑	縄 文	早 期	18群42基		9群29基	9群13基	
		早 期	1			1	
		前 期 ？	1				1
円 墳 円 形 周 溝 状 遺 構 方 形 周 溝 状 遺 構 溝 状 遺 構	平 安 以 降	古 墳	13	6		6	1
		古 墳 ？	2			2	
		古 墳 ？	5		5		
		古 墳 ？	4	1	1	2	
		平 安 以 降	1				1
	平 安 以 降	9	2	4	3	2	

- * 第1次～第3次調査では、和泉期・鬼高期・真間期・国分期という時期区分で報告している。ここでは、それを古墳時代中期・同後期・奈良時代・平安時代に単純に置き換えた。
- ** 第2次調査185号址と第4次調査009号竪穴住居跡は同一遺構。調査区域との関係で2度の調査歴をもつため、合計時に是正した。
- *** 調査区域との関係で、025号址は第1次・第2次調査の2度の調査歴をもち、第1次調査061号址と第4次調査022号溝状遺構は同一遺構であるため、合計時に是正した。



第84図 有吉遺跡時代別竖穴住居跡分布図 (1)

緩斜面部に位置することから見て、台地下に広がる低地との関連性をうかがわせるものとなっている。

古墳時代の調査成果としては、円墳2基、中期の竪穴住居跡1軒及び各次調査での累計が68軒を数える後期の竪穴住居跡を報告した。中期の竪穴住居跡は、第1次調査において遺跡の北西部から検出された唯一例に終止し、「集落としての規模、あるいは該当期の様相等々は不詳であるが、台地全域の調査によって遺構の数を増し、これによってかなり明確に把握されると確信している。」と記した第1次調査の報文に反する結果となった。それに比べると、後期の竪穴住居跡数は飛躍的に増加し、その立地も遺跡全体に広がっている。細かく見ると、遺跡東側から南側の、台地平坦面から緩斜面部にかけての密度がやや濃い。また、第3次調査における2期の円墳の調査成果で、「確定的な年代を付与することができないが、…(中略)…7世紀後半代に含まれることが予想される。」として報告された当該期の集落と墓域との関連性については、各次調査で検出され、第2次調査の小结において「周溝遺構」あるいは「周溝群」として慎重な報告が成されたものとともに、南側に尾根続きで隣接する上赤塚古墳群の成果をあわせた上で、再考の余地を残しているといえよう。

奈良時代の調査成果としては、第1次調査における39軒の竪穴住居跡が報告されたのみである。古墳時代後期に、数の上でも、占地の上でも飛躍的に拡大した集落域は、奈良時代に及んで遺跡の北東部に集約し、見かけ上ある程度の収縮を見せている。

平安時代に関しては、各次調査での累計が99軒を数える竪穴住居跡の調査成果を報告した。当該期の竪穴住居跡の軒数は、第2次調査報告書の小结で「竪穴住居址群の主体となる」と記され、また第3次調査報告書の結語で遺跡の「主体」とされた古墳時代の竪穴住居跡軒数を、数量的には凌駕している。平安時代の集落域は、奈良時代に比べて再び拡大するが、占地的には遺跡の南側を除いた北半部に集約しており、遺跡北東部の平坦面に積極的に進出しているように見える。

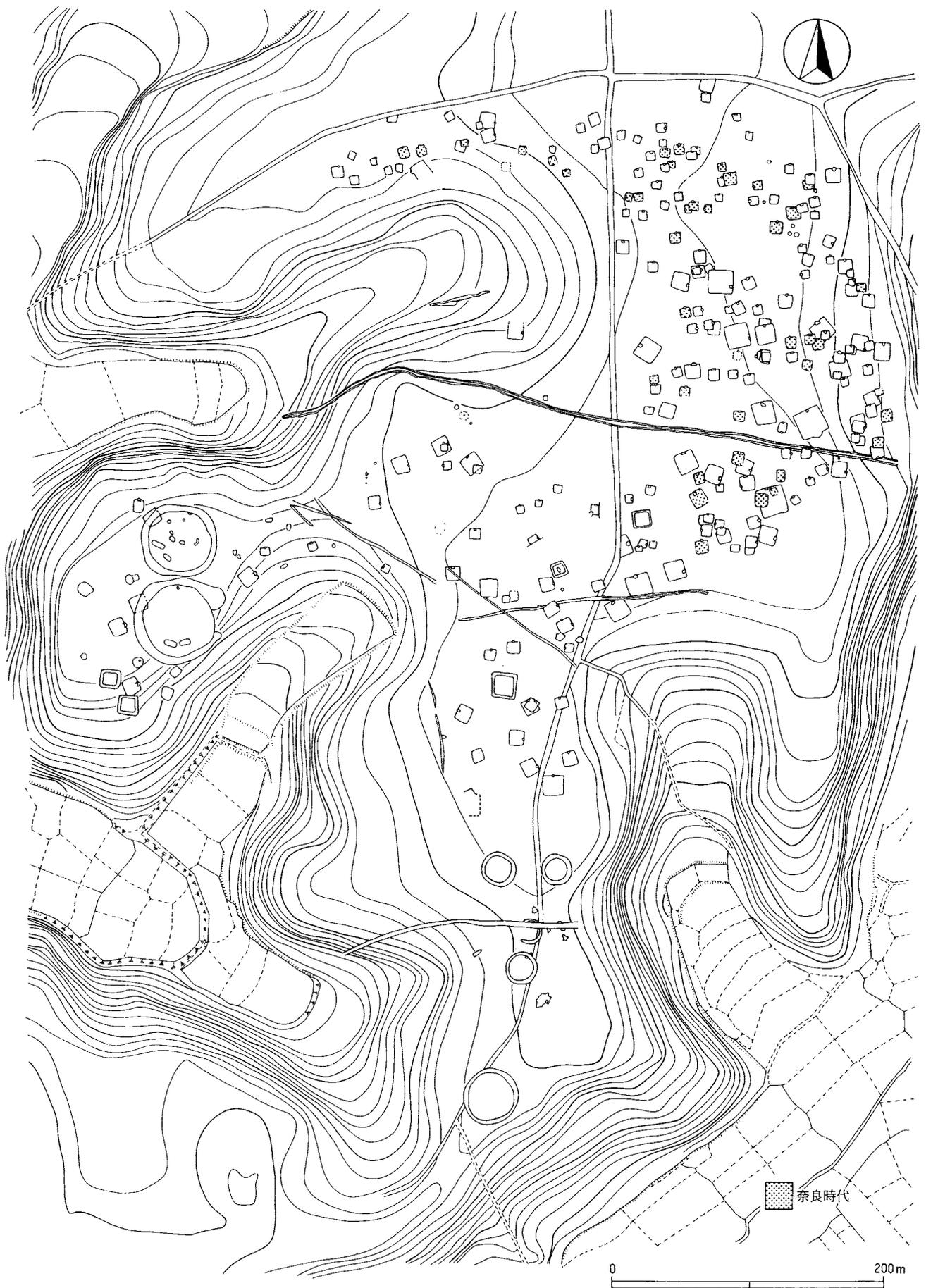
古墳時代後期～奈良・平安時代の有吉遺跡は、最終的な竪穴住居跡の分布状況を見ると、同時期の竪穴住居跡348軒・掘立柱建物跡15棟などを検出した高沢遺跡⁽³⁶⁾と、南から湾入する谷津を隔ててあたかも対峙するかのような位置関係にあるともいえる。

第2節 高沢古墳群

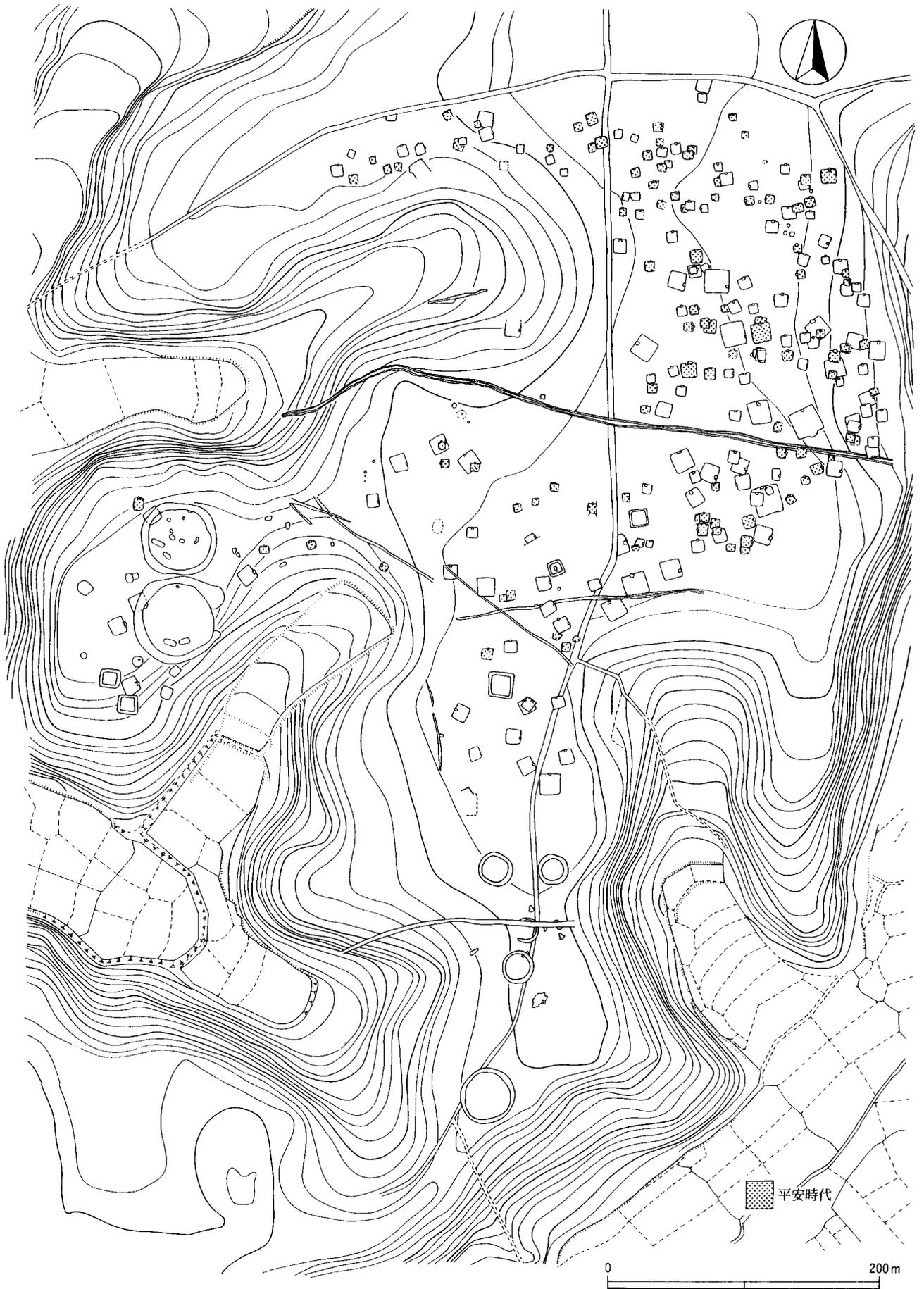
1 高沢古墳群と周辺古墳群について(第87図)

第1章においても触れたように、本古墳群に隣接して生浜古墳群⁽³⁷⁾、南二重堀遺跡⁽³⁸⁾がある。いずれも本古墳群と同じく古墳時代後期に属すると考えられる古墳の調査が行われている。従来、これら3遺跡とJR外房線の北側に存在する古墳群を総称して、「兼塚古墳群」との名称が付されていた⁽³⁹⁾。生浜古墳群では6基、南二重堀遺跡では8基、本古墳群では4基のいずれも円墳が、これまでにそれぞれ確認・調査された。なお、南二重堀遺跡の北側部は調査前に既に削平されており、この数よりもさらに数基の古墳があった可能性がある。また、JR外房線の北側には、未調査であるが「兼塚古墳群」に包括されるべき墳丘が、少なくとも6基あり⁽⁴⁰⁾、合計30基前後の一体をなす古墳群となる可能性がある⁽⁴¹⁾。これらの古墳群は、時期差はあるものの古墳時代後期から奈良時代にかけて造営ないしは追葬されたものと考えられる。当該期に伴う集落は、隣接する高沢遺跡、南二重堀遺跡において、各段階に連続して見られることから、その有機的関係が想定されよう。

さらに西側を見ると、大道遺跡に2基、有吉遺跡に2基⁽⁴²⁾がそれぞれ存在している。ちなみに、有吉遺



第85図 有吉遺跡時代別竪穴住居跡分布図(2)



第86図 有吉遺跡時代別竪穴住居跡分布図 (3)

跡では2次調査分で「円形周溝」が4基検出されている⁽⁴³⁾。これら「円形周溝」に関しては、本来墳丘をもっていたかどうかは不明であるが、位置的なことから、これまで述べてきた一連の後期古墳と関連性をもつ可能性がある。大道遺跡に関しては、古墳自体は未調査であるが、近隣から後期集落が検出されており⁽⁴⁴⁾、集落と同時期の推測も十分に可能である。

また、有吉遺跡のある台地先端部に上赤塚古墳群があり、5基の円墳が確認されている。1号墳のみが調査され、5世紀前半代の古墳であることが判明している⁽⁴⁵⁾ことから、残りの古墳も1号墳に近い時期のものと考えられる。

以上のように、通称赤塚支谷と通称赤井支谷に挟まれた台地上には、古墳時代後期全般に円墳を中心とする群集墳が形成されている。さらに、この台地先端部には上赤塚1号墳に代表される中期古墳が存在する。その位置については、古いものほど台地の先端部付近に立地し、時代が下るにつれて谷奥へといく傾向があるといえよう。これらに伴う集落は、隣接する有吉遺跡、高沢遺跡、南二重堀遺跡、種ヶ谷津遺跡、大道遺跡に古墳時代前期から後期、奈良時代に至るまで存在し、古墳築造を支えていたと考えられる。

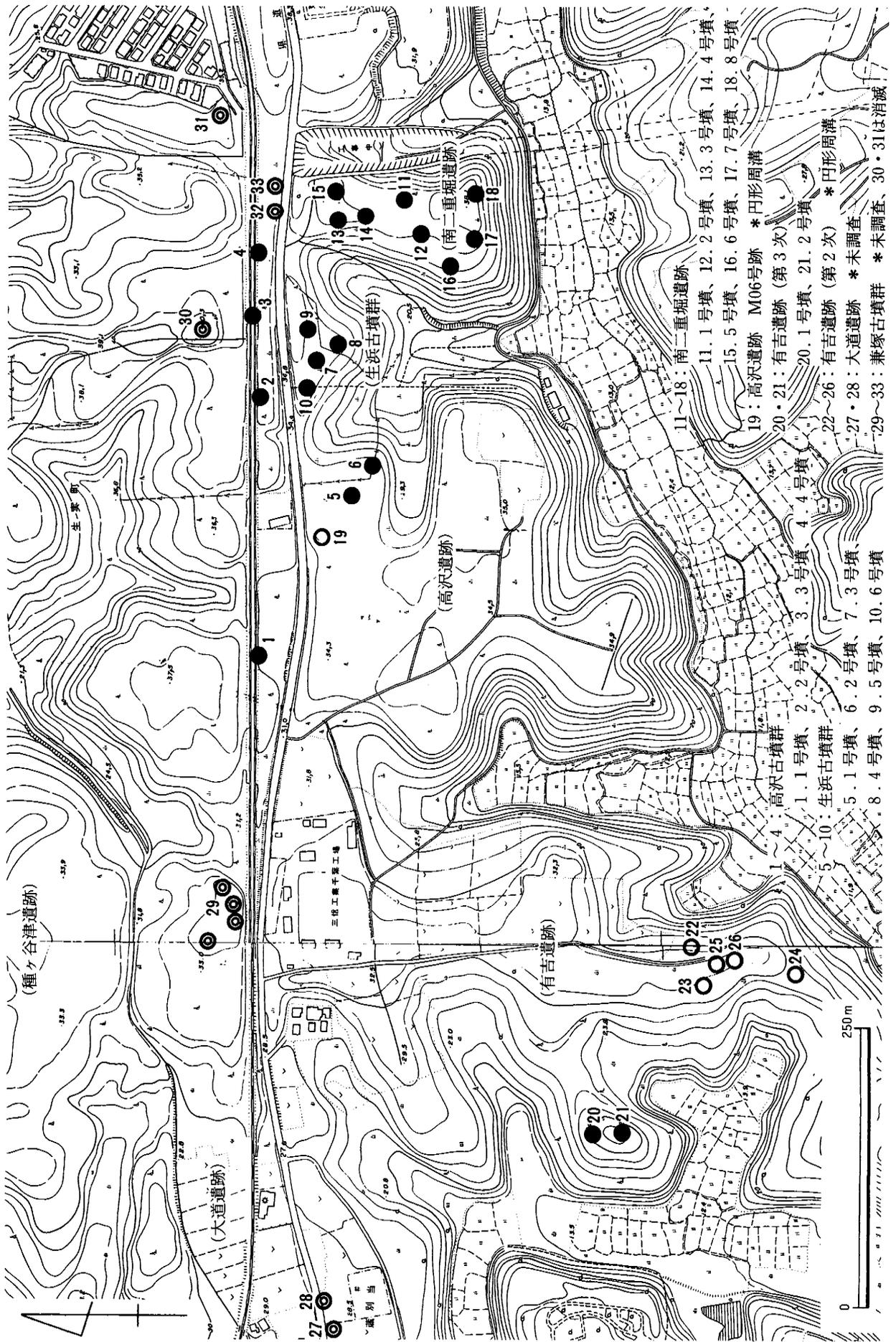
2 高沢古墳群の年代的位置付け

本古墳群はいずれも鉄道建設の際に北側部分が削平されており、全容を残すものはないが、その年代的な位置付けについて考えてみたい。

1号墳は墳丘が残存している部分には埋葬施設は見られず、周溝内に長形状の掘込みを検出したのみである。遺物も全く検出されず、その性格は不明点が多いが、いわゆる周溝内埋葬の可能性を指摘したい。出土した土師器坏から年代について考えると、第58図1・3が6世紀後半、2が5世紀末～6世紀前半に比定できる。出土状況については、2が周溝覆土下層(15層)、1・3が周溝覆土上層(14層)に包含され、1と3が近接した状態で検出されている。もちろん、量的にも少なく、周溝内出土という状況は、古墳の年代を確定的なものとするには不十分である。だが、周溝覆土下層(15層)は第1次堆積層と考えられることから、2が古墳の築造年代に比較的近い位置を示すと考えられる。また、1・3についても依存度が高いことから、これらの土器の時期までの利用(追葬)を示している可能性がある。

2号墳については、裾部に木棺直葬の主体部を2基検出した。裾部に主体部を有する点は、「変則的古墳」の特徴の一つと共通する。主体部内に土器は検出されず、明確な年代を付与することは出来ない。しかし、墳丘内及び周溝出土須恵器(第63図12・22)は陶邑編年TK43併行期に位置付けられる。土師器坏についても概ねこの期に位置づけられ、6世紀後半とすることができよう。なお、20については中期のいわゆる和泉式に比定される高坏であるが、墳丘盛土中央部の下部から検出されており、築造時に混入したものと考えられ、本古墳とは直接関係ないものと判断した。

3号墳は、横穴式石室をもつものであるが、石室本体が鉄道建設により削平され、不明確な部分が多い。また、前庭部における遺物出土状況は、須恵器、鉄製品、銅製品、石製品などが多く散乱しているというものであった。しかし、直刀及び装飾品が多く残存し、本古墳群及び周辺古墳群の中でも群を抜く内容であることから、単に盗掘による攪乱ではなく、追葬時における攪乱の可能性を指摘できる。さらに、出土須恵器坏を現在の編年観に参照してみても、7世紀中葉(第66図1・3)と8世紀前葉(第66図6～11)の2時期を確認することができ、追葬の可能性をより強くする。ちなみに、近年の陶邑窯及び湖西窯編年の見直し作業を参照すると⁽⁴⁶⁾、両者は近似する年代を有することになり、一括性の高い状況と考えることもできるが、直刀及び鉄鏃の数量の多さや耳環が2対ある点などからも、追葬された結果の状況であると



第87図 高沢古墳群及び周辺の古墳

判断したい。

4号墳は、頂部よりややずれた位置に木棺直葬の主体部をもつものである。だが、主体部の中心部はやはり攪乱を受け、副葬品も鉄鏃と刀子のわずか2点にすぎなかった。墳丘及び周溝内出土土器の年代について考えると、第75図5は前期、7～9は中期、3・4は後期の所産と考えられ、大きな幅が見られる。7・8は周溝覆土上層から出土し、古墳築造の年代を示すものとも考えられる。しかし、主体部出土鉄鏃は明らかに後期の所産であることから、墳丘表土からの出土ではあるが、3・4の須恵器を年代の指標とすることができると思われる。これらの須恵器はTK209併行期に位置づけが可能であり、7世紀前葉との年代が得られる。よって、少なくとも本古墳主体部の年代は、これに近い位置を考えたい。

以上のように、追葬を考慮した年代的位置付けを行うと、1号墳（5世紀末葉～6世紀前半・6世紀後半）、2号墳（6世紀後半）、4号墳（7世紀前葉）、3号墳（7世紀中葉・8世紀前葉）という順序の本古墳群の変遷が得られる。埋葬形態に関しては、粘土郭を有する木棺直葬（1号墳・2号墳・4号墳）から横穴式石室（3号墳）へという変化が見られる。なお、横穴式石室をもつ3号墳は、本古墳群中でも注目される副葬品類をもつ。隣接する生浜古墳群2号墳及び4号墳も横穴式石室である上、副葬品である直刀及び鉄鏃の形状から、ほぼ同時期であると考えられる。特に生浜古墳群2号墳においては、周溝内出土であるが年代的位置付けの指標となった須恵器坏及び長頸壺と、ほぼ同様のものが本古墳群3号墳にも見られる（第66図3・12）。副葬品の組成についてもやや異なりが見られるが⁽⁴⁷⁾、大枠において類似する内容である。本地域の後期古墳群を分析する際に重要な点となると思われる。

注1 種田斉吾・阪田正一 1975『千葉東南部ニュータウン3－有吉遺跡（第1次）－』（助千葉県文化財センター）

種田斉吾 1978『千葉東南部ニュータウン5－有吉遺跡（第2次）－』（助千葉県文化財センター）

栗田則久ほか 1983「有吉遺跡（第3次）」『千葉東南部ニュータウン14』（助千葉県文化財センター）

2 高野博光ほか 1981『布佐・余間戸遺跡』布佐・余間戸遺跡調査会

3 田村 隆・金子博英 1982「鎌ヶ谷市林跡遺跡採集の隆起線文土器」『奈和』第20号 奈和同人会

高橋博文 1992『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X I』（助千葉県文化財センター）

4 天野 努 1974「地国穴台遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II』（助千葉県都市公社）

5 鈴木道之助 1974「榎峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II』（助千葉県都市公社）

6 鈴木道之助 1976「雨古瀬遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IV』（助千葉県都市公社）

7 中山吉秀 1976「高根北遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書IV』（助千葉県都市公社）

8 鈴木道之助 1974「瀬戸遠蓮遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II』（助千葉県都市公社）

9 田村言行ほか 1983「岩富漆谷津遺跡」『岩富漆谷津・太田宿』佐倉市教育委員会

10 小久貫隆史ほか 1994『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書VIII－取香和田戸遺跡（空港No.60遺跡）－』（助千葉県文化財センター）

11 鈴木道之助 1986「新東京国際空港No.12遺跡の有舌尖頭器をめぐって」『研究紀要』10（助千葉県文化財センター）

12 篠原 正 1981「成井遺跡出土の隆起線文土器」『舌状台地』創刊号 北総考古学研究会

13 篠原 正ほか 1983『山倉大山遺跡調査概報』北総考古学研究会

- 14 安井健一 1998「大谷台遺跡」『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書2』（勸千葉県文化財センター）
- 15 千葉東金道路（二期）建設に伴い、平成7年度に発掘調査された遺跡で、現在整理作業中であるが、隆起線文系土器及び爪形文土器が出土している。
- 石塚 浩 1998「遺跡今昔物語－歴史をふりかえる新しい道－」『房総の文化財VOL.15』（勸千葉県文化財センター）
- 16 柿沼修平ほか 1979『土宇』日本文化財研究所
- 17 大塚達朗ほか 1979「市原市南原遺跡第一次調査抄報」『伊知波良』一 伊知波良刊行会
大塚達朗ほか 1980「市原市南原遺跡第二次調査抄報」『伊知波良』四 伊知波良刊行会
- 18 光江 章 1986『東郷台遺跡』（勸君津郡市文化財センター）
- 19 當眞嗣次ほか 1998「山王台遺跡」『山王台遺跡・下向山遺跡』（勸君津郡市文化財センター）
- 20 安藤道由ほか 1996「台木B遺跡」『兎谷・上時田・下時田・向台木・台木B遺跡』（勸君津郡市文化財センター）
- 21 安藤道由 1996「下根田A遺跡」『上ノ山A・上ノ山B・下根田A・下根田B・御所塚遺跡』（勸君津郡市文化財センター）
- 22 斎木 勝 1973「東京湾東岸における縄文草創期・早期遺跡群」『ふさ』第4号 ふさの会
- 23 伊藤聖一 1980「千葉県君津市大和田遺跡採集の縄文草創期・早期資料」『さざなみ』19号 地域研究会
- 24 佐伯秀人ほか 1992『前三舟台遺跡』（勸君津郡市文化財センター）
- 25 新東京国際空港の第二期工事に伴い発掘調査の行われた遺跡で、整理作業の進捗とともに草創期の土器の出土した遺跡が新たに判明している。遺跡名のみを列挙すると、成田市東峰御幸畑西（空港No61）遺跡・東峰御幸畑東（空港No62）遺跡・十倉三稲荷峰（空港No67）遺跡、及び山武郡芝山町の香山新田新山（空港No10）遺跡の4遺跡である。これらを加えると、草創期の土器が出土している県内の遺跡数は28遺跡になる。
- 26 齊藤進氏による須和田式土器の時期細分に照らし合わせると、5期区分のうちのV期に相当するものと思われる。
- 齊藤 進 1990「関東地方における弥生時代成立の様相」『研究論集VIII』東京都埋蔵文化財センター
- 27 第2回最新出土考古資料巡回展において、市立市川歴史博物館での会期中に展示された市川市教育委員会における展示及びその配付資料「市川市木戸口遺跡第1地点」を参考にした。また、松本太郎氏から御教示を受けた。記して謝意を表したい。
- 28 田形孝一ほか 1991「笹田遺跡」『笹田遺跡・三ツ田遺跡・大竹古墳群（1）－大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書I－』（勸君津郡市文化財センター）
- 29 安藤鴻基ほか 1975『清水谷遺跡』清水谷古墳発掘調査団
- 30 土屋治雄 1998「祝崎古墳群」『一般国道409号（木更津工区）埋蔵文化財調査報告書－木更津市菅生遺跡・祝崎古墳群－』（勸千葉県文化財センター）
- 31 平野 功 1993「ササノ倉遺跡」『事業報告II－平成2年度・平成3年度－』（勸香取郡市文化財センター）
- 32 これらの遺物は「土玉」として総称されることが多く、分類基準もその用途についても明確にされていない。今回の報告では、単純に10g以下のものを小玉、10gを超えるものを丸玉というように便宜的に重さによる分類をした。
- 33 ガラス質発泡物という名称は今回の報告のための仮称であり、より適切なものがあれば改めたいと思う。

なお、この遺物については穴澤義功氏から御教示を受けた。記して謝意を表したい。

- 34 面積が100cm²を超えるのは、分布範囲の周縁部において、隣接メッシュ分をあわせてサンプリングしたためである。またサンプル内の遺物重量が0 mgで、微量の土のみしか検出できなかった3メッシュについては、見かけ上の分布範囲とサンプルの分析結果とが相容れなかったものととらえる。参考までに、3メッシュを除いた修正値は、遺物の分布面積2077.38cm²、単位当たり重量の平均27.14mg/cm²となる。
- 35 遺構の種類・帰属時期等については、基本的には各次の報告書の記載を尊重した。
- 36 関口達彦ほか 1990『千葉東南部ニュータウン17—高沢遺跡—』(財)千葉県文化財センター
- 37 種田齊吾・谷 旬 1977『千葉東南部ニュータウン4』(財)千葉県文化財センター
- 38 古内 茂・伊藤智樹 1883『千葉東南部ニュータウン12』(財)千葉県文化財センター
- 39 武田宗久 1953「第二節 古墳時代」『千葉市誌』千葉市
武田宗久 1976「第4節 古墳時代」『千葉市史 史料編1 原始古代中世』千葉市史編纂委員会
※ただし、武田(1953)は兼坂古墳群と南二重堀古墳群に分けて記載している。
- 40 うち4基が現在の地名表にある兼坂古墳群の範囲内に包括されている。
- 41 高沢遺跡では1基の円墳とも受け取れる周溝状遺構が検出されており、これらの古墳群に包括されるものかもしれない。
関口達彦ほか 1990『千葉東南部ニュータウン17』(財)千葉県文化財センター
- 42 栗田則久 1983「有吉遺跡(第3次)」『千葉東南部ニュータウン14』(財)千葉県文化財センター
- 43 種田齊吾 1978『千葉東南部ニュータウン5』(財)千葉県文化財センター
- 44 白石浩・榊原弘二 1983『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 45 栗田則久 1982『千葉東南部ニュータウン13』(財)千葉県文化財センター
- 46 尾野善裕 1997「東三河・遠江(窯跡) 湖西」『7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会
- 47 生浜古墳群2号墳については雁又鏃があり、高沢古墳群3号墳については馬具、切子玉、座付環金具、空玉がある点に組成の違いがある。

写 真 图 版

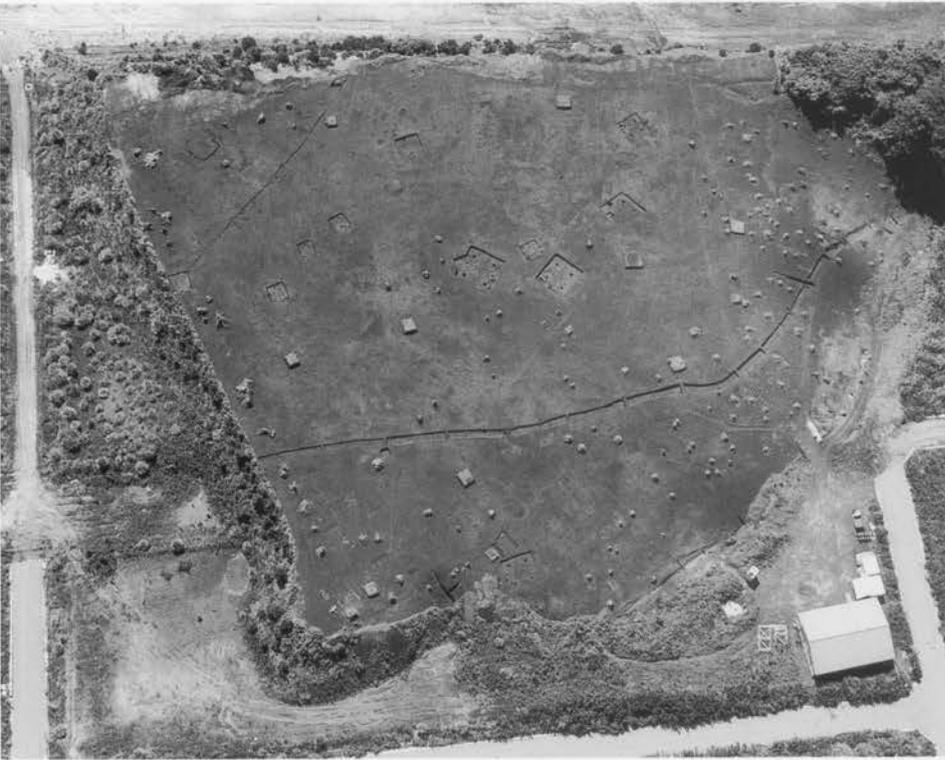


有吉遺跡

高沢古墳群



調査区遠景（南上空より）



調査区全景



層序
(左：C3-22・23/
右：B3-02・03)



第1ブロック (南西から)



調査風景



第2ブロック (南東から)



第2ブロックVII層石器集中地点 (西から)



第3ブロック (北西から)



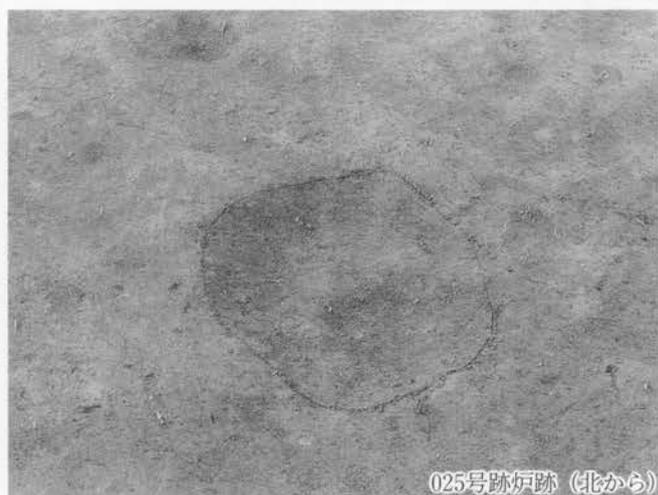
第4ブロック (南から)

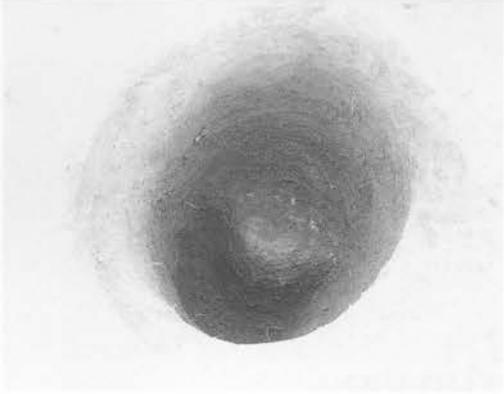


第5ブロック (南東から)



単独出土ブロック (北西から)





P3底面付近検出状況



001号住居跡 (南東から)



001号住居跡カマド



遺物出土状況



002号住居跡 (南東から)



P1土層堆積状況

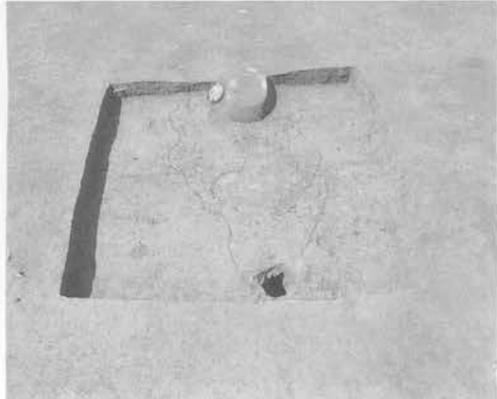
004号住居跡（南東から）



007号住居跡（南東から）



007号住居跡カマド



全景（南から）



008号住居跡遺物出土状況（南から）



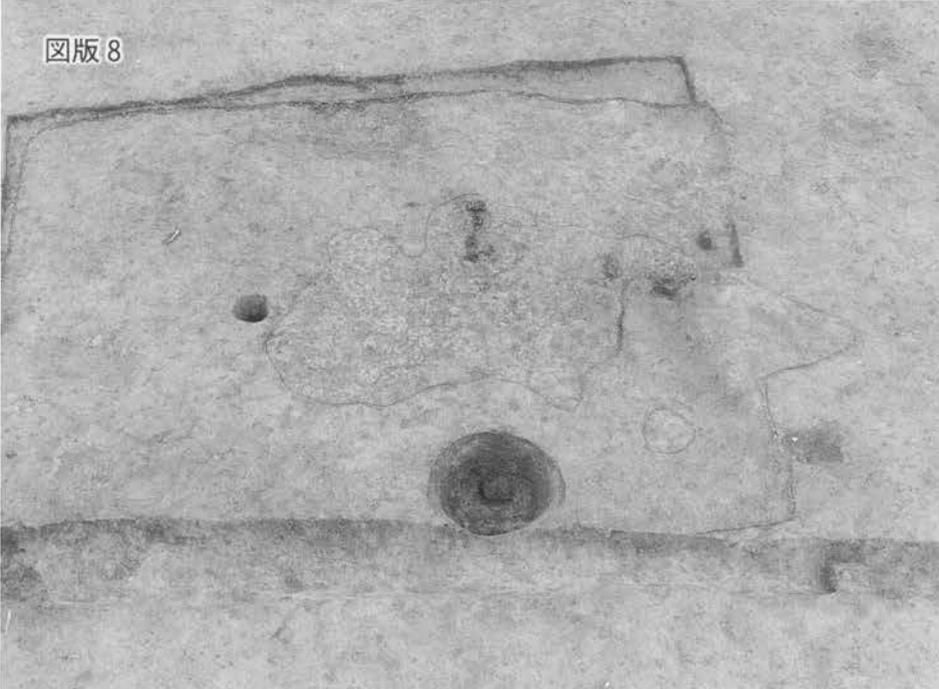
008号住居跡カマド



カマド遺物出土状況



009号住居跡（北西から）

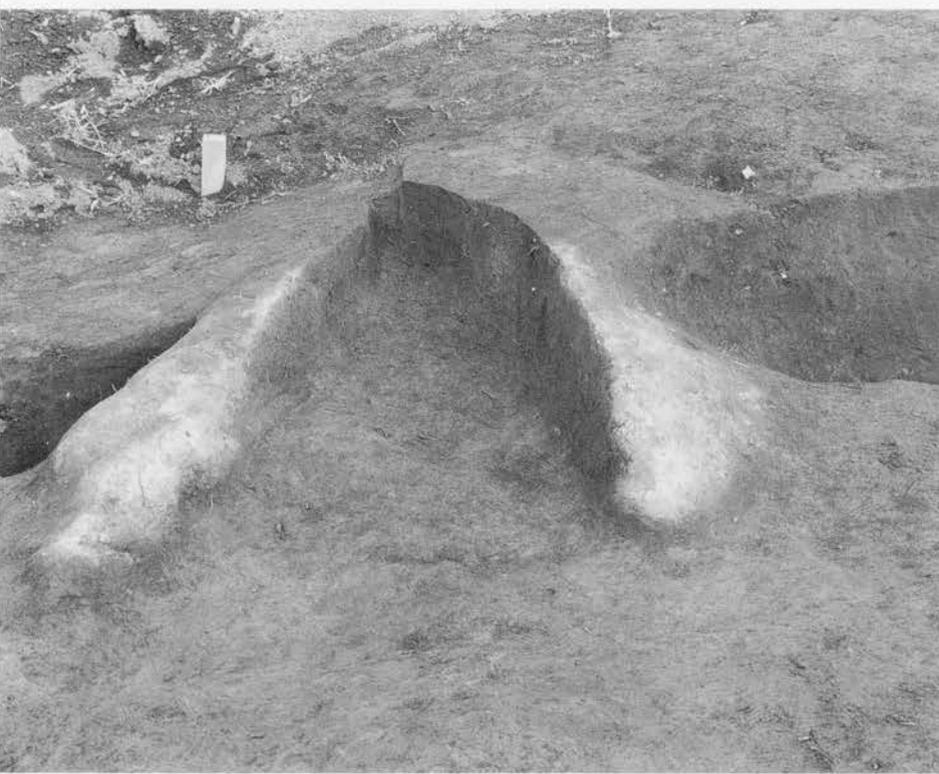


カマド遺存状況

011号住居跡（南東から）



016号住居跡（西から）



016号住居跡カマド



003号住居跡（南東から）



003号住居跡カマド



カマド遺物出土状況



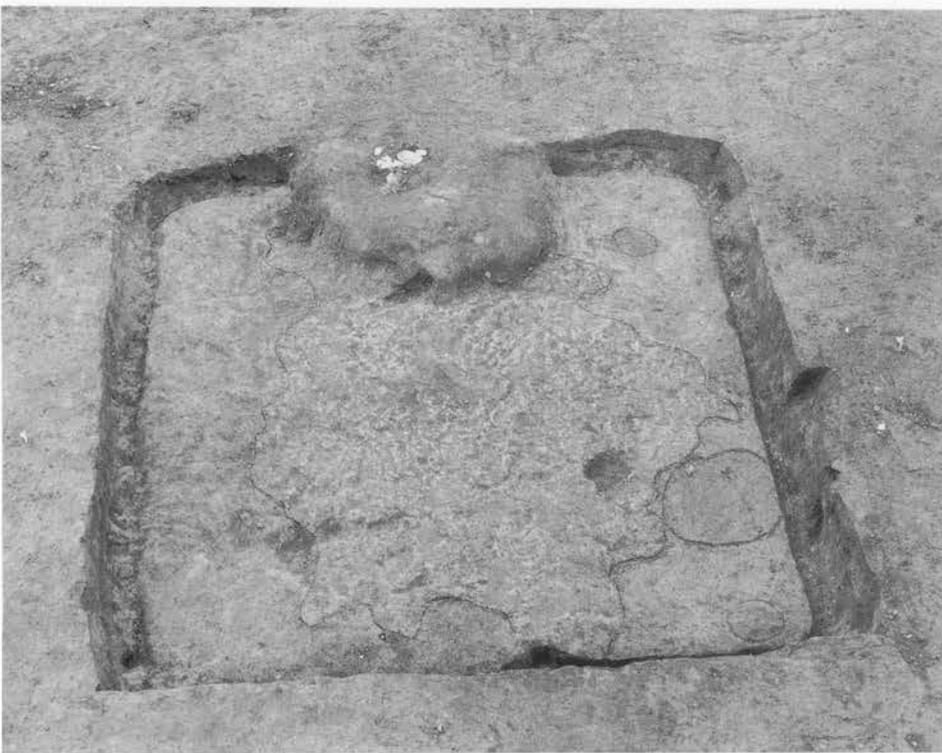
005号住居跡（東から）



006号住居跡（南から）



006号住居跡カマド



012号住居跡（南東から）



カマド遺存状況



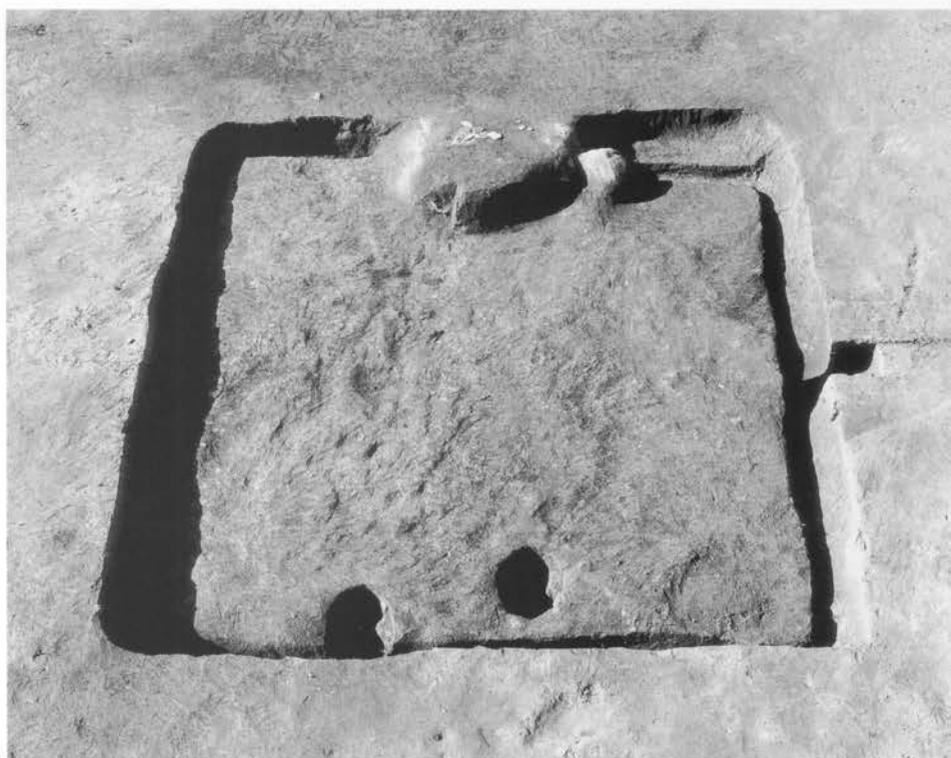
カマド遺存状況



013号住居跡（南から）



遺物出土状況



014号住居跡（南から）



カマド遺物出土状況

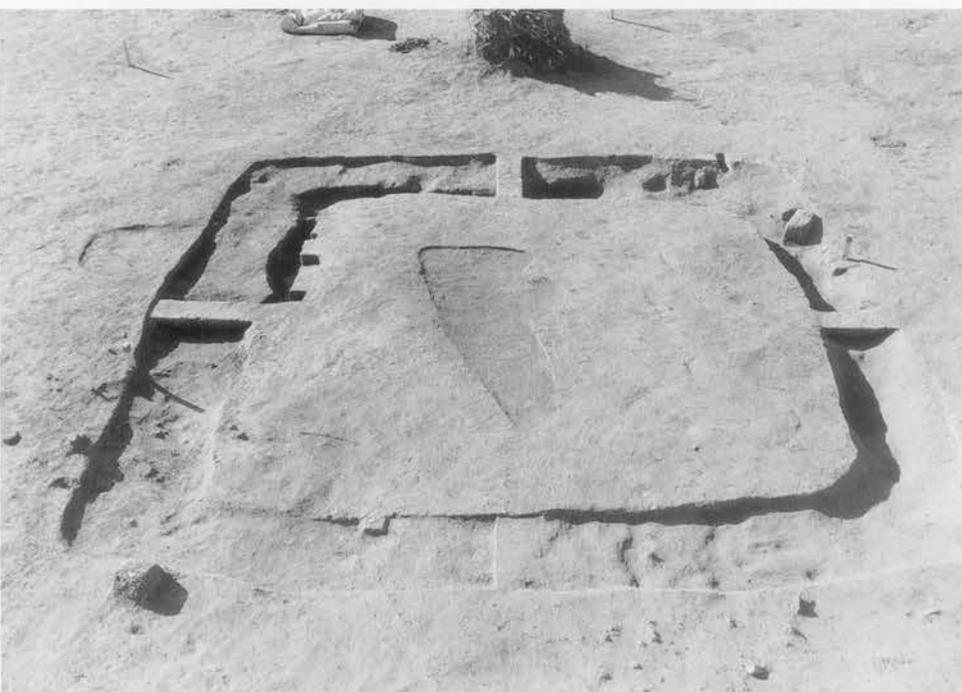


014号住居跡カマド



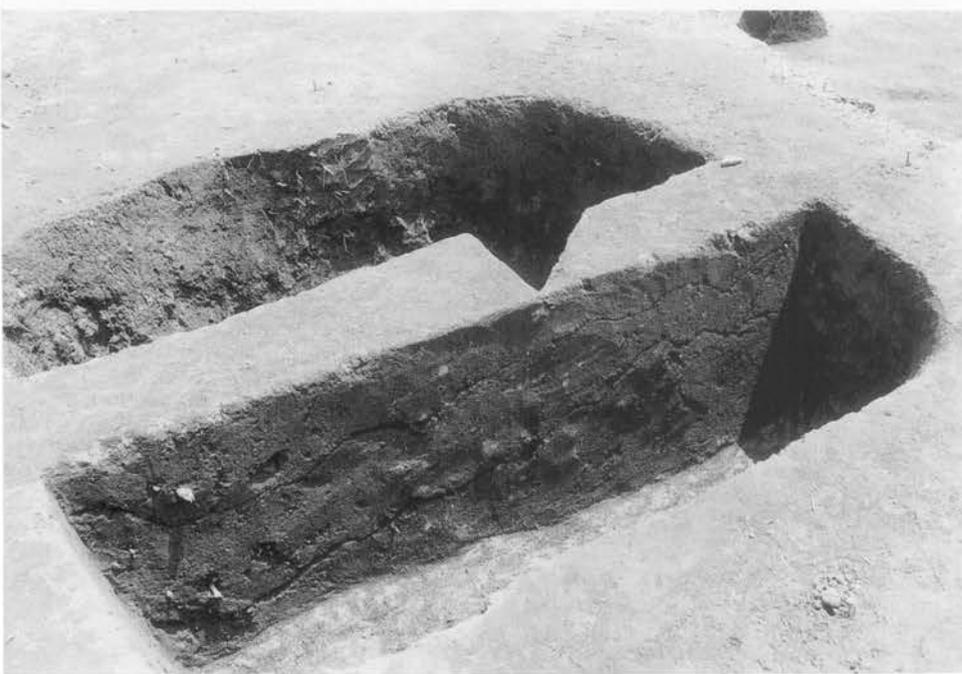
カマド遺存状況

015号住居跡（南から）



覆土堆積状況

020号方形周溝状遺構



021号土坑覆土堆積状況



覆土堆積状況



018号溝状遺構 (西から)



018号溝状遺構 (北東から)



覆土堆積状況



022号溝状遺構 (西から)

第1ブロック



(1~7:4/5 8~13:2/3)

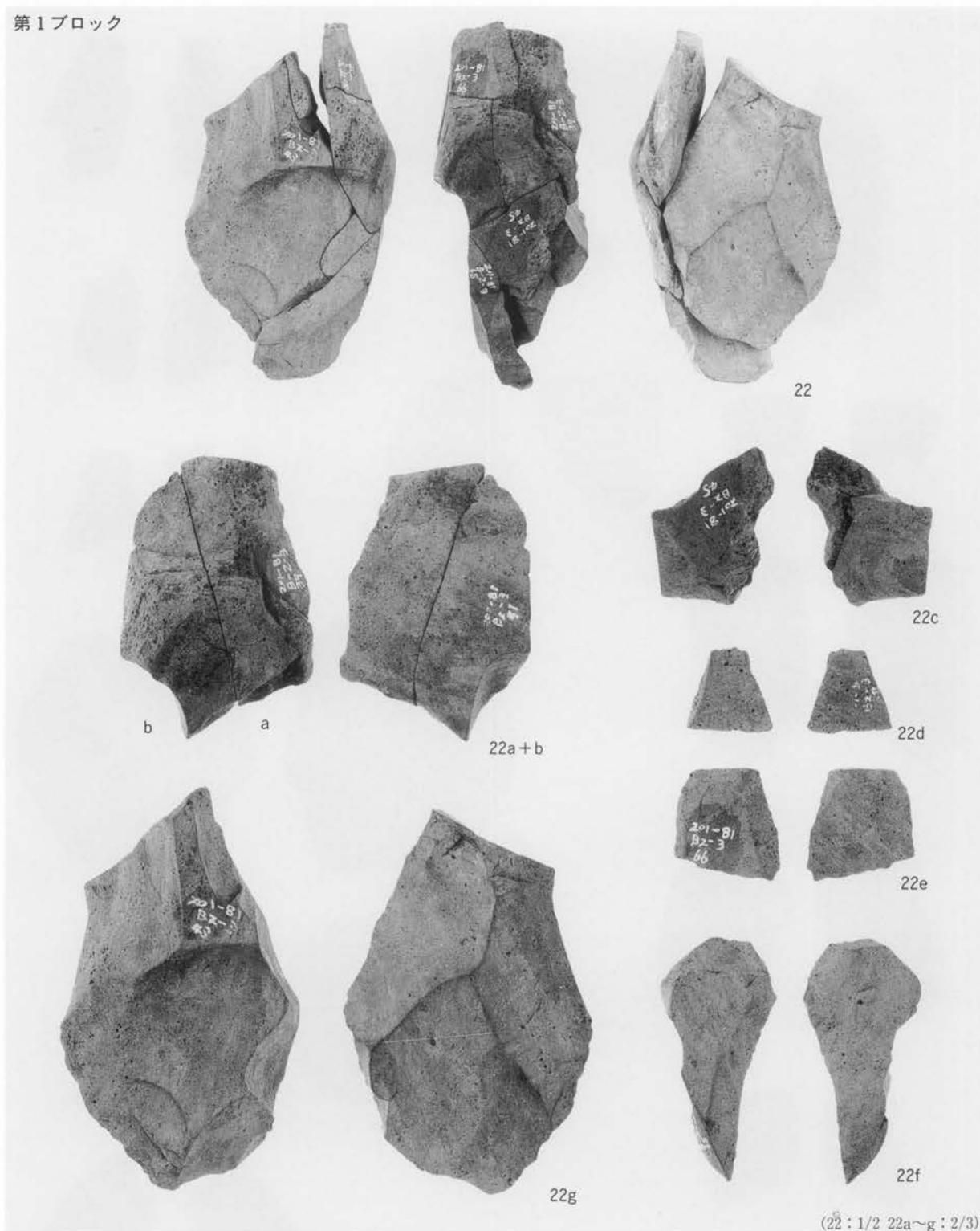
旧石器時代出土遺物(1)

第1ブロック



(2/3)

第1ブロック



(22 : 1/2 22a~g : 2/3)

第2ブロックⅢ層石器集中地点



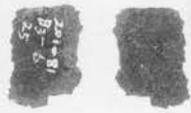
(4/5)

第4ブロック



(4/5)

第2ブロックVII層石器集中地点



(1 : 4/5 2 · 3 · 5 · 6 : 2/3)

第6ブロック



(1 : 4/5 2 : 2/3)

表採



(1 : 4/5 2 : 2/3)

第5ブロック



(2/3)

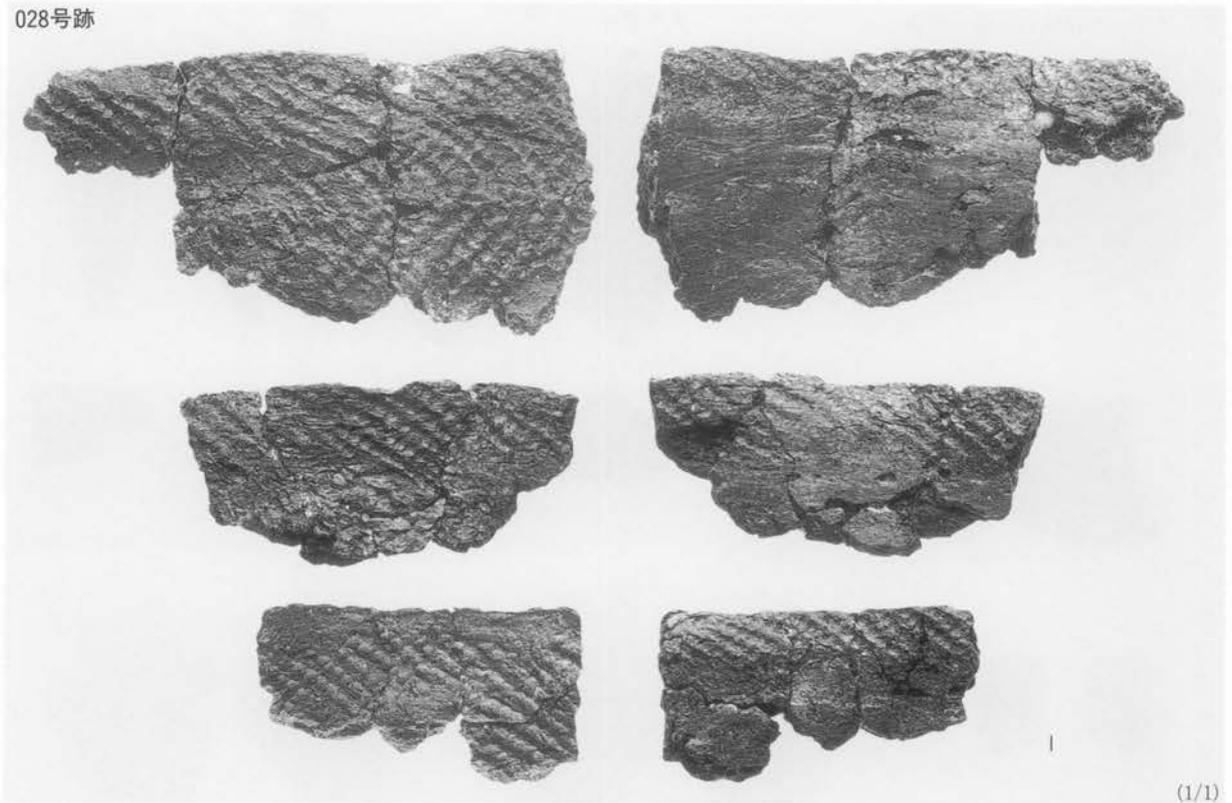
第3ブロック



(2/3)

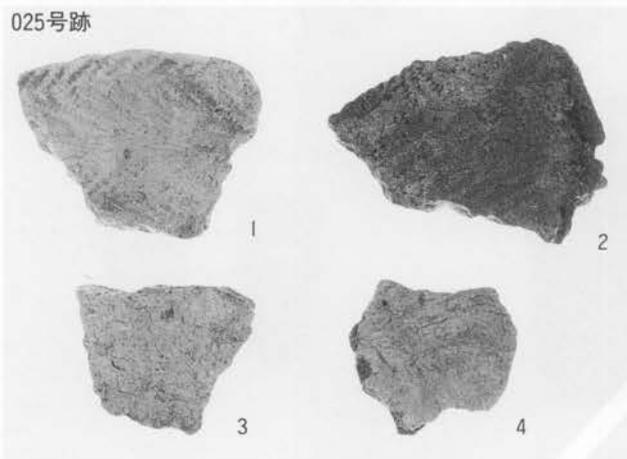
旧石器時代出土遺物 (4)

028号跡



(1/1)

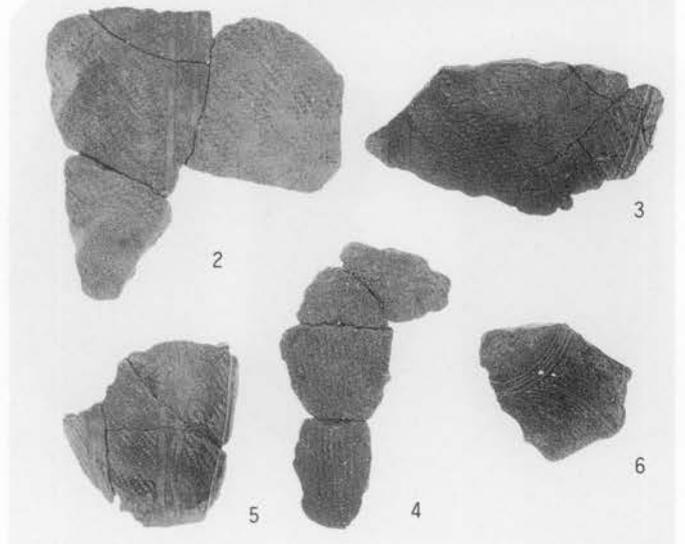
025号跡



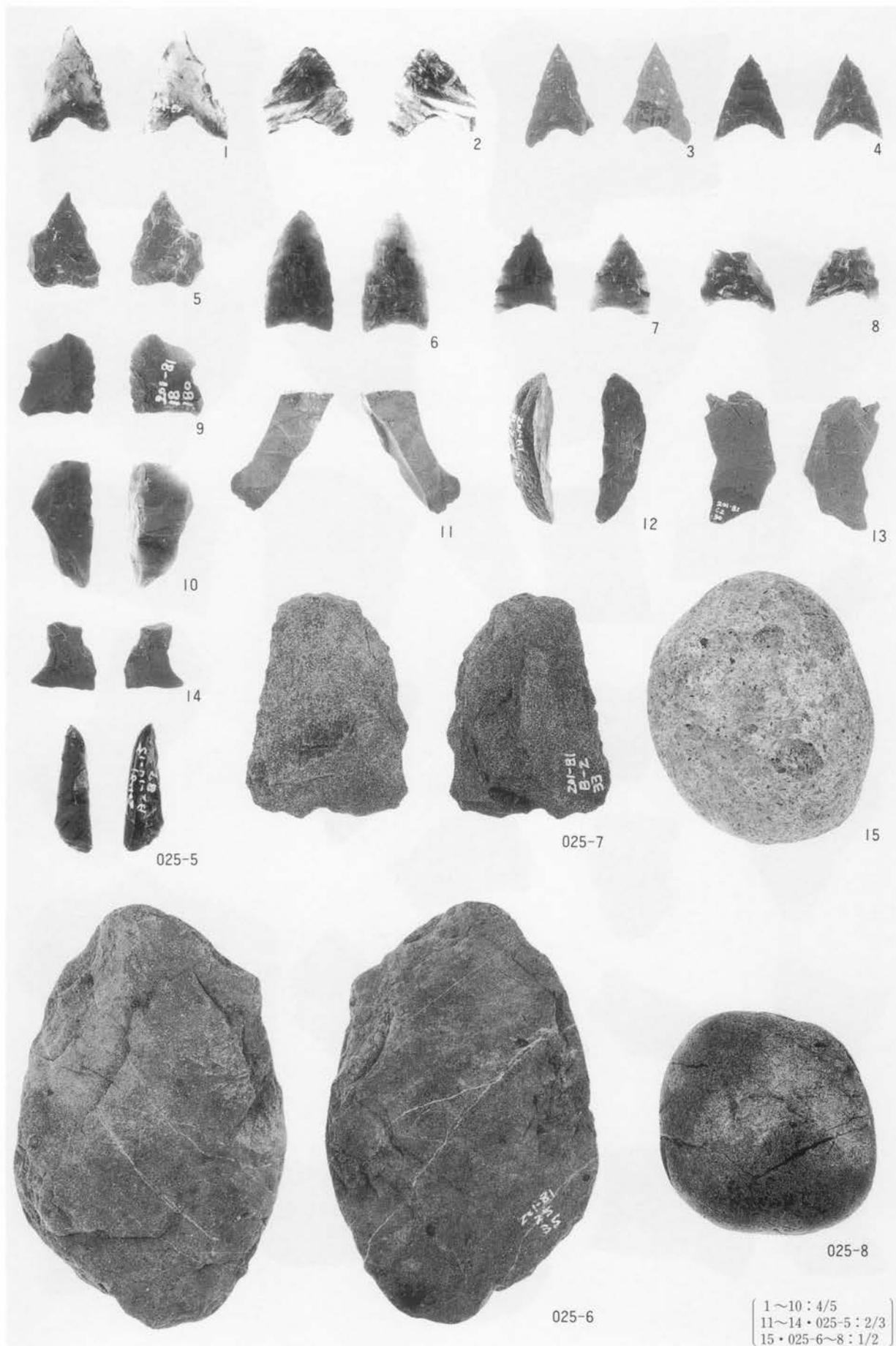
017号跡



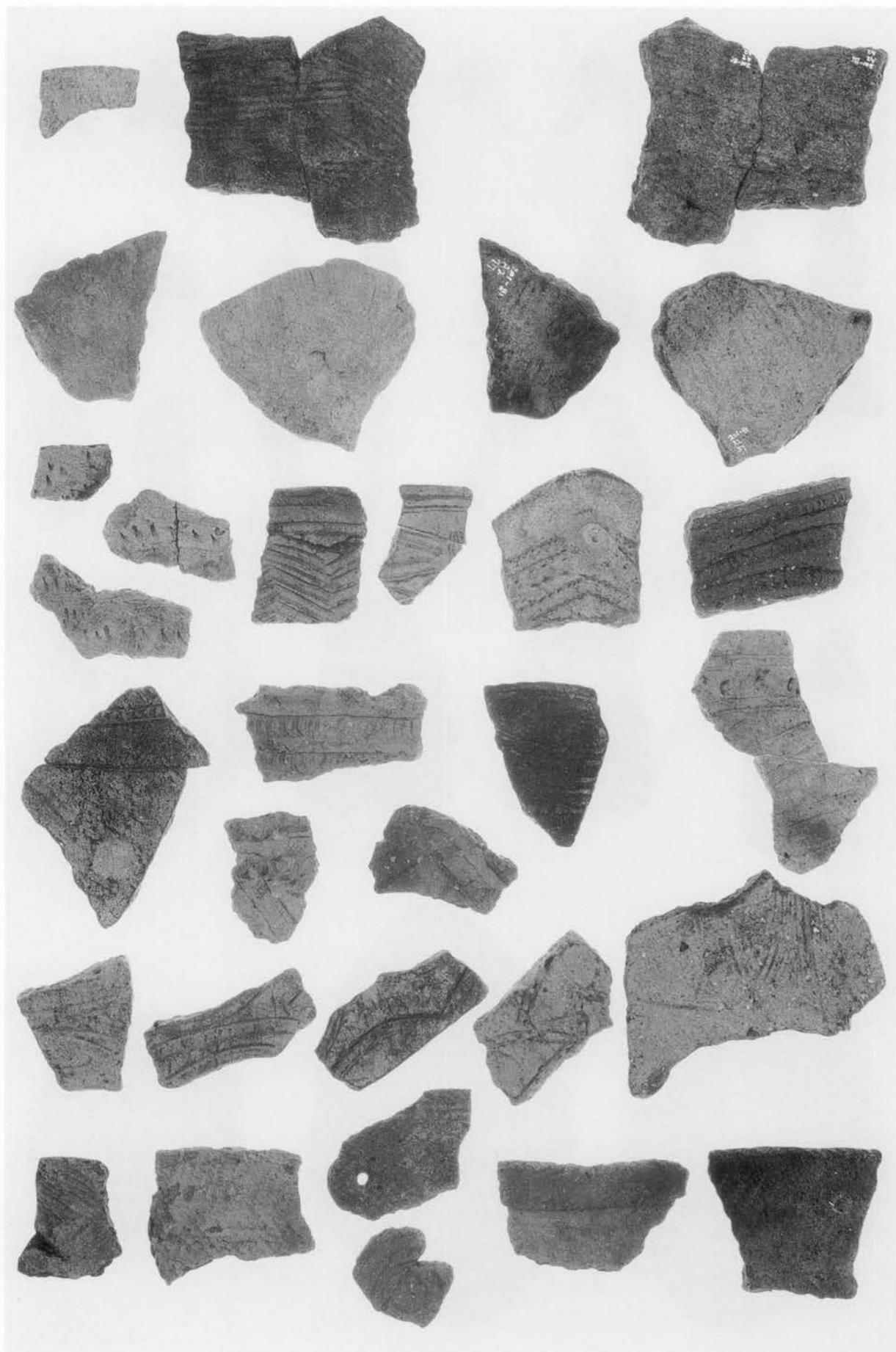
010号竪穴住居跡



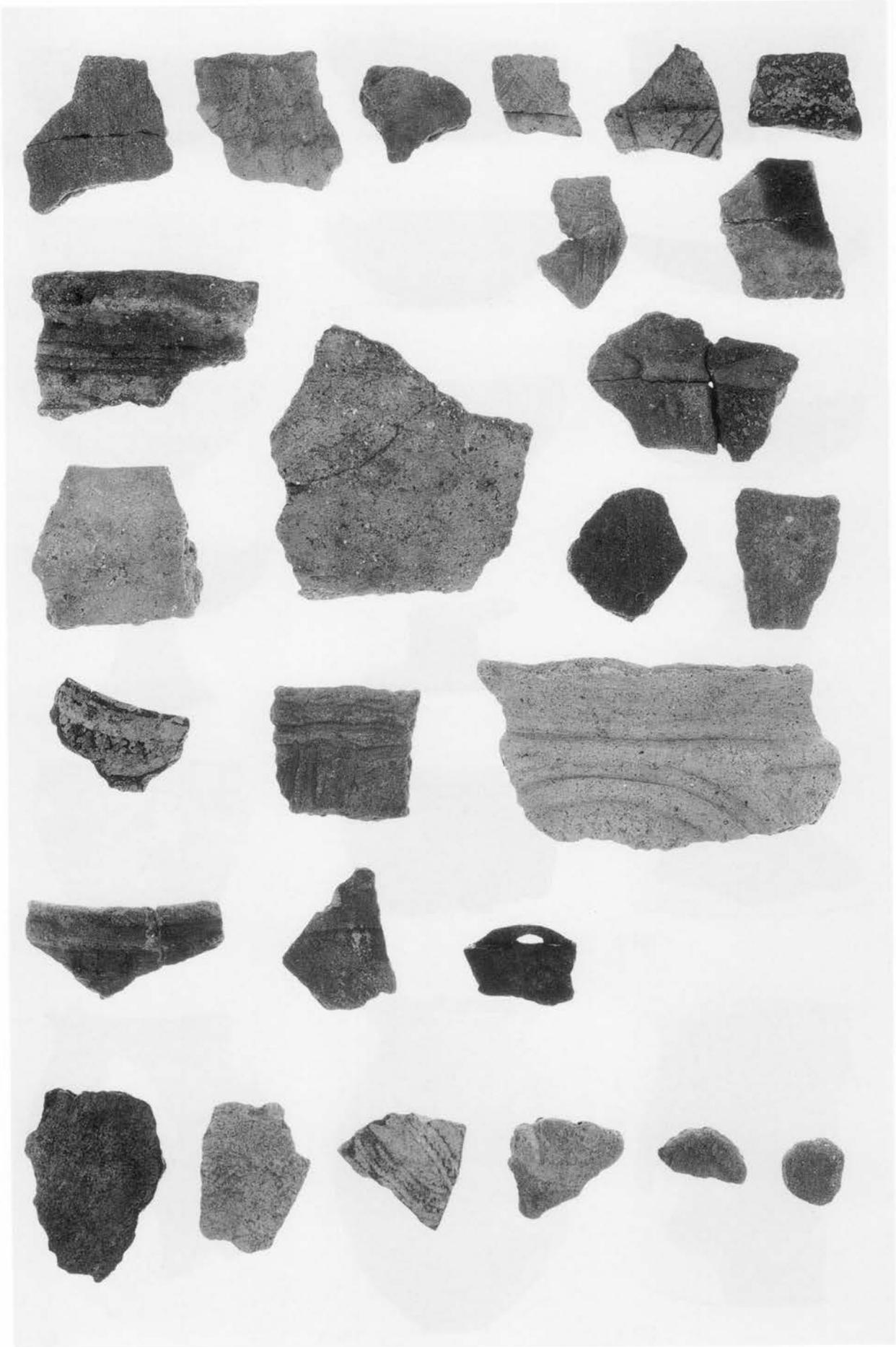
遺構出土の縄文土器・弥生土器



遺構・グリッド出土の縄文時代石器



グリッド出土の縄文土器（1）



グリッド出土の縄文土器（2）・土製品



古墳時代の土器



003-1



003-2



005-2



005-1



006-1



006-3



012-1



012-2



014-1



003-3



006-5



014-7



014-5



014-6



014-9



004-4



007-10



008-4



016-2

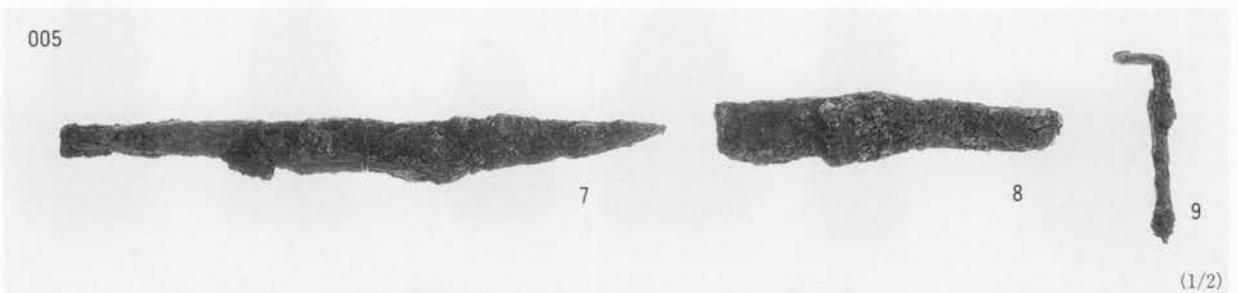
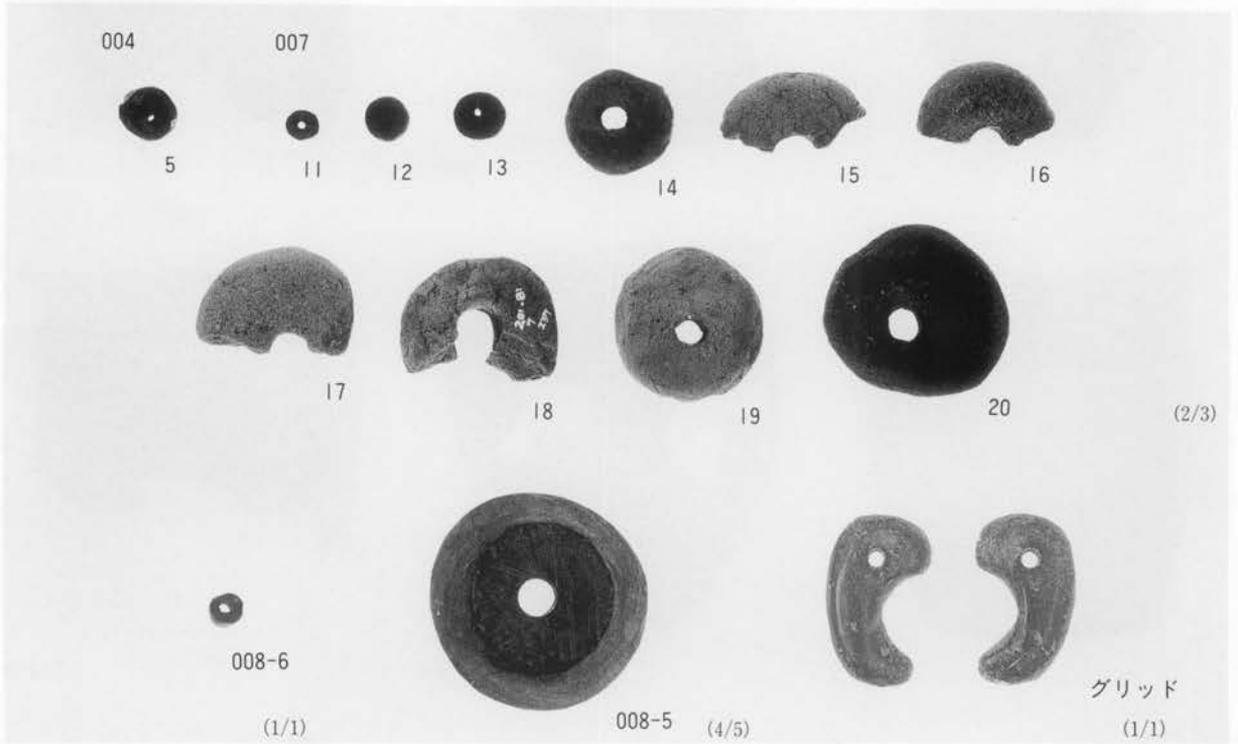
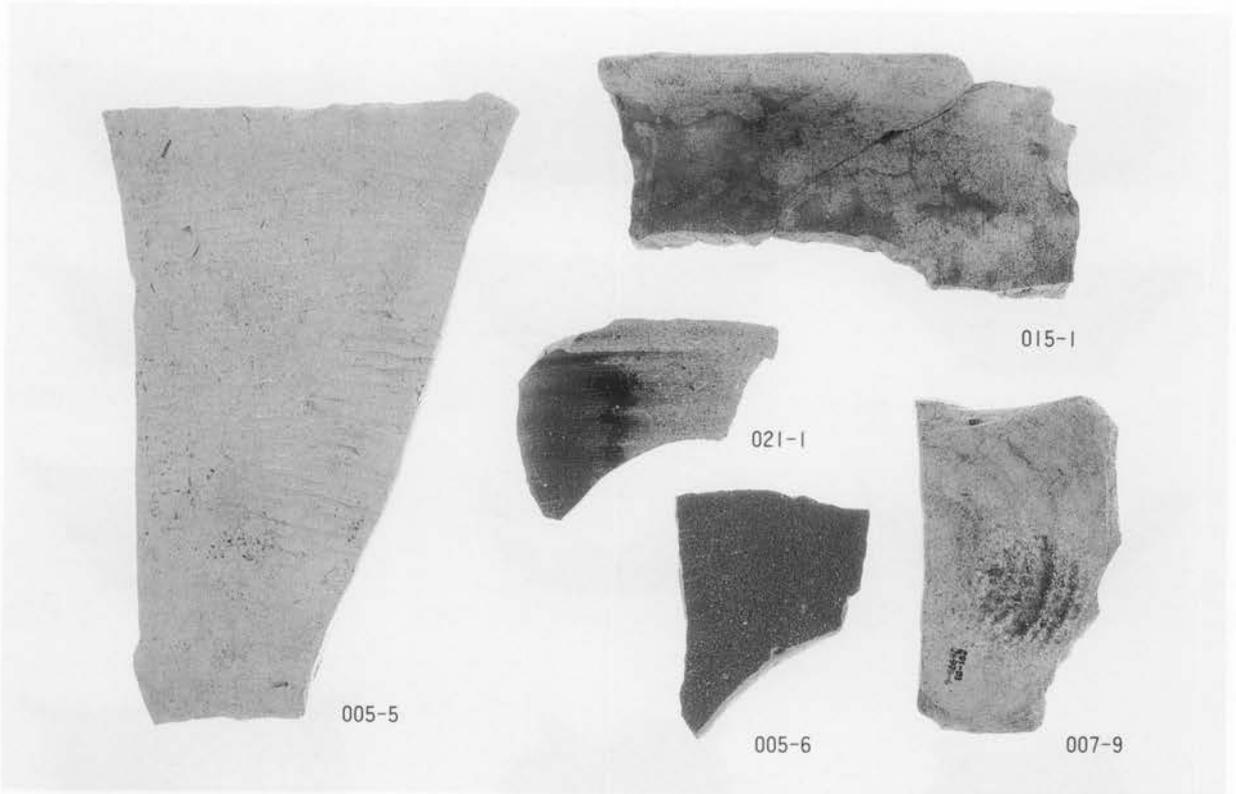


003-4



006-7

古墳時代・平安時代の土器・支脚



古墳時代・平安時代の土器・玉類・鉄製品



調査前風景



調査前風景



周溝断面



1号墳（表土除去後）



周溝内土坑

1号墳（調査終了後）



2号墳（調査前）



2号墳（墳丘断面－南西より）



墳丘内遺物出土状況（須恵器埴瓶）



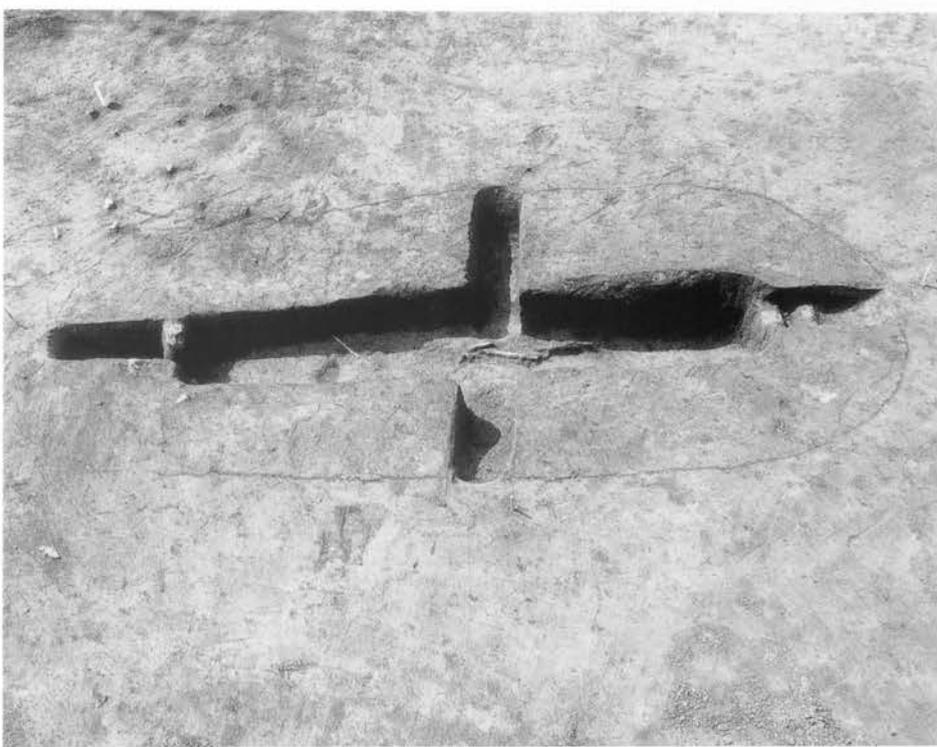
2号墳（墳丘断面-東より）



周溝内遺物出土状況（土師器坏及び高坏）



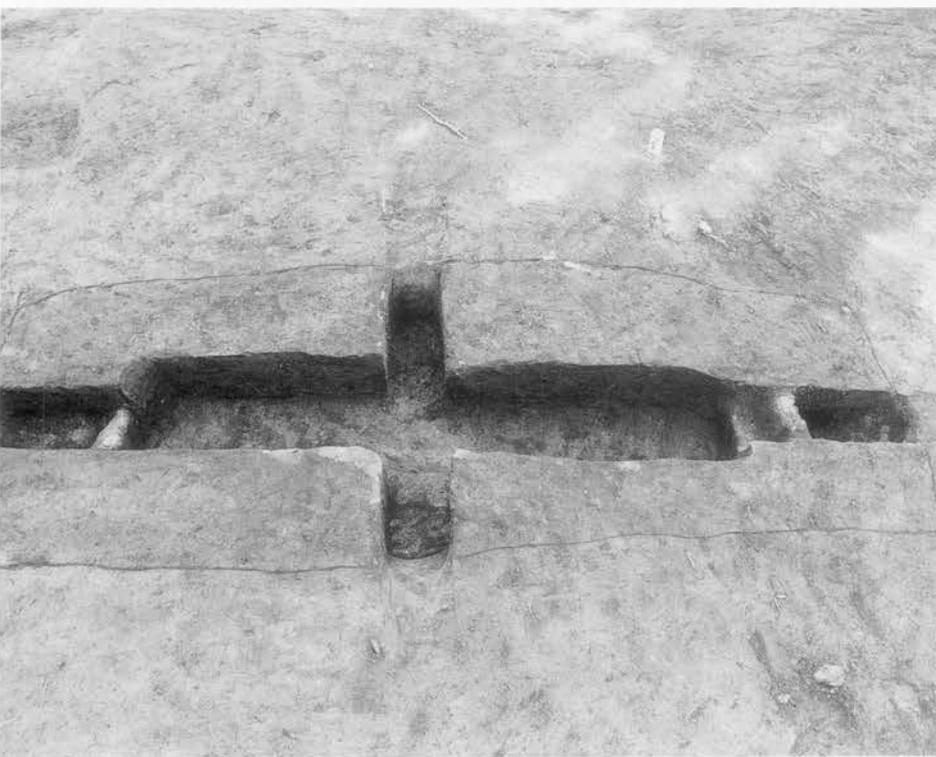
2号墳（調査終了後）



2号墳第1主体部（確認状況）



2号墳第1主体部（完掘状況）



2号墳第2主体部（確認状況）



2号墳第2主体部（完掘状況）



3号墳 (調査終了後全景)



3号墳 (墳丘南北断面)

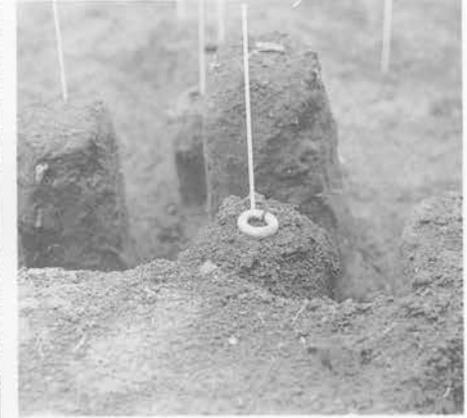


3号墳 (調査範囲外墳丘状況)



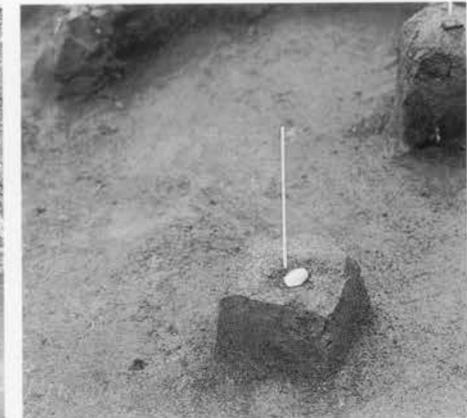
金環出土状況

3号墳（主体部付近遺物出土状況）



金環出土状況

3号墳（主体部付近遺物出土状況）



切小玉出土状況

3号墳（主体部付近遺物出土状況）



4号墳（調査前）



4号墳（墳丘断面－東より）

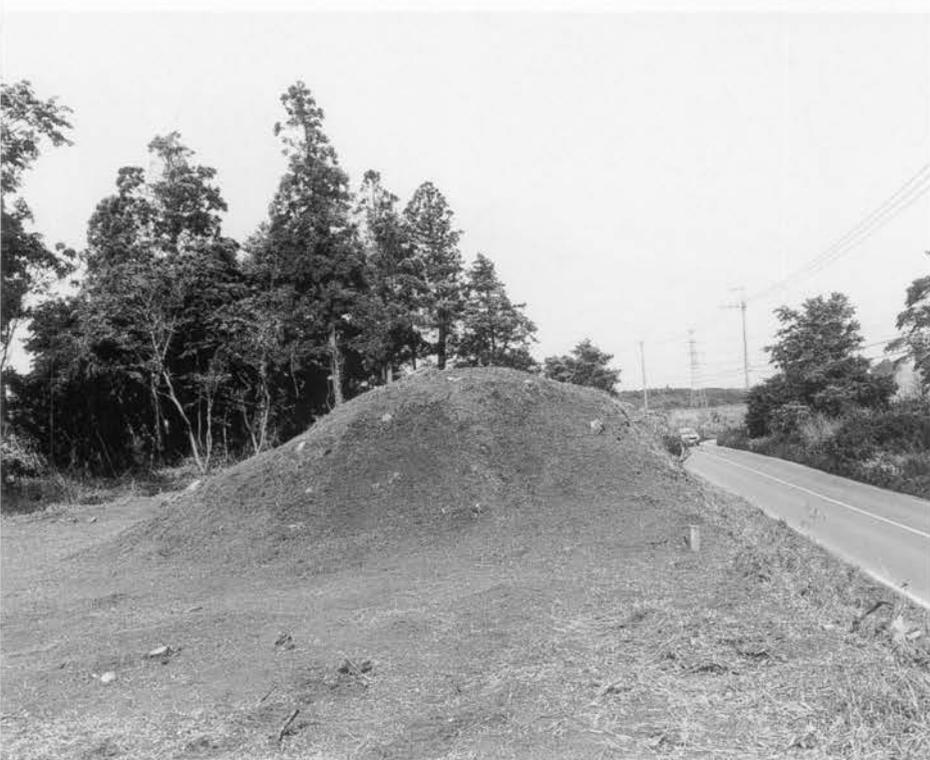


4号墳（調査終了後）



主体部付近土層断面

4号墳主体部（完掘状況）



1号塚（調査前）



1号塚（墳丘断面）



2号塚



1号方形周溝状遺構



1号土坑



ピット状況

1号竪穴状遺構



1号溝状遺構



2号溝状遺構



1号墳-1



1号墳-2



1号墳-3



1号墳-4



2号墳-22



2号墳-21



2号墳-12



2号墳-15



2号墳-16



2号墳-17



2号墳-18



2号墳-20



2号墳-23 (表)



2号墳-23 (裏)



2号溝状遺構



3号墳-5



3号墳-7



3号墳-10



3号墳-17



3号墳-3



3号墳-6



3号墳-11



3号墳-8



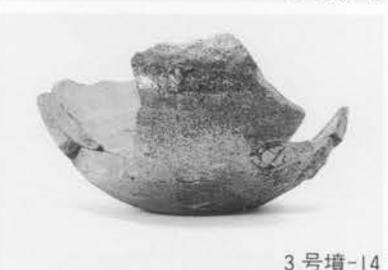
3号墳-12



3号墳-9



3号墳-4



3号墳-14



4号墳-3



4号墳-6



4号墳-12



4号墳-11



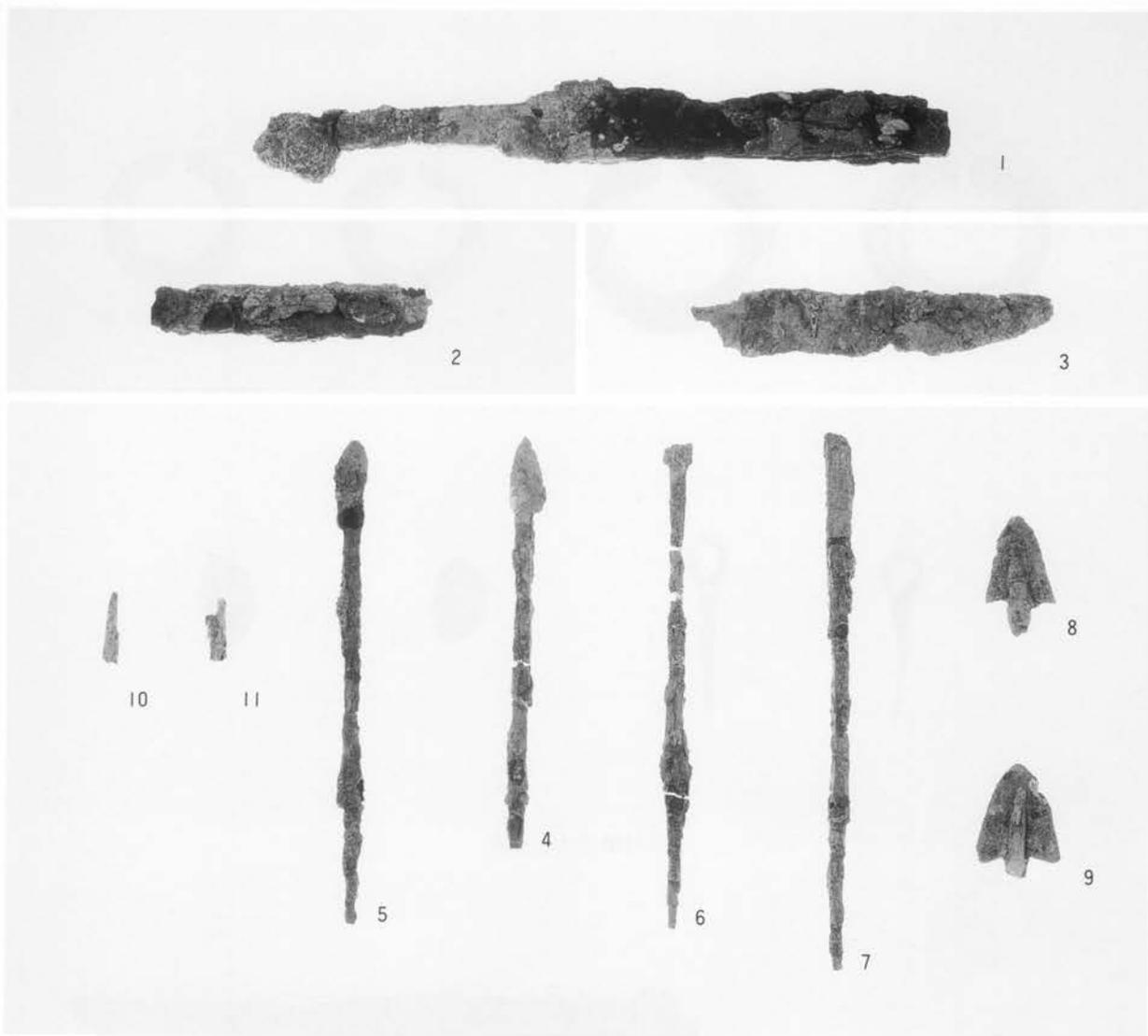
4号墳-7



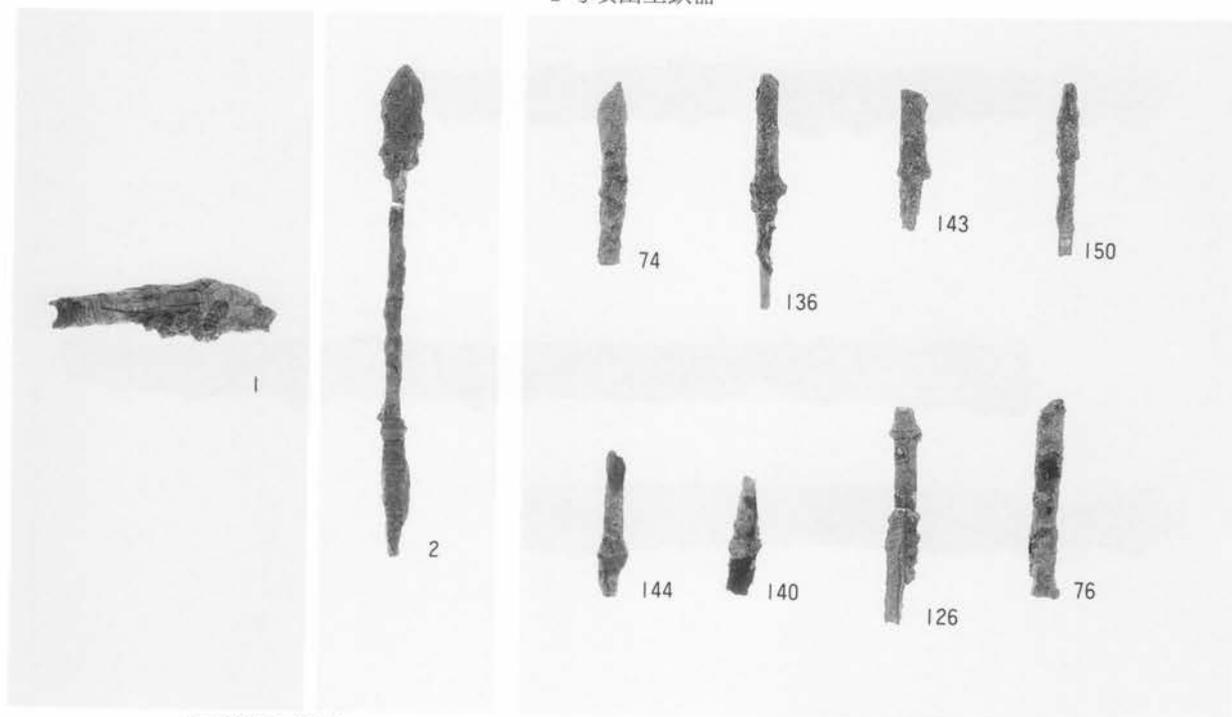
4号墳-8



4号墳-9

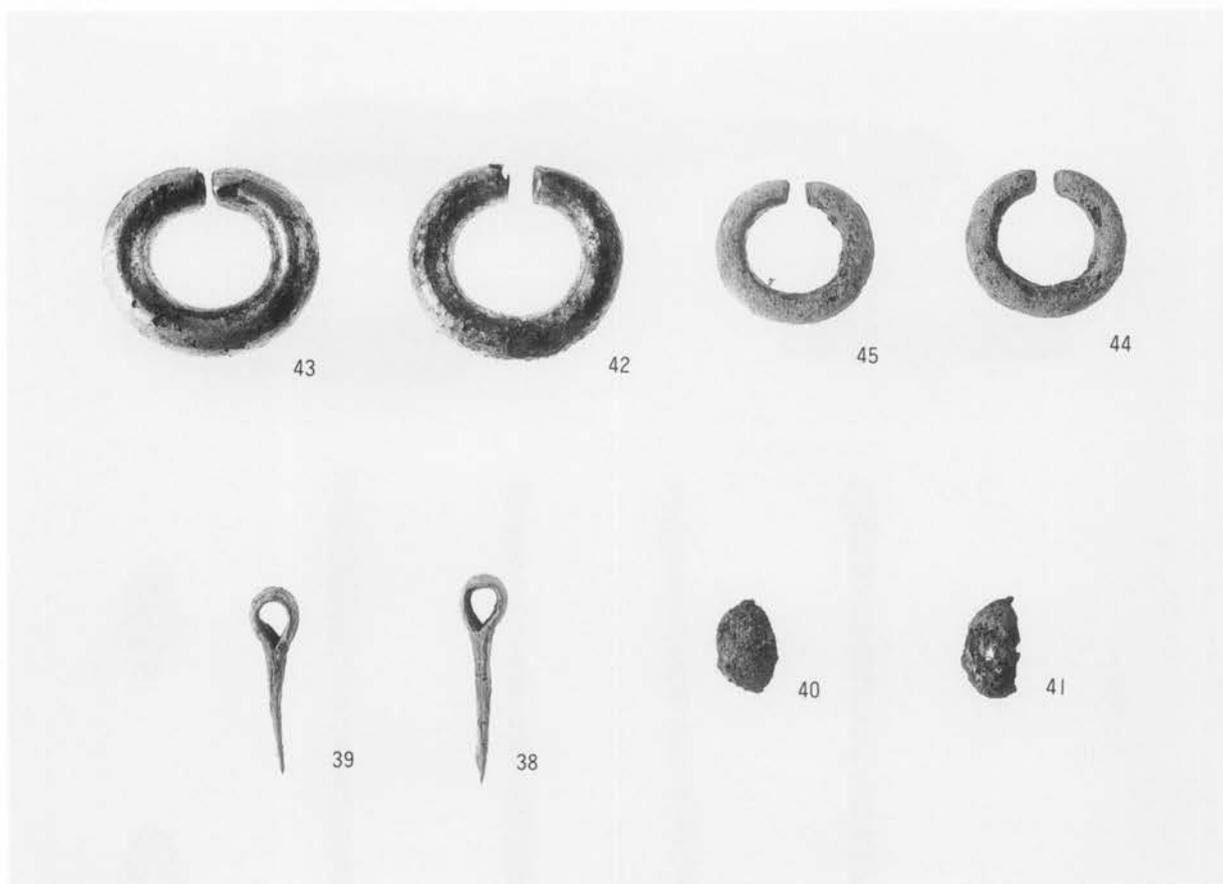


2号墳出土鉄器

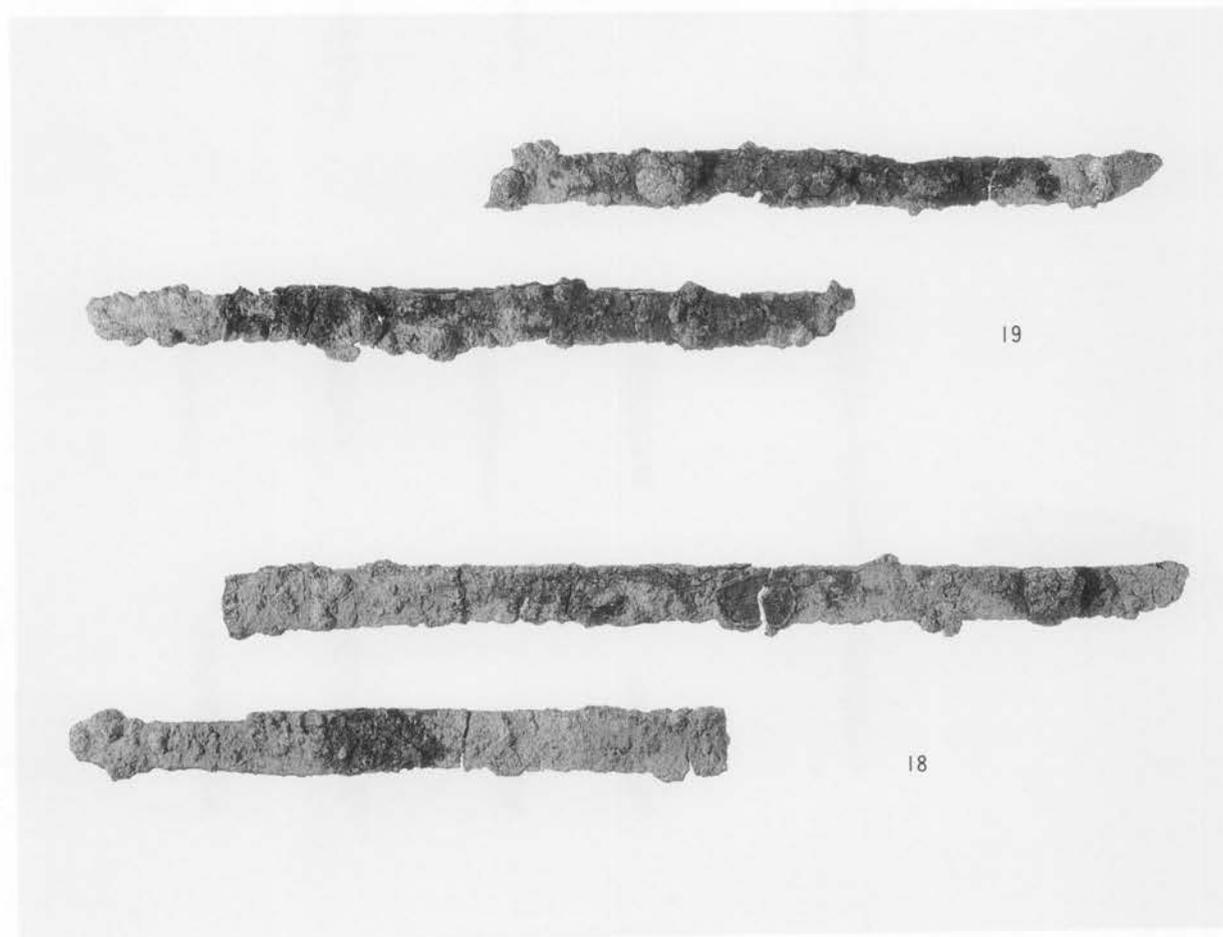


4号墳出土鉄器

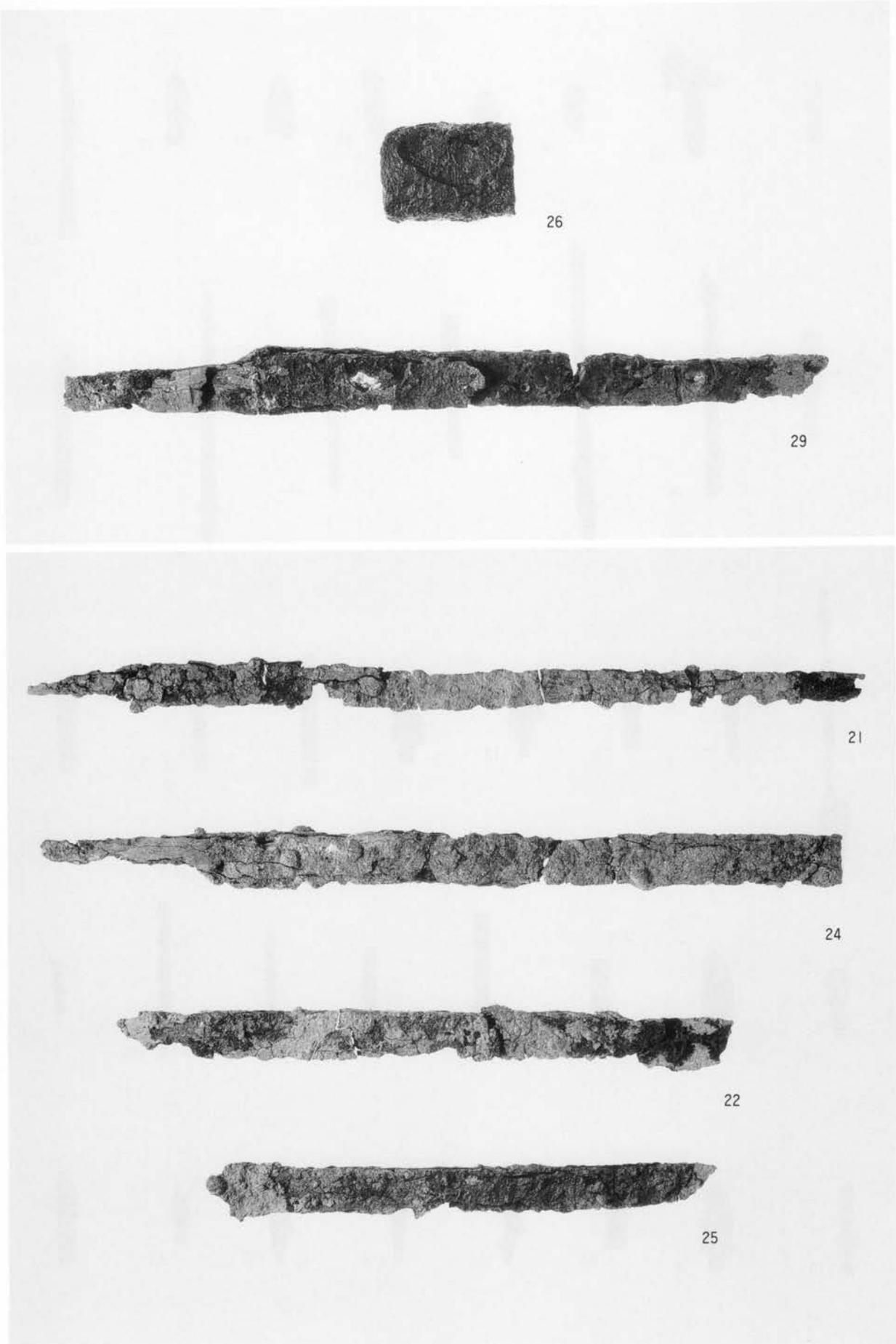
3号墳出土鉄器 (1)



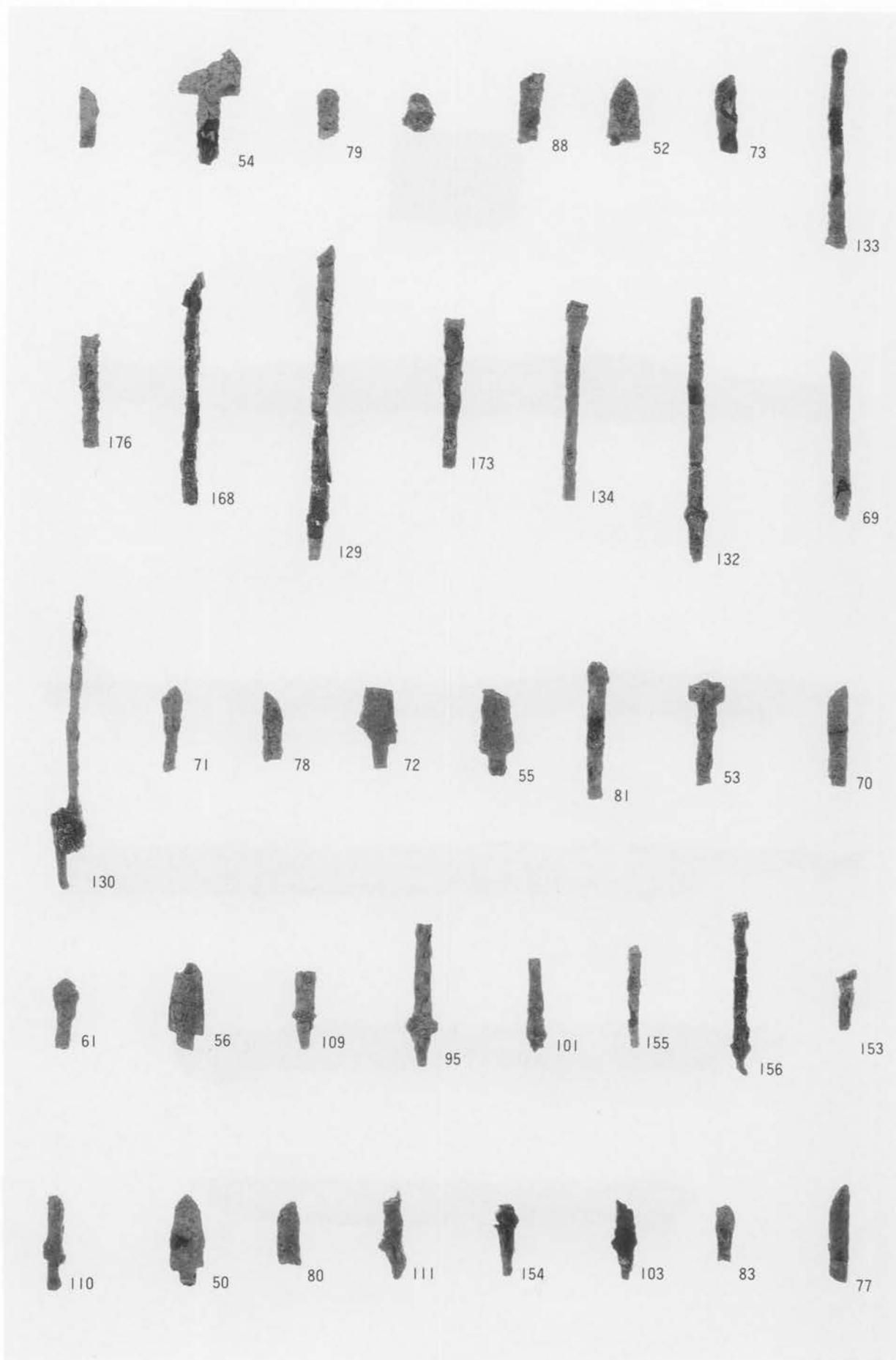
3号墳出土銅製品



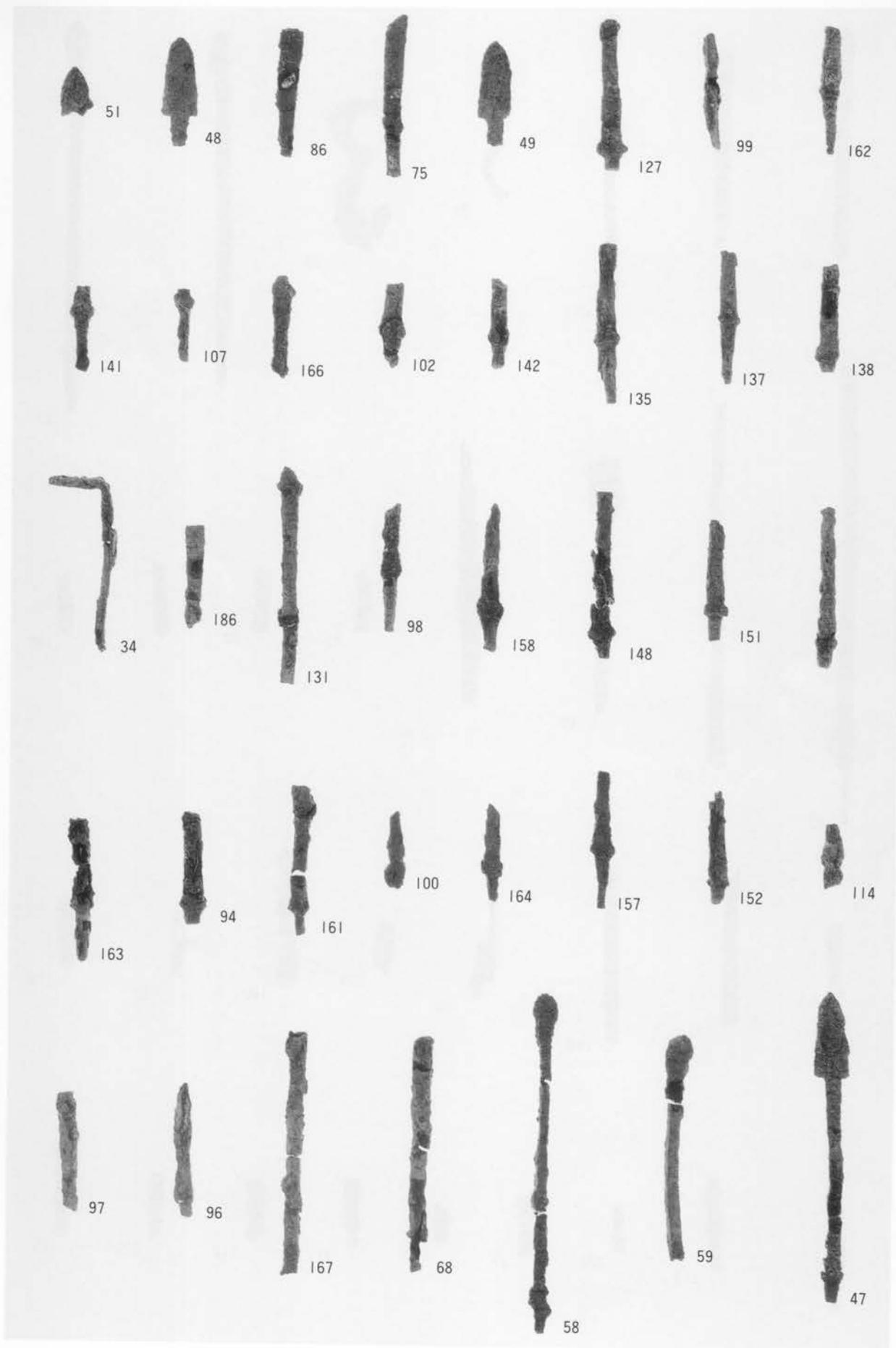
3号墳出土鉄器(2)



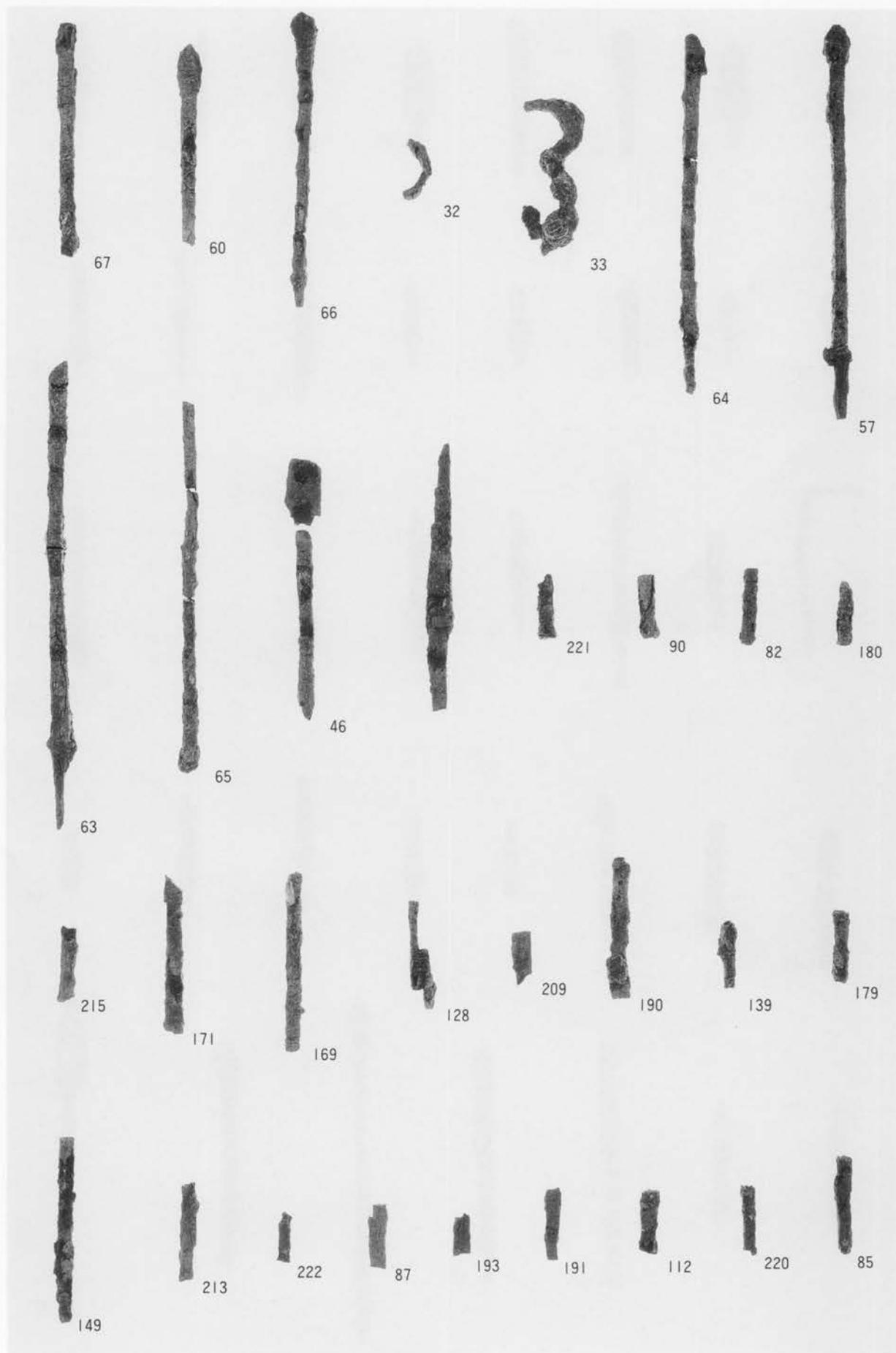
3号墳出土鉄器(3)



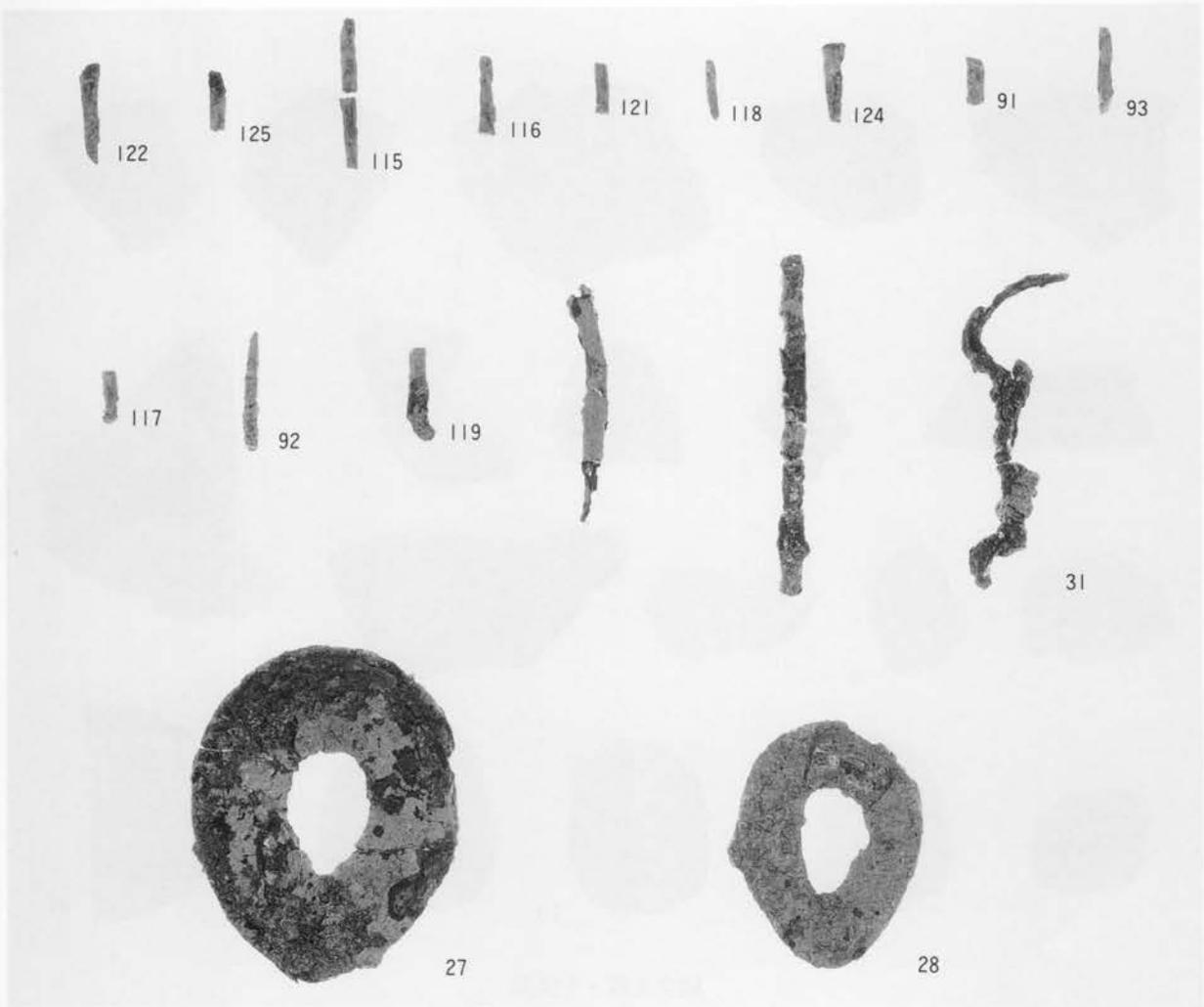
3号墳出土鉄器(4)



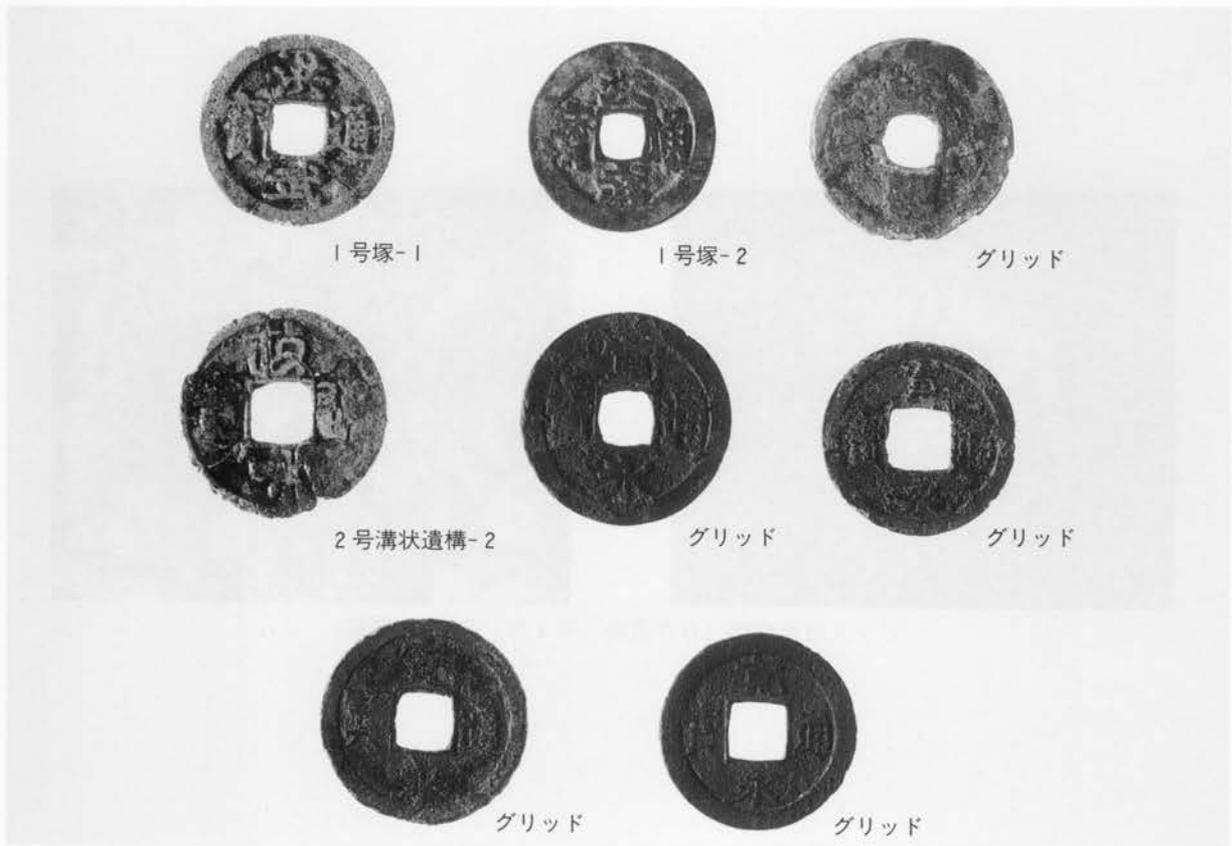
3号墳出土鉄器(5)



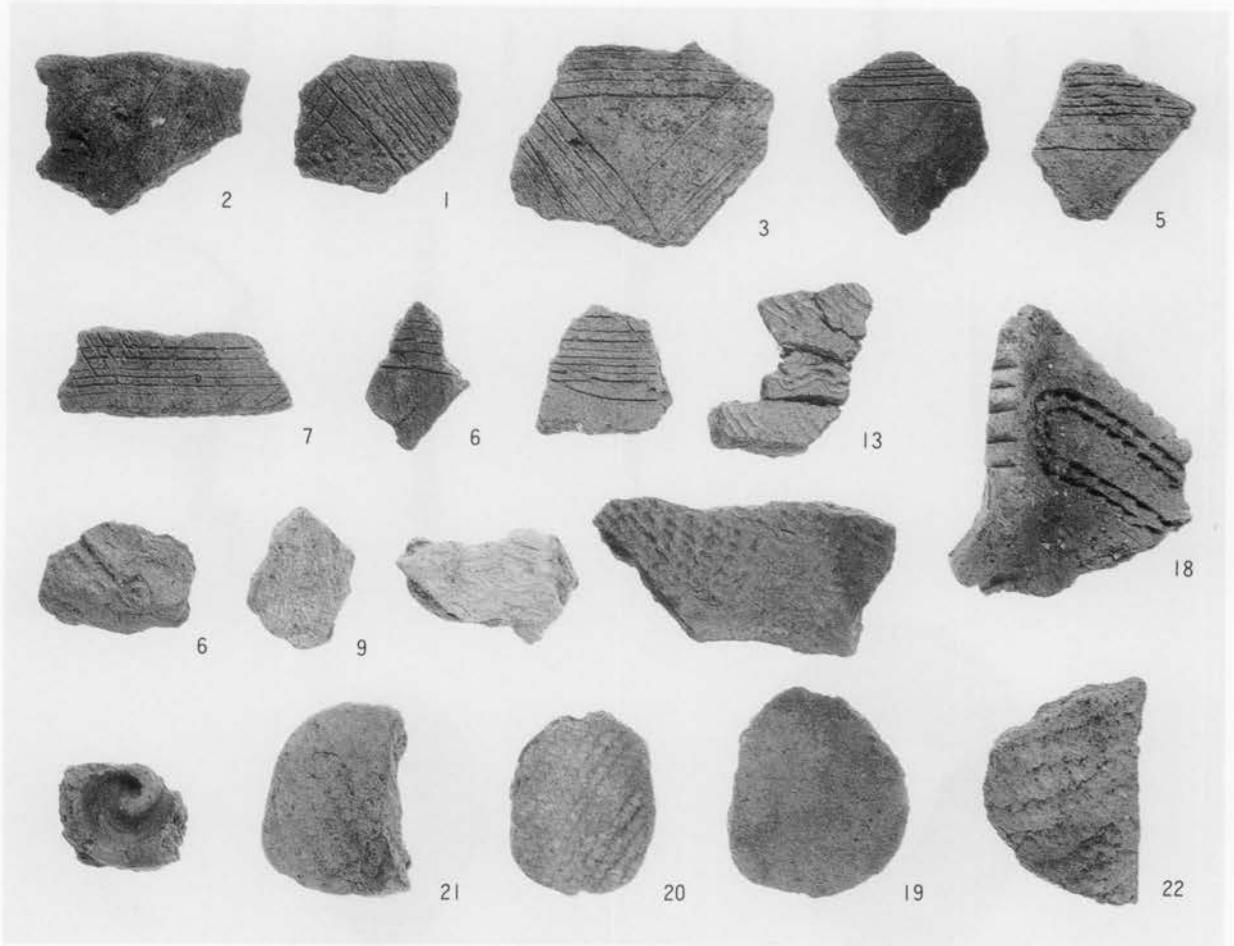
3号墳出土鉄器(6)



3号墳出土鉄器 (7)



銭 貨



縄文土器・土製品



ガラス質発泡物（有吉遺跡（第4次）008号住居跡）

報告書抄録

ふりがな	ちばとうなんぶにゅーたうん21							
書名	千葉東南部ニュータウン21							
副書名	千葉市有吉遺跡(第4次)・高沢古墳群							
巻次	21							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第351集							
編著者名	山田貴久・小笠原永隆							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地-2							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ありよしせき 有吉遺跡 (第4次)	ちばけんちばし 千葉県千葉市 みどりくみなみおゆみちよう 緑区南生実町 1,569-1ほか	201	081	35度 33分 10秒	140度 9分 50秒	19880525～ 19881110	9,000	千葉東南部 地区土地区 画整理事業 に伴う事前 調査
たかさわこふんぐん 高沢古墳群	ちばけんちばし 千葉県千葉市 みどりくおゆみちよう 緑区生実町 2,703-1ほか	201	084	35度 33分 20秒	140度 10分 10秒	19820401～ 09830331		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
有吉遺跡 (第4次)	集落跡	旧石器時代 縄文時代草創期 縄文時代前期 縄文時代中期 弥生時代中期 古墳時代後期 平安時代	石器集中地点	7ヶ所	旧石器時代石器、 縄文土器(草創期・ 前期・中期)、縄文 時代石器、土製品 (土器片錘) 弥生 土器、土師器、須 恵器、玉類(石製 勾玉、ガラス小 玉)、鉄製品(刀子、 釘)	縄文時代草創期 の多縄文土器が 炉跡に伴って出 土した。また、 弥生時代の竪穴 住居跡は須和田 式期のものでは ある。		
高沢古墳群	古墳 塚	古墳時代 中世～近世	円墳 塚 土坑 方形周溝状遺構 竪穴状遺構 溝状遺構	4基 2基 1基 1基 1基 2条	土師器、須恵器、 鉄製品(直刀、鉄 鏃、馬具、刀子)、 銅製品(耳環、空 玉)、切子玉、銭、 縄文土器、石器			

千葉県文化財センター調査報告第351集

千葉東南部ニュータウン21

— 千葉市有吉遺跡（第4次）・高沢古墳群 —

平成11年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 住 宅 ・ 都 市 整 備 公 団
千 葉 地 域 支 社

千葉県美浜区中瀬1-3
幕張テクノガーデンD棟

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉県中央区都町2-5-5
